

四宮鳳翔は契りたい

羽林

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

四宮鳳翔。四宮かぐやの甥っ子。いつか四宮の家長となる者。

?ネタバレ要注意

2022/11/06 完結

2022/11/13 補完編投稿開始

目次

本編 四宮鳳翔は契りたい

プロローグ

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

(6)

(7)

エピローグ

補完編Ⅰ 四条真妃と契りたい

[1]

[2]

[3]

[4]

[5]

補完編Ⅱ 早坂愛は耐えられない

[1]

[幕間]

[2]

[3]

[4]

[5]

[6]

1

12

29

44

62

85

113

131

146

159

180

200

218

238

258

273

284

302

314

330

347

補完編Ⅲ 早坂愛は取り戻せない

[0]

[1]

[2]

402 390 364

## 本編 四宮鳳翔は契りたい プロローグ

四宮鳳翔、16歳。おそらくこの世で最も優れた高校生だ。

祖父雁庵は国家の心臓と謳われる四宮財閥のトップを張り、昭和の怪物とまで言われた傑物。

そして父黄光は次代四宮家家長と目されるハゲちやびんだ。

俺は今、海の上にいる。正確には海の遙か上を飛ぶビジネスジェットの中だ。腹心二名と執事一名が側に控えている。

というのも、先程ガルダン・アーラサム王国という国で一仕事終えた帰り。もちろん仕事というのは肉体労働ではなく、頭脳労働だ。

彼の国とは第二王子と面識があり、その後継者争いの支援を密かに行なっている。うっかり俺が暗殺されやしないか心配してしまう。実は今もこの機体に何かされたんじゃないかと疑っているが、それを表に出す訳には行かないので、笑顔を保っている。

「何か良いことでもございましたか？」

「いや、別に」

俺の笑顔を見て不安を覚えたのか今この場にいる腹心の片割れが聞いてくる。だが、いずれ四宮の家督を継ぐ者として、肝が太いところを見せねばならない。ここは我慢してもらおう。

「坊っちゃんはこの甘栗を楽しみにしておいでです。ですから、そのようにニヤニヤなさっておいでなのですよね？」

「然り然り」

この執事は敏腕中の敏腕。執事が上級使用人とされる四宮家において最高峰の執事である。

彼を俺に付けてくれた祖父に感謝を。

というわけで剥いてしまった甘栗を食べる。

「何もそのような安物を食べずとも……」

「まあ科学の力で多少香ばしくなっただけはいるが、気にするほどでもない。お前も食べるか？」

「いえ、結構です」

こういう気骨があるところを俺は評価したい。

「さて、せっかくのティータイムだ。雑務を片付けることとしよう」

俺はこの一年余りで四宮グループの海外勢力を掌握し拡大させた優秀さで知られる。

父黄光、叔父の青龍や雁庵による家督継承争いは俺という新星が舞台上に姿を現したことで決した。むしろ、父黄光と俺との親子対決になるのではと予想する者もいるほどだ。

海外に根を張るライバル企業と言って良いほどにこの数十年で成長した四条グループ謹製のあの手の手の妨害工作を回避あるいは逆手に取り、その筋の人からの評価は上々。

それもこれも中学時代にあちこちの要人と顔合わせする機会を与えてくれた祖父に感謝だ。

「また……ですか」

「まあ雑務と言っても、なかなか重要な案件だ。秀知院の内部情報の確認とその対処だ」

今取り掛かっているのは、一年以上前に離れた——別に退学とか中退ではなく留学という体なので、戻ろうと思えばいつでも戻れる——秀知院学園の内部情報への目通しだ。

秀知院学園には将来我が国を背負う人材たちが多く集う学校。彼らはまだ子供といえど、将来を見据えればその内情を把握し成長ぶりを確認しておくことは非常に重要だ。

生徒や教師、警備や掃除に売店などのおじさんおばさんに至るまで秀知院内部には俺に情報を報告する者が数多くいる。

「……だからと言って好きな娘に好意を寄せる者たちを始末するのはやりすぎでは？」

は？

「おいおい人聞きの悪いことを言わんでくれたまえ。誰が誰が好きだって？始末と言ったか？語弊があるじゃないか」

「若君が四条の令嬢に好意を抱いていらつしやって、ライバル候補やその親にあらぬ罪を着せて失脚させているという話です」

んん？

「君は酷い誤解をしているようだね。仕方ない。懇切丁寧に説明してやろう」

まず、学生時代の恋愛経験というのは本人の自己肯定感に直結する重要な要素だ。

四条の令嬢はその可憐さと気品の高さでまあモテる。そこは認めてやろう。しかし、それでは困るのだ。

確かに彼女には優秀な弟がいて、彼を跡取りに推す声が多いそう

だ。だが、四条はここ何代か連続で婿取りによって家督を継承している。今代もそうしないとは限らない。

である以上は四条の令嬢の自己肯定感を得る機会をなくす努力をせざるを得ないのだ。

そうとなつては、彼女に懸想する男子諸君には秀知院から消えてもらう必要がある。校則違反然り、カンニング然り、痴漢盗撮然り、万引き然り。

あるいは彼らの親御さんに手を回しておくのも良いだろう。例えば海外や地方に転勤とか仕事で重大なミスをしてしまったとか、自宅から違法な何かが見つかってしまうとか。そうすれば不埒な男子諸君も秀知院から去らざるを得なくなるだろう。

このようにして四条の令嬢、長々しくて面倒だから眞妃と呼ぶが、眞妃は彼氏が出来る機会ひいては自己肯定感を得る機会を失い、そのままずっと独り身という寸法だ。

いずれ決着をつけるつもりだということは言わなかった。

「どうだ？分かったね？」

説明が終わって二十秒くらいだろうか。場は飛行音のみが支配していた。

「……あの、結局若君がその御令嬢を好いてらっしゃるとい話は否定なさらないんですか？」

もう一人の腹心が何か言ってくる。

「そこはわざわざ否定せんでも良いことだ。自明のことだろう。そもそも、四宮の御曹司が四条の令嬢に好意を寄せるなんざ、天地がひつ



くり返った場合にしかあり得ない事態だ。くれぐれも妙な誤解はしないように。いいね？決して父上やお祖父様に変な報告を上げられるなよ」

腹心たちは顔を見合わせて深々と頭を下げた。ようやく分かってくれたらしい。

「さて、君たちに説明してる間にその真妃の自己肯定感ゼロもとい独り身を維持するための策略は練った。あとは日本に残る腹心たちにこの通り実行してもらうだけだ。」

ここで執事が何かを皿に乗せて俺の前に出してくる。

「これは？」

「このジェットに紛れこんでいた爆発物です」

「そんなもん海にポイしなさい！ポイ！」

「はい。適切に処理させていただきます」

いつ以来だろうか。肝が冷えた。この執事がいなければ余命後どれほどであったことだろうか。例の第二王子に泣き言を入れた。

スタンプで返事が来る。ごめんだそうだ。舐めてやがるな。

「さて、次の報告に目を通そうじゃないか」

メール文に俺は固まった。今度のものは秀知院内部からの報告ではない。東京にある四宮の別邸に潜む間者からの報告だ。

「どうされました？」

「君、同級生の誕生日にウエディング顔負けのサイズのケーキを贈った経験は？」

「ありません」

「君は？」

「私もございませぬ」

「だよなあ」

怪訝そうな表情を浮かべる腹心二名に説明する。

叔母のかぐや——叔母ではあるが俺と同世代——が同級生の秀知院高等部生徒会長のためにウエディングのそれを思わせるサイズのケーキを用意し、意気揚々と学校へ運んだらしい。

なんでもいちごにもスポンジなどにも工夫を凝らした逸品だとか。

「甥の、兄妹同然の俺にはこのようなことはなかった。贈られたのは決まって常識サイズのホールケーキだ。なのに、これだ。これが意味することとは？」

「……かぐやお嬢様がその生徒会長に好意を寄せているということでは？」

「俺もそれは考えた。だが、好意を寄せているからってこんなことするか？普通」

「似た者同士ということでしょう。甥と叔母同士で」

腹心の片割れがコーヒーを飲みながらドヤ顔で暴論を吐いた。

「俺は誰かに好意を寄せたとしても、そんな常識からかけ離れた行為はしないぞ」

二人は黙り込んだ。話を戻す。

「俺は考えた。なぜ、かぐやがこのような暴挙に出たのか」

二人は固唾を飲んで俺の言葉を待った。

「結論としては生徒会長、白銀御行に脅迫されたからだというものだ」

二人はまたも顔を見合わせた。仕方なく説明してやる。

まず、かぐやは祖父雁庵が年老いてから妻ではない夜職の女との間に設けた子とはいえ、我らが四宮財閥の才色兼備で知られる令嬢だ。

一方、白銀御行は確かに平民。アパート暮らしで兄はバイト三昧、妹は新聞配達で家計を支えざるを得ない涙ぐましい状況らしい。それでいて父親は職業不定かつ母親は行方不明。

「何故白銀家がこうなったと思う？」

二人は口を揃えて分かりかねると言った。当然だ。彼らは俺ほどではないがまだまだ若輩。

「我が父、黄光が白銀父の工場を潰したからだ」

正確には潰すきつかけを与えたのみで、白銀父がリストラを決断すれば回避できたような軽い代物だという。しかし、その決断をしなかったがために工場は潰れ、家庭崩壊の憂き目に遭った。

いずれにせよ。

「白銀御行は四宮に恨みを抱いているということだ。これで動機としては十分だな」

「しかし、恨みがあっただけで平民風情が四宮の令嬢をどうこうできるのでしょうか？」

「通常はできない。だが、秀知院というのは本来権力者の子息子女が集まる環境であるが故に、それが可能になってしまいう場でもある」

「……………協力者がいる、というお考えなのですか？」

流石に俺の腹心というだけあって優秀だ。話が早い。俺は重々しく頷いた。

「俺は龍珠組の娘が怪しいと考えている」

かつて俺は龍珠組の娘を桃太郎呼ばわりし、吉備団子を得るべく大声で歌ったことがある。

その後の桃太郎はかつての乱暴な性格から吉備団子を持ち歩いては人々に譲渡する慈悲深い性格に変化したと思っていたのだが。

「俺が居なくなったら途端に叔母に牙を向いたということか。ちょうど俺の留学直後に白銀御行はその成績を躍進させている。そこで手を組んだんだらう。要するに、復讐の機会を伺っていたということだな」

「いや、何してるんですか」

何って大声で歌ったあと、隣に居た親友の田沼翼と一緒に追いかけて回されただけだが。逃げる翼の表情がどれだけ見ものだったことか。

まあそんなことはどうでも良い。

「思えば正月に本邸に顔を出したとき、かぐやは目を合わせてくれなかった。俺に苦しみを悟られなくなかったんだろうな」

いくら海外に拠点を置いたと言っても、将来の後継者として礼節は守る必要がある。時間を作って日本へ戻り、父や祖父に挨拶したのだ。本邸での滞在時間は僅か三時間足らず。

かぐややその近侍の早坂愛の挨拶は廊下で彼女たちが深々と頭を下げたのみだ。俺が二言三言声を掛けたが、要領を得ない返事しか来なかった。

中学時代ぼっちになっていたかぐやを見かねて学校で合間を縫って話すようになった恩を忘れられたと思っていたのだが。

「確かに若君に目をあわされては誰であろうと、どのような隠し事も出来ませんからね」

「その通り」

お勞しや、叔母上。俺はティッシュで出ない涙をそつと拭った。

「……………若君。愚見ですが、私の考えを述べさせていただいてもよろしいでしょうか?」

「何だ。言ってみろ」

「四条の令嬢が一枚噛んでいるという線は……………」

時が止まった。俺の茶碗を持つ手が微かに震える。

「つははは、面白いことを言うな」

「いえ、冗談ではなく」

「マキは四条の者だが、誇り高い。平民や桃太郎でもあるまいし、陰湿な真似などするものか」

二人はまたも顔を見合わせた。何か企んでいる目をしている。程度としては軽めのようなが。

「四条の令嬢のことをよくご存知のようですね」

「かぐやとは違って別にそこまで冷え込んだ仲でもないからな」

かぐやと眞妃は昔何かあったらしく——本人たちにそれぞれ訳を聞いても教えてくれない——会えば嫌味の応酬を繰り広げる。

かつて公の場でもないんだから仲良くしたらどうだと言ってみたことがある。しかし、眞妃は嫌よと言い、かぐやは嫌ですと言った。流石にこれではお手上げだ。

「具体的にどれほど仲がよろしいので？」

ここで正直に言うという選択肢はあり得ない。

同じ純院組であることを挙げるのもそれはそれで味気無い。それなら両者のプロフィールを見れば良い話だからだ。

「……………言ってしまうえばお前たちぐらいか」

二人は頬を赤く染めた。おいまさか。知りたくなかった情報を手に入れた。

「まあ、そうだな。四条の攻勢も下火になって大分日が経つ。そろそ

る日本に戻っても良いかもしれないな。ついでに、かぐやの現状を確認する」

こうして、俺の留学は終わった。俺が居ない間四条など敵対勢力が再び攻撃して来ないとも限らないので、その対策案を纏めて執事と腹心二名に託す。

それから本家——と言っても次期総帥夫人である俺の母——や別邸の使用人たちの差配を取り仕切っている早坂への連絡作業を行う。

「若様、よくぞご決断くださいました。別邸の使用人一堂、心より御帰還をお待ちしております」

「いや、俺ホテルに泊まるつもりなんだけど」

電話の向こうであれこれ駄々をこねる早坂を宥めるのに、おおよそ三十分かかった。どうやら別邸の使用人のトップはお暇のようだ。

(1)

第六十七期生徒会。その活動終了日が目前に迫っている。

「会長、石上君。少し良いですか？」

「何だ、四宮。そう改まって」

秀知院学園生徒会会長である白銀御行はその座にある者のための腰掛けに座りながら、同副会長四宮かぐやの話に耳を傾けようとする。

それはソファに座って書類を片付ける同会計石上優も同様であり、その長い前髪が僅かに揺れた。

「実は――」

かぐやが言うことに白銀はその鋭い目を見開いた。

曰く、かぐやの甥である四宮鳳翔が留学を終えて帰国し、秀知院に戻って来るとのことだ。

それを聞いた白銀は頭痛がするのを自覚した。

今でこそ学年主席の座を死守してその自尊心を維持する白銀であるが、彼の帰国を聞けば冷や汗を流さずにはいられない。

白銀やかぐやの世代には四条帝という男が居る。サッカーで公立の弱小校をインターハイ出場に導くのみならず、半年以上前の全国模試で白銀に大差をつけて撃破し、全国一位の座を獲得した帝の名を冠するに相応しいハイスペック男子。

白銀は偶然……そう、偶然見た高校サッカーの特集記事にあった帝の顔写真を見たことがあるが、容貌の良さという意味では帝の双子の



姉で白銀と同じクラスの眞妃にそこまで劣らないイケメンである。

その四条帝とスペック面でほぼ同格と噂されるのが四宮鳳翔だ。むしろ世間的にはともかく秀知院生に両者を比べさせた場合、後者の方が上だと言う者の方が多いだろう。それを額面通りに受け取るならば、もしその時の模試を受けていたなら四条帝と同じ程度の点数、すなわち白銀より遥か上の点数を取れるということになる。

事実、全国模試ではないが中等部時代を含めた定期試験の主要五科目で彼は常に満点を取り続けたと白銀は聞いた覚えがある。普通の公立校ならいざ知らず、高偏差値の名門校である秀知院の定期試験であることを考えれば、それは控えめに言っても尋常でないとと言えるだろう。実際、秀知院の定期試験ではいわゆる満点回避問題は大抵どの科目にも出てくる。

「ああ、あの人ですか」

「知っているのか？石上」

「……まあ、僕も昔はサッカーやってたんで。確か、去年の一学期の途中から向こうに行ってたんですね。会長は喋ったことないんですか？」

「ああ、一切ないな」

だが、高校から秀知院に入学した白銀は直接喋った経験こそないものの、前生徒会会長などからその名声を聞いたことがある。

結論としては良く言えば自由奔放、悪く言えば自分勝手というのが第一の感想だ。聞いた話では前生徒会会計が彼に桃太郎呼びわりされた挙句、学校でそういうキャラとして売っていかざるを得なくなっただけらしい。

また、サッカー部に入部して練習試合が終わってすぐに顔を出さなくなつたとも聞く。

時には悪い意味で四宮の男子らしいと思えるような話を耳にした。鳳翔の父親である四宮黄光がこの学園の理事長であるがために、校則をはじめとした規則を一方的に変更できる権限を持つとか。あるいは学園内で彼の噂をすればすぐに彼が飛んで来るとか。

「そう言う石上は話したことはないのか？」

「かなり昔になりますけど、少しだけ。ほら、僕って足速いじゃないですか。だから、四宮先輩……おつかない方の四宮先輩に目つけられたことがあるんですよ」

「……どうして足が速いと目を付けられるんだ？」

「あの人って、なんか急にサッカーに凝り始めたんですよ。それで足速いだろうって練習に付き合わされて……」

「もしかして鳳翔と仲が良いんですか？」

目を丸くしたかぐやが石上に尋ねた。だが、石上は手を横に振る。

「いえ、全然ですね。たぶん向こうは覚えてもありませんよ。練習って言っても、一対一じゃなくて——」

その内容を聞いて白銀は耳を疑った。石上が言うには鳳翔は一人で二十人余りの生徒たちを相手にする練習と言う名の蹂躪劇を繰り広げていたと言う。その被害は上級生にまで及び、あまりのハードさから怪我をする人まで出ただとか。

いろいろな意味で常人離れた話に白銀は困惑の色を隠せない。

「まあ、それで一個下の僕も呼ばれたんですけど、すぐに戦力外通告されました」

「……そうか、うん」

「まあ、気付いたらあの人ゴールキーパーになってたんですけどね。その練習もまあ酷いもんでしたよ」

「いや、もう良い。十分だ」

止まりそうにない話に白銀はストップを掛けた。

（この際、四宮鳳翔の能力は問題じゃない。困るのは――）

白銀がかぐやに告白させる戦略が打ち止めになりかねないこと。これまであまり考えないようにしていたが、仮に白銀がかぐやと付き合えたとして四宮家が歓迎するとは白銀本人ですら思えない。

15

なぜなら、白銀本人は良家の子息子女が通う秀知院においてその成績から質実剛健・聡明英知との名声を得ているとはいえ、実家のヒエラルキーはたとえ秀知院でなかったとしても限りなく論外に近いレベルだ。五億円もの借金を抱えてアパート暮らし。おまけに母親は蒸発済みで父親は職業不定の中年男性である。

もし娘がそのような家の男と付き合っていると聞けば大抵の親や兄弟姉妹が忌避するだろうし、かつて国の盟主とさえ謳われた四宮家からしてみれば、白銀はかぐやの相手として塵芥以下のように見えることだろう。

嫡流であることからして四宮家本家大元に属しているであろう鳳翔が秀知院でその目を光らせる場合、何の後ろ盾も持たない白銀は万事休すで交際どころではない。

現時点では生徒会会長続投意欲に欠ける白銀からしてみれば、立地の経緯からして四宮家さえ手を出しづらいこの生徒会室が使えなくなった時点でこれまで半年以上も続けてきた恋愛頭脳戦が立ち往生することになりかねないのだ。

（いや、それだけじゃない。もし見舞いの件がバレていけば――）

一学期のことだ。かぐやが風邪を引いたので、生徒会を代表して白銀が見舞いのため四宮別邸を訪れることがあった。その時、不慮の事故によって白銀とかぐやはベッドで同衾――実際に何をしたかと言えば、ヘタレた白銀は睡眠中のかぐやの唇に文字通り指一本触れたのみ――したのだが、そのことが漏れていけば……考えるだけで白銀はゾツとした。

（あのメイドが早々喋るとも思えんが……）

スミシー・A・ハーサカ。四宮別邸に居た実物のメイド。よくよく考えてみればかぐやの部屋で二人きりになったのはハーサカの手引きだ。自身の首を考えればそのことは隠蔽する筈である。それでも不安な白銀は改めて自分にそう言い聞かせた。

なお、鳳翔はハーサカ……早坂とは別の使用人から情報を得ているため、かぐやの恋愛頭脳戦については把握しておらず、怪しい気配を感じ取ったのもウエディングサイズのケーキの件が初である。

「それで、四宮。わざわざそれを言いに来たと言うからには何かあるのか」

「ええ……」

ただ単に甥っ子が帰ってくると言うのであれば、かぐやが直接白銀

や石上に声を掛ける必要はない。

何かあると思うのは無理もないことだ。

「あの子……鳳翔が帰って来る以上、私は今までのように家の力を行  
使し辛くなります。ですから、あまり彼に目をつけられないようにし  
てください。何かあっても庇えるとは限りませんので……」

(怖っ!!)

白銀はかぐやに好意を抱く一方で恐怖を感じたことは多々あるし、  
さらに酷いことに石上はただただ殺されるのではないかと言う怯え  
混じりの恐怖をかぐやに抱いていた。二人には四宮鳳翔という男が  
そのかぐやさえ権力的に抗えきれない相手という風にしか感じられ  
ず、彼の帰国はただの悪夢である。

最も、実際には鳳翔とかぐやの関係は鳳翔がかぐやの我儘を多くの  
場合聞き入れるため、ごく普通の兄と妹の関係をコトコト煮詰めた具  
合になっているのだが。

「分かってくればそれで良いんです」

そう言ったかぐやは二人に背を向け生徒会室から去ろうとする。

「それと言い忘れてましたが、二人とも出来る限り四条真妃さんとは  
距離を置いてください。さもなければ確実に……」

校内の世事に疎いせいで四条真妃って誰と思う石上だったが、一方  
で白銀はかぐやを訝しんだ。

(四宮が言い忘れたと?)

白銀に次いで学年二位の成績を維持するかぐやは単純な記憶力な

ら白銀をも上回る。そんなかぐやが直接人に注意を促す場で言い忘れなどあるはずが無い。

(おそらく、今の話が本命だろう。だとすると四宮鳳翔という男は四条に)

不意に生徒会室の扉が開く。思考を中断した白銀の目線の先に居たのは生徒会書記の藤原千花。頭のリボンがトレードマークでピンク色の髪と猫撫で声を持つバーサーカーである。

「?三人とも何の話をしてるんですか?」

「藤原先輩。今、四宮先輩の甥が留学先から戻るって話を――」

「翔くんが!?かぐやさん、早く言ってくださいいよ!」

はしやぐ藤原にこれは話が長くなりそうだと三人は天を仰いだ。

~~~~~

俺こと四宮鳳翔は俺自身が行った工作によってB組に配属されることとなる。今回の帰国の目玉である白銀御行が在籍しているだけでなく、四条真妃や田沼翼、おまけで藤原千花らが居るクラスだ。

一応、他の候補も検討はした。

例えば、かぐやが居るA組。だが、そこにはかぐやの近侍の早坂愛が所属している。だいたい前のことではあるが、以前教室で別邸に居る

時と同じ具合で喋ったことで、かなりキレられた思い出があるのだ。ゆえに早々に候補から除外。

C組とE組は特に見るべき点はなかったが、一瞬だけ迷ったのはD組だ。やはりあの渡部神童が居る。同世代で一番好きなプレイヤーを選べと言われれば、俺は真つ先に彼の名前を挙げるだろう。

とはいえ、それだけでは選ぶ理由とは成り得ず、結局俺はB組に席を置くことになった。神童とはサッカー部の昼練がない時に中庭かどこかで遊べば良い。

今は宿泊先であるホテルから学校へ向かう車の中だ。少なくとも登校時は必ず車を使う。

こう言う時間で運転手と喋るのは中々乙であり、得られる情報が時として何かの助けとなることもある。一応、俺から話す話については細心の注意を払わなければならないが。

大昔、かぐやがあまり好きではなかった頃に下校時間をずらしてもらったのが懐かしい。最初はかなり渋られたものだ。

会話を楽しみつつも、俺は愛用のタブレットでとあるPDF類を開く。

秀知院学院高等部二年二学期中間テストの問題並びに白銀御行の答案。

誰がなんと言おうと断じて外部流出ではない。なぜなら、父がこの学校の理事長であり、俺自身が次代理事長である。

これまでのものは既に目を通した。相当な努力の痕や勉強に対する執念が窺える。

本当は問題冊子のメモ書きまで欲しいのだが、流石に入手困難だ。白銀が住んでいるというボロアパートにこちらのエージェントを

送り込むという手はなくてもないが、白銀と龍珠桃の繋がりを疑っている現状下では諸リスクを無視できない。

大差をつけにくい定期試験で普通にやったら負ける可能性がある。そういう相手だ。まして仕事に忙殺された状態なら。

別にカンニングでこれまで点を取って来た訳ではない。ただ、膨大な量の過去問を手に入れたり、作問者の情報を手に入れた上でその者の問題作成の癖を把握したりするだけだ。

これをするのも才覚のうちだろう。

そして、学校に着いた。

最近では携帯ゲームのアプリにどハマりしていると噂のちよび髭校長が挨拶して来る。両手を揉み込む様はどこぞの悪徳商人のようだが、これはふざけた成りをしているようで腹に一物抱えるタイプの人間なので、油断は出来ない。

教室に着く。

転入生というわけではないため、わざわざ壇上から挨拶する必要はない。見渡せば白銀を筆頭とするごく少数の外部入学組以外知った面子である。

席は黒板側から見ると一番右手の列かつ一番後ろ。取って付けられたような席だ。

ホームルームが終わると、多くの同級生が挨拶に詰めかけて来た。

曰く、向こうでどうしていたかとか。

曰く、歓迎会の調整をいただいたとか。

仕事のことを完全にボカして向こうの学校での話を答える。



一方で彼らは歓迎会をカラオケで行いたいらしい。だが、俺は下手な歌声を聞くと酔う体質だし、そもそも流行の曲などチエックしていない。

早坂に聞けばすぐ分かるだろうが、いささか気が引ける。まさか国歌や昭和の歌謡曲を歌う訳にもいかないし。

そう言うわけで俺は開催場所に焼き肉店を希望した。すると、秀知院生らしく良いとこの店を予約してくれた。流石だ。

だんだん対応に飽きてきたので、群衆をすり抜けて白銀の前に声を掛けておきたい人物の元へ向かう。

幼馴染にして親友の田沼翼だ。

何故か恋愛相談を俺ではなく生徒会の方にしたのはいただけないが。壁ダアンと言うらしい。白銀もいい加減なアドバイスをするものだ。俺に相談してくれれば、完璧な根回しによって安全に事を運んで見せたのに。

とはいえ、結果オーライなのだから良しとしよう。

今の翼は昔と違って髪を染めて軽薄そうな雰囲気を漂わせている。通話アプリのアイコン通りだ。

だが、内に秘めた優しさというか甘さのようなものは残っているように見えた。

「心の友よ」

熱い抱擁を交わした。

昔、それも就学前に早坂と一緒に見たアニメのキャラを思わせる言葉でウザ絡みをする。だが、翼は快く受け入れた。

「なっ…!?!」

多くの男女が驚きのあまり声を出すのが聞こえる。中にはキヤー

キヤー叫ぶ者もいる程だ。眞妃は目鼻立ちなど整ったパーツを使つて間抜け面を晒している。

「もお、ダメでしょ。翔くん。人の彼氏に抱きついたりしちゃ」

乳牛のような鳴き声をあげながら注意するのは藤原千花。現生徒会書記。

中学以来あだ名で呼び合う仲だ。

「ああ、千ちゃん。でもさ、翼が彼女にするような人でしょ？そんな狭量な人とは思えないけど」

もちろん翼の彼女が狭量な人間であることは把握済み。だが、俺はこうしてすつとぼける程度のことには平気で出来てしまう男だ。

翼の彼女——確か経団連理事の孫娘か何か——は思いつきりこちらに殺気を放っている。

相当な度胸の持ち主らしい。

「つべこべ言わない！そういうもんなの！」

実の母親のように嗜めてくる藤原。怪物の気を秘めており、好奇心をそそられる人物だ。だが、彼女の妹には良い思い出がない。

両者揃って仮に父や祖父に婚姻を勧められたとしても絶対に考え直すよう言うであろう。

「相変わらずの不調法者ね。全く」

「おう、久々だな。お前の父親によろしく伝えといてくれ。向こうではありがとうって」

「……あんたねえ」

なんかしれつと会話に混じって吐き捨ててきたのは四条真妃。ど  
ういう風の吹き回しか再び髪をツインテールにしているが、幼少期の  
頃とは逆であり似合っていない。リボンをつけていないためなの  
か。

これなら俺が留学に行く前のように普通に髪を下ろして欲しい。

真妃は髪に手をやりながら言い放った。

「まあ良いわ。それにしても随分戻ってくるのが早いんじゃない？も  
う少し遅いかと思ってたんだけど」

話が長引きそうな気配がしてきたので無視する。

残念ながら、今は真妃に構っている場合ではないのだ。

「そう言えば噂の生徒会長さんはどこ？顔を拝んでみたいんだけど」

「……無視してんじやないわよ」

本当は既に分かっている。よく見れば人気男性アイドルに似てな  
くもない顔もそうだが、他に重要なことがある。秀知院の生徒会長は  
首元に金製の緒飾を身につけるのが常だ。

おまけに片鱗しか見せていない藤原と違って完全に怪物の気を発  
して——藤原とは方向性が別のようなだが——おり、非常に分かりやす  
い。

狼を思わせる目つきはただ者ではない。存在感が違う。

白銀は肘を机の上に置き手を組み、じつと椅子に座っている。

俺はかぐやのため、心を鬼にした。左足を白銀の机の足掛けに掛  
け、さらに左腕を膝上くらいに置く。顎の角度を調整して良い具合に  
見下ろした。

あからさまな挑発行為だ。

放課後には用務員のおじさんに入念に拭かせるので、それでチャラにして欲しい。

俺は微笑みながら優しい声色で言った。

「はじめまして。生徒会長さん。四宮鳳翔、副会長のかぐやの甥です。よろしく」

「……白銀御行だ。こちらこそよろしく頼む」

俺は白銀の様子に違和感を覚えた。憎悪の気配が一切感じられず、そこにあるのは恐怖と困惑だ。

これがかぐやを脅した人物なのかと訝しむ。父黄光を恨み、その妹のかぐやにケーキ調達を強要するような人物なら、息子の俺にそれなりの憎悪を抱いても全くおかしくない筈だが、その兆しも隠している気配もない。

若干間があったのはただの困惑故だろうか。それとも叔母を副会長にしたことにキレられているとも思ったからだろうか。

副会長というのは余計な一言だったらしい。素直に反省した。兎にも角にも、まずは試すことだ。

俺は緒飾を指差した。

「良いもん着けてるね、触らせてもらっても？」

「……ああ、構わない」

緒飾は本来気安く人に触らせてはいけなような代物なのだが、結局はこの学園の物で父の物。つまり、俺の物だ。俺の物を俺が触ることと異議を唱えられる謂れはない。

力関係は良く分かってきている。ただ触らせまいと意思の強さを見せるタイプのおバカさんではない。普通の人間相手ならそういう反応をしたかもしれないが。

一時の恥辱に耐える胆力の持ち主と言ってもよいのだろうかと思む。

ここまで判断に手間取るのは久しぶりだ。

ふと見ると、眞妃は目を丸くしてこちらを見ている。ほれ見たことかと心の中で呟いた。眞妃は潔白そのものだ。だが、それは良い。分りきっていたことだ。

(……んん?)

ふと、この状況にどこか楽しみを覚えている自分がいることに気が付いた。まるで犬を躡けているような気分だ。飼ったことなどないが。

成る程、こいつはかぐやにとつての犬ところ、つまりペットだったらしい。後で過剰な餌やりは厳禁だと言っておかねば。いくら普段飢えている犬相手だったとしても。

「いつまで触ってんのよー!」

いつの間にか眞妃の不興を買っていた俺は早速言い訳に走った。

「ん、なんか千ちゃんちの忠犬パス公みたいでさ。そうだ、今度遊びに行っ方がいい?」

「良いですよ。何日が良いとかありますか?」

「……んん、そうだな。ごめん、日取りの調整はあとにでもらって良い?先生がいらっしゃる時だと助かる」

意外とあっさり了解を得る。先生というのは藤原の叔父に当たる省大臣のことだ。政治家とのコネクションは決して手放してはいけない。

もちろん、少し先のことになるかもしれないという注意が藤原からはあった。大臣なら四宮の将来的な後継と会うより優先すべき用事は数多あるだろう。

別にそのぐらいで気を悪くはしない。

「え、嘘。藤原さんって」

「いや、中学の時割とこう言う感じじゃなかったか？」

「脳が破壊される……」

冗談抜きで頓珍漢な噂をしている愚民どもに白い目を向ける。

最後の娘は病院に行くことをお勧めしよう。

あくまでこれは政治のためのやり取り。

秀知院の高二にもなってそれぐらいのことも分からないようでは将来が思いやられる。

一つ重要なことを言うのを忘れていたので、藤原に小声で言うておくことにした。

「そうそう。頭のおかしい妹と姉はどっかにやっといて、普通に相手すんの面倒臭い」

「あはは、了解です」

苦笑いする藤原本人もあれらの狂い様は承知しているらしい。

かく言う俺も怪物は好きだが怪物と狂人は似て非なるものだ

思っているので、あれらはお断りだ。

一方で周囲の反応。

まず、肝心の眞妃。手を腰付近に当てて明後日の方向を向いていらっしやる。

これは一体どういう反応だと俺は訝しんだ。

翼は笑みを浮かべている。今のやり取りの意味をちゃんと把握してくれていると嬉しいのだが。彼が正造先生のような四宮お抱えに相応しい医者になるためにも。

俺はかつて彼が目を輝かせて祖父のような立派な医者になる夢を語ってくれたのを昨日のことのように覚えている。

そうであってもらわなければ困る。俺の将来の夢の一つに彼に看取ってもらおうというのがある。万一幽霊か何かにならなったら猪一番にその様子を見てやりたい。

白銀はあっけにと取られた様子。

どこまで分かっているのやら。目を見てもどうしても眠そうという感想が真っ先に浮かんでしまう。

これでは判断し切れない。

「そうだ会長さん。今度時間ある？俺の奢りで良いからさ、フグ食べよう。フグ。美味いぞ」

白銀の人となりをつかむため、食事に誘う。どうしてフグなのかは毒にどう反応するのか試したいのと、後は単純に俺が食べたいがためだ。

心のどこかで彼を欲しいと思っている。どんなに癖が強かったり性格に難があったりしても、実力あるいは素質を持った人間ならば抱

えたくなるという悪癖だ。

白銀は少し眉をピクつかせて断ろうとした。奢りという部分が気に障ったのかもしれない。生まれの割に、プライドが妙に高そうな感じがする。

俺は親睦を深めるということで押し切った。

「待たせたな」

急に現れるや否や扉を背にしてそう言い放ったのは渡部神童。サッカー部のエースだ。

「いつもお前は遅いんだよ！」

お決まりのフレーズを言った後、中庭でサッカーをするため、教室から飛び出す。二人して華麗に通行人を避けながら、目的地へと向かった。

「……」

隣の教室から向けられるかぐやの警戒する視線がほんの一瞬俺を突き刺した。



転校初日の四宮鳳翔の振る舞いに面食らった白銀ではあったが、押しが強い彼の食事の誘いを断ること叶わず、こうしてなけなしの小遣いを全部持つて指定されたフグ料理店に来ている。

「そもそも公にフグを食べられるようになったのはかの伊藤博文氏が――」

あれこれと蘊蓄を並べ立てる鳳翔に対して当たり障りのないよう接する白銀御行。当然だ。かぐやの甥であり彼女以上の権限を四宮家中で有すると思われる彼の不興を買ってはどのようなか分かったものではない。媚びを売るわけではないが、多少緊張の糸が張り詰めるというものだ。

そうこうするうちに、二人が陣取る個室にフグの薄造りが運ばれる。身を醤油に付けて口へと運んだ鳳翔は一転して童のように顔を綻ばせた。

「ん〜。美味しい。こう見えてフグは久々だね。ああ、口の中が蕩けそう」

一方の白銀は口に広がる旨味を味わうのも程々に会話を広げようと彼に尋ねた。

「……鳳翔は向こうではどういうものを食べていたんだ？」

「時間ある時はちゃんとしたモノを食べてたけど、そうじゃない時はサンドイッチとかハンバーガーで済ませてたな」

白銀は一口にハンバーガーと言っても有名チェーン店というより



俺は帝に勝つために、自分自身のレベルアップのみならず身近に居たクラブの連中を鍛えることに。拳句、帝に勝つためには俺がゴールキーパーとなつて一点も取らせないのが良いと、音楽を辞めてまで帝に勝とうとあれこれ算段をした。

そういうわけで高一の時にリベンジを兼ねてわざわざサッカー部に入部し、部費増額の協力と引き換えに彼が進学した公立高校と練習試合をしたのだ。ゴールキーパーとして彼を完封して満足した後、幽霊部員状態となつて久しい。退部手続き自体を面倒くさがつたのである。

サッカー部にまた顔を出すつもりはない。せいぜい趣味でやる程度で十分だ。

単なるモチベーションの減衰が原因ではない。俺の目の前には掌握した四宮の海外事業をリモートでの指示等によって取り仕切る重大な職務がある。

そのための情報としてあちこちに点在する腹心あるいは回し者からの報告書はもちろんのこと、時にはSNSすら活用する。国内外の各メディアの公式アカウントをテレビニュースの代わりとしてチェックするというようなものだが。

高校生に重要な仕事の数々を任せるのは四宮家に実力主義的風潮があるからなのかそれとも世俗で言うブラック体質なのか。相当な割合で後者だろう。

比較対象を基本帳簿の上の数字でしか把握していないので、はつきりと言い切れないが、おそらく日本で一番ブラックではなからうか。我が家は。

喫急の課題だと言うつもりはないが、そう遠くないうちに改善する必要がある。メディア関係のあちこちに四宮の手が回っているとは言え、一度SNSだろうが何だろうが告発されれば芋づる式に四宮の悪行が世に出かねない。

一応、告発したくなる程働かされている者はいざそうすればどのよ  
うな末路が待っているか察しているであろうことが救いである。

「ま、そんなのはお祖父様や父上に任せるとして……はあ。昨夜やる  
筈だった分込みで仕事片付けない」と

そう呟いてストレッチをし、身体中に血を巡らせる。あの二人なら  
余程差し迫った状況にもならない限り改革などやりそうもないよう  
な気はするが、それはそれ。流石に今はまだ国内の多くに至るまでを  
改革出来るほどの実権は持っていない。国外に展開する四宮グルー  
プの事業以上に既存権益が複雑に入れ込みすぎている分、かえって解  
錠には時間が掛かるのだ。

俺はノートPCを弄り回し、海外に残る専属執事に連絡を取った。

「あー、テストテスト。聞こえてるー?」

「はい、坊っちゃん。ご安心ください。よく聞こえております」

先日のジェット機で見事危険物を見つけ処理する大ファインプ  
レーをかましてくれたということでもまたしても使用人内での評判を  
上げた例の執事。仕事でも良くサポートしてくれている。

彼なくして一年で四宮の海外勢力を大いに伸ばすことはできな  
かっただろうと思うほどには優秀だ。

共有された書類に目を通す。この執事も大概の仕事なら任せられ  
るが、あくまで執事。

俺の判断を仰がなきゃならない時は少なからずある。

——プップルルルプップ

別件で仕事用のスマホに電話が掛かってくる。そうか成る程などと相槌を打って、懸念事項への対処法を指示する。

使い終わったスマホは向こうのベッドの方に放り投げた。

早朝五時半。手早く仕事を終えて二度寝という人生最高の極楽を味わったが、楽しい時間はあつと言う間に過ぎるもの。

「あーあーあー」

冷たいシャワーを浴びて頭をすっきりさせる。濡れた髪から滴る水滴で書類や機械に悪影響が出ては困るので、ちゃんとドライヤーで乾かした。

髪をあれこれ弄っていると、室内に取り付けられた電話がやかましく鳴ったので、駆け込むようにして応答した。

「ん？朝食？良いよ。持ってきて」

今現在、俺は四宮別邸ではなく、グループ傘下のあるホテルに宿泊中。

早坂はこれに文句を言ったが仕方がない。何せ俺の部屋は彼女に見せられない高度な案件の宝庫になるのがオチだ。むしろ、無駄にスペックの高い早坂にさる案件を理解されては全てがご破算になりかねないので、遠ざけざるをえない。

結局、あれの主人は我が父黄光。チクられたらお終いだ。

「失礼します。お食事をお持ちしました」

彼はこのホテルの支配人。俺は支配人直々に食事を運ばせている。

支配人は事前の آپ取りは必須ではあるが、この部屋に立ち寄れる数少ない人物だ。

「苦勞」

入らせて机に食事を並ばせる。彼はどうせ早坂の母親あたりが手を回したのだろうが、俺の食の好みをよく把握している。

アスパラなどというものは含まれておらず、カリカリベーコンが多く入っていた。

もちろん、仕事や真面目な食事の時は好みでない食材といえど笑顔を貼り付けて食べる。公私混同は絶対にアウトだ。

一応、俺に料理を出すようなシェフならちやんと賞味できる具合にしてくれるのだが、嫌な記憶を思い出すのもあつてあまり目に入れたくはないので基本的に入れるのは止してもらおう。

あつという間に食べ終わった。本当はもっと入るのだが、腹一杯になるまで食べていては遅刻してしまうので我慢しなくてはならない。

「ご馳走様。ところで……何か言いたげな様子だね」

どこか気まずそうに突っ立っている支配人君に目を細めて問う。  
彼はゆっくりと頷いて言った。

「はい。そのお……この部屋、もう少し何とかありませんか」

「ほお？何かとは？はっきり言ってくれたまえ」

「少々、いいえ正直に申しましてかなりお部屋が見苦しくなっているものと」

部屋には使用済みティッシュや小物、脱ぎ散らかした衣服が散乱している。俺は素知らぬ顔で支配人の顔を見つめた。

「確かに、一般のスタッフをここに入れるのをためらわれるお気持ちは分かります。しかし、あなた様なら」

彼がここまで言ったタイミングで俺は手のひらを見せることで制止した。

「あのな、一度確認したとしても、いつどのタイミングで刺客が紛れ込んでくるか分からないだろう。厨房ならともかくとして。油断は出来ない。さあ、早く行け……忠告には感謝してるぞ」

「かしこまりました」

このホテルの支配人は信用がおける人物だ。いつも食事は彼が運んで来る。

支配人に掃除させる手もなくはないが、食事の持ち運びで十分。それに彼も他の仕事がある。彼自身、見てはいけないものを見たくはないだろう。

哀れな彼のため給金を弾むよう掛け合ってみるか。

ねぎらいと称してシユフやスタッフ一人一人の顔を見て確認したこともあり、毒を盛られる心配自体はしていない。厨房の出入りは元々厳重。

だが、部屋の掃除は別。スタッフが出入りしている隙に、他所様のエージェントなどに入り込まれたら普通に不味いので、見送らざるを得ないのが実情だ。

食事を終え、身支度も済ませた。

「あくもしもし、車今どこ？もう大丈夫なんだけど。そう、ならすぐに部屋を出るから」

意気揚々と部屋を出る。エレベーターで降りてエントランスへ。外を見れば乗るべき車がある。

どこからか聞こえる小鳥の鳴き声をBGMにいそいそと車に近づく。ドアの開閉を手伝おうとする運転手が確認してきた。

「忘れ物はございませんか？」

「大丈夫……あ。しまった」

持ち歩くべき仕事用のスマホを部屋に忘れたことを思い出した俺は運転手に告げて待っているように言う。

急いで部屋に戻ってベッドの方にぶん投げた記憶を頼りにあちこちひっくり返しながらスマホを探す。しかし、全然見つからない。

マズい、このままでは遅刻だと俺は顔を顰めた。

~~~~~

結局、一人では見つからず、支配人や運転手と一緒に躍りになって探してやっとスマホが見つかった。支配人に掃除を強くお願いされてしまった。ぐうの音も出ないとはこの事だ。

顔から火が出そうな思いだが、やってしまったものは仕方がない。切り替えていこう。

俺はかぐやと違って俗に言う花嫁修業の真似事などしていないため、掃除は大の不得手だ。料理ならともかくとして。



一応、学校には仕事に手間取って遅れると虚偽の説明をして切り抜けた。クラスの皆も大抵が力関係を察しているので、基本誰も言わない。ただ一人を除いて。

「あなた、本当は別の理由で遅れたんでしょ」

「……別の理由だと？詳しく知りたいな」

「あなたが手間取る仕事なんて早々あるはずないじゃない。どうせお気に入りのペンがどこかに行ってたとかそんな感じでしょ？」

眞妃は変なところで勘が良く、侮り難い。ネコみたいなやつだ。

考察も少し違う点はあるものの割と的を射ている。一瞬盗聴器でも仕掛けられていたのかと疑ってしまった。

さて、どう反論したものかと俺は頭を捻る。

「そんな些細なミスをするわけじゃないでしょう。鳳翔はいずれ四宮を背負うお人なのですから」

叔母のかぐやが現れた。

今日も絶賛その手のモードに入っている。心の内では俺のことを散々罵ってくれていることはお見通しだ。

こつちは一応妹同然に思っていてやっていると言うのに。だが、世の中の妹は兄を散々に罵るとも聞くので、ある意味自然なことなのかもしれない。

だが、どういう風の吹き回しか。何故かここ最近かぐや自ら俺の弁当を運んで来る。千切れんばかりの尻尾の振り様だ。生徒会解散と何かしら関係あるのだろうか詳細は不明だ。

「あら、おば様。ご機嫌よう」

「だからおば様はよしてくださいといつも言っているでしょう」

「……姪扱いすれば止むぞ。それ」

四宮鳳翔、四条真妃、四宮かぐや。ついでに生徒会解散中のため教室にいる白銀御行。この学年の四天王とでも言うべき人物たちが一堂に介している。

その豪華さは一目見ようと他クラスからも見物人が来るほどだ。

「鳳翔、今日の分の弁当です。受け取ってください」

「ん。ありがとう」

弁当は別邸の料理人が作って一級品が出来立てで学校まで届けられる。かぐやのとは違って非常に肉々しい。それを見て俺は今日も口角を上げる。

量もかぐやと比べて遥かに食べる俺のため、さながら百貨店のおせち料理のような貫禄がある。また、中身は全くもって別物。ローストビーフは当たり前で穴子やらキスやらハモといった各種天ぷらが入っている。一応、旬を重視したかぐやと違って俺のは単に俺の好きな物を詰ませた——陳腐な言い方だが——男の夢が詰まった弁当だ。

一応、ホテルのフィットネスに頻度に気をつけながら通っているのもあって、体脂肪率は依然低いままだ。そもそも四宮家は代々痩せ型である。

何年も前に早坂から不意に早死にするなどと言われた覚えがあるが、俺が死んでダメになるようなら四宮グループといえど遅かれ早かれ潰れるだろう。それに老いて醜態を晒すくらいなら早死にする方が良い。

ふと、かぐやが何やらペットと話しているのが目に入る。結局、アホみたいなサイズのケーキはかぐやがペットへの餌付けとして行つたと結論が出た。全く大袈裟なヤツだ。

帰還初日に電話で餌やりについての注意をしたところ、何故か数秒固まっていた。凶星だったらしい。

「翼、一緒に食べよう」

中等部時代のかぐやでもあるまいし、ぼっち飯は性に合わない。別に翼以外にもアテはたくさんあるが、それでもなお翼が優先だ。

翼の実家の病院は四宮家関係者の多くが使っていることもあつて翼が断ることはない。一部の例外を除いて秀知院生はその辺に敏感なのだ。

柏木はどうせ真妃と一緒にだろう。俺が帰ってから昼はずっとそうだ。羨ましいなどと柏木に言わせるつもりはない。

「それでさ、支配人が掃除しろとか何とか言い出してさ」

俺は翼に愚痴を連ねていた。生来の気性もあつてか彼はにこやかに聞いている。元々、翼は俺の欠点を承知していた。話が弾む。

気付けば何故か獲物が一個なくなっていた。

「ふーん、悪くないわね。この唐揚げ」

「フグだぞそれ」

どうやら四条家の御令嬢様は盗っ人にお目覚めになったらしい。俺のフグを一匹盗って行った。

誇り高い四条とは何だったのか。

眞妃の弁当はおおよそ俺の趣味に合わない。取り返すというか返しにどれか一品奪う気は毛頭なかった。

しかし眞妃がそこまで食い意地張っていたとは知らなかった。男子だけでなく女子も三日——実際には一年半近くぶりだが——会わざれば刮目して見よということか。

だが、フグと聞いて震え上がっているのが約一名。

「あら、会長。フグはお嫌いですか」

「いや、そういうわけではないんだが」

哀れ白銀。フグはお気に召さなかったようだ。

今度飯に行くときは寿司にでも連れて行ってやろう。

~~~~~

弁当を食い尽くし、サッカーというより蹴鞠——シユートが素人に当たったら危ないという神童の一声によるもの。これはこれで楽しく雅なので構わない——に興じるため、中庭へ向かう。

「あつれれ、翔くんじゃん。おっ久あ」

一階の廊下で早坂がちよっかいを掛けてきた。急いでいるので、構っている暇はない。

早坂は周囲に人がいないのを確認し、メイドとしての口調でイチヤモンをつけてきた。

「……案の定お部屋を散らかしているようですね。そのおかげで今日遅れたとか」

げ。

「だから言ったんですよ。別邸の方に戻るべきだと」

先日の別邸対ホテル論争。彼女の主張は俺の掃除能力の欠如を最初に挙げてきた。ホテルスタッフでは始末に負えないだろうと。

対して俺は企みの都合上絶対にダメだという事を正直に話すわけにもいかないのです、本家嫡流の俺が別邸に戻れば、かぐやが居るだけでもキャパオーバーに近い使用人たちがいいよパンクすると主張した。

掃除の件に関しては俺が気をつければ良いだけの話とした。

実際、俺が別邸に戻れば来客数の激増その他によって使用人たちへの負担は耐え難いものになっていただろう。嘘は言っていない。

しかし、早坂にも使用人としての矜持があるらしく、俺が戻った際の使用人の差配を前もって想定しておいたのか、細々と説明してのけた。

それによると割と耐え得るらしい。

来客数などにおいて想定が甘い節が見受けられたので、半信半疑だが。

その後もしばらくの間口論は続いた。

結局、俺はかつて父黄光が早坂に下した密命を盾に跳ね除けたのだが、どうやらそれを根に持っているらしくかった。そういう表情をしている。赤の他人が一見しただけなら分からないだろうが。

「大丈夫、心配せずとも対処法は既に見つけた」

俺は脱兎のごとく駆け出した。

映画のスパイ染みた身体能力とスキルを持つ早坂ではあるが、白昼堂々校内でそれを発揮するわけにもいかない。

無事逃げ切って神童らサッカー部の一部と蹴鞠に興じた。

楽しい時間はあっという間に過ぎ、昼休みも終わりに近くなった。次の授業が教室移動のクラスがあると把握していた神童の冷静な判断で早めにお開きとなった。

中等部時代のラーメン巡りの一貫で使い方を学んだ自動販売機でお茶を買い、一気に三分の一ほど飲み干す。

「あ、あの」

小柄な女生徒が声を掛けてきた。風紀委員特有の黄色い腕章を付けている。

先程の蹴鞠にでも文句があるのだろうか。

しかし、風紀委員の顧問はどうの昔に買収済みだし、俺にとって都合の悪いルールは変更させて欲しい。

一体何の用だと問う。彼女は自己紹介を済ませてから言った。

「今度の生徒会選挙、四宮先輩のお力をお借りしたくて」

なるほど。

白銀のバックにいるかぐやに対抗するため俺の力が要ると。正解だ。

一応買収やルール改変に当たって俺に関する噂自体は僅かに出回ってしまったものの、目立った動き自体はしていなかったのが影響

したのか。俺の本性は知らないらしかった。

矜持こそあれまだまだ力不足と見た。

以前高一の学年首席がこんな感じの娘だと聞いたことを思い出す。  
おそらくこの娘だろう。

少し遊んでやろうか。

この安易な考えが俺に失態をもたらした。

(3)

四条眞妃は激怒した。既に生徒会選挙のシーズンに突入しているこの日。

親友の柏木渚がとんでもないことを言い出してきたのだ。

「本物の愛？」

「そう、彼に聞いて来て欲しいの」

「はあ？自分で聞けば良いじゃない」

眞妃がそう言うと、渚は囁いてきた。彼というのは柏木の彼氏と人と呼ばれる田沼翼のことではなく、あの四宮鳳翔のことらしい。

「そこに直りなさい、この不調法者！」

自分の彼氏より能力面で優れた男が現れるや否やそちらに靡こうとするメス猫を眞妃は一喝した。

「あゝ、そうじゃなくって」

話を聞けば、渚の友人が彼に聞きたいらしい。しかし、その友人では彼に聞くのに都合が悪く、仮にもいわゆるVIP組の一員である渚に頼んで来たとか。

しかし、いくら渚でも四宮鳳翔とは身分違い。そこで彼と対等と思しき眞妃に頼みたいと言うことらしい。

眞妃も彼にそんなことを聞くのは避けたかったが、眞妃は生まれながらに人が良かった。

「本当に、その友達は実在するんでしょうね？」



眞妃は友人と称してその実渚自身が聞きたいのではとなお疑いを呈した。

しかし、渚のするという言葉に嘘をついた様子はなかった。

「仕方ないわね！」

振りに応える芸人のごとく、眞妃は渚の頼みを受け入れた。

そんなわけで眞妃は鳳翔と相對している。いざ彼に面と向かって聞くと思うと、小っ恥ずかしくて仕方がない。だが、これも親友のため。眞妃は腹を括った。

「ほ、本物の愛ってどう思う？」

可能な限り傲慢不遜な態度で彼を問いただす。しかし、彼は困惑していた。

「……早坂家を売れとかそう言う話？無理」

四宮家から分裂してできた四条家だけあって、四宮家に仕える早坂家については当然承知している。令嬢の眞妃であっても例外ではない。

早坂愛が叔母様の近侍であるという情報もとつくの昔に知っている。

だが、違う。

「そういう話じゃない！」

「……真面目な話なのか、これ」

「そうよ、グズグズせずに早く答えなさい」

「ふむ」

彼は手を顎に置き暫し熟考した。

眞妃はその時間が人気店の行列に手持ち無沙汰で並んでいる時のように長く思えた。

「病院行ってこい」

眞妃はキレた。

~~~~~

仕方なく早坂に先日眞妃が世迷言を言い放った件について調べさせたところ、すぐに分かった。どうやらかぐやが発端らしく、柏木渚を経由して眞妃にお鉢が回ったらしい。

かぐやが本物の愛について知りたがるとはどう言う状況か。

早坂に聞いても要領を得ない解答しか得られない。

結局、何らかの映画か何かを見たのだろうという結論に達した。

だが、今はそんなことどうでも良い。

「では、これを保護者宛のプリントとして配布すれば」

「はい、一応各家庭に電話で受け取ったか確認して回るといふ文言も添えて。明らかに紛失しそうでかつ率先して噂を広める類の生徒のご家庭には実際に電話するようお願いします」

「ええ、分かりました。職員会議に投げておきましょう」

とある主任級の先生にブラックなお願い事をする。彼は親が事故に遭い、その治療費に困っていたのを俺が助けたのだ。そして、彼は恩には必ず報いる男。

事故の原因に関しては俺がマッチポンプみたいな真似事をする筈がないので、ただの偶然だ。

もちろんこの先生以外にも俺のシンパは数多くいる。今回のプリント配布に賛同するよう言い含めておくのを忘れる訳がない。

今度は別の、選挙管理に関わる先生に個人的なお願い事。

「ああ先生。昨年の生徒会選挙では無記名や非候補者の名前を書くといったようなふざけた投票が多発したそうですね？どうでしょう？今回から投票は記名投票で行っては？もちろん生徒には誰が誰に投票したのか知らされませんが。そう、生徒には」

「なるほど。良いように取り計らいましょう」

「頼みましたよ。息子さんの栄達を心よりお祈りしております」

多発というのは非常に便利な言葉だ。複数そうした事例が起こっていたなら使用できる。

今度の先生は息子が四宮系列の企業に就職している。ちよつと昇級を示唆するくらいなら別に良い。それぐらいの能力を備えていることは確認済み。

シンパの生徒に連絡する。今度の生徒会選挙は記名投票で、誰に投票したのか保護者に知らされると。数時間としないうちに校内にこの噂が広まるだろう。

翌日。俺は相変わらず翼と一緒に弁当を食べていた。眞妃はどこかへ消えた。

「ごめんくださ〜い、翔くん居る〜?」

他クラスを訪れたからだろうか。若干丁寧でなおキャピキャピした声を俺は無視した。

見かねた翼が呼びかけてくる。

「大将。呼ばれてるよ」

「んん?」

そうこうするうちに早坂が机にやって来る。教室でそんな素早い動きして良いのだろうか。

「何かね、うちのクラスの四宮さんが怒ってるんだ〜。何度呼び立てても来ないって」

「なるほど」

「行ってあげたら?」

翼の言葉を受けて仕方なく、百歩どころか万歩も譲歩することとした。本来、向こうから尋ねて来るべきであるというのに。

「弁当食い終わってからな」

早坂が並みの人なら気絶しそうな目で睨んでくる。だが、四宮家の家督を継ぐ者として、こんな脅しに屈する訳にはいかない。

しかし人より遥かに多い量の弁当もいつか終わりが来るわけで。結局俺はこの生徒会室を訪れていた。早坂はこの場にいない。扉を蹴破るとそこにいたのは四宮かぐやと四条真妃の両名であった。

かぐやは古典的な淑女らしく座っており、真妃は上手い具合に足を交差させて座っている。

道理で教室にいなかった訳だ。

「これはこれはお揃いで」

実に珍しい組み合わせだ。どこか一致団結している様子が窺える。明日は雨か雪でも降ると言うやつなのだろうか。

かぐやは良いとして、真妃がここにいる意味が分からない。

二人とも絶対零度の視線を俺に浴びせていた。

かぐやが粗茶を出してきた。流石にこんな学生時代の選挙一つで将来の棟梁にあからさまに楯突くことはないと思いたいが。

度胸を見せんと一気飲みした。勢いよくカップをテーブルに置く。

「お代わりを」

かぐやはいそいそと新しい茶を用意し始めた。ここで真妃が口を開いた。

「あんた最近、随分とあの一年生に入れ込んでいる様子じゃない？」

伊井野ミコのこと何やら話があるらしい。

俺は彼女を支援するにあたって素性や性格・趣味に至るまで調べた。

伊井野ミコ。父親が高等裁判所裁判官で母親は国際人道支援団体

職員という完全にそっち系の娘。

性格は曲がったことを許さない生真面目な性格。本当になぜルを変える系男子の俺を頼ったのか不思議だ。

彼女は定期試験で一位を獲ることを自信の根源としている。まあそれはどうでも良い。

趣味はイケメン男性の囁き声が収録されたCDを聴くこと。俺も試しに聞いてみたが、寒気がするだけだった。

他にもラクダの鳴き声やその他環境音BGMと呼ばれる類の音楽を聴いている完全なメンヘラ女。

正直これらの情報を知っていたら貞操の危機ということでも最初から関わらないでいただろう。だが、賽は投げられてしまったので仕方ない。

「悪いか？困っている人を見たら助けるのは当たり前だろう？」

俺が人を困らせないと一言も言っていない。

「そうですか。では私たちも助けてくださいますか？」

かぐやが何やら気色の悪いことを言い始めた。どうにも白銀が負けるのは不愉快らしい。その美しいペット愛に感激した。

「だが、一度伊井野に勝たせると約束した以上は難しいぞ」

勝つために力を入れているこの状況。今更、白紙に戻すことはできない。

「それでこのプリントですか」

かぐやが昨日の帰りのホームルームで生徒たちに配布されたプリントをテーブルに置いた。

そこにはこう書かれてある。

生徒会選挙の候補者は二人。一人は白銀御行、支援者は四宮かぐや。もう一人は伊井野ミコ、支援者は四宮鳳翔。

「事実しか書かれていないじゃないか」

「それに加えて、全クラスで保護者に見せると生徒に圧力を掛けさせる。電話確認までチラつかせて。なるほど、大した一手です」

流石にかぐやは理解しているらしい。

いくら名門秀知院生といえど、所詮は子どもに過ぎない。遅かれ早かれプリントを保護者に見せるだろう。

そのプリントを見た保護者はどう考えるか。ほとんどの者たちが今回の生徒会選挙は四宮家同士による代理戦争だと理解する。

「極め付けは広く流布され教師に確認を取れた者も出た噂。今回の選挙は記名投票であり、その内容は保護者に通知されると」

代理戦争と理解した親の多くは息子あるいは息女に嫡流の俺が支援する伊井野ミコに投票するよう迫るだろう。

一方のかぐやは妾の子であることが半分俺のせいで学内に知れ渡っている。差別する意図がなくとも、わざわざかぐやに乗るバカはいない。

生徒がいざ投票となって指示に背けばその内親にバレて大目玉を喰らうと。

ほとんどの生徒が親の金で贅沢しているこの学園では極めて効果的だ。

「それで、お前はこの状況下でどうするって言うんだ？VIP組の圧力でも使うか？あれらも大半は俺とズブズブだけど？」

俺が出てきた以上、四宮の力はかぐやではなく俺が活用することになる。もう勝敗は決したも同然だが。

「こうなった以上は政策面で勝負するしかないでしょう。幸い、そちらの政策はかなり無茶なものようですし」

あの坊主おさげ強制、さらには手荷物検査のことを言っているのか。  
秘匿は上手く行っているようで何よりだ。

「ふくん。まあせいぜい頑張つて。ところでお前はなんでいる訳？」

先程から俺とかぐやの競り合いを静観している真妃に問いかける。

「決まってるでしょ。私が叔母様に協力するためよ」

何かしらの利害の一致でもあったというのか。何かは分かりかねるが。

「ほう。四条家の力は俺には通用しないと散々示した筈だが？まして今回は国内そして秀知院だぞ？」

四条家は設立過程が過程だったので、国外に本拠を構える。だが、お得意の海外で俺に連戦連敗だった訳で。

いくら四条を負かした時に手足となって動いた者たちが国内にはほとんど居ないとはいえ、ここで四条に負ける道理はない。

「まあ見てなさい。あんたが悔しがる姿が今から目に浮かぶわ」





「当初、伊井野は皆さま方に男子は坊主、女子にはおさげといった髪型を強要するおつもりでした。しかし、そこはこの私が応援するにあたり、その部分は手直しさせていただきました」

公の場での一人称は私を使う。

伊井野を六法から引用して説き伏せたことが思い出される。もちろん、アフターケアとして君は頑張っているよなどと囁くのを忘れなかった。

「この髪型は成績不振者、あるいは素行不良者に自主的にやっていただくこととします」

もちろん、この聴衆の中にもおバカさんは少なくない。そのフォローとして言った。

信賞必罰は世の常。つまり、学校に何かしらの貢献をすれば免除される旨を伝えた。

「そう、何かしらの貢献です。部活動の実績が最たる例でしょう。あるいはもつと他にも……あるでしょうね」

秀知院生ならこれで気付く。

最悪、寄付金で免除。つまり理事長である俺のパツパに貢げば回避可能だと。

無責任極まりない坊ちゃん嬢ちゃんにはこれが効く。

「手荷物検査もこれと同様。対象者は限定され、努力次第で免除可能。こうすることで、生徒間の切磋琢磨を促していく所存であります」

もちろん、その努力には親に寄付金の支払いを説き伏せることも含まれる。

何はともあれ、最悪だった伊井野の政策はこれで一変した。これな

らまあ投票しても良いかと思わせられる。

白銀たちがどんなに聞こえの良い政策を打ち出してきても無意味。

俺の演説が終わり、伊井野本人の演説のための最終確認を行う。

そうこうする内にかぐやによる応援演説が終了した。嫌でも伊井野に投票せざるを得ない生徒たちが名残惜しそうに聞いていたのが印象的だった。

「緊張してる？」

次は伊井野自身による演説。これが最大の山場。

彼女は変なところで自己肯定感に欠け、演説が不得手だと彼女の同級生かつ俺のシンパから報告が入っている。

流石にここまで肩入れした手前負けられないので、伊井野には条件を出した。五秒間与えるが、その間に軌道に乗らなければ、事前に録音したものを流すというもの。

「大丈夫、俺がついてる。お前は必ず勝つ。祝勝会用にフレンチだつて予約したぐらいだ。絶対大丈夫」

数年後に流行語になる言葉を吐いて、伊井野を励ます。恍惚とした表情で伊井野は戦場へと向かった。

伊井野の旧友大仏こぼちのメガネが怪しく光ったのに俺は気づかなかった。

そして鬼門の五秒間。天が味方したのか、はたまた俺が味方したのが良かったのか、すすいと乗り切った。その後も特に問題なく無事に伊井野の演説は終わった。

完全勝利だ。

後日、新生徒会発足。

伊井野が会長で藤原が副会長。他の面々に関しては無論俺のシンパだ。

俺自身は何の役職にもついていない。最初やる気を見せるだけ見せておいて、多忙を理由に断った。

ただ伊井野と藤原だけでは限界があり、俺が操る余地は十二分にある。

「ふんふんふふくん」

あまりに事が上手く運び、鼻歌が出てしまう。終いには舞でも踊ってしまいそうだ。かぐやと違ってそんなの習ってないが。

窓から校内の様子を観察すると、坊主頭あるいはおさげ髪で腕に赤布を巻きつけた寄付金交渉に失敗したらしい生徒がポツポツ見られる。

これが新しい秀知院学園だ。

「随分とご機嫌の様子じゃない、叔父様」

「……今なんて？」

真妃の口から聞きたくない言葉トップスリーに入る言葉が聞こえた気がした。

きつと気のせいだ。

「聞こえなかったかしら、叔父様」

「おやおや可愛い姪のマキちゃんじゃあないか。んん？何か用かね？」

「これを見てみなさい」

眞妃のお可愛く飾られたスマホが手渡される。画面を見てみると、秀知院学園に関してとんでもない話がSNSに出ている様子だった。世に言う炎上というやつだ。

ふと気になって眞妃のSNSアカウントを覗き見しようとしたタ  
イミングで、スマホが取り返される。

「赤布は失態だったわね。途中で投げ出すからこんな結果になるの  
よ」

眞妃が何やら俺を見下す形で言ってくる。

新生徒会の発足後に打ち出された政策。この煽りを受けたのが野  
球部だ。この学園では罰則の象徴と化した坊主頭で他の生徒から偏  
見の目で見られていると部長から相談が来た。

そこで俺は新生徒会に何とかしろと投げた。その影響で例の罰則  
の対象者は身体のどこかに赤布を巻くということになったのだが。

「あれ染みていると言っても言いたいのか。とんだ言い掛かりだ」

半世紀以上前にいた某元美術志望の政治家を連想させる決まりは  
絶対厳禁。海外で仕事をしていた自分が検討の場にいれば回避でき  
たであろう事案だ。

最も、新生徒会の判断を報告された時に適当に聞き流していた俺に  
非がないとは言わない。

「言い掛かりでもなんでも、こうして表に流れちゃった以上は何かし  
らの処分は必要じゃないかしら？」

「今、職員室はてんやわんやの様子ですよ。新生徒会に責任追求がいつてもおかしくないでしょうね」

「石上優……!?!」

前生徒会メンバーの石上優。

会計職として縁の下の力持ちだった彼は腕に赤布を巻きつけ、かつての野暮つたい長髪から清潔感溢れる坊主頭へとチェンジしていた。

どうやら伊井野ミコ直々に校内で漫画雑誌を読んでいたところを刈り取ったらしい。親が家庭内でのヒエラルキーが異常に低い彼を庇って金を出すはずがなかった。

記念すべき被害者第一号として恨み骨髓の様子だ。

しかしこの状況下では新生徒会を助けようがない。下手すりゃ巻き込まれるわけで。

「おそらく現生徒会の方々の首はすげ替えられるでしょうね。そして、その後に座るのは……」

「お前たちということか、かぐや」

ここで眞妃が訂正する。眞妃自体は生徒会に加わるつもりはないらしい。

かぐやは続けて言った。

「そうそう、あなたのお父上も随分お怒りのご様子ですよ? ついては週末にも京都の本邸に来るよう伝えてくれと」

不意に現れたかぐやの言葉は俺の顔を青ざめさせるには十分だった。

よりもよって父に言い付けたのか。あの人は普段は甘さマシマシパパだが、締めるべきところは締める。

今度は前生徒会長がお出ましのようだ。

「少し、遊びが過ぎたようだな」

「……白銀、お前俺の金でどんだけ食った？家族へのおみやの分も俺が出したことを忘れたか？」

「倍にして返す。だが、お前は色々舐めすぎだ」

石上にしろ白銀にしろ、眞妃とかぐやが背後にいるせいとかやたら気が大きくなっている。

虎の威を借る狐。そんな言葉が脳裏を掠めた。

「……ツハハハハ、ハハハ、見事!!見事だ!!」

もはや賞賛する他なかった。大方彼らのしたことは理解した。

彼らは一旦負けてから再起を図る方向へ早々にシフトしていたということだ。

これは内通者なくして成立し得ない。

最初の段階で内通者足り得たのは大仏こぼちのみ。他が伊井野ミコ本人と俺自身しかいなかったためだ。

彼女が内通し、俺が手直した政策をかぐやたちに密かに伝えた。その結果、かぐやたちは赤布及びSNSによる炎上という活路を見出した。

どうやったのか藤原を更なる内通者に仕立て新生徒会内部に影響力を持つ。何かのチケットで買収でもしたのか。

また野球部を利用し、俺に坊主の対策を新生徒会に投げさせたのだろう。

最終的に責任を取らされ罷免された新生徒会に代わるのは、生徒たちに受けの良い政策でアピールした旧生徒会の面々。

これ以外に考えられない。

一本取られた。だが、これはこれで良い。

後日、新生徒会の面々は解任される。なお、藤原は書記として伊井野は会計監査として生き残った。

切られたのは俺のシンパたち。非常に申し訳なく思った。

そして週末。京都本邸にて。

「父上……面目次第もございません!!」

父が理事長となっている学校の名誉を傷つけてしまった。そう平謝りするが、父は無言を貫いている。

これにはどう反応すれば良いのか困らされた。

正直、父に借りを作つたのは無茶苦茶痛い。後に痛い形で響きかねない。

週明け。人気の無い廊下に居た早坂の俺を見る目にカチンと来た俺は言う。

「……なんだその目は?」

「いえ、別に」

俺は知っている。早坂の底意地の悪さは母親譲り。その早坂にまるで手負いの獣を哀れむかのような目で見られたことが俺にとって



はここ数年で一番の屈辱だった。

(4)

四宮グループは企業数総資産二百兆円にして四千超の関連企業と九十万人もの総社員を抱える日本有数の財閥である。そのトップである総帥が凡人であるはずも無く、現に四宮雁庵は昭和の怪物の異名を持つ傑物として名高い。

その雁庵は京都にある四宮本邸の自身の書齋で秘書の早坂正人から雁庵の嫡孫である鳳翔が仕出かした不始末について報告を受けていた。

(かぐやのやり口が巧みだったとはいえ、鳳翔め。油断したな。いや、油断というより遊び半分だったが故の不始末と言ったところか)

「これを見て、お前はどう思った？」

報告書に目を通す雁庵から所感を尋ねられた正人は重々しく口を開いた。

「……正直、驚きました。まさかあの御方がこのようなミスをなさるとは」

正人の言葉を聞いた雁庵は目を逸らす。鳳翔が徐々に自分のような畏怖の目で周囲から見られつつある事を改めて感じたがためだ。

「あいつも人間だと言うことだろう。偶にはミスもする。それで、この事を知っているのは？」

「箝口令は既に出しておりますが、黄光様とかぐや様の他にも各々方の側近の幾名かの知るところとなっております」

「……なら、その側近の中からごく少数で構わねえ。処分して良い者を選び出せ。分かるな？今後この事で鳳翔を良いようにしようと言うならタダでは済まないということをあの二人に教えてやれ。手段は問わん」

「畏まりました。早速、手配致します」

一礼して正人は書斎から去る。雁庵は酒を片手に窓の外から見える月を見た。

「……名夜竹。俺はまだそっちには行けねえらしい。だから、もう少しだけ待っててくれ」

名夜竹とは今は鬼籍でかぐやの母親である清水名夜竹のことである。名夜竹の没後、意気消沈していた雁庵は名夜竹の娘で赤子のかぐやではなく、同じく生まれたばかりである孫の鳳翔をそれはそれは可愛がった。

ただ甘やかすばかりでは無い。勉強、武芸、芸事の類にはずば抜けて優秀でありながらパーテイから逃げ出す絵に描いたような奔放さを持った鳳翔を黙認するだけでなく、自分の知るありとあらゆる術を折を見て仕込んだのだ。

「失礼します。雁庵様、お呼びでしょうか」

先程の正人とは別の秘書を呼び出した。家訓にある通り、雁庵は人を使っても人に頼るような真似はしない。一人に情報を依存すればどのような末路が待っているのか知っているのだ。

「……ああ。先程の正人の言葉間違いはねえだろうか？」

「概ね間違いありません」

「概ね？」

思わぬ……とまでは行かないまでも意外な秘書の言葉に雁庵はおおむ返しする。

「はい。調べたところによれば、今回の一件。四条家の令嬢眞妃様が関与していたと」

四条家は四宮家と根深い対立関係にあるとはいえ、元は同じ家。早坂愛が良い例であるが、四宮家に仕える者たちは四条家のうち四宮家の血筋を引く者を敬称で呼ぶのが常である。

「ほう？」

「どうやらかぐや様を含む旧生徒会メンバーが眞妃様と結託して若君を嵌めたようです」

今度こそ思わぬ話に雁庵の口角が上がる。ここ暫く鳴りを潜めていた怪物の覇気に秘書は鳥肌が立つのを自覚した。

「……かぐやの方からその眞妃何某に声を掛けるようなことあねえだろうな」

「はい。体調不良で寝込んでいたかぐや様に眞妃様の方から声を掛けたと、秀知院学園高等部の養護教諭から報告が来ております」

雁庵は暫く考え込んだ末に、秘書に尋ねた。

「お前は どうして 四条の 小娘の方から かぐやに 声を 掛けた と思う？」

「報告によれば、眞妃様から見て帰国後の若君のお振る舞いに目が余る点があつたそうで」

「それで？」

「申し訳ありません。詳細まではその場で言及されなかつたようです」

「……俺はお前の考えを聞いたんだ。どうしてそれで報告一辺倒なんだ？」

今の四宮家は雁庵自身のカリスマ性への心酔と鳳翔の将来性への期待感によって纏まっている。こうした状況が永久に続くわけではないことは雁庵自身承知しており、秘書といえど何とか育てて鳳翔のために遺産を残しておきたいと思うのが親心ならぬ祖父心である。

「私には考えなどと言うものはありません。ただ秘書として雁庵様の手足となつて働くことが出来ればそれで私は満足です」

「そうか……それで良い。下がつて良いぞ」

どこか困惑する様子の秘書が書斎を出て行つてから現実と理想の剥離に雁庵は溜め息を吐いた。

「ダメだな。この有り様じゃ鳳翔の代になつても四宮は……」

四宮家の力の根源はその絶対君主制にあるが、何時までもその体制では通用しないことは長い人生の中で時代の潮流の変化に敏感に反応してきた雁庵自身承知するところだ。

幸か不幸か長男黄光あるいはその弟の青龍や雲鷹ではなく嫡孫の鳳翔に有り余る才能は受け継がれた。鳳翔は幼少期から類稀な才能

を發揮し、雁庵もそれを見込んで数年という短い間ではあったが自らの知る術を直接教え込んで来たが、付いて来る者たちがこれでは鳳翔はいつか時代の波に呑み込まれることになりはしないかと不安で堪らない。

それはさておき、雁庵は先程の秘書の処分について考え始めた。

「ああ、そうか。あいつはあの事知らないんだったな。なら、分からないくても——」

不思議じゃない。

もう五年以上も前のことになる。いずれ万里を羽ばたくべき孫が腑抜けになるのではと恐れた雁庵が鳳翔に施した教育。

雁庵自身その内容が常軌を逸していたことは当時も理解していたが、その判断の可否について情として迷う事はあれど理としてやるべきでなかったとは今でも思っていない。

「……こんな事も直ぐに考え付かないたあ、俺も耄碌し出してるってことか」

身体が思うように動かなくなつて久しく、雁庵はここ最近自分が老いていることをひしひしと感じている。この一年余りで鳳翔が叩き出した規格外の成果に満足する自分が居たが、それでも彼はまだまだ小僧と言つても差し支えない年齢だ。

仮に、養子縁組等の手段を使って鳳翔に直接家督並びに財産を譲渡したとしても、年季<sup>ねんき</sup>は<sup>は</sup>ある黄光が鳳翔を支える体制でなければ危うい。そう雁庵は思っている。

「なあ、名夜竹。あの時の俺の選択は……間違っていたのか？」



「えっと、何でいるんですか?」

流石に教室で堂々と少女漫画を読むのは鋼鉄のメンタルを持つ俺でも躊躇われる。そこで人気のない場所が入り用なのだ。

そこで選んだボランティア部部室。だが、ここは翼とその彼女の言わば『愛の巣』のような空間でもある。

柏木は俺がここにいるのがご不満らしい。

「次期理事長が学校のどこにいても不思議じゃないだろ? ああ。経団連理事に宜しく伝えといてくれ」

柏木にはお悔やみを申し上げなければならない。

どの教室だろうが思いのままに侵入可能なマスターキーを俺は所有している。

ゆえに、俺がボランティア部部室でたむろしていても不思議ではないのだ。

「まあまあ、渚。彼のこれは今に始まったことじゃないから……」

流石に翼は良く分かってきている。

彼女相手でも啖呵を切るのが良い男というものだ。

それに、四宮お抱えの医師が好きな女に振り回されるなんてことはあつてはならない。

翼が実に頼もしくて何よりだ。

「本つ当に懲りてないようね。少しは反省したら?」

何故かいる眞妃。

こんなふざけた部活に入るような殊勝な精神を持ち合わせていただろうか。この部の顧問は俺が買収して部員増加を督促しないよう



念を入れて言い含めたのだ。

「よもや柏木が親友だからといって眞妃に声を掛ける事態にはならないはずだが。」

「何の話？」

「この間の選挙の件よ！」

先の生徒会選挙。

結局四人に迫られた時に思い至った経過で間違いなかったのだが、眞妃がかぐやたちに協力した本当の理由は今でも分からなかった。

どうにも眞妃の方からかぐやに協力を申し出たらしいのだが。

仕方なく早坂にどういうことだったのか聞いても知らぬ存ぜぬで頼りにならない。

いずれにせよ、眞妃がある種キーマン的な存在になったのは間違いない。

俺の手直しした伊井野の政策を食い破る策を思いついた者こそ他ならぬ眞妃だったと聞いている。

どうにもSNSの特性についての理解が深いらしかった。

「あのね、反省っていうのは引きずることとは違うの。要点だけ洗い出して頭の片隅にでも置いておけば良いんだよ」

そもそも眞妃は俺の悔しがる顔を見たかったと主張するが、俺としては一本取られはしたものの基本的には結果オーライの形でしかなかった。

出し抜かれたこと自体、知者も千慮に一失ありという言葉があるの  
で気にしていない。

父に頭を下げることになったのはかなり痛い。

別に俺は本気で伊井野に入れ込んでいたわけではない。勝たせるという約束自体は果たした。結局、あんなポ力で終わったのは最終的には伊井野本人の責任だろう。

任命責任もとい応援責任なんてものではないったらない。

単に眞妃が俺を出し抜きたかっただけだったりするのだろうか。色々考えたものの、結論は出ていない。

「ああ言えばこう言う……で、あの伊井野って娘とはどうなったのよ？」

「どうって何が？」

「……何回も食事に行ってたらしいじゃない」

思わぬ眞妃の追求に俺は目をパチクリさせる。

「嫉妬？」

「……しばくわよっ」

「まあ、まあ、マキ。落ち着いて」

真顔で怒気と殺気を出した眞妃をどこか眞妃に見惚れた様子 of 柏木が抑える。話題転換だとばかりに翼が口を開いた。

「ところで大将。何読んでるの？」

当然の反応だ。

スマホを購入して以来、電子書籍に傾注してきた俺が紙媒体を手に行っていることはさぞ懐かしく翼の目に映っている事だろう。



が嬉しい。

見返りとしてワインでも贈ることにした。

「おはよう、翼」

向かいのベッドで翼がお目覚めの様子だ。

最近、彼はこの部屋に泊まることが多い。ベッドはそのために増やした。広さも全く問題ない。

はじまりは彼に部屋の散らかり様を愚痴った時だ。なら自分が掃除すると買って出てくれた。

彼は本当に人が良い。

翼ならどうせ内容なんて分からないし、外に漏らすような真似もしない。結局それが一番大事なのだ。

今では外での仕事——幹部たちとの飲み会や政治家連中との食事会その他——がない時は毎日翼が泊まり込みで掃除をしている。

終われば、ホテル内の施設をフリーパスで遊び回れる。

おそらくこれ目当てだろう。

だが、今は彼が医学部に行くためにも大事な時期。

たまに俺が彼が分からない問題を教えることもある。

有名講師の間の取り方とか緩急の付け方、口調を模倣すれば大体それっぽくなった。

次のテストで彼女超えを目指そうと口を酸っぱくして言っている。

一応時間管理も俺が注意を払う徹底ぶり。俺のせいで落ちたとか言われたら普通に傷付くので手加減はしない。

一方、こっちは日が昇る前から仕事。学業がある分、時間との勝負だ。

頭の中で物事を少なくとも二つ三つは同時に考えなければならぬ。

キーボードを一心不乱に叩いていく。

「んく、大将。おはよう」

「おう、シャワー浴びてこい」

ある意味シェアハウス状態。柏木が知ったらどんな反応を見せてくれるか今から楽しみだ。

二人で朝食を摂る。

なお今日の彼の昼食は柏木が作って持ってきてくれるらしい。

だが、日常的にホテルシェフの作るものを食っているには物足りるだろう。哀れ。

「大将、忘れ物は？」

「うんざりするほど確認したから大丈夫」

二人で駄弁りながら車に乗り込む。なんだかんだ話題が尽きない。そうこうするうちに学校に着いた。

何故か外の空気によたらピンク感を感じたが、絶対に気のせいなので無視した。

仕事のせいか色々とヤバくなっているのかもしれない。

処理する量を減らすことを検討すべきかと物思いに耽った。

教室。

藤原があれこれ話しかけてくる。先日は例の大臣に会えて実に有意義な時間だった。途中であの頭のおかしい姉妹が外から帰ってきて場が混沌と化したことだけが悔やまれる。

「無視すんな、バカ…」

あの高飛車な真妃がしおらしい様子である。なんか制服の袖を手で引つ張っている。

不味い。俺は冷や汗をかく。この真妃の姿を他人に見られては厄介だ。

流石に一つのクラスから半月の間に多数の男子の失踪者を出すのは出来ると言えば出来るが、あまりやりたくない。いくらなんでも怪しまれかねないだろう。

俺は真妃を連れて人気のない廊下に移動し、例の壁ダアンをした。

「おい、どういうつもりだ？」

「別に……何でも良いでしょ」

真妃の姿に何だこいつと思った。調子が狂って仕方がない。

潤ませた目を右斜め下の方に向けている。俺は両手を真妃の頭部の左右に置くことで退路を塞いだ。

真妃が驚いた様子で俺の顔を見上げた。口を尖らせて言うことに俺は胸の鼓動が激しくなるのを感じる。

「何よ。あんたが悪いんじゃない。散々無視してくれちゃって」

「……無視？例えば？」

真妃は言う。例えば先程は藤原との会話に夢中になって真妃の呼びかけを無視していたらしい。

他にも後輩の女子に構って真妃を無視したとか。

またある時は弁当の中身をシェアしたいのを無視されたとか。

果ては戻ってきた初日のこともあげつらい始めた。

まだ話は続くらしいが、流石に俺はストップを掛けた。

「お前それってさ、俺に気があるって言うことで良いよね。え？」

真妃は戸惑った様子であちこち目線を右往左往させながら口を開く。

「気があるっていうか……」

「あつれれ、翔くんに四条さん！こんなところで何してんの？まさか二人で逢い引きい？」

早坂乱入。一体どこから聞いていたのか。思わず体勢を立て直して壁ダアンを解く。

これ幸いとばかりに真妃は茹で蛸のような顔をして去っていった。追おうとする俺を早坂が捕縛する。周りに人がいないから本気を出しても良いらしい。

「早坂、お前さあ」

お邪魔虫の凶行に怒りが沸々と湧いて来る。昔の縁とその立場並びに技能に免じて罰するつもりは無いが、それらさえなければ三日以内に肅清していたところだ。

「本当は分かっただけでしよう。真妃様は四条の御令嬢。若様であつてもどうにもならない相手」

早坂は四宮家のメイドとしての言葉で言った。諦めろ、と。

本当は主筋に向かつて無礼であると非難したいところだが、今は堪





今日の眞妃はやたら様子が可笑しかった。

例えば昼休み。昼食と一緒に食べたかったらしいので、空き教室で望みを叶えてやろうとした。

だが、俺の弁当を見て激怒。

どこかへ去っていった。

そして今、俺を引っ張ってタクシーに連れ込んだ。

移動すること別に大した時間もかからず、学校からも歩きでいける距離にある見覚えのある神社近くに到着。

現金を払って二人して降車する。そして示し合わせたかのように二人で黙ってその神社の境内の奥の方へと移動した。

「……で、こんな所まで連れてきた訳を聞いても？」

「そんなの何だって良いでしょ。それより、叔母様の近侍とは何？ 近くない？ 前々から思ってたけど」

何言ってるんだこいつ。

「早坂愛と距離をとって十年ほど。今更何かあると思うか？」

そもそも早坂とどうにかなる気は毛頭ない。もしそんなことをしてしまえば、グループ内部の力関係のバランスが偏ってしまう。それは将来の後継として避けるべきであるし、早坂自体ただの幼馴染かつかぐやのお付きというだけで好きでもなんでもないのだ。

「ふくん。ならあの弁当は？」

「早坂が料理人たちを葬ったらしいから、あれ自ら作ってきたようだ。」

詳細は不明だが」

真妃は俺の言葉でのっぴきならない事情があると理解したようだ。今日の早坂は本当に一体何だったのだろうか。

「そう。で、感想は？」

俺としては珍しく感情に任せて正直に答えた。

あの弁当はシェフの料理に慣れてしまった俺にとっては少々……いや、率直に言っただけなら物足りなかった。邪魔した事も含めて次にあんなことを仕出かしたら絶対に許さない。恒久的な海外転勤を視野に入れる必要がある。その時はヴァルハラ送りにしないのが最後の温情だ。

一応はかぐやの側付きなので、やろうと思っても直ぐに出来ることはではないし、少なくとも機密を握っている事から監視を寄越す必要があるのが手間ではあるが。

ちなみにかぐやは今日は自分で作った弁当を生徒会室で食べたらしい。

勘違いでなければ付き人の公私混同に巻き込まれた形だ。可哀想に。

伊井野政権の時に生徒会室の警備システムを掌握し盗聴器を設置するつもりだったのだが、実行する前に政権が転覆させられ、その案は没になった。

今はそれが悔やまれる。あの生徒会室でどんな会話が繰り広げられているのか興味は尽きない。

真妃は俺の言葉を聞いて笑い転げた。早坂に憐れみを覚えたそう  
だ。

しかし、すぐに顔を青くさせた。



昨日の件で話でもあるのだろうか。

「落ち着いて聞いてください。かぐや様がお倒れに」

自家用車を呼びつけてすぐに病院へ向かう。早坂は一旦帰宅し正装に着替えてから来るらしい。

担当医はおそらく田沼正造。『世界の名医十選』に選ばれた小児心臓ベイパス手術の第一人者として知られる名医。

四宮家お抱えの医者でもあり、首相の心臓手術の経験すらあった。

「先生。かぐやの病状は…!?!」

本人曰く、不整脈のようだという。突然心臓が激しく鳴り出し、時折死んでしまうのではないかと思う程胸が痛くなるそう。

心配だ。かぐやの母親は先天性の心臓病で結局それが元で亡くなったと聞いた覚えがある。

かぐやが居なくなると叔父の雲鷹のあたりの動きがしつちやかめつちやかになることが予見されるので、普通に嫌なのだが。

「二人とも、怒らないで聞いてください」

「おお、さすがは名医の中の名医！翼の祖父！もうお分かりに」

「話を伺って大体ね。……つまり、恋の病です」

「今なんて？」

「どうやら聞き間違いでも起こしたらしい。おおよそ病院で聞くに似合わぬ言葉だ。」

「恋の病です。普通に好きな人にドキドキするアレですね」

先生が言うところには、かぐやは恋のドキドキで倒れて救急車で運ばれたらしい。30年医者をやって初めての出来事に少し動揺しているらしい。

割と俺も動揺している。あのぼっち極めてたかぐやが？すぐには信じられない話だった。

かぐやが言うには学校の活動で特定の人物の事を考えると鼓動が速くなるのだとか。

今日は髪についていたゴミを彼が取ってくれて頬に少し手が触れたタイミングで胸に突然キュンキュンとした痛みが走ったらしい。その痛みで息もできなくなると。

かぐやが言うにはこれまでの人生でここまで胸が苦しくなったのは初めてとのことだ。

「かぐや、先生の言う通りだよ」

「では鳳翔も以前こんなことが？」

心機一転、墓穴を掘りかねない状況だと俺は気を引き締めた。

「……俺が誰相手に恋をするって？んな訳ないだろう」

「そうですか。てつきり真妃さんの名前が出てくるものと」

俺は一瞬硬直した。

誰が話を漏らしたのか。初等部の頃に祖父に一度バレたのが伝播したのか。だが、祖父とかぐやの仲は冷え込んでいるはず。

叔父の雲鷹が話を聞きつけ、かぐやに情報を売った可能性に思い至る。

父ともう一人の叔父青龍はこのことを知らない筈だし、情報を得たとしてかぐやに売る旨味があるとは思えない。

「なあんてそこでマキの名前が出てくるのかなあ？ んん？」

俺はすつとぼけることにした。

「安心しなよ、もう知ってるから。四条さんが入院してたとき毎日孫をパシリにしてたことはよく覚えてるよ」

思わぬ方向から飛び火し、俺は冷や汗をかく。

初等部の頃のことだ。

浅はかだった俺は四宮の息が掛かった病院で四条家令嬢と大ぴらにやり取りする訳にはいかないだろうと子供ながらに思い、こっちは屋上かどこかで勉強している振りをし、翼に見舞いの文言を書いたノートを持たせ往復させることで真妃とやり取りするという浅知恵を実行したのだ。

普通に病室で話すよりもガチ感が出てしまうことに気付かなかつた当時の俺を呪う。

とにかく、今ここで言うべきことはただ一つだ。

「すいませんでした」

言い訳の余地はなかった。素直に翼の祖父に謝る。久々に心のもった謝罪をした気がした。

居た堪れなくなって早坂と二人して診察室を出る。

「若様……………」

早坂がドン引きしている気がするが、今はそれどころではない。問い詰める必要がある。

「かぐやの病のこと、父上には？」

「……………」

「伝えていないんだな？ならば今しばらく保留に。決して違えることがないよう」

早坂は父黄光からかぐやの情報を逐一報告するよう密命が下されている。当然、かぐやは知らない話だ。

要点を言おう。早坂はかぐやの恋のことを隠蔽したのだ。

だが、今はその方が都合が良い。かぐやと弱味を握り合うことになつたが、協力体制を作る契機となる。

その場合、早坂の存在が煩わしいが。どう動くか分かったものではない。

「畏まりました」

その後、かぐやはあろうことか結構しつかりした額を使って精密検査をしたものの、心臓が綺麗であることが分かったのみ。

さっさと教室に戻った。実に馬鹿馬鹿しい。

自分の椅子に座り、腕を額に置いて天井を仰ぐ。瞑想を始めた。

一つ分かったことがある。かぐやは白銀御行のことが好きらしい。脅迫されているだのペットとして餌付けしてるだのと考えていた自分が恥ずかしい。二人の仲が怪しいと散々報告が上がっていたにも関わらず。

自分はそこまで思い込みが激しかっただろうか。

「俺…どうしたら」

「かぐやさん、そんなに悪いんですか…？」

「ああ、状況は危険極まりない」

「どうしたものか。このことを父が知ったらどんな反応をしたものか。」

いくら優秀とはいえ一平民に過ぎない白銀御行と腐っても四宮家令嬢のかぐやをくつつけるにはどうすれば良いか。

協力体制を築かざるを得ない以上は考えるしかない。

二人とも退学の末に離別するという最悪の未来が頭に浮かんだ。

「思わず俺は立ち上がる。」

「別れる事を防ぐため、最善を尽くす！これしかない！」

「うわあ〜！かぐやさん死んじゃったらやだ〜!!」

周囲を見渡せば、教室はお通夜モードに陥っていた。他クラスにまで波及している様子。眞妃は何やらメールを送信しているようである。

その後、かぐやの泰平無事を知ったみんなに責められ、あちこち追いやられる結果となった。



(5)

四宮鳳翔、11歳。色んな意味で同級生より進んでいる小学生だ。

というのも先日。終業式の日に好きな子とキスをした。

ツインテールの髪と綺麗で可愛い顔が特徴の才色兼備の女の子。その時のことを思い出すだけで天にも昇る心地だが、一つ問題があった。

それは彼女が俺の実家である四宮家と犬猿の仲にある家の令嬢であること。彼女との間柄がバレようものなら二人ともどんな目にあうか知れたものじゃない。故に、この関係は絶対に秘密にしなければならぬ。

最初に彼女を見たのは俺が初等部に入学する前に催されたさるパーティでのことだ。

一目見て彼女が叔母様なのか妹なのかよく分からないかぐやとどこか似ているように感じられた。今も昔も外見は全く違うが。

ただ、その時は別に好きとかそういう感情は彼女に持っていなかった。

そこで彼女と特に話をするというようなこともなく。

俺はパーティの直前、いつものようにしつこく言い含められていた。

「今日こそはちゃんと会場に居るんだぞ。隠れるとかは無しだからな」

国家の心臓とまで呼ばれる四宮家ではあるけれど、本邸は京都にあつて東京では無敵と言うほどまでに強いというわけではない。

四宮家としては嫡流の御曹司である俺がこの先十年は東京に居着

くことを契機とし、今一度強化しようという腹らしい。

ここ最近、以前の倍以上の頻度で東京で開催されるパーティーに出席している俺の父親にして次期四宮家総帥有力候補の四宮黄光は心配している。俺がまたパーティーから逃げ出したりどこかに隠れたりするのではないかと。

「分かっています。お父様」

もちろん分かっていない。四宮家の御曹司の俺に挨拶したい人は少なくない。それこそ料理にありつく暇もないほどひっきりなしに現れる。

それが面倒で俺はパーティーがある毎にお父様が危惧していたような行動を取る。今回も例外ではない。

「また逃げられた!!」

普段はテーブルクロス影に隠れたり階段近くの死角で物思いに耽ったりする。ある時には警備のおじさんと楽しくお喋りすることもある。子供という体で近付き、話術を駆使して偉い大人の有る事無い事を聞き出すのだ。当然、後になってから四宮家の御曹司であることがバレて平謝りされ、俺は人の弱みをお漏らしたことを密かに口止めされる。

今日は屋外に逃げ延び、庭園にある木の枝に登って一休み。上着を脱いで枕の代わりとして一眠りする。ふと、微かに目を開けるとこちらをまるで物の怪でも見ているかのように大きく目を見開いて視線を送るどこかかぐやに似た彼女の姿が目に入った。

数時間経って俺は聞き覚えのある大きな声に目を覚ました。

「こんなところに居たのか!!全くお前はいつもいつも……少しは反省

しろ！」

と口では色々罵るお父様も結局は口先だけ。注意した直後あるいは帰りの車内で俺の髪を優しく撫でていることから判断するに、然程怒ってはいない。その丸い頭も甘さもまるでアイスクリームのようだ。

「また、パーティから逃げたんですか？」

帰った俺を部屋で出迎えるのは早坂愛。幼いながら使用人である彼女は俺のスーツを脱がしに掛かる。この頃はまだ髪を結んではおらず、かぐやの近侍というわけでもなかった。肩に届くか届かないかぐらいかという長さの金色の髪が当時の俺には眩しく感じられた。

「だって、愛が居ないと退屈で」

元々、愛——当時はそう呼んでいた——は俺の付き添いのような形でパーティに出てくることはあったが、俺が愛と話し込んで声を掛ける大人を無視したというような事が二度三度あってからは同席しなくなつた。パーティ中の脱走にはそのことへの意趣返しという意味も含まれる。

俺の言葉を聞いた愛はスーツをハンガーに掛けながら頬を赤くして俯いた。この頃は互いに初心な反応を見せ合っていた。

そして、初等部入学前。愛との関係に転機が訪れる。

「……………え？」

お父様の言葉に耳を疑う自分が居た。

「愛はもうかぐやの近侍だ。あまり仲良くするな」

「……お父様が何を言っているのか、俺にはよく分かりません」

俺の言葉を聞いたお父様はツルピカ頭をポリポリと掻いた。落ちて着いて言葉を選んだ感を出しながら残酷だと思えることを言った。

「良いから、子供は黙って言うことを聞け。な？」

理由、それも最大の理由は何年も経った後に知ることになるが、それを知らなかった当時の俺は突然の宣告に狼狽えた。愛の方から何かアクションを起こすよう愛に言葉を尽くして頼んだが、取り付く島もなかった。遂に俺は不貞腐れ、一般的な小学一年生なら嬉々として受けるだろう授業を適当に受け流していた。

だが、それで成績に響く俺ではない。とある大きな書店に立ち寄ったときのこと。

「執事。この棚に並んでるの全教科分買って」

「かしこまりました」

教科書はあまりに省略箇所が多かったり説明が迂遠だったりする。ぱつと見で見分らない訳ではないが微妙に苛つくので、教科書のガイドブックのような書籍で何をやる予定なのか把握しておく。半年足らずで小学校六年間の内容を熟知してしまったので、さつさと中学校三年間の内容の把握に勤しみ始めた。

名門私学といえど簡単などころの扱いを簡潔にする分、少しペースが普通より速いのみで——おまけに中高で中途入学者が入って来るので、アホみたいな速さと言う訳ではない——何を教わるかさえ分



困の喧騒を無視して水筒に冷水をドボドボと入れた。

何時もの様に放課後になってしばらく経ってから送迎の車の後部座席にかぐや、愛、俺の順で乗り込む。かぐやが嬉々として愛に話しかける中、俺は仏頂面をして外の景色を眺めている振りをしていた。

つまらない。この時間は言うまでもないが……入学前は楽しくて仕方がなかったピアノ、バイオリン、外国語、その他のレッスんもつまらなくなっている。剣道や空手をはじめとする数種の武道もただ爺さま方の真似をするだけの無味乾燥な時間に過ぎない。

毎日が退屈で仕方なかった。

「帰ったら花札を教えてあげるわ。鳳翔もどう？」

俺はぶつきらぼうに答えた。

「別に良いよ。二人で好きにやったら良いじゃん」

愛が俺の物言いに心配しているのかは不明だけれど、チラツと俺の方を見るのが分かった。

注意された手前、かぐやや大人たちの前では親しくするわけにはいかない。ただ、学校に人から隠れるのにうってつけの場所があったので、昼休みを使って愛と落ち合っては都度話し込んでいた。この時間だけがこの頃の俺にとっては唯一の癒しだった。

「そう？それでね、早坂……」

窓に反射して見えるのはかぐやの相手をする愛の姿。元々俺がそこに居るはずだったのに。俺はバレない程度にため息を吐いた。

その夜。もう一度お父様に電話越しながら訴えることにした。



えて嬉しくなる自分が居た。しかし、正月はお母様も忙しくそんなにベツタリ出来ない。一方の愛は予想が外れて母の早坂奈央が居らず、どこか寂しげだった。学校で示し合わせた通り、昔二人で見つけた本邸近くの山にある用途がよく分からない小屋で落ち合う。

「愛」

俺は愛に抱きつく。愛も俺の背中に腕を回した。終業式の前日以来、溜まった話を二人で話し込んだ。夢中になったあまり、気付けば日が暮れそうな時刻になっていた。冬は日が落ちるのが早くて困る。

「帰ろっか」

愛はこくりと頷いた。昔とは違って髪を横で束ねている。その姿を見てそんなアクセサリーなんかどこか山の中にも捨ててさっさと元の髪型に戻して欲しいなど改めて思った。絶対にそっちの方が可愛い。

二人揃って小屋を出る。

「……あ」

お祖父様の秘書として働いている愛の父と鉢合わせした。冬なのに額から汗が出てくる気がした。

「鳳翔様。屋敷では鳳翔様が見当たらないと騒ぎになっております。まさかとは思いましたが、ここに居られたとは……」

不味い。責められる。愛が叱られない様にと庇うことにした。

「その、すみません。俺が愛を無理言つて連れ出して……」



愛の父は膝を屈めて俺に物申した。かなり度胸があるらしい。

「娘と仲良くしてくださいるのは大変ありがたいことですが、こうなることを私どもは望みません。さあ、帰りましょう。愛、後で話が」

愛の父……早坂正人の言う通り、本邸は騒然としていた。お母様が戻ってきた俺に抱きつき、お父様は俺の肩をそっと叩く。お祖父様までもが部屋から出てきて遠目にジッとこちらを見ていた。

夜になって俺が愛と密会していたことがお父様に伝わり、大目玉を喰らった。

「普段もこういうことをしてんのか？」

「……」

初めて見る普段とは違った剣幕に俺は威圧され、うまく言葉が出ない。お父様は業を煮やした。

「鳳翔!!」

結局、お母様が俺を庇ったことで話は有耶無耶になった。だが、お父様が学校の先生連中に注意を払う様に言ったのか、後日になって昼休みの密会がお父様に伝わった。俺の方からも愛の方からも互いに仲良くすることは——何年も経って知ったのだが秘密裏に——固く禁じられた。

それからかぐやには以前よりも八つ当たり気味に接する様になっていた。愛の方から何もアクションを起こさなかったことを知って勝手に愛に失望した。結局、俺が一人で舞い上がっていただけだったのだと心の中で自分を嘲笑った。

数ヶ月としないうちのこと。図書室に足を運ぶ途中でかぐやと同じクラスの子から俺は声を掛けられた。

「鳳翔様、その……かぐや様が妾の子って言うのは本当ですか？」

人聞きで知っている話ではあったが、流石に赤の他人に「そうだよ」とは口が裂けても言えないので、誤魔化すことにした。

「そう、だったかな……ごめん、あいつのこと全然興味ないから良く覚えて無いや」

すると、俺が暗に肯定したと思われたのかかぐやが妾の子という話が俺のクラスの子まで知っているぐらいには学年中に広まった。

しかし、俺は噂は捻れて広まるものであることを身を持って体感することになる。

「鳳翔、お前妾の子なんだって？」

「……は？」

これまで気さくに接していた男子によるあまりに頓珍漢な話に俺は耳を疑った。

「いや、さつきあいつらが廊下でそう話してるのが聞こえてよ」

その時指差された数人だけでない。俺は与太話に関わっていた子たちを調べ上げて順番に少し前まで密会に使っていた場所まで——人によっては引き摺ってでも——連れて行き、これまで培った技術の数々を使って制裁を与えた。

後日、その子たちは学校から席を消していた。当然の報いだ。彼らが仕出かしたことは両親にも四宮家にもお母様の実家にも極めて無礼千万な行いだ。年度末には彼らが四宮家の力によって家族共々生活苦に追い込まれたという話を執事から聞いた。

~~~~~

別邸での食事は俺とかぐやがだだっ広いテーブルに向かい合って座りながら食べる。愛は使用人なので、そこに混ざるわけにはいかない。自然、かぐやは食事中俺にマシンガントークをぶち撒けることになる。

「今日ね、鳳翔と二人でご飯食べてることを友達に話したら夫婦みたいですって。私たち」

あの妾云々の話で傷ついたので知らないが、かぐやが人との関わりに億劫になってきつつあるという話を風の噂で聞いたことがある。しかし何故かその分、かぐやは俺により積極的に話しけるようになっていった。

「へえ、そうなんだー良かったな〜」

三つ星ホテルからスカウトしてきたと言う腕の立つシェフたちが作った味は上質だがボリユーム感に欠ける料理をナイフとフォークを使って丁寧口に運ぶ。一方、かぐやへの回答はいつも適当だ。

「でも、私たちは二等親だから結婚できないんですって。私のことを

好きになっちゃダメよ?」

得意げにふざけたことを言うかぐやに内心ウツザと思いつつながら愛想笑いを浮かべる。ふと、口の中で何とも言えない不快な感じがした。

「げっ、アスパラ入ってんの?これ。あ……」

昔のように愛に俺の苦手な食べ物を代わりに食べてもらうことはかぐやの手前……というより、あれだけ厳しく注意された以上金輪際出来はしない。俺は誤魔化して笑いを作りながら咀嚼して飲み込んだ。

「偉いわ。鳳翔。苦手な食べ物もちゃんと食べれるのね」

誰か早くこの叔母を何とかしてくれと心の中で叫んだ。

就寝前。俺はベッドに満足げに寝転がった。かぐやが風呂に入ってる時を見計らって執事に言ったのだ。かぐやと食事の時間をズラしてくれと。

「あれ、電話?」

携帯を見ればお父様からの電話だった。すぐに応答する。

「お父様……何のご用件でしょうか?」

「ああ。ちよつとな。鳳翔……お前、かぐやのこと、嫌いなのか?」

半分かぐやが居るせいで愛とまともに口すら聞けなくなったのだ。そう思わずには居られなかった。だが、馬鹿正直にそうですとは言え



学校に残って図書室の本を読み漁ることにしている。

日が暮れる前に校門へ行き、運転手に携帯で連絡して呼び出しては車に乗って帰った。

運転手と色々世間話をすることにハマったのは別の話。

そして、遂に俺は学校中にある本という本を全て読み尽くしてしまった。授業中もそうしているので仕方ないが、どうも人より読むスピードがかなり速いらしかった。

職員室に忍び込んで先生の持つ本を盗つては読むことを繰り返したものの、すぐに在庫は尽きた。もちろん本はその都度しれっと元の場所に置いておくことを忘れない。

別邸の中にある本もとつくに読み尽くしてしまったので、学校に持って来て読もうとしたところで単なる徒労に過ぎない。結果、俺は本を読んでいる振りをして学校の外にお忍びで行くことにした。

時間を見計らっては学校に戻り、素知らぬ顔で運転手に電話する毎日だ。

お忍び探索を続けて数ヶ月。

「ここ、良いな。なんか京都っぽい」

お気に入りスポットを見つけってしまった。とある神社の境内。その裏手は誰も来ず、どこか雰囲気俺の肌合おう。

よほど居心地が良かったのか、ここに来るためだけにリスクを冒し続けた。流石に手持ち無沙汰だったので、ここに来ては頭の中で各種ボードゲームをして楽しんだ。自分と他人を模倣した自分を戦わせるといふ他人が聞けばドン引きすること請け負いの遊びである。

休み期間中に——自室ではあったけれど——あまりにその遊びをやり過ぎて脳がパンクしたせいかは分からないが、熱を出して入院す



そういう日々を続けていたある日のこと。いつものようにポタポタと涙を垂れ流しながら対戦を楽しんでいると不意に人の気配を感じた。

神社に人が参詣するのは当たり前だが、こんな奥の裏手という辺鄙な場所に来るのは尋常ではない。誰だと思ひ警戒の視線を向けると、遙か昔に見た娘が驚いた顔でそこに立っていた。

四条真妃。同じ学校同じ学年。校内テストではいつも三位の娘。

つけられていたらしい。ここに来るとき人の気配には十分気を付けていたはずなのだが、俺は自分が抜かったのだと悟った。ほんの一瞬だけ、悲しみを紛らすために偶然ここへやって来た同類かとも思ったが、そうではないだろうと頭の中ですぐに結論が出た。理由は悲壮感のようなものが全く感じられなかったからだ。

「情けないわね。それでも跡取り？ 四宮もお終いな」

生まれて初めて挑発された。

俺は四宮と対立する四条の令嬢だから当たり前だと冷静に判断していた。

むしろこれは挨拶に違いない。

そう思って袖で水分を拭い、初めて人を睨みつけた。

「お前、名前は？」

知ってはいたけど、挨拶ならこう聞くべきだろうと思った。

「何よ。不調法者ね。私の名前は四条真妃。あんたの親戚よ。あんたの名前は？」



俺は精一杯の威厳を込めて名乗りを上げる。要は空元気だ。

「四宮鳳翔」

この娘は下手な大人より遙かに話が上手だった。

どこかかぐや味のあるこの娘に話すのは癪だったけれど、気付けば思いの丈を打ち明けていた。

いつも一緒にいた子をかぐやに盗られたと。

「だったら奪い返せば良いじゃない」

「……無理だよ。父上が決めたことだから」

簡単に難しいことを言ってくる彼女の気楽さに呆れながら、丁寧に説明してあげた。

父上の采配だから覆すのは難しいと。

「あの子のさ、かぐやがあげたらしいんだけど、アクセサリーを見ると心がざわつくんだ。それもあってかな……いつも必要以上に刺々しくしちゃって」

気付けば余計なことばかり話す自分が居た。

敵に無闇に情報をあげてはいけないと、この歳にして分かっていたのに。

「私が協力してあげる。私もあんたみたいにかぐやが気に入らないから」

こうして、妙な協力者を手に入れた。

しかし、この無責任極まりない協力者のアテにならない助言を参考

にしても現実はどうにもならないわけで。

四条は理想論ばかりという父上の言葉の意味を実感していた。

それから週一ペースで彼女とここで会っていた。

どういう訳か俺への助言というよりかぐやの将来についてあれこれ言い合う会と化していた。主に俺がネタを提供し、彼女は話を膨らませる。

俺としてはただ鬱憤を晴らして言っていただけなのだが、無駄に人が好い彼女のことだ。棘のある言葉とは裏腹に殊勝にもかぐやを心配していたのだろう。

ある日彼女は言った。

「もう……その子のこと、諦めたら？」

俺が言いたくても言えなかった言葉を彼女は口にしてくれた。

とつくに愛……早坂への愛想は消えていた。駄洒落じゃないけど。だけど、それはこうして会うのを止めにするという意味でもあり。

「そっか、うん。寂しくなるな」

この娘は聡い。

早坂のことを諦めることじゃなくて、お前と会わなくなるのが寂しいという俺の真意を見抜いている様子だった。

「あんたが望むなら、またここで会ってあげても良いわよ」

彼女は手を彼女自身の背に回し、目線を斜め上に逸らしながらそう言った。

俺は久々に本心から笑みを浮かべて感謝した。

それからお互い時間の都合が大丈夫な日は毎度ここで会うようになった。

昼休みに図書室で偶然を装って同じ棚に向かう。時間がある時は薬指を、ない時は小指を相手側に向けるという示し合わせたサインを使つて互いの都合を確認した。

会話のレパートリーも増えた。同じクラスにしたのが功を奏したのかもしれない。

指定する成績優秀者を俺と同じクラスにしろと先生に優しく、そう優しく諭した。

その中にしれつと眞妃を入れておいたのだ。

ある日のこと。

二人で日直の仕事のため職員室に向かうことになった。

学校では話さないという暗黙の了解があつたものの、つい廊下に人がなかつたために話しかけてしまった。

彼女は慌てて静かにするよう仕草で示した。

その日の放課後。

「良い？私とあんたの家は喧嘩中。あんな危ないことは絶対やめて」

喧嘩とは随分可愛い言葉を使う。そう思った俺はからかうことにした。

「俺とマキが結婚して喧嘩が収まれば良いのな」

敵同士の家が政略結婚をきっかけとして和解した例が歴史にあることを知っていたからこそその言葉。本来は逆で和解の証としての政略結婚なのだが、この際どうでも良かった。

眞妃は怒つてバカじゃないのと罵つたが、俺は笑い飛ばした。

~~~~~

高学年になったある時のこと。

眞妃が病気のため入院した。不幸中の幸いと言って良いのか、入院先は翼の祖父が治める病院である。この時の俺はすっかり眞妃に執着するようになっていたので、そうだ見舞いに行こうと思った。

しかし、ここは四宮の人間が多く使う病院だ。忍び込んだところでいつかバレるだろう。

そこで俺は翼を使ってやり取りすることにした。

病院に通う名目に翼と一緒に勉強するためだという真っ赤な嘘を使った。

そもそも俺と翼ではレベルが違い過ぎる。

「というわけで、これよろしく」

翼は快く引き受けた。

なんでも俺が人間的な振る舞いをしていることに感動したらしい。

俺のことを一体何だと思っているんだとジト目を向けた。

見舞いの言葉などを書いたノートを翼に託し、五分足らず。翼はテクテクと戻って来た。お可愛い返事が綺麗な字で書いてある。俺はフツと息を吐きながら言った。

「なんだ余裕そうじゃん。それなら……」

「それがね、大将」

翼によると、結構長いこと入院しなければならぬらしい。どうやら返事の内容は眞妃お得意の強がりのようだった。お可愛い奴め。

「しかし、ただ返事を書くというのも味気ないな」

「なら、和歌を書いてみるのはどう？」

「ほう？」

珍しく翼が役に立ったことにニヤリとした。なるほど、源氏物語を読む一貫として和歌を勉強した事が功を奏したのか俺は小学生にして和歌を詠める。

簡単に言えば早く君に会いたいという意味の歌を恥ずかしげもなく即興で書き込んだノートを翼に託した。

程なく翼が戻って来てノートを見ると、バカじゃないのという文言に返歌が添えられていた。

お可愛い奴め。

こうして俺と眞妃は和歌を贈り合う平安時代の男女のようになっていた。

そんなある日。

病院の屋上にあるベンチで海外の経済雑誌を読んでいた俺の元にサッカーボールがコロコロと転がり込んで来た。

俺は雑誌を閉じてそのボールを蹴り返すため、立ち上がりながら言った。

「あのさあ、病院でサッカーとか頭おかしいんじゃないの？」

眞妃やかぐやのように不調法者と続けようとして相手の顔を見、硬直した。

こいつは只者じゃない。それにどこか見覚えのある顔。一般人の子供では断じてない。

ここで取り除かないと災いになる。そんな予感がした。

割と本気気味にボールをその子の顔面に蹴り込む。彼はジャンプし、シュートさながらの強烈な威力のせいか唸りを上げるボールをその胸板を使う事で受け止めた。

俺はそれを見て思わず感嘆の息を漏らす。中等部あるいは高等部込みだとしても、秀知院のサッカーをやっているメンツで俺相手にこれを成せるのは数人しか居ないはずだ。

内心少しビビってる様子なのが玉に瑕だが。

「……やるな、お前」

プロ選手を除くのであれば、今まで直接見た人の中で一番上手かもしれない。

「そつちこそ。四宮財閥の御曹司」

こちらの素性を知る少年に俺は怪訝な顔をして見せた。

「へえ。俺のこと知ってたんだ。名前は？」

「四条帝だ」

たしか眞妃の双子の弟がそういう名前だったと思い出す。よく見れば確かに目元あたりに面影がある。その名声というか愚痴は眞妃から聞いたことがあった。何でも凄く臭いらしい。

ちよつと近寄らないで欲しいと思った。

だが、それだけではない。以前、かぐやに近づき連れ出そうとした不届き者。それが彼だ。

四宮家からも四条家からも、かぐやに近付けないようにされた馬鹿者だった筈。

だけど、違う。この風格は馬鹿のそれじゃない。

俺と帝は互いに睨み合った。

「大将、戻ったよ……って、あれ？」

翼はのほほんとしながら最悪のタイミングで戻って来た。もちろんノート片手に。

それを見た帝は全てを察したらしかった。

ズボンのポケットに手を突っ込んでどこか得意げに話し始める。

「なるほど。姉貴と古風な文通をしていたのは、お前か」

「……悪いか？」

俺はどこか後ろめたさを感じながらも、開き直った。

「いや」

そう言うや否や帝はボールと共に突っ込んで来た。どうやらサツカー対決でもしたらしい。

俺は集中力を高めるべく深呼吸した上で、カツと目を見開いてそれを迎え撃った。

一体どれほどの時間が経っただろうか。

全然取れない。いや、取れることは取れる。しかし、あつという間

に奪い返されるのだ。

技術や判断力そのものは決して負けてないと思うが、踏んで来た場数のあまりの違いがここで響いていた。

おまけに体力が尽きるのはこちらが先のようなだ。

俺は一旦距離を取り、かき始めた汗を拭って仕切り直そうとした。

「あんたたち!!何してんのよ!」

突如屋上に響いた風鈴を思わせる透き通った綺麗な音に帝はビクツとする。二人の力関係を目の当たりにした俺は何事もなかったかの様に声の主に尋ねた。

「マキ、お前……寝てなくて良いのか?」

どうやら翼の通報を受け、病を押し来たらしい。

帝は姉に弱いらしく、顔を青くしてすぐに降参のポーズを取った。

眞妃に必死の弁解をしている。俺も追求されたが、難なく躲した。

帝はもう帰ると言う。加えて俺の肩をポンと叩いて言った。

「俺はお前たちのこと応援してるぜ」

「は? 応援?」

それではまるで俺と眞妃が男女の仲になろうとしているみたいではないか。

眞妃は不用意な発言をした帝の両手を捕らえ片足を使って背中を圧迫していた。

意外と元気そうな姿に俺は安心した。

なんだかんだ眞妃が退院。

眞妃の様子がおかしいことに気付いて再入院を勧めたところキレ



られるという事件があったものの、神社での秘密会談は継続。

そして、最上級生になった。

流石に四宮家の令息と四條家の令嬢が四年連続で同じクラスというのは流石に不自然なので、違うクラスにせざるを得なかったのがツライ。

この頃、眞妃に対して考えていたことはただ一つ。

こいつ、俺のこと好きなんじゃね？というもの。根拠は帝の言葉だった。日が経つにつれて棘を増していく眞妃の言葉も得意の強がりにはしか聞こえなかった。

学年単位で数組のカップルが誕生するぐらいには、俺の代の生徒たちも色ボケし始めている。

少なくともクラスで一番モテているのは俺だった。

既に告白された経験もラブレターが下駄箱に入れられていた経験もそれぞれ二桁ほどある。

大半が金や地位目当てだろうが。下手人のほとんどが特に関わりのない者たちだ。

一方の眞妃は恵まれた容姿の割にそこまでモテてはいない。

眞妃が学校で男子をあまり相手にしていないのもあるが、怪しいと思つた不届き者たちを俺が手を回してプチプチと学校から追放したり学内での地位を貶めたりして人気を操作しているから。

さあバツチこい。そう思っているうちに、終業式の日を迎えた。

いつもの場所。蝉たちが囀し立てる中、眞妃は意味深に手を後ろに回しながら突然昔語りを始めた。

最初なんだこいつと思つたことは墓場まで持っていくつもりだ。



早坂への執着が消えた頃からかぐやと本心から自然と接することができるようになっていた。こうして京都にある本邸へ向かう車の中でも弾んだ会話を演出できている。かぐやの話に俺が調子を合わせるのが常だ。

最近、かぐやは話し相手の数が以前にも増して右肩下がりらしい。お陰で話題が溜まりに溜まっているんだとか。

意外と眞妃と話す時と同じような具合で大丈夫だったりする。

眞妃に言ったら十中八九癩癩を起こすだろうが。

この間二人が廊下ですれ違った時、何やら言い合っていた様子だったのが気掛かりだ。

どうして険悪なのか。昔かぐやの将来について二人であれこれ勝手に言い合った手前、眞妃に訳を聞くわけにもいかず。かと言つてかぐやに急に四条の令嬢のことを聞けば余計なことを疑われかねない。

そうこうするうちに本邸に着いた。学校では最近やや自由奔放気味な俺もここでは将来の後継者としての振る舞いが求められる。儀礼を守らないと立場が危うくなってしまう。

ここ何年もパーティなどの場で真面目に励んだお陰で、小さい頃のやらかしも払拭されつつある。むしろ、ヤンキーが普通に過ごしていると褒められるのと同じ理屈で却って俺の評判は高まるばかりだ。

眞妃と公的にお付き合いし、結婚まで持っていくための方策は未だ何も浮かんで来ない。そもそも人脈も経験もまだまだ不揃いで打つ手に乏しい。

現時点でも実力自体は世間に転がっている若社長にそこまで劣らないと思うのだが、四大財閥に数えられる四宮ではそれがあつても、だから何?といった話でしかない。

俺は早くも手詰まりの状態に陥っていた。

「じゃあ、行ってくる」

お祖父様に挨拶する時、かぐやは別室待機だ。かぐやとその側に控える早坂は俺に頭を下げた。襟を正しながら、俺はお祖父様と会うべく歩き始めた。

この時、地獄への切符が既に切られていたとは知るわけもなく。

今回のお祖父様への挨拶はその書齋ではなく、やたら広い板敷きの広間が舞台である。何名かの秘書あるいは使用人たちが控える中でそれは行われた。

「お祖父様、鳳翔です。ご無沙汰しております」

幼い頃、各地で醜態を晒していた手前、お祖父様相手であつても礼儀作法に気を配る。

「ちよつと見ねえ間に大きくなつたな」

「お祖父様の恩恵あつてこそです」

お祖父様は他の人が居る手前、俺が礼儀作法に気を配っていることをよく理解されている。人払いが命じられ、余人は退室して行つた。

「これで良いだろう。さ、こつちに来い」

「はい、お祖父様」

昔からしているようにお祖父様の膝の上に座る。正月に重くないか聞いたところ、馬鹿にするなど笑われた。

正直お祖父様の年齢からしてうっかり漏らされそうで怖いのだが。

「最近、学校ではどうだ？」

「多くの女子からお誘いがありました。困つたものです」

「ほう、最近の子供は進んでるな。それで、どうした？」

「全て袖にしてやりました」

少しツボに入ったらしく、口元を緩ませたお祖父様からあまり泣かせるなよと嗜められる。

妾なんて困って終いに騒ぎを引き起こした人に言われたくはないのだが。

俺は妾なんて困う気はさらさらない。彼女一人で十分だ。

少ししてお祖父様の顔つきは真面目なものに変わり、俺は今一度気を引き締めた。

「鳳翔、お前には飛び抜けて才覚がある。もういくつか会社を任せても良いんじゃないかと思っただけだな」

「……嬉しいです。任せていただければ、必ず結果を残して見せます」

お祖父様は顔を綻ばせた。

将来の後継として下手に謙遜すれば評価を下げるし、何よりこの歳の老人にはこのぐらい若さを見せた方が効果的だ。

お祖父様は手をポンポンと叩き、使用人を呼びつける。使用人は資料を持ってきて直ぐに立ち去った。

お祖父様が手に取った俺に見せた資料には四宮傘下の企業のいくつかについて詳細が書かれてある。決して子供に遊びで見せるものではない。

お祖父様は本気のようなだった。その心意気と思ひ切りの良さに嬉しくなる。

昭和の怪物と呼ばれただけあって、人を見る目と嗅覚の良さは随一らしい。ここに余人では決して出来ない判断を下した。

無論、四宮の良血とはいえ子供がトップになったと知ればその会社は混乱に陥るので、俺が出した指示を別の者が雇われ社長に伝えることで実行に移すという周りくどい方策を取るようになるのだが。

「いつしか四宮を継ぐ者として期待しているぞ。子供だからといって甘えるな」

「もちろんです。早速、準備に取り掛かります」

「早えって。まだまだ話したいことがあるんだ。茶菓子でも食べながら、ゆつくりしていけ」

お祖父様は今度は鈴を鳴らした。湯気が立ち込めたいかにも熱そうな茶と老舗の和菓子が運ばれてくる。

俺は再び下座に移り、お祖父様が召し上がるのを待つてからそれに手をつけた。

「……最近、かぐやはどうしてる?」

「何でも、学友たちとは不仲らしく。ここしばらくはクラスの垣根を越えて声をかけるようにしております」

「そうか」

お祖父様は滅多にお声をかけない癖にかぐやを心配している。一方のかぐやはお祖父様にそっぽを向かれていますと考えている。

悲しい親子のすれ違いだ。

それに対してお祖父様は俺に対してやたら構いたがる。

名夜竹が居ない寂しさを俺で紛らわしてるのだろうと父上が人に

漏らしていたのを聞いた覚えがあった。

「これからもあいつを気にかけてやってくれ。俺は何にも父親らしいことをしてねえからなあ」

「今からでも、遅くはないかと」

お祖父様は手を横に振って言外に無理だと告げる。俺は溜め息を吐いて茶を口に含んだ。

「ところで、お前……四条の娘御とはどうなんだ？」

俺は思いつきり咽せた。すぐに心中の動揺を抑えて可能な限り自然に答えようとした。

「どう、と言いますと？」

「何でも学校の外で頻繁に会ってるらしいじゃねえか」

不味い、バレている。最悪あのキッスのことまで知られている可能性もあると俺は冷や汗をかいた。

出来る限り動揺を隠してお祖父様に答えた。

「ああ、そのことですか。はい、少しばかり勝負などを」

「ほう、勝負か。どうゆう？」

「テストの点数などを少し」

全くの嘘ではない。ちゃっかり眞妃より良い点を取って度々悔しがらせている。





どうしよう。どう真妃に釈明すべきか。いや、そもそも言えば墓穴を掘るだけ。墓場まで持つて行こう。そう心に決めた。

違法上等でそういうことを仕込まれたことを知る者たちは十年以内に必ず粛清してみせる。

あの日の翌日、どこに行っていたのかかぐやに聞かれた。

俺はしれっと美味しいものを食べに行っていたと答えた。かぐやは納得していた。

実際、出された食事自体は上質だったのだから完全な嘘ではない。とてもじゃないが味を楽しむ余裕がなかったのは言うまでもないだろう。

あの時間は恐怖しかなかった。

抵抗なんて出来る精神状態じゃなかった。

嫡流の子なので我慢できているが、そうでなかったら今も震えが止まらなかったかもしれない。

「小学校最後の夏休みは……」

新学期の始業式がいつも通り体育館で行われる。校長の長々しい話を聞き流した後、真妃の後ろ姿を見た。

少し見ない間に一層気品というか可憐さが増している。

不埒者たちが増えるかもしれない。保護者の方からアプローチしてつつがなく消せるような体制を整備すべきだと思った。

他クラスの友人を訪ねるという体で真妃のクラスを訪れる。席の配置は確認済み。

真妃の座る机を素通りする振りをし、素知らぬ顔で都合がつくというサインを交わし合う。

式が終わればすぐに下校だが、それでも帰宅前に教師からの連絡事項で教室に残る時間はある。

真妃のクラスの担任はトイレに籠っていてしばらく来れないのだ。お可哀想。

今学期の終業式はどうしてくれようか今から検討中だ。

そしていつもの場所。

祖父にバレているが、勝負という体裁自体にケチはつけてこなかった。祖父に怪しまれないためにも、しばらくはここでの会合を継続する。

もしキッスをするなら別の場所だ。もういつそ学校中を掌握してどこかの空き教室で会うようにすべきかもしれない。

「マキ!!」

真妃は今日も先に着いている。

俺の場合、まだ迎えの車を呼ぶ前に学校を抜け出しているという状態が続いているので、他の生徒たちが粗方帰ったタイミングで初めて向かう。

よって真妃がいつも先着なのだ。

今までも休み期間中は会えなかったけれど、この夏休みほど真妃とまたここで会おうのを待ち遠しく思った休みはない。

真妃は俺に背を向けている。真妃が振り向くや否や俺は驚いた。

真妃は目を赤く腫らし肩を震わせている。かっつてない怒り様だ。

「この不調法者!!」

一瞬、不調法者とは思った。意味は心配りがなっていない人のと。

眞妃やかぐやの口癖。俺でさえたまに使う言葉だ。しかし、俺に向けられる様な言葉では断じてない。

俺ほど心配りが得意な者が同世代にいるとは思えなかった。

眞妃が写真を俺の足元に投げつけてくる。拾って見た。

あの日の写真だ。

目の光を失った俺と未成年だけれど俺より歳上の女の人がキスしている写真。

「……ッ！」

俺は硬直した。顔面蒼白になっているのが自分でも分かる。

誰がどうやってこんな写真を撮ったのか。どうして眞妃が持っているのか。

そして何より終わったと思った。

「これは！何!？」

こんな証拠があつては下手な誤魔化しは厳禁だ。涙目の眞妃に気後れしながら正直に話すことにした。

「その、お祖父様が……」

「っ、何でも良いわよ！」

どうやら経緯を聞きたいわけではないらしいかった。

目に手を当てて涙を流す眞妃をどうしたものか、判断が出来なかった。

「私は本気であんたのこと……もう知らないわ！あんたなんかと付き合うんじゃないわ！」

合成写真だとか他人の空似とでも言うべきだったのか。そんな下手な嘘を吐くほど愚かではない。もっと根本的な何かが必要だ。

俺が自身の思考の渦に呑み込まれている間に眞妃は駆け出しして行った。

気付いた時には遥か彼方へと消えていた。

しれっと交際していたことにされていたのを気にする余裕はなかった。

「ははは、はは、はあ、どうしたら」

覆水盆に返らず。そんな言葉を思い出した。もうどうにもならない。

眞妃との関係が破綻した。

父が昔好きな女性と無理矢理別れさせられて今の妻、つまり俺の母親と結婚したという話が脳裏に浮かぶ。かつて眞妃にもした話だ。

黒幕はそう、あの昭和の怪物だ。

思わず天を仰いだ。

一瞬神頼みなどというバカげた考えが浮かんだが、すぐに頭の中から消し去った。

「もう……ああ」

結局、四宮の子と四条の子がどうにかなるなんて無理な話だった。それだけのこと。

だけど、こんな結末はなしだろうと思った。

ふと、早坂をかぐやに取られたみたいなことを考えてやさぐれていたあの頃と何にも変わっていないことに気づく。

そんな自分を嘲笑した。

「帰ろ」

学校に戻ってそこから運転手に連絡しなきゃならない。憂鬱だ。

そう思いながらここを去る。それから何年もここを訪れることはしなかった。

来たらまた、袖を濡らして痛い目を見るところだったから。涙を流すこともめつきりなくなった。

俺がここから去った後、早坂の母親が木陰から出てきたことに気付けるはずもなかった。

~~~~~

白銀と石上は生徒会活動で以前より遥かに多忙を極める羽目になっっていた。

それもこれもあの四宮の甥の鳳翔のせいである。

鳳翔操る伊井野政権が短期間のうちに好き勝手したため、そのツケを払う毎日。

二人はもう疲労困憊だった。

「会長、もう良いでしよう？帰らせてください」

「いいや、石上。それじゃ明日からもっと苦しむだけだ」

ただの備品の移動でさえ、この始末。まかり間違えば過労死しかねない。

女性陣は今日もう使えない。

かぐやは家の用事。藤原はどこかへ消えた。伊井野は風紀委員の仕事。

ヤケ気味な石上は溜め息を吐く。

「はあ、ほんと。疲れました……ってええええ?!?!」

「何だ石上?…ってうおあああああ!?!」

気付けば四条真妃が床で倒れていた。

白銀と石上は真妃と対四宮鳳翔戦で共闘したことがある。だが、何処か二人とも真妃を敬遠している節があった。

プロフィール自体は二人も把握している。

四条真妃。学年三位の天才にして四宮一族と血縁関係にある四条家の令嬢。

天才というのも文句の付けようがない。

実際、真妃がいなければかぐやの甥を出し抜けなかったと二人とも承知している。

だが、二人はかぐやから警告されたことがある。

真妃に必要以上に近づけばどうなるか分からないし、いざとなっても助けようがないと。

その言葉が二人の脳裏にこびり付いては離れない。自然、対応は慎重を期すことになった。

「会長、どうしましょう!?!」

「仕方ない。救急車を呼ぼう」

~~~~~

「それは恋の病でしょう」

秀知院から救急車で運ばれる先は自然と田沼正造がいる病院であつた。

「はあ？私か？バカ言わないで頂戴、お医者様」

田沼医師は君の親戚も同じ病気に罹つて担ぎ込まれたと言いたいのは山々だったが、眞妃の後方には彼女の要望の元居続ける男子二名。そのうちの一人がその原因であることを覚えていた。

それに何より守秘義務というものもある。  
よつて、その説得の仕方は控えた。

「でも、彼氏が浮気してるのを見たことが切っ掛けで倒れたんだよね?」

白銀と石上はそれを聞いたとき驚いた。え、この人彼氏居たの……と。



眞妃は渋々口を開いた。彼と先生の孫が浮気しているのだと。

田沼医師はカルテを落としたり。看護師はドン引きしていた。まもなく病院中に噂が広まった。

白銀は田沼翼と浮気するような男を一人知っていた。

「し、四条……まさかとは思うが、その彼というのは」

「鳳翔よ」

眞妃は憔悴し切っていたのか目の前にいる医師が四宮お抱えであることを失念していた。

「ええ〜!?!」

四宮と四条の因縁は共闘にあたって二人も耳にしていた。これではまるでロミオとジュリエットだ。

しかし、ロミオが男と浮気していたとは。

そんな演目があれば、確実に客席からブーイングが飛んでくる。かつての甲子園での五打席連続敬遠のように響きを買うこと請け負いだ。

「って、あの人!?!よりもよって!?!男見る目あります!?!」

石上はまだに髪を消し去られた恨みを募らせている。下手人の伊井野はまだ百歩譲るとして、その背後にいた鳳翔に恨みの矛先を向けていた。

当の鳳翔が聞けば一笑に付しているだろう。

「うっさいわね。不調法者。彼の何が分かるってどういうの?」

責められた石上は困惑した。白銀はそつと石上の肩を叩いた。

「彼との馴れ初めを聞かせてもらってもいいかな」

田沼医師は気を取り直し、根掘り葉掘り聞くことにした。

眞妃は初めて人に鳳翔と付き合うようになった経緯を打ち明ける。夢見がちな石上は浮気の件を忘れて良い話だなあと思った。一方、冷静な白銀はでも浮気したんだよなあと思った。

「そう、それでどうして私の孫と浮気していると……？」

眞妃は言う。先日見てしまったのだと。彼と田沼翼が同じ車に乗り込むのを。

そして今日も乗り込んだので、予め呼んだタクシーに乗って直ぐに追いかけたのだ。

そしたら車を降りた二人は楽しそうにホテルへと入って行った。

気落ちした眞妃は学校へと運転手に引き返させ、降車。

荷物を教室へ取りに向かったところ、気付いたらこの病院に運ばれていたと言った。

「それは男同士楽しくお泊まりということじゃないかな」

そこに邪な意味はないはずと、半ば安堵した田沼医師は諭した。

彼らが異様と断言できる頻度でお泊まりしていることを、一方の祖父である田沼医師は知らなかった。

「でも、彼、話すようになった頃に男をかぐやに盗られたって」

別に鳳翔は盗られたのが早坂だとも男だとも言っていないのだが、どこをどう取り間違え何を思ったのか眞妃は男であると解釈していた。

案の定、白銀は脳を破壊された。

前々から知っている二人の間に起こった痴情のもつれに動揺の色を隠せない田沼医師は鳳翔の趣向から話を逸らすことにした。

「だけど浮気というのは性急すぎや…」

「彼、前にも」

精神的に参っていた眞妃は口を滑らせた。

「前科あんの!？」

思わず白銀と石上が叫ぶ。

ここで眞妃は男の人の大きな声がちよつと怖いと主張。

白銀と石上は慌てて謝った。

それはそれとして二人は義憤に駆られた。

「っ、あれは違うわ。あれは四宮家の計略で…」

眞妃は写真について説明し、さらに続ける。突き放した後すぐに分かったのだと。

浮気写真を渡したのが他でもない四宮の手の者だったから。

諸悪の根源は四宮雁庵。女に無理矢理鳳翔の唇を奪わせ、撮影した写真を眞妃が見るように仕向ける。

そうすれば勝手に眞妃の方から別れを切り出すと。

雁庵と懇意にしている田沼医師は眞妃の話に色々おかしい点があることに気付いたが、黙って話を聞くことにした。

「いつもその場所で待ってたわ。サインはなかったけど、いつかきつと来てくれるって」

(健気……)

眞妃は謝りたかったと言う。ろくに話を聞かなかったことに罪悪感を覚えたのだ。

違うクラスであったため、まず密会のためのサイン交換の機会すら碌に得られない。

廊下ですれ違った時も鳳翔は眞妃から目を逸らしてサインに気付かない。

その内、鳳翔が雁庵の付き添いのため放課後あちこちに出向いていと聞き、断念した。

「彼の姿を目で追うだけでも満足だったわ」

その頃の鳳翔は酷く疲れた様子だったという。

放課後、飛行機や車、新幹線などその他交通機関を使い倒して出来る限り多くの時間を雁庵に付き添うために使う毎日。

彼らにどんなやり取りがあったのかは四条には知る由もない。

「あれ？今はお二人普通に学校で話してますよね？」

「そこは成り行きよ。彼の方から話しかけてきて、それからは学校でも話すようになったわ」

その頃には鳳翔による学校の掌握が完了していたということをも眞妃は知らなかった。

雁庵の計略をその場で見抜けずそれどころか彼を罵ったがために愛想を尽かされたのではと不安を感じていた眞妃は安堵。長い冷却期間が終わったと考えた。

「でも、留学しちやって、戻って来たと思っただらこれよ……もう私どうしたら」

白銀は熟考し出す。石上はただただ可哀想とばかり思っている。

田沼医師は看護師を連れて一旦席を外した。

「四条、四宮には何か聞かなかったのか？」

白銀は鳳翔帰国後も依然かぐやを四宮と呼んでいた。紛らわしかったが、眞妃はどちらの四宮かすぐに分かった。

先の選挙の際の談合において白銀が鳳翔を四宮の甥呼ばわりしていたからである。

「おば様のこと？聞けるわけないじゃない」

あの生徒会選挙における対鳳翔同盟をきっかけに仲良くしていると白銀は思っていたのだが、二人の間柄は複雑怪奇らしい。

「もういつそ忘れて他の人と付き合った方が……」

危うく鳳翔が聞けば一線を越えた消し方をしかねない発言を石上は無意識のうちに放った。眞妃はそれを聞いて石上を睨み付ける。

「はあ？そんな真似この私がするわけないでしょう。とんだ不調法者ね」

手詰まりだった。白銀たちに何とかできる範囲を超えている。

「四条、柏木はこの事について知っているのか？柏木の悩みとして四宮に相談すれば、まだ何とかかなりそうなものだが」

かぐや、突然のピンチ。

数日後、生徒会室に主だった面々が集まる運びとなった。

(7)

かぐやは困惑していた。

それもそう、柏木渚がまたしても恋愛相談に来ている。珍しく最初から自称ラブ探偵の藤原千花がおり、柏木の親友の四条真妃さえ同席しているこの状況。

何かのつぴきならないことが起こったことは容易に察せられた。

扉の向こうにはかぐやの近侍の早坂愛が潜んでいる。

「その、一体どういうお話でしょう……？」

柏木は何があったのか珍しくこの生徒会室に来てなお躊躇っていないらしい。ウジウジとする様子はあまりに彼女らしくない。

「ほら渚、言っておやりなさい。彼とかぐやの甥が浮気してるって」

あまりの言葉にかぐやは絶句した。藤原は鼻血を出して洗面所に直行。

扉の向こうの早坂が崩れ落ちた音が耳の良いかぐやには聞こえた。

「この写真を見てください」

それは甥の鳳翔が柏木の彼氏の肩を叩きながらホテルに入っている写真だった。

柏木は言う。四宮の令息相手にプロの探偵を雇えば喧嘩を売っていると四宮家に思われるので、マスメディア部にいる友達二人に協力してもらったらしい。

「このホテル……四宮グループの系列のホテルですね。鳳翔も帰国後はこちらに泊まっていると聞き及んでいます」

「はい。マスメディア部によると二人は頻繁にこのホテルに入ってきて、出てくるのは決まって翌朝。それから車に乗って登校しているようです」

かぐやの脳はパンク寸前だった。生々しい甥の不貞行為、それも同級生の彼氏相手に。

今すぐ会長を呼びたくなった。

「ホテルの内部には……」

「マスメディア部によると、客じやないなら帰れと迫られ渋々泊まったのですが、二人がどの部屋に宿泊しているかまでは特定できなかったとのことですよ」

「なっ!!?」

タイミングよく入ってきたのは伊井野ミコ。風紀委員として威勢よく事情を聞き出そうとしてくるも、まさかの男同士ということで逃げ出そうとしたが、かぐやが巻き込み、笑顔で席に座らせた。

伊井野は今となっては鳳翔に弄ばれたと事あるごとに文句を言っている。鳳翔に食ってかかったところ、体よく丸め込まれたというのが彼女らしい。

そんな伊井野もこの事態には戸惑いを隠せない。

話は続く。昨日柏木が翼を問い詰めたところ、何をしているか口を割らなかつたらしい。

「真妃さんは鳳翔に何も聞かなかつたんですか？」



「なつ、何で私があいつに聞かなきゃなんないのよ!？」

眞妃の素直じゃない態度にかぐやは呆れた。

二人の間に昔何かあったことは既に把握している。

眞妃の入院時期と同じ時期に鳳翔は田沼翼と勉強するなどと言って家を抜け出していたし、初等部のいつ頃からか鳳翔は眞妃から露骨に目を逸らしていた。

一方の眞妃も鳳翔が眞妃から目を逸らし始めた時期辺りから鳳翔のストーカーを開始。学校で木陰や違う校舎から鳳翔を見つめる眞妃の姿を度々確認している。

それに巧妙に隠されてはいたが、学園から去っていく者の多くに鳳翔が何か仕掛けたであろう気配——他に犯人候補が存在しない——があり、その者たちを調べると眞妃に好意を寄せていたという情報が高確率で見つかった。

今なおかぐやはそうした話を数少ない鳳翔への切り札として、いざという時のために握り続けている。

しかし、柏木の話をここで蹴って誰か他の人に相談されるようなことがあっては不味い。この席にいる者は兎も角として、出来る限り内々に処理したいのが本音だ。

かぐやは意を決して鳳翔を問い詰めることにした。

~~~~~

日暮れ頃。

ホテルの部屋で俺はベッドで寝転がりながら仕事。翼は机で受験

勉強。

たまに翼が質問してくれば教え、その後ベッドに転がっているペットボトルのお茶を飲む。

「あー、そんな訳だから、後よろしく」

雇われ社長に出す指示を腹心に電話で伝え、本日の仕事は終了。夜は早く寝て早朝からまた仕事だ。

ふと例の害虫駆除作業をここしばらく怠っていたことに気づいてノートパソコンを開いた。

この間の少女漫画洗脳事件の時の真妃の姿で害虫が数を増やした恐れがある。

心してかかった。

「……？」

また石上優の名前が送信されたリストに入っている。

確かに石上は長つたらしい髪を綺麗さっぱり消し去ったことで、見栄えは良くなったが、それだけのことだ。間違いなくいつもの虚偽報告だろう。

石上がリストに入ったのは昨年のこと。

違う学年違う敷地の男子生徒に惚れられるのは容姿端麗な真妃ならありえない話ではないが、それでも接点がないだろうということまで詳しく調べた。

すると全くの事実無根。それどころかやつかみであることが判明。憐れみを覚えつつも損な性格だと呆れたものだ。むしろ石上と一悶着あった男子生徒の方がよほど危険分子だろうという判断を下した記憶がある。

とはいえ先日眞妃が病院に運ばれた際、救急車を呼んだのは白銀と石上らしい。

眞妃に大丈夫だったか話しかけたところ、洗脳事件の時とは別の方向性で様子が少しおかしかったので、もしかしたらという不安に駆られた。

白銀の場合。

かぐやとの婚姻を仄めかし乗って来なければ、消去することになる。それ事態は容易だ。

父親が職業不定かつアパート暮らしである以上は隙だらけ。罪を着せるのは容易だ。

父親が犯罪者ともなれば、いくら人望ある生徒会長といえど、学校から去らざるを得ない。

石上の場合。

父親の会社は四宮に比べれば雑草のようなもの。容易に吸収できし、家族ごと白銀家のような生活苦に追い込むのも全く難しくない。

白銀とは真逆で成績の悪い石上では自主退学という形になるだろう。

とはいえ白銀はもちろん優秀だが、石上は石上で高校生離れしたI Tへの強さを持つ人材。

換えは十分に効くが、確保して育てたくないと言えば嘘になる。不登校歴こそあれ事情あつてのもので生徒会の勤務状況は真面目そのものと聞いている。

大学を卒業する目処がつけば、こっちからスカウトしてみたいときえ思う。

悩ましい。

すると電話が掛かってきた。ここの警備を任せている者たちの

トップだ。

「翼く、ちよつと部屋出てるよ〜」

翼に不安を与えないために一旦部屋を出て電話することにした。

先日は何故かマスメディア部の紀かれんと巨瀬エリカがこのホテルに侵入してくるといふ事件があつた。

流石に社長令嬢を警備のおじさんに捕縛させるのは気が進まないため、支配人に圧を掛けさせ客として宿泊させた。

俺自ら尋問するも全く口を割らないのでお手上げ。

むしろ巨勢に至つては叔母面してくる始末。

その際にマスメディア部部長の朝日雫や担当顧問に抗議電話。さらに二人の親たちにもそれぞれ圧力を掛けることになった。

その時の教訓を生かし、多くの女性警備員を手配したのだが。

「はあ？また秀知院生？何人？特徴は？」

「男子一名に女子五名です。まさか不埒な集まりでは……」

「良いからさっさと特徴を話す!!」

一喝して得た特徴は次の通り。

唯一の男子生徒は小柄でメガネ着用。容姿は可憐。

女子五人に関してはまず、変なヘアピンをつけたおかつぱ頭。

次に、女子高生とは思えないセンスの欠片一つないツインテール。

また、変なヘアピンをつけたスタイル抜群な娘。

そして、おさげを二つ結びにした小柄な娘。

最後に、髪を後ろでまとめた人形のように綺麗な娘。

女子に関してはおそらくこの集まりならそれぞれ柏木、眞妃、藤原、伊井野、かぐやと言ったところだろうか。

他の人が眞妃の髪型を揶揄するのは我慢ならないので、今報告した不届き者は左遷確定だ。不満を抱かれないよう一旦は別の良い位置に付け、適当なヘマをさせ……するのを待つてからという形になるが。

所詮はかぐやの顔を覚えていないレベルの小者でしかない。

男子は正直これだけでは分からない。白銀でもなければ石上でもない。誰だろうか。

「なら、男子の方には男性警備員三名。女子たちには女性警備員八名が当たって。ただし、ツインテールと人形に関しては非常階段の方まで誘導すること。上の階で俺自ら対処する。」

「危険では？」

「……お前は俺が女子二人まともに相手できない軟弱だとしても言う気か？」

「滅相もございせん!!」

「ならさつさとやる。今言った二人以外は捕らえ次第、ベビールームにでも放り込むこと。俺と同じ秀知院生だということを忘れず、くれぐれも丁重に扱うよう周知しろ。いいな？」

指示出しを終えて一旦部屋へ戻り所用で一時間ほど席を外すと伝えた。

~~~~~

~~~~~

「ここはホテル内にある会議室。俺と侵入者三名が向かい合っている。」

「で、かぐやにマキ。そして……今はハーサカか。一体何の用だ？」

「その前に、他の三人はどこに？」

「別室待機だ。良いからさっさと答えろ」

柏木、藤原、伊井野は女性警備員が手早く処理してベビールーム送りに。かぐやと真妃は予定通り非常階段を使わせ、俺自ら会議室に誘った。

しかし、ただの男子生徒かと思っていたハーサカくんが余計だった。

ハーサカくん。

ハーバード大中退で道楽で執事をやっている泣き虫……というかなり盛られまくった設定の早坂愛。藤原千花を別邸に招くにあたって作られた早坂の擬態の一種だ。

正直、あまり気分の良いものではない。

早坂ということはいくら俺の護衛要員の一人とはいえ子供相手だと舐め腐った男性警備員三名では手こずる。

何せかぐやの最大の切り札だ。そう簡単には処理できない。

スマホで監視カメラの映像を見て早坂だと気付き、慌てて俺自らの場へ連れて来たのだ。

「鳳翔、あなた……男が好きなんですか？」

「はっ。」

意味が分からない。かぐやは真剣な眼差しで尋ねて来た。

いや、生徒会メンバーに柏木がひつついて来たということは翼案件だろう。同じホテルに泊まったからと、そこまで空回った勘違いをされるのは想定外だが。

ここで真妃が爆弾発言をかました。

「あんた昔言ってたじゃない。男を叔母様に盗られたって」

「はあ!？」

どうやら真妃は昔の会話を何かしら取り違えて覚えていたらしい。取られたと思つてたのは男ではなく早坂のことだ。

早坂本人の目の前で言うわけにはいかないが。

かぐやも勝手に男から男を奪った女扱いされて憤慨している。そもそもかぐやに交際経験やそれに類するものはまだないはずだ。

「よく思い出してみろ。俺は男を盗られたとは一言も言っていないぞ」

「いつも一緒にいた子を盗られたってことはそういうことですよ?」

俺は懇切丁寧に説明してやる。

その子は女で盗られたというのもかぐや自身の意思によるものではないと。

「何よ。紛らわしいわね。ずっと勘違いしちゃってたじゃない」

「んな妙な勘違いされるなんて想定できるか」

「待って。その子って私のこと？」

流石に早坂が勘付いた。敬語も演技も忘れてらしい。

確かに、早坂がかぐやの近侍になるまではよく一緒にいた。

同じアニメも見たし、同じフライパンで作られた料理を食べた。

「話の腰を折るな。控えろ」

もう十年ほどになるだろう。早坂にこうして接するようになってから。

後戻りする気は更々ない。

早坂は一礼した。

「……そういうこと」

真妃もやつと真相を把握したらしい。

社交界の場がかぐやの近侍の早坂愛を見る機会は四条の令嬢ならあり得る。ハーサカが早坂愛であることも把握しているらしかった。

「で、翼……柏木の彼氏に関して話があるんだろう？」

「そうよ。一体あんたたち何やってるわけ？かなりの頻度で泊まらせてるんでしよう？異常よ。異常」

それはそうだが、真妃に掃除能力が皆無だと知られるのは癪に触る。

同じクラスのとときに掃除当番として被ることは多々あったものの、適当に箒を動かしては誤魔化していたので、未だバレてはいない。



「大方、柏木さんの彼氏に掃除でもさせているんでしょう。全く見境がない」

かぐやは普通にバラした。

俺が整理整頓する能力に乏しいことを。

「そう。どうしてももって言うなら私がやってあげても良いわよ」

「お前が？」

真妃は肯定した上で感謝しなさいというが、あそこは仕事部屋。

いくら真妃とはいえ、彼女に見られると大変不味い代物がある。

おまけに四条家令嬢を部屋に出入りさせているなどと父や祖父の耳に入ればどうなることか。

だが、これを言えば再び真妃との関係が壊れてしまう。かぐやに視線を向けた。

「良かったですね。それとも、別邸の方に戻りますか？」

かぐやは俺を見放した。選択肢は残っていなかった。

柏木たちは解放。翼も家に帰した。

~~~~~

「良いか。絶対、変装して来いよ」

「分かっているわよ。任せなさい」

結局、眞妃が早坂監修の変装姿で部屋に出入りすることで落ち着いた。別邸に何故があった余りの男子制服を使った男装である。

もちろん、翼のようにここで外泊させる訳には行かない。

よって、学校で男装し、タクシーでホテルへ来て掃除してはくつろぐ。

日が暮れる前にはここを出てタクシーで学校へ戻り元の姿へ。

その後は素知らぬ顔でまたもタクシーを使って眞妃は家に帰るところになる。

タクシー代は俺のポケットマネーから出すことになった。

そして眞妃が出入りするようになってから数週間。

案の定、眞妃に俺の進めている計画がバレた。

「これは一体どういうことかしら？あんたの息が掛かった者を中心として四条家内部に反四宮過激派を形成？よくもまあ考えたものね」

バレたのはずっと準備していた俺の四宮四条戦争計画。

時期を見て四条が進めているフランス銀行との経営統合への妨害工作を緩やかに。

統合が成功し、四宮と四条が少なくとも資産額で同等レベルになったタイミングで過激派が四条内部で決起。

祖父雁庵が危篤という情報を四条に流して四条家が四宮家に攻撃するよう仕向ける。四宮家は父黄光を中心としてこれに反撃。

もちろん、四宮と四条が全力で殴り合えば互いに無視できない大打撃を負う。犬猿の仲の両家も理的に講和へと動かざるを得ない。

講和の証として政略結婚という話が出てくるだろう。もちろん、俺

のシンパから。

講和が達成され次第、四条の過激派は自壊する手筈だ。

「かぐやはその前に、子無しの大物政治家の養子にねじ込んだ白銀と婚姻させる。そうなると四宮家に残った政略結婚の駒は俺だけの相手になるのは」

「私ね。……あんた、そこまでして私と結婚したいわけ？」

眞妃は聞いた。

国家の心臓である四宮と各国で名を轟かすMNCの四条で戦争が勃発すれば両グループの社員だけでなく、大勢の日本国民や複数の他国民の一部にまで甚大な悪影響をもたらすことになる。それを分かっているのかと。

「はじめからそれが狙いだ」

俺は枕元から小さな箱を取り出す。

その中に入っているのは俺の母親が付けているものより遥かに値打ちのある指輪。

四条家令嬢へのプロポーズにはこれしかない、例のガルダン・アラサム王国で入手した石を加工させて作らせた一品。

思ったより三年以上も早く渡すことになってしまった。

「マキ。俺はかつて策にハマってお前との時間を失うことになった。これは、今の俺がお前と共に居続けるために練った、そしてそれを実現できる精一杯の謀略」

白銀はかぐやへの告白のために文化祭で大掛かりな準備をするらしい。

俺を騙すのは無理と根回ししてきた。

おばさんを下さいという聞いたことのない啖呵と共に。

その計画は俺の計画とは真逆で自分の幸せを掴むと同時に生徒たちにハートの風船の大群という幸せをにもたらす最高のもの。

一方の俺の計画は数千万人あるいはそれ以上の人々を不幸にしてやつと自分の幸せを手に入れるという、これ以上が考えにくい最低最悪のもの。

良心の塊である真妃では受け入れられない可能性がある。分が悪すぎる勝負は今ここで決めるしかない。

深呼吸して、繊細な真妃が怯えないように落ち着いた声で言った。

「マキ、聞いてくれ。お前は俺にとって生き甲斐そのもの。だから、お前と死ぬまで一緒に居たい。お前と居られないなら、四宮の家督を継いだところで意味がないんだ」

本心である。

四宮家家長となった場合、自分を殺すことになるのは明白。絶対に判断ミスをしてはいけないというプレッシャーは並々ならぬものだろう。

おそらく誰にも心を許せなくなる。今以上に。

ただ真妃さえ側に居てくれるなら、少なくとも家の中では心穏やかに過ごせるだろう。

真妃はプルプル震えている。分かっている筈だ。

俺の計画がなかったとしても、四宮と四条の間では遅かれ早かれ戦争が起こる。

それなら最初から着地点が見えている俺の計画に乗った方が良いと。

真妃が今も俺と交際中だと思ってることぐらい、白銀から確認済みだ。交際中のプロポーズ、受けない筈がない。そうであって欲しい。

真妃が黙りこくっている時間がそれこそあの夏休みよりも長く感じられる。

「……仕方ないわね」

この言葉を待っていた。

「だけど、あんたもちゃんと長生きしなさいよ。早死になんてしたら絶対許さない。あんな不摂生な弁当は金輪際やめること！良いわね！」

俺はあの夢のある弁当を二度と食べられないことに一抹の寂しさを覚えながらも、満面の笑みで頷いた。

## エピローグ

結局、すべて思い通りになった。

俺は四宮家の家長代理となった。ただ表向き次の総帥は父黄光なので、俺が四宮家を裏から牛耳っていることを知っているのはごく一部の人間のみだ。

存命中に取り計らってくれた祖父雁庵に感謝を。

かぐやのためと言えはその通りに取り計らってくれた。

冬頃。

手筈通り俺の息の掛かった者たちが中心となって過激派として暴走。正月は四条家対策で右往左往する本家の人間たちを見て哀れみを覚えた。

四宮家に誠心誠意尽くす者たちから極力犠牲者を出さないことが家長代理としての精一杯のお情けだった。

そして家長代理になってまず初めにかぐやの婚約を断行。

二学期期末試験結果発表後の白銀との食事で彼に子無しの大物政治家への養子入りを説得。

白銀自身は父親の会社の復興という夢を今ひとつ捨て切れないう子だったが、妹に最大限援助するということで納得してもらった。

というより、白銀に拒否権はなかったと言ったほうが正確だ。これにより強固な首輪を繋がれたことに気付いただろうか。

そして祖父を言いくるめ、父黄光を説得した。公の場では白銀を新姓で呼ぶが、私的空間では今なお白銀と呼んでいる。

新学期。高校サッカー全国優勝を果たした帝が転校して来た。

帝はかぐやと白銀の婚約を知るや否や崩れ落ちていた。てつきり知っているものと思っていたので、拍子抜けした。

俺が裏で糸を引いたと半日足らずで看破していたが、それを恨んでどうこうする肝はなく。

でなければ和平に妨害の一つや二つ入れた筈だ。

フランス校との交流会でのダンスパーティー。

せめてもとかぐやを姫様呼びして踊りに誘う帝を引っ張って、パーティー中にセツテイニングしたフランス（校）代表との試合に参加。

帝と神童のツートップで俺がゴールキーパーという夢にまで見た布陣が完成した。

パーティー終了後、俺とかぐやは本邸に呼び出される。

四条との抗争激化による一族の会議のためだ。議題は抗争の落とし所。

俺はジェットでの移動中に例の執事にメールを送信した。

会議の中で父黄光は俺に言った。お前の婚約者に四条の令嬢を据えるしかない。

かぐやはそれを聞いて俺が何かしたと勘付いたようだったが、かぐやは大人だった。

もちろん、婚姻の話は四条家内部から起こさせたもの。四条真琴が渋った一方で娘の眞妃は白々しく承諾。

こうして四条家側から新総帥黄光に婚姻の話が持ち込まれ、会議で俺は重々しく父の言葉に頷いた。

しかもこの件で生徒会選挙の件についての借りをチャラにする白々しさである。

東京にある料亭で二人の顔合わせ。同級生なのに。

互いに向かい合わせの席に座り、必死に平静を取り繕った。その後、無事婚約は成立した。

むしろこの件で大変だったのは白銀、かぐや、石上の三人だった。俺と婚約させられる眞妃が可哀想だと主張する伊井野を必死に宥め倒したと聞く。

あの娘は俺をどんだけ恨んでいるんだ。

こうして、初等部の頃は雲を掴むような話だった真妃との婚姻が現実のものとなった。あまりに多くの犠牲を払って。

そして、祖父雁庵が遂に死去。

最後に二人きりで会った時は運良く血の巡りが良く頭が働いていた。昭和の怪物と言われた祖父らしく、俺の計略を看破してみせた。もちろん盗聴器は事前に例の執事に命じて外させた。

自分でも祖父の力をまた垣間見れて嬉しかったのか渾身の計略をあつさり見抜かれて悔しかったのかは分からない。

別に真妃とくつつくことそれ自体には異存はないらしい。

だが、お前こそ俺の次の怪物と言ってもらえたときは確実に嬉しさだけがあった。

葬儀の日。俺の婚約者として真妃が出席。

二人して屋外で黄昏ていた時に、三兄弟で最も狡猾な叔父雲鷹が邪魔してきた。

どこから嗅ぎつけたのか、すべて俺の狙い通りだったんじゃないかと追求する叔父に対し、真妃と二人揃って知らないと答えてみせた。

その時の叔父の顔こそかぐやが撮るべき最高の被写体だったと俺は思う。

そして夏休み。翼の彼女である柏木の懐妊が発覚。

ただただ翼の手際を賞賛するばかりだった。

そして、大学受験。二人して東京を離れて京都の方へ行くことにした。

二次試験終了後、真妃は妊娠を告げた。

元々早いうちに結婚まで持っていこうという話ではあったが、せめて合格発表が終わってから言うって欲しかった。



もちろん、二人ともしつかり合格していた。

これを知った両家はてんやわんやの大騒ぎ。眞妃が俺に告げるまで家族にも秘密にしていたと分かったときには感服した。

これを聞いた翼は俺の肩を組み、帝は呆れた。

「やっぱり来たか。今日は俺の方が早かったな」

「そういうあんたはかなり眠そうじゃない。いつからここに？」

「早朝五時。昨日は寝付きが良くて」

初等部の頃、散々密会を繰り返した場所。

本来の集合場所は秀知院のだが、お互いに此処にいるだろうと察していた。

朝っぱらから張り込んでいたのは今日こそ俺の方が先に着いてやろうと思ったからだ。

今の眞妃は俺が秀知院に戻った頃より色気が増してより可愛くなった。俺が贈ったりボンが彼女を良く引き立てている。

幼少の頃を思い出させる姿が俺によるものと知った石上にマニアックだと揶揄された時はしつかり制裁した。

「時々あんたが天才なのかバカなのか分からなくなるわ」

それはどこかの自称世紀の大天才に言って欲しい。

彼はこの先の人生を俺の言いなりとして生きていくというのに、帝に大見得を切ったのだ。

何か逆転の秘策でも用意しているのだろうか。出国の際に隠し事をしている雰囲気はなかったのだが。

二人は外に停まっている四宮の車に乗り込む。もうここにも堂々と車で来て良い。

運転手は初等部時代の俺がずっとここに通っていたと聞いて、たいそう驚いていた。

車で行けばそれはもうあつという間に秀知院。

今日はここに友人たちが見送りに駆けつけてくれている。

「あら？居ない」

てつきり校門前まで出迎えに来るものと思っていたが、違うらしい。

「白銀の時みたいなき感じではなさそうだけど」

海外の大学へ飛び級で進学するために、秀知院を中退した白銀は卒業式の日、校庭で盛大なサプライズを受けた。

かぐやの発案によるものである。

だが、校庭には誰もおらず、校舎裏に誰かが潜んでいる気配はない。

三年A組の教室も二年B組の時の教室も回ったが、誰もいない。

「生徒会室じゃない？祝福の仕方が目に浮かぶわ」

果たして生徒会室へ行くとその通りだった。

「「結婚おめでとう!!!」」

かぐや、翼、神童、帝、藤原、紀、巨勢、風祭、豊崎らが所狭しと並んでいた。



わざわざ作ってきたという弁当の内容は至って一般的なもの。  
巨大サイズでもないし、肉ばかりでもないし、揚げ物ばかりでもない。  
い。

白飯にハンバーグ、ポテト、味付け卵、お浸し、そして漬物。  
なんだかんだ俺の好みに寄ってしまうのがお可愛いところだ。

「お前つわりは……」

「あんたのためならどうってことないわ」

眞妃はなかなかどうして男前なことを言う。

契ってからは吹っ切れたのか、ずっとこうだ。

「美味しい。これ、仕込みにかなり時間掛けただろ」

「べ、別にそれほどでもないわよ」

前言撤回。やっぱり眞妃は眞妃だ。

食べ終わると、互いに眠気が襲ってきたらしい。肩を寄せ合って眠りについた。護衛の人員は車内に控えているので、セキュリティ面も寝過ぎすリスクも問題ない。

目が覚めたら関ヶ原。滋賀県を通過して割とすんなり京都駅。

駅近くの道路に、手配した車が停まっている。二人で後部座席に乗り、発進。

京都の街並みを楽しんでいるとあつという間に、この日のためにグループ傘下の企業に作らせた家の前だった。

例の執事が立っている。

「ご無沙汰しております。坊ちゃん……いいえ、若旦那。心配されて

いたものは何一つございませんでした」

四宮と四条の和平の印でもある俺たちを狙って新居に爆弾でも仕掛けられてないかと心配だったので、例の執事に調べさせたが何も無かったらしい。

「それと、ご心配のものとはまた別の類の爆弾がございましたが、どうぞお二人で処理なさいませ」

「また爆弾か」

「ちよつと、またつてどういふことよ」

眞妃に説明する。

ガルダン・アラサム王国へ行った帰りにジェットの中から爆弾が見つかったという話を。

「危うく何処ぞの空が落鳳坡になるところだった」

「ほんつとバカだわ。あんた」

笑い飛ばす俺に呆れる眞妃をよそに例の執事に尋ねる。その爆弾は俺たちで処理すべきものなのかと。

「はい。私では到底処理しきれない爆弾です。ですが貴方様方ならきつと」

「マキ、俺その爆弾に心当たりがあるんだけど」

「奇遇ね。私もよ」



「鳳翔。なんかあんたがこの子に未練タラタラみたいに聞こえるのは私の気のせいかしら？」

断じて違う。

確かに今なら認めよう。俺の初恋は愛だったと。

しかし、ずっと好きなのも愛しているのも眞妃であることに変わりない。

もうとつくに愛のことは吹っ切れている。

大体、眞妃自身俺が愛に未練があると本心から思っているわけではないだろう。

愛の同居に眞妃が一枚噛んでいるのではという疑念が生まれた。

俺が未練を否定することを分かっている、なら良いだろうという方向に話を持って行きたいのだ。

「未練なんかない。けど、愛さん絶対邪魔するでしょ。主に夫婦の営みとか」

「いえ、ご心配なく。私が警戒している間にじゃんじゃんなさってください」

愛がまた昔みたいに敬語を使っている時点で不安しかない。

ここで眞妃はため息を吐いて言った。

「鳳翔。私のことを思うなら認めてあげなさい。愛が居てくれる方が気楽だわ」

ここまで言われたら呑むしかない。

こうして、愛の同居を渋々ではあったが認めることになった。

そして時は流れて入学式。俺は不安に駆られていた。

「今更だけど、この大学って藤原みたいなのがウヨウヨいそうだよな」

「本っ当に今更ね。今から別の大学受け直す気？」

「いや、ここが良い。色んな意味で」

京都は四宮の本拠地と言っていい地。ここにある大学に四宮の手が伸びていない筈はなく。そして学生も不純物が数多く混ざった秀知院大学より民度という意味では遥かに良い。

真妃の安全を確保するには最適の大学だ。

「あんた今どうせ私に近づく不届き者を排除しやすいとか考えてるんでしょ」

バレてる。

かなり前にかくやが騒動の意趣返しとばかりにネタバラししたのだ。

愛想を尽かされないかヒヤヒヤしたことが思い出される。

真妃は左手薬指を俺に見せながら言った。

「大丈夫。私はあんたとずっと一緒に居てあげる。あんたは人を不幸にする暇があつたら、人を幸せにする方法でも考えてなさい」

真妃は俺が仮面の下に何を隠しているのか知っている。俺も左手薬指を見せながら存分に格好つけて言ってやった。

「ああ、俺は”国家の心臓”四宮家の嫡男。この国を、国民を、さらに豊かにしてみせる。そして何より、お前をどこの誰よりも幸せにしてみせる」



「言ったわね。約束よ」

すっかり成長した真妃との改まった約束はこれで三度目。

一度目はあのホテル。四宮と四条の争いで傷ついた人々を必ず救済すること。

二度目は駆除の件がバレた時。これまでに駆除した人々とその家族を可能な限り元の水準の暮らしに復帰させること。

いずれも今の俺からすれば帝にボールの取り合いで勝つよりずっと簡単だ。

「マキ」

俺は真妃に手を差し出す。真妃はその手をギュツと掴んだ。

「俺たちの契りは絶対だ。何があっても変わらない。子々孫々に至るまで、ずっと不滅だ」

これで良い。かつて望んだ夢は全て叶った。あとは真妃の望みを全て叶えるだけ。

「ふくん。なら聞くけど、子どもの名前は何か良い？」

真妃がニヤつきながら聞いてきた。答えは一つしかない。

「お前の望み通りに」

「不調法者ね。私はあんたと一緒に決めたいの」

どうやらまだまだ叶えなきやいけないことが増えるらしい。

俺たちがこの世で最も壮大な恋愛頭脳戦の勝者だ。

補完編Ⅰ 四条真妃と契りたい

「1」

ベビールームに囚われていた柏木、藤原、伊井野は解放された。呼びつけたタクシーを使って翼を含めた四人を家に送り返す。予想される料金分の三倍以上の福沢諭吉を各々に授けた。

問題は真妃、かぐや、早坂の三名。

「何？お前ら泊まる気？」

「はい。そうですか？」

仕方ないので、俺が宿泊する部屋の両隣の部屋に泊まらせることにする。俺がこのホテルに泊まり始めて以来使われていなかった部屋なので、別に問題はない。もちろん、支配人に指示して内部を整えさせる。

荷物に関しては俺の部屋の隅に一時置いておくことになった。

「マキ、お前よく外泊許可取れたな」

「渚と一緒に建前があるからよ」

柏木も翼と一緒に別の部屋で泊まってくれても良かったのだが、一生このホテルは使いたくないらしい。よほど嫌な思いをしたのだろうか。

「それより、お腹空いたわ。なんか出さない」

「なら、下の階に天ぷらの店あるからそこ行く？」

こうして四人でホテル内の天ぷら店の個室で夕食を済ますことになった。

カウンター席に眞妃、俺、かぐや、早坂の順で座る。目の前で揚げられたものを食べるのだ。

「あんたいつもこういうの食べてるの？」

「そうだが？まあ今日の朝は舌平目のムニエルにカツサンドだったけど」

俺の話聞いた三人は固まった。思考停止したらしい。

「……早死にするわよ？」

「結構なことだ」

三人の呆れた視線を無視して俺はお通しに手をつけた。

~~~~~

メインの天ぷらの前に刺身を食べる早坂愛の心の内は欧州事情かと言うほどに複雑怪奇であった。いや、複雑を通り越してむしろ無心と言えるかもしれない。

ただ、惰性のみによって魚肉を咀嚼している。

「でき、翼のやつ結構モノ片付けるの上手くてさ。口は堅いやつだからまあ良いかなって思って明日以降もと言ったわけよ」

鳳翔は眞妃にこれ以上なく心を許しているらしい。病院で聞いた件からして二人は相当深い仲だ。

かぐやは一族内での席取りのため黙っているのが有効と判断したらしく、鳳翔と眞妃の間を邪魔する兆しはない。

ふと、早坂は昔自分が居た席に眞妃が座っているのだと思った。この人のためにも思つてずっと罪悪感に耐え続けて励んできたのに、待つていた末路がこれだ。

いや、眞妃でなくても翼も翼だ。

単に仲が良いというだけのド素人に部屋の掃除を任せていたとは。

(口が堅いから……?)

鳳翔の言葉に引つ掛かりを覚えた。鳳翔は早坂が黄光にかぐやの情報を漏らしていることを知っている。鳳翔が心からかぐやを大事に思っているかは定かではないが、それでもあまり快く思われていないかもしれない。

そんな嫌な考えが頭をよぎった。

「そういえばあんた、昔からあの子をよく使つてたわよね。私が入院してた時もそうだったし。あれはちよつと可哀想だったけど」

鳳翔と眞妃が言葉を交わす度、胸が締め付けられる気分になる。

それでも、かぐやに取られた好きな子というのが自分自身のことだと思えば、いくらか締め付けは緩くなった。

「いうてあいつ俺が人間らしい振る舞いをすることに感動してたらしい。酷くない?」

鳳翔の冗談に眞妃がウケたのかケラケラ笑っている。かぐやも少しツボに入ったらしい。だが、早坂は知っている。鳳翔が本当に大切

だと思った人にはどこまでも優しいことを。

(……けど)

今の早坂は、決してそうは思われていないだろう。

「あなた友達と勉強するからと言っては毎日のように抜け出してましたよね」

いつの間にかかぐやが話に混ざっているが、早坂は相変わらず黙々と食べ進める。

異様に帰りが遅かったので、誘拐でもされたのではと心配していた日々を思い出した。

「翼とはしてなかったけど、勉強はしてたよ。まあ途中からマキの弟とサッカーしてたんだけどさ」

この時、かぐやと早坂は鳳翔がサッカーに傾倒し始めた訳を初めて知った。

「あの男と？そんなことしてたんですか」

眞妃の弟とはすなわち、四条帝。昨年の全国模試で白銀に大差をつけて撃破し、サッカーにおいても高校屈指という実力者だが、かぐやにとっては詐欺師同然の忌々しい男でしかない。

「弟の話はどうでも良いわ。それより、あんたあの歌は何だったの？」

(……歌?)

「あれ翼の発案。俺じゃないから」



ニュースを見ながら歯を磨けば、後はもう寝るだけだ。

——コン、コン、コン

ドアの方で入室確認目的なのかノックされる。アポ無しの訪問。どこぞの死神のような暗殺者であっても問題ないように身構えてからドアを開けた。

「ちよつと良い?」

真妃だった。聞けば、この後早坂に男装指南を受けるため手短に済ませたいらしい。

「あんたまさかこれから寝るつもりだったわけ?」

「いつもならとつくに寝てる時間だし」

「……そう」

真妃が聞きたいのは早坂のことについてらしい。どう思っているのか聞いてきた。

「どうって言われても……別にあいつのこと好きとかじゃないから」

「じゃあ、あの娘に迫られたら拒否できるの?」

迫られるの意味を問えば、チュウとかと言ってくる。どうやら真妃はキスのことをチュウと言うらしい。なかなかどうしてお可愛いことだ。

早坂について話が及んだので、想定してみる。早坂は女子高生ながらエージェントとしてかなり優秀な部類に入る——その気になれば



秀知院のセキュリティすら突破できるレベル——ため、強引に襲われれば状況次第ではあるが無力化される可能性は排除できない。

「抵抗はするけど……お前、あの時のこと根に持つてるの？」

思い出されるのは初等部の頃に起こった真妃との関係が破綻するきっかけとなった事件。あれに早坂の母親である早坂奈央が一枚噛んでいたことは調べがっている。

しかし、あれは場合によつては叔父雲鷹を凌ぐ程に狡猾な人間なので、こちらが勘づいていることを悟られるわけにはいかない。どのような行動に出るか予測し切れないし、早坂家自体が少なくとも今は手放せない重要な剣だ。

真妃は俺の問いに対してゆっくりと首を横に振った。それどころか、頭を下げてきた。驚いた俺は目を丸くする。

「ん？いや、何何何？どうした？」

真妃が口を開いた。声を震わせて言うことには、すぐに分かってあげられなかったバカな自分を許して欲しいとのことだった。

思わぬ話に俺は戸惑った。あの少女漫画洗脳事件の時とはまた違ったしおらしい真妃に強烈な違和感を覚えずにはいられなかった。

「あの時、俺たちはまだ子供だった。仕方なかった。……マキ、そう気負わなくて良いから」

「……でも」

上目遣いをする真妃に心臓が跳ねているかのような感触を覚えた。

「過ぎたことだ。それより、早坂に用事があるんだろ？手短らについて

さつき言つてたけど、もうそれなりに時間経つてゐるぞ」

俺の言葉を聞いた眞妃はどこか落ち着かない様子で部屋を出て行く。少し手を伸ばせばまた違った景色が見える気がしたが、度を越した眠気によつて断念せざるを得なかつた。

~~~~~

### 体育祭。

競技種目にサッカーをねじ込もうとしたが、工作中に眞妃に見破られ断念することに。どうもサッカーは弟を連想させるためにあまり好きではないらしい。

結局、二年生は全員参加することになっているソーラン節の際に裸足にならなくてもいいようにするぐらいしか工作はしなかつた。

こうなつては味気ない競技の連続でしかない。仮病を使うことも考えたが、それも断念。理由はただ一つだ。

父が来るので、サボりたくてもサボれない。

「父上、ご無沙汰しております」

「鳳翔。元気にしていたか？」

「それはもう。先日は……」

昼食休憩中の理事長室。父が理事長のみが座れるご立派な席に腰

掛けている中、俺とかぐやはテーブルの両脇にあるソファ―にそれぞれ弁当片手に座ることになった。

生徒会選挙の件の失策を詫びようとするが、手を横に振って笑い飛ばされる。むしろ、グループとしてSNS対策——もちろん四宮らしい対策——に本腰を入れる契機となったので、結果的には良かったと言う。

弘法にも筆の誤りだとのことだ。もちろん本心からの言葉である保証はない。

俺の留学中はいざ知らず、俺が出る学校行事には父黄光はわざわざ時間を作って顔を出す。ハゲ面を直に生徒という生徒に晒すことになるので、俺としては恥ずかしい限りだ。

息子の俺もいつかハゲるのではとまことしやかに囁かれたことさえある。もちろん、度を越して俺の名誉を傷つけたお馬鹿さんは少なくとも首都圏からは追放した。

「かぐやも息災だったか？」

「ええ、はい」

かぐやも表にこそ出さないが、内心鬱陶しく思っているのが見てとれる。完全に同意だ。

「それはそうと……あのスローガンはいったい何だ？」

かぐやと顔を見合わせる。困惑の色を隠せていない父が窓の外を指で差し示す。その先にはデカデカと張り出された応援団謹製のバカ丸出しで何を言いたいのか全く伝わって来ないスローガンが書かれた横断幕があった。



婚の駒となりグループに貢献しなくてはならない。ただし、学生時代は好きに恋愛しても良いという話。

父はノブリス・オブリージユ——言い換えれば、位高ければ徳高きを要す——の精神を尊ぶ。要するに、無駄に責任感が強いお人だ。

面倒。父の持論を聞いていてそんな感想が浮かんだ。

既にただ政略結婚するより遥かに多くの貢献をしてきた自負があるし、何よりノブリス・オブリージユの精神など俺にとってはただの題目に過ぎない。

俺に言わせれば上に立つ者というのは下に居る者を利用し益を得ることはあっても、その害を受けてはならないのだ。なお、下の者に旨味を吸わせないとはいっていないのが肝である。

もちろん、俺の考えを人に知られては倫理観の欠如を疑われ、かえって不利益を被る危険性が多分に出てくるので、表向きは心得ている振りをする必要がある。

ならばどうするか。逆手に取れば良いだけだ。

「……もうこんな時間か」

今では眞妃が男装してこの部屋に入り込むのに慣れてきた。眞妃が来る前はスパでマッサージを受けていたのだが、今日の夕方は喜ばしいことに眞妃に手や背中をマッサージしてもらった。

感想としては極楽という一言に尽きる。力加減もツボの押さえ具合も完璧だった。

おそらくはかくや辺りから何か吹き込まれたのだろう。でなければ、眞妃がそのようなことをするはずがない。

だが、あまりに気持ち良すぎたせいがかかえって寝れない。これでは

早朝の仕事に響きかねない。むしろ、今やっておくべきか。そんな考えが浮かんだところで電話が掛かってきた。

「早坂……？　どういう風の吹き回しだ？」

掛かってきたのはプライベート用端末の方。

この番号は早坂のもの。早坂がプライベートで一体何の用なのか。俺は通話を拒否した。今更話すことなど何も無い。

「んだよ……またかよお。もお……ん？」

再度着信が来る。今度は早坂ではなく、白銀だった。珍しい。興味をそそられた俺は応答することにした。

「はあい。白銀。いったい何用？」

「ちよつと聞きたいことがあるんだが……」

どこをどうとち狂ったのか、白銀は上流階級では子供へのメッセーヂを家の者がPCで確認するのが普通と聞いたらしく、それが本当かどうか聞いてきた。

思ったより万倍も下らない話に俺は笑いながら答える。

「ハハッ。んなわけあるかい。そんな話聞いたこともないわ。わざわざそんなことに人員割かないし、プライベートぐらいあるよ。普通に」

本人に分からないようこつそりやってますとかいざ知らず。また、仮にそういうことが行われていたのなら、多大な権限を持つ俺が知らないはずがない。

何より、実際にそういうことがあったのなら、あの計画は既に御破

算になっているだろう。

ほぼないだろうが、泳がされていた可能性を考慮して念のためこっそり確認してみることにする。

「そう……だよな」

「んなこと少し考えたら分かるだろう？そんな与太話どこで聞いたんだ？」

「……いや、四宮のところのハーサカでメイドから聞いたんだが」

んん？

「……ハーサカ？どゆこと？」

白銀とハーサカもとい早坂の間に何らかの接続ションがあるらしい。堂々と白銀が言うあたりからして怪しいものではないと思われるが。

若干のきな臭さを俺は感じた。

「あ、わりい。仕事の電話来たから切るわ」

仕事用の端末が着信を知らせる音を鳴らしている。早坂からのものだ。何やら妙なことが起こっている気がする。

今度はちゃんと応答した。先程とは打って変わって低めに声を出す。

「どうした？普段ならもう寝てる時間なんだが。眠い」

しれっと先程通話に拒否したのは寝ぼけていたせいだどでっちらげ。早坂は眠気を堪えるよう言った後、早速本題に入った。

「かぐや様が白銀会長を好きだという話はご存知ですね？」

翼の祖父が恋の病という診断結果をかぐやに突きつけた場に俺も同席していたので、当然知っている。かぐやの意向を実現すべく、既に子無しの大物で手を結ぶに値する人物のリストアップ作業を粗方終えている。

白銀をそうした者の養子にした上で、政略結婚という体裁を作ることでできれば、あとは既にかぐやの結婚相手を探していた気の早い者たちの反対を押し切るだけだ。

俺が先日病に倒れた祖父雁庵に代わって家長代理になる話も根回しは半分済んでいる。流石にグループのトップとしての次期総帥は父黄光ではあるが。

「それがどうかしたか？」

「では、かぐや様が会長の方から告白させようとしている話は？」

「……知らないが？」

どうやら我が叔母は一昔前の淑女らしく男の方から告白すべきとでも考えているらしい。

「今ひとつ話が見えん。疾く話せ」

急かされた早坂は言う。先日スマホを買ったかぐやは通話アプリで生徒会の面々とID交換をした。それで当然白銀ともメッセージのやり取りをするようになったのだが問題が起こった。

かぐやは既読システムを知らず、白銀とのトーク画面を二時間ほど見続けていたらしい。その結果、かぐやは白銀からのメッセージを三回連続即既読という失策をかましてしまったと言う。





もつと言えばかぐやが既読システムを知っていると勝手に思い込んだ早坂のミスだ。

側付きの使用人ならそれぐらい察するべきだろうに。技術が一流でも、超一流の使用人を目指すならば、そういう心配りがなってる。あの執事を見習って欲しい。

「ええ、そうですね。今日は別件です」

ギャルモードの早坂を使って俺を呼び出したかぐやはただならぬ様相だ。

「何でも会長が盛り場に行くそうなので、そこから連れ出して来て欲しいのです」

「……!？」

本日四時。かぐやによると、駅前のカラオケ屋で男女が番を求めて乳練り合う盛り場が行われるという。けしからん限りだ。

俺と同じクラスの風祭と豊崎に誘われた白銀は意外にもその破廉恥な会合に参加するという。

貧しい人間は心まで貧しくなってしまうらしい。俺は白銀に憐れみを覚えた。

しかし、カラオケというのはあまりよろしくない。長居すれば下手な歌に酔うことになる。

「カラオケから連れ出すだけならまあ良いけどさ。手駒使った方が早くない?」

「なら早坂を行かせますか?」



しい。

「白銀は……?」

「ここに居るぞ」

風祭に促されて豊崎が白銀を連れて来た。

「ちよつと別の部屋に行きたい。付き添って」

「あ、ああ」

白銀の肩を借りて部屋を出た。周囲の視線が俺たちに集まっていた。

「お前、こういう場に来て大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないから、こうして気持ち悪くなってる」

「いや、そうじゃなくてだな。こういう集まりに顔を出したって四条にバレたら不味くないか？」

「……四条ってマキのことか？」

白銀は落ち着かない様子で頷いた。俺は鼻で笑った。

「どうしてマキの名前が出て来る？」

「どうしてって、お前ら付き合ってるんだろ？」

「……誰がそんなこと言った？」

「四条がお前のこと彼氏だつて言つてたぞ」

「……？」

白銀が言うことには、病院で石上と一緒に俺が翼と浮気中だと眞妃が主張するところを聞いていたらしい。

元彼とかではなく、彼氏だそうだ。この俺が。

「……あ」

カラオケ店の廊下。具合を悪くして白銀に肩を借りた俺と男装姿ではなく女子制服を着た眞妃がかち合った。噂をすれば影というやつだ。

見れば、いつかの日のように俯いて肩をプルプル震わせている。

「白銀。今日のところは帰りなさい。あとは私が」

「……ああ」

白銀は眞妃の言葉を聞き入れて帰って行った。これで、一応かぐやの要望通りにはなった。

聞くところによれば、眞妃はかぐやから俺の言付けを聞いてかぐやを問い詰めたらしい。男装を解除してから急いでここに来たという。

「責めようつて訳じゃないの。事情は聞いたから。ただ……」

眞妃は俺の身体を支えるようにして抱きついた。

「……本当に、心配したわ」



ロポーズに使うつもりだった指輪。

かつての関係に戻りたい。そう願ってやまない自分がいる。

「いや、待て。冷静に」

眞妃は四条の令嬢らしく気高い人間だ。受け入れられるとは限らない。

「……だけど」

全てが終わってから看破されるのと、その前に共犯者になるのでは眞妃からの心象がまるで違う。

それにだ。

「これが受けてもらえないなら、所詮その程度だったということ」

俺は決断した。明日、俺が部屋に戻った直後、眞妃が来るまでの間にこれらを掃除される丘の中に潜ませる。

そして、眞妃がこれらを見つけ次第、悪魔の囁きをする。

指輪は枕の下にでも置いて適当なタイミングで出せば良いだろう。

俺は賽を投げることにした。

「2」

二学期期末試験結果発表後。俺と白銀はさる高級フレンチの個室で打ち上げを行っていた。もちろん、俺が半強制的に連れ込んでのものである。

「白銀、お前は前の食事会で言ったな。かぐや……叔母さんをくださいとか何とかか」

「ああ」

「そして、俺は言った。お前の父親の会社を潰したのは他ならぬ四宮家だが、それでも良いのかと。今でも、その答えは変わらないものか？」

白銀は首肯する。その目を見る限り、嘘ではないようだ。

俺は盛大にため息を吐いて見せた。

「全く……四宮家の御子ともなれば、その価値は計り知れない。政略結婚のため利用されるのがオチなのに、よくそんなことを」

「それはお前も、だろ？」

白銀は少し調子に乗りつつあるようなので、お灸を据える意味を込めて目を鋭く細めて言う。

「だからこそだ。四宮の御子が二人揃って政略結婚を蹴って自由恋愛の道に走ったなどと知られたら、政財界の年寄り世代はこれをどう思うかな？考えるまでもない。だから、父上もお祖父様も反対せざるを得ない」



白銀は押し黙った。そろそろ頃合いだろう。

「だが、お前とかぐやの交際を押し切るといふ難事業も、俺の手にかかれば赤子の手を捻るがごとく容易い。お前はこれを聞いてどうする？」

嘘である。流石の俺もこのレベルの工作はいささか骨が折れる。正直、ここは逆に俺が思いつきり苦勞する風を装っても良かったくらいだ。

「……見返りを支払えば動く。そう言いたいんだな？」

白銀は外部入学ながら秀知院の生徒会長の座に登りつめただけあつて、なかなか良い嗅覚を持っているようだ。

「そうだ。だが、今のお前では見合うだけのものは払えない。ならばどうするか？」

「今後一生、俺の全てを捧げろ……と」

「まさしく」

言うまでもないが、これでもかなり譲歩している。正直、白銀の代わりは世界だけでなく国内だけでもちらほらいるだろう。もちろん、家柄込みにはなってくるが。

かぐやが白銀を好きで尚且つ眞妃の存在があるからこそ、ここまですることになっている。

「どうする？…後戻りするなら今しかないぞ」

「いや、そんな気はない」

白銀はテーブルに両手を置き頭を垂れた。かぐやの結婚相手という座を手に入れるためなら俺に頭を下げるくらいどうとでもないということか。

俺はそれっぽく一笑いした。

「もちろん、お前の文化祭での告白が失敗に終われば、この話はおじやんだ。これは前にも言ったな。さあ、頭を上げてこれを見ろ」

俺は鞆から養子縁組のためにわざわざ作成したりストを白銀に渡した。

「あくまでお前が白銀家を出て、そこに書かれてある人物たちの誰か一人の養子になった上で、政略結婚のための婚約をするという運びになる。交渉は俺が中心となつて行うが、それでも必ず養子縁組が成立するとは限らない。優先順位は遅くとも文化祭までには明らかにすることだ」

子無しの大物の養子の座を狙う者はその者の親戚や関係者をはじめめ少なくない。四宮家の将来の棟梁である俺が派閥全体への援助を見返りに頼み込んでやつとその者たちに有利に立てる。

しかし、これを短期間のうちに成し遂げるのは俺でさえ重荷でないととはとても言えない。

白銀が誰の養子になりたいかは、本来慎重を期して決めるべきことだ。しかし、タイミングが少しでも遅ければ全てが後破算に終わるので仕方ない。

あくまで最優先は眞妃。このスタンスは曲げられないのだ。

「……俺には夢がある。親父の会社を復興させると言う……」



白銀はあくまで傀儡になるだけで、別に下僕になるわけではないのだ。

「鳳翔。お前は今回の試験、本気を出していたのか？」

「……さあな。確かに生半可ではない仕事を片付けながらというハンデはあった。だがそれを言うなら、お前だって生徒会活動あるいはバイトというハンデを抱えての試験だろう？」

話をすり替えることにした。

白銀は今回俺が主要教科連続満点記録を途切れさせたことがご不満らしい。

「大体、二年の二学期期末試験というのは一年の一学期中間試験より遥かに難しい。子供でも分かることだ」

「……今回の試験でのお前の失点は全て些細なケアレスミスによるものだと聞いているが？」

例えば、句読点の付け忘れだとか。翼との会話を盗み聞きしたらしい。

「まあ、誰にでもミスはあるだろうな」

「お前、本当は手を抜いていたんじゃない？」

「心外だな。そんなつもりはない」

言えない。白銀との付き合いがこれから長くなることを考えると言えるはずがない。

今回のテスト、というより秀知院に戻るにあたって俺はミスをして  
いた。俺がB組に入ったことで、白銀以下の面々の出席番号が一つず  
つずれて眞妃と白銀の間の番号が俺に割り振られることになった。  
すると、どうなるか。テストでは出席番号順の列で席に座ってテス  
トを受けることになる。つまり、俺のすぐ前の席に眞妃が座るのだ。

ここで、眞妃の髪型を思い出そう。あのツインテールだ。首筋を隠  
すものが何もない。思わず目を奪われそうになる。

しかしながら、試験中である。カンニングのレッテルを貼られるこ  
とを防ぐために眞妃の後ろ姿を見ることはできないわけだ。

髪を解いてなどと言えば、うなじが気になったことが眞妃にバレる  
という巧妙な罫でもあった。

要するに、今回のテストで俺は試験問題ではなく、眞妃のうなじを  
見たがる自分自身と戦わなければならなかったのである。

おかげで、集中力は散漫。結果として、些細な記入ミスを起こす羽  
目になった。

数学や理科の計算ミスこそ防げたものの、一度解き終わって眞妃の  
誘惑——もちろん本人にそのつもりはない——を紛らわす手段を  
失った俺に為す術はなかった。

見直ししようとしても手が付かず、頭を押さえて煩惱退散を一心に  
願うほかなかったのだ。

「そーいや、お前……確かマキの弟の帝に負けたことがあったそうだ  
な」

堪らないので、話題を変える。小さく切り取られた鯛の身を口に運  
ぶ白銀の手が止まった。

「知っているか？あの男は昔、かぐやを連れ出そうとしてあえなく失  
敗。両家からかぐやに近づけないようにされた曰く付きだ。しかも、

未だにかぐやに未練があるらしい」

白銀は持っているナイフとフォークを震わせている。よほど帝が気に入らないようだ。

「公立高校でモテているにも関わらず、誰とも交際しない。奴は本気だ」

ここで俺は白銀に真剣に聞いた。

「どうする？あれを封じ込める策は暖めているが……お前が望むなら実行するのも吝かではないぞ」

「……いや、良い。今は養子の話に集中してくれ」

白銀は口ではこうは言っているが、俺の策が碌でもない代物であることに勘付いたらしい。目元がピクピクしている。

「ま、それもそうだな。俺もマキの弟に破廉恥な計略を使うのはいささか気が引ける」

実際、俺の計略は四条帝を封じ込めるには大いに有効だが、四条家に俺の関与が知られれば本命の計画が後破算になりかねないという危険性を秘めている。とはいえ、かぐやと白銀の心情を知る前はこれが本命の計画に組み込まれていたのだが。

しかしながら、かぐやの婚約が上手く運びさえすれば、この計略の旨味は半減する。そうである以上は白銀の言う通り、止しておいた方が良いだろう。

~~~~~

### 奉心祭。

風土記にある逸話が今の秀知院学園の敷地で起こったとされるところから名付けられた我が校の文化祭だ。

その逸話とは、病で死になっっていた姫君を心配した父親が天からお告げを受けた。若者の心臓を火に焚べてその灰を蘿蔔の汁に溶き入れて娘に飲ませろと。

噂を聞いた姫に好意を寄せる若者が自らの心臓を捧げたことによつて、姫君は助かったという。

問題はここからだ。秀知院には奉心祭でハートの贈り物をする永遠の愛がもたらされるといふ話がまことしやかに囁かれている。シンパたちからの報告で初めて知った話だ。

白銀はこの伝説を基とし、数多のハートの風船をかぐやに捧げるといふ。よくもまあ考えついたものだ。普通に渡せば良いのに。

しかし、かぐやが奉心伝説を知ったのは文化祭まで数日に迫った今日だ。かぐやは白銀に何かしらのハートをさり気無く渡したいが、何を贈ったものか検討がつかないという。

「鳳翔は眞妃さんに何を渡す気なんですか？」

「……お前まさか丸パクリする気か？」

かぐやは憤慨した。

「強いて言うならごくありふれたものだ。マキが持っているところを





「見張り役に徹しとくから安心して」

「中の、とか言わないわよね？」

「言って欲しいのか？」

「なわけないでしょ！この不調法者！」

教室はどこも基本使われているため、学校の隅にある納屋で着替え  
てもらう。当然ながら周囲の警戒は怠らない。

「終わったわ」

真妃が脱いだ服は袋に折り畳んで入れて俺が持ち運ぶ。もちろん、  
その袋は購買で買ったバックに他の小物や土産類と一緒に入れてお  
く厳戒ぶりだ。簡単に女子の服を持ち運ぶ男子生徒という汚名を背  
負うわけにはいかない。

「最初、どこ行こうか？」

二人で学園内を歩きながら話す。この学校の学園祭はおそらく他  
校のそれよりレベルが高い。よりどりみどりだ。

「そうね……なんか良いところないの？」

「なら、石上のクラスでホラーハウスやってるらしいからそこ行く？  
二クラス合同でやってるんだってさ」

「それは聞いたわ。私の友達が掃除用具入れに二人で五分間閉じ込め  
られて無茶苦茶怖かったって」

「掃除用具入れか……しまった。消臭スプレーを持って来るべきだった」

「……そんなに潔癖なら、もっと部屋綺麗にしなさいよ」

「面目ない」

俺の部屋が一週間ぐらい放置すればゴミ屋敷のような惨状になることは既に知られている。一日だけでも常人が冷や汗をかくレベルだ。

真妃と話す時間を増やすべく、俺も試行錯誤しているのだが改善の目処は立っていない。

「人を入れるわけだから綺麗にされてる筈よ。でも、その前に行ってみたいところがあるわ」

「へえ、それは？」

「……鳳翔、あれを見て」

真妃が指し示した先には、また少しばかり髪が伸びてハリネズミのような頭になっている生徒会会計の石上優。彼が見つめる先には秀知院難題女子と言われているらしい子安つばめがいた。

「はえ、やるなあ。高め狙ってやつか」

長髪で野暮ったかった頃の石上ならともかく、今の石上なら勝算はなくもないかもしれない。難題女子と言われているだけあって、一筋縄ではいかないだろうが。

「ちよつとアドバイスして来なさいよ。私、この格好じゃ石上相手に

「話せないし……」

眞妃が男っぽく話そうとしても令嬢としての品の良さが隠しきれなかったのも、男装中の眞妃は人前では外国語で話さざるを得ない。しかし、成績が芳しくない石上にそれが通じるかは微妙なので、俺が出張ることになった。

石上に背後から近づき、その両肩に手を乗せて思いつきり力を込めた。

「石上、何してんの？」

「わっ！……って、おっかない方の四宮先輩!？」

「おっかない方？」

石上の言葉に引っ掛かりを覚えたが、まあ良い。

「察するに、子安つばめを文化祭デートに誘いたいってところか。ふん」

「あの、お願いですから、邪魔しないで下さい」

「……へえ、そんなこと言っちゃうんだ。悪いことをした人には罰が必要だと思わない？」

「自分のことですか？」

「お前、思ったことすぐに口に出すの止めような。……よし、あの人のシフト終わったら即刻声掛けるぞ」

すると石上は怖気ついた。よくそれで俺に対して無神経になれるものだ。

「……じゃあお前今までいったい何してたの？視姦？文化祭中に警察呼びたくないんだけど」

途端、後ろから小突かれる。眞妃が痺れを切らしたらしい。他国の言語で喋り始めた。石上は目を丸くしている。

『あんた、さつさとまともなアドバイスしなさいよ！』

『今まさにこれからやろうとしてたんだけど……』

「あれ、大将何してんの？こんなところで」

あまり良くないタイミングで翼が来た。このままでは程なく柏木も来るだろう。

「子安つばめを視姦していた石上をお縄につけるかつけないかで議論してた」

途端、眞妃に脛を蹴られた。

「……石上が子安つばめを文化祭デートに誘いたいみたいだったから、激励してた」

「あれが激励!？」

「へえ、石上さんが子安先輩の事……言ってくれば良いのに。水臭いなあ」



者は他を探しても滅多に居ないだろうし』

『そうじゃないわよ。女の子としてどう思うかって話よ』

『最初に目に入った顔の可愛い子。ただそれだけ。好きなのは今も昔も眞妃一人』

『……あつそ』

待つこと15分弱。ようやく入れた。かなり繁盛しているようだ。

「……ご注文をお伺いします」

眞妃の要望をかぐやに伝えたところ、その通りに早坂が俺と眞妃の相手をする事になった。

流石に別邸に居る時と完全に同じ格好をしているとは予想していなかったので、少し驚いている。

「俺は珈琲を。マキは？」

正直、珈琲よりほうじ茶や烏龍茶の方が好みだが、早坂が淹れる以上は珈琲にする。

「私も同じのを」

早坂が準備に取り掛かった。眞妃が男装のままいつもと同じような座り方をしているので、心臓がやたら飛び跳ねて仕方ない。

「楽しみだわ。四宮別邸の味」

「その内いつでも飲めるようになるけどな」

「……そうね」

今や眞妃とは秘密裏に交際中であり、半年以内に国中を混乱に陥らせる共犯者でもある。それもこれも二人で四宮の敷地や天下の往來を堂々と歩けるようにするため。

「あの娘って、ちゃんと珈琲淹れるの上手いの？」

前に早坂が職権濫用した際に俺がボロクソ言ったからか、眞妃は早坂の技量を疑っているらしい。

「ああ。早坂は珈琲に関しては間違いない。そういえば、俺が最初に飲んだ珈琲が早坂によるものだったな」

確か、初等部六年の冬。正月はゆつくり出来たので、本邸で羽を伸ばしていた時だ。

早坂が珈琲の腕が主人に出せるようなレベルになったと言うので、かぐやと部屋で二人して飲んだのだ。最初はその苦味に驚いたものの、品のある香りと喉越しに魅了された記憶がある。

「……よくもまあそんなこと覚えてますね」

意外と早く戻って来た早坂が風呂上がり時のような顔をして突っ立っていた。

眞妃は面白くなさそうだ。

「……ふん」

別邸にある珈琲豆は良質そのものだが、秀知院に置いてある豆も決して馬鹿に出来ない。何せ国寶に出される店のもの。

思えば早坂が淹れる珈琲は相当久々のような気がする。

「うん、前飲んだ時より美味しいな。ボーナス増やすよう掛け合つところか?」

もちろん、この場限りの冗談である。それは早坂も承知しているところ。

「……いえ、結構です」

「そうか。マキは早坂の腕をどう思う?」

「悪くないわね。これは例えるなら……そうね、愛の味といったところかしら?」

「まあ名前が名前だしな」

「そうじゃないわよ。不調法者。気付いてない?これがあなたの好みに合わせてあるって」

「……ならその珈琲、俺が貰うけど?」

場に沈黙が生まれた。

飲み終わった以上、長々しく居ても仕方ないので、レジでお勘定。チャージシュー麺くらいの値段だったので、文句を言う。

あの豆を使って早坂が淹れた珈琲なら、もっと取って然るべきだ。

「安過ぎない?」

「でもこれで採算採れるので……」





抱き締めるわけにはいかない。

一旦、ホテルに行くのも難しい。どこか二人きりになれる場所はないか思案する。すぐに脳裏に心当たりが浮かんだ。

『マキ、次はホラーハウスに行こう』

こうして一年A組とB組が合同で催したホラーハウスに突撃した。何故か男女別を指示する看板——風紀委員曰く、不純異性交遊の場ではないとのこと——があつたが、今の眞妃は男装中なので関係ない。

伊井野が俺を睨みつけるが、無視する。あの生徒会選挙は伊井野に對する大掛かりな授業のようなもの。むしろ感謝してほしいものだ。会長職の座に一度は上らせたわけだし。

伊井野の旧友で元子役の大仏こぼちが耳にコンプレックスを抱いているというチョコキ子女史に関する説明をしている。なんでも、人の綺麗な耳を切るという悪趣味をお持ちなんだとか。

眞妃が怖がっているの、手を繋ぐ。それを見た伊井野は意外とでも言いたげな表情をした。

チエキ子が現れたという体で掃除用具入れに二人で隠れさせられる。ヘッドホンとアイマスクを持たされて。どうやら立体音響を体験させるのが狙いのようだ。

だが、今はそんなことはどうでも良い。生真面目にヘッドホンを装着しようとする眞妃の手をそつと掴んだ。

「……ちよつと、何する気？」

「密室でやることなんて決まってる」

いつかの日のように唇と唇を合わせるキスをする。といつても、例

のポーズ以来、キス自体はほぼ毎日のようにしているわけだが。眞妃も乗り気になったらしい。互いに唇を相手の唇に押し当て、さらに互いの指を絡ませる。

唇で相手の唇を噛むようなキスに移行する。別に口同士のキスは指輪を渡したあの日以来、眞妃と色々したので問題ない。はむはむという擬音語がよく似合う音が響いているような気がした。

それからいよいよ互いの舌と舌を絡ませようとする。

コーヒーを飲んだ後のそうしたキスはやめた方が良いという話を聞いたことがあるが、有象無象ならともかく早坂が淹れたコーヒーならたぶん大丈夫だろう。

「あのお、まさかとは思いますが、何かありましたか……ツ!?!」

これからという時に伊井野が掃除用具入れのドアを開ける。想定よりかなり早い時間切れだった。

伊井野は頭を抱えた。大仏は空いた口が塞がらない様子。有名ジュエリーブランド社長の娘である小野寺は青褪めた顔で固まっている。

泣きそうな顔で伊井野は呟いた。

「え、これって……嘘。え？男同士？どうすればっ……」

俺と眞妃は逃避行のため、その場から駆け出す。

振り返って見ると、伊井野は崩れ落ちてぶつぶつ呟いていた。

[3]

奉心祭二日目の朝。学校中が騒然としていた。

遂に白銀もといArs・neが動き出した。アルサーヌ・ルパンというモーリスルプラン作の小説に出てくる怪盗から命名したと言っていた。

マスメディア部は学校中のハートの風船が一夜のうちに失われたと紙面で騒ぎ立てた。

藤原は自身に対する挑戦だと鼻息を荒くしている。

「大将。これって大将の仕業？」

翼が手持ちの校内新聞を指差しながら俺に質問した。

「……どうしてそう思った？」

「こういうのやりそうだし、実際出来そうだし……」

「残念、外れだ。俺ならルパンじゃなくて石川五右衛門から引用する」

翼だけでなく、真妃や藤原にマスメディア部にも疑われたが、同じような言い逃れで乗り切った。

「はあやだやだ。みんな疑っちゃって」

「自業自得よ」

「俺そんな表立ってやらかした記憶ないんだけどなあ」

「全く……それよりあんた何張り切って作ってんのよ」

「鳳凰。今日は母上が来るらしいから、あらかじめ作ってる」

父黄光は今回の文化祭は仕事で忙しく来れない。

四条の攻勢が強まっているのだ。家中では俺を海外に派遣するべきだという声も上がったが、父が俺に頼り切る訳にはいかないと思っただけで除けた。

うちのクラスはブルーノートで客を集めている。俺、真妃、白銀が上手さでスリートップだ。

白銀は最初一番下手だったのが、短期間のうちに上達してきた。本当に若いうちに首輪を繋げて置いて良かったと感じる。かぐやとの婚約を猛プッシュする理由の一つには奇貨を置く意味も含まれているのだ。

そして、シフトの時間。数人の護衛役を伴って母がやって来た。教室の前で出迎える。

「母上、お久しぶりです」

「ええ。鳳翔……あなた少し見ない間に何だかより一層大人になった気がします」

母は強しと言うが、A、B、Cの限りなくCに近いところまで行ったのが雰囲気から察しているのか。

どういう意味かは聞かず、すつとぼけることにする。

「はい、これからも精進して参ります。さあ、お手をお引き致します……実は母上にお渡しするものは既に作ってあるのです」

母の手を引いて教室内の椅子に座らせる。当然、珍しい画に同級生

の視線が集まった。

「ご覧ください。鳳凰を拵えました。お納めください」

両手を使って抱えなければならないほどの大きさのバルーンアートを手渡す。

「まあなんて立派な……出来ることならいつまでも飾っていたいぐらい」

そう言った母は側に控えている執事の一人にそれを渡して、車に運ぶよう指示する。

「あの人にもお土産として何か作ってはくださらないかしら」

「父上のことですか？……であれば、兜でも作りましょうか」

「それが良いでしょうね。あなたの手際を見てみたいわ」

父への土産は建前で、それが本命だったらしい。あらかじめ作っておくというのは失敗した。

俺が黙々と作ろうとしたところで母が口を開いた。

「あなた……ホテルに毎夜毎夜男の子を連れ込んでるって本当ですか？」

我が偉大なる母はおおよそクラスメイトの前で話すべきではないことを言い出した。教室中の正気を疑うような視線が俺に集まった。

「どこの誰がそのような話を……」

「言うはずないことは分かっているでしょう?」

まずは早坂の通報を疑う。しかし、「男の子」と母が言ったことからその線は消えた。かぐやも同様である。

支配人などホテル関係者の線も当然ながら浮かんだが、本家などに通じていないことは常日頃からこつそりと確認している。

「翔くんのお母さんですか?翔くん、昨日小中学生くらいの男の子とキスしてたって……」

藤原が首を突っ込んで余計なことを言い出した。おそらく伊井野が生徒会室で噂したんだろう。

不思議と校内で噂になっている様子はなかったが、今ので台無しだ。後で何故知らせなかったのか白銀やかぐやを問い詰めなければならぬ。

男装中の眞妃は確かに身長だけで言えば中一前後の男子相当だろうが、にしては可愛すぎるだろうとツツコミを入れたくなる。しかし、我慢だ。

あまりの言葉に母は絶句した。

昨日眞妃の男装を察していた柏木は凄い目で俺を見、白銀は呆然としている。翼は固まっております、眞妃は気まずい様子で明後日の方向を向いている。

風祭と豊崎は口を大きく開けていた。

「ほら、その……英雄色を好むと言いますし……」

いつそ開き直すことにした。眞妃が凄い形相でこちらの方向へ振





に至った。

「分かったぞ。それを聞いた校長が体育祭のときに父上に話した。俺に直接聞けない父上は帰った後で母上に愚痴を言う。それで母上が今日、俺を問い詰めた……という訳か」

「おそらく、それで合ってるでしょうね」

「なんて事だ……」

話が拗れた結果、俺は学園内でシヨタコンと言う噂が立っている。いや、物は考えようだ。これで男装中の真妃とホテル以外でも会いやすくなる。

俺はポジティブに考えた。

「それはそうと、マキさんにハートは渡したんですか？」

「ああ。昨日な」

俺からはキューピッド型たこ焼きを、真妃からは焼き鳥の出店で買った鶏ハツの串を贈り合ったのだ。既に交際中というか、二人の間では半分許嫁気分である以上は変に気取っても仕方ないということでした。

「何？まだシール貼れてないの？」

「隙を見て貼ろうとしたんですが、どうにも隙がなくて……」

「まあ焦らなくても良いんじゃないか。後夜祭の方がチャンスはあるように思われる」

そこまで言って俺とかぐやは校舎の方へ戻ろうとする。そこで妙なものを見た。

「つばめ先輩？」

「あつ、かぐやちゃんに四宮君！」

子安つばめがウジウジとした様子で体育座りをしている。らしくない光景だ。

「ねえ、二人とも結構モテるよね？」

ここで嘘を吐いても仕方ないので、かぐやと二人して肯定する。目的は恋愛相談らしい。

「どういう話？手短に願いたいんだけど」

流石に恋愛相談でシフトに穴を開け続けるのも気が引けるのだ。早く真妃のところへ帰りたい。

「……ゴメンね。ちよつと告白の断り方を知りたくて」

「好きな人の存在をでっち上げれば？」

ちなみに俺はずっと真妃が好きなので、でっち上げた経験というのは一度もない。

「……うくん。私、四宮君ほど嘘吐くの上手くないし……」

失礼なやつだと率直に思った。

罇が開かないので、やむを得ず詳しく話を聞くことにする。

何でも子安つばめに告白したという人は良い人ではあるのだが、彼女は今までそういう目で彼を全然見たことがなく、困惑しているらしい。

その告白は断れば今までの関係ではいられなくなるような熱烈なモノであつたらしい。告白される経験に富む子安つばめであっても、対応に苦慮しているのだとか。

「ちなみに、付き合ってしまうという選択肢は無いのですか？」

「付き合ったらきつと好きになっちゃやうでしょ？好きになったら私……相手のことしか見えなくなっちゃやうから体操の方がおぎなりになるの目に見えてるんだ」

子安つばめは続けて大学との微妙な距離の遠さやそれを理由にすることの体裁の悪さを挙げた。

「だから断るのは複合的な理由で……明確な理由が無いっていうか」

「……どうしてもその子と付き合えないから、断る理由が欲しいと？」

「そういう訳でもないんだけどね……」

俺は混乱した。かぐやが口を開いた。

「告白の断り方を知りたいんですよね？私はいつも『性欲に爛れた視線を向けるな。この浅ましい豚め』って言ってますよ」

「お前、甥の面前でそんな単語使うの止めろ」

「あら、失礼。でも、このぐらいバッサリ行った方が相手のためでしょ

う？変な気を持たすよりずっとマシです」

「まあ確かに……」

子安つばめはかぐやの言葉を聞いて思案している。決意を固めたようだ。

「かぐやちゃん……彼のケア、お願いしていいのかな？」

「え？ケア？誰が誰のケアをするんですか？」

「え？かぐやちゃんが優くんケアだけど……」

かぐやは固まった。

「先輩。一応、石上がどんな告白したかだけ聞かせてもらっても？」

子安つばめは話す。昨日、石上と一緒に学園祭を周ることになり、自クラスに連れて行ったという。その出し物にあった巨大なハートのクツキーを石上は見事に当てて、自分の気持ちだとして渡してきたのだと。

「先輩。その告白をされて断って良いのは、好きな人または配偶者やそれに準ずる人がいた場合。あるいは相手に根本的な欠陥がある場合だけだけど、このいずれかに該当箇所は？」

「ないけど……」

「なら受けるべきだ」

「そ、そうです。受けましょうー！」



俺の仕事の電話を四条の娘である自分が聞いてはいけないと思っているらしい。お可愛いことだ。

『いや、俺たちは一連托生なんだから構わない。いずれはマキに助言を乞う機会もあるかもしれないし』

俺はポケットから取り出した仕事用端末の画面を見る。

「……早坂あ？また何か面倒事か」

俺は応答ボタンをタップした。眞妃も耳をそばだてている。

「何事？……は？告白方法？……今デート中なんだけど……はあ。マキ、ちよつと寄り道して良い？」

『仕方ないわね』

二年の校舎へ戻り、その屋上の手前まで足を運んだ。かぐやと早坂が居たが、会話を盗み聞きされる可能性を鑑みる。マスターキーを使って屋上に出た。外は一段と寒い、まあ良い。

「で、何の用だって？」

聞けば、かぐやがいよいよ今日白銀に告白する決意を固めたらしい。白銀のスタンフォード大への飛び級による進学を聞いたのが切っ掛けだということだ。

「……知ってたんですか？会長がスタンフォードに行く件。あまり驚かれていますか？」

「一応、俺の父親がここの理事長だしな」

もちろん、シンパの教職員からの報告で聞いてはいた。しかし、白銀との食事会で聞いていたのもまた事実。

「で、告白の方法だったな。早坂、お前が何とかしろ」

「ここまで来てそんなこと言わないでください」

「仕方ねえな……かぐや、壁ダアンについて知っているか？」

「壁ドンですね。会長が柏木さんの彼氏にそれをアドバイスしたのは聞き及んでいます」

「お前がやれ。白銀が人にこれをアドバイスしたということは、白銀相手であつても有効だということだ」

俺が説明してやったところで、かぐやが文句を言う。

壁ドンは男性が女性にやって初めて有効になり得るものだし、何よりがぐやが白銀相手にやるには身長が足りない。

「鳳翔は眞妃さんどうやって付き合ってたんです？参考程度に」

一応、眞妃の認識においては初等部のキスから交際が続いているので、それを話すことになる。

「エモい雰囲気になったところで俺からマキにキスした。……真似するの？」

「参考程度と言ったはずですよ」







火を眺めるのも飽きてきたので、体育館から拝借したマットに二人で座り、備品の大きな毛布と一緒に包まっている。

「どうする？…この後ダンスやるらしいけど、俺たちも踊るか？」

「いいわ。こうしていると暖かいし……ねえ」

「……？」

俺が眞妃の方を向くと、眞妃の方からキスしてきた。眞妃はキスが好きらしい。俺も眞妃とのキスは好きだ。

昨日の掃除用具入れの時のように行為に拍車がかかる。今日は伊井野は居ないので、止める者は誰もいない。勢いづいてA、B、CのBまで行った。眞妃が嫌がる可能性もあったが、雰囲気酔っているのか文句を言わない。俺は調子に乗った。

「シテも良い？」

「……ちゃんとあるんでしょうね」

「抜かりなく」

「……初めて、なの？」

「……ごめん」

それを聞いた眞妃は俯き、顔に暗い影を落とした。

眞妃はキスの写真を見ただけだったが、俺が初等部の頃に貞操を奪

われていたことを察していたらしい。中等部の時のことは今度こそ絶対内緒だ。

だが、眞妃はすぐに顔を上げて笑って見せた。少し無理をしているのが伝わってくる。

「良いわ。私が上書きするから」

言葉にならないような時間を眞妃と過ごす。最初から眞妃が良かったとは口にしない。それは眞妃に言っただけではないような気がした。

開戦直後の眞妃は強気だったものの、結局は俺が終始優勢だった。他の分野の経験を組み合わせることによって初見の事物を攻略することを得意とする眞妃でも、この戦いにおいては組み合わせようがなかったらしい。

—— 本日の勝敗。 四条眞妃の敗北。

燃え尽きた眞妃に毛布を掛け、俺は少し黄昏れる。保健の授業によると、仮にピルと併用していたとしても避妊成功率は九十九パーセントしかないという話だ。

もしこれでデキたとして、約半年後の婚約まで無事に隠し通せるだろうか。いや、それでも婚約後数ヶ月以内には絶対バレる。

遺伝子検査をしなかった場合は四宮家の面子のためジ・エンド。いや、考えるべきは別。

遺伝子検査をして俺が父親であると明らかにしたとしよう。

そもそも婚約前からずっと敵同士の家だったのに、二人が男女の仲だったと知られたらどうだろう。吉と出るか凶と出るか。案外大丈夫な気がするが、楽観視はできない。

雰囲気は酔っていたのは俺だ。情けない。

——カチッ

!?

——ゴゴゴゴゴ

不味い。どういう因果か人が入ってくる。

眞妃の顔を含めた全身を毛布で隠し、俺はせめて腰あたりだけでも隠す。ティッシュに包んだゴムは……向こうにポイして、入ってきた三人に顔を向け手を挙げ挨拶をした。

「よ、よう」

そこに現れたのは藤原にマスメディア部のエースコンビだった。

藤原は絶句。紀は口をあんぐりと開けて巨勢は目が縦向きの棒になっっている。大声でキャーキャー叫ぶかと思っただが、入浴を覗かれがちなヒロインとは違うのか。いや、一周回って冷静になっているだけなのかもしれない。

「翔くんナニしてたの!?!午前中お母さんに程々について言われたばかりですよね!?!」

「……ちよつと雰囲気に酔っちゃって」

「鳳翔様……いい、いったいお相手は……!?!」

紀が全身を震わせて尋ねて来る。一応、藤原はかぐやの親友。紀巨

勢コンビは眞妃と仲良くしていた筈であり、さらには以前の尋問で全く口を割らなかつた実績持ち。

三人の口の堅さは折り紙付きと言って良い。

万一の時に遺伝子検査に持っていくためにも、証人は必要だ。

「誰にも言うなよ？ 大声も出さな」

三人揃って頷いたので、毛布を少し動かす。三人は声を掠らせて呟いた。

「マキ……」

「四条さん……!？」

「これで良かった……んでしょか？」

「分かったなら、そこ閉めてとつとと出て行ってくれ」

後日、噂が広まっている気配はなかつたので、結果オーライだった。

「……行つた？」

「起きてたのか」

眞妃は頷く。どうだったか聞いてきたので、最高と本心から言う。

ここしばらくで一番嬉しそうな表情を浮かべて眞妃は俺に身体を寄せてキスをした。

「4」

今でこそ彼にゾッコンな四条真妃であるが、その第一印象は別に良くも悪くも、ましてや普通だったわけでもない。変な子。ただそれだけが鮮烈に印象として刻み込まれていた。

真妃が彼を最初に目撃したのはさるパーティの会場のことである。耳の良い真妃は二人の大人のヒソヒソ話を聞きつけた。

「見ろ。あれが四宮グループの黄光の御子息、鳳翔だ」

「……あれが噂の？」

「ああ。パーティからいつもあの手この手で隠れたり酷い時には逃げ出したりするらしい。今日は一体どんな手口を使うのやら」

「はあ。四宮はあれで大丈夫なのか？」

「さあな。むしろ、こんだけ大人が居て無事隠れ切るのなら、意外と大した才能の持ち主なのかもしれないぞ」

（ふくん）

真妃は二人の視線の先をしてみる。そこに居たのはどこか影がありながらも綺麗な顔をした男の子。スタッフにドリンクのお代わりを要求している。

（まあ、良いわ。どうせあの叔母様と似たようなものでしょ）

真妃は彼の叔母であるかぐやと最初に話した時の経験を活かし、今度は自分から話しかけに行くような真似はしなかった。

以前は父真琴と一緒にパーティも楽しかったのだが、いつの頃からか真琴は娘の眞妃の前で四宮家への憎悪を隠さなくなってきた。眞妃はそんな父に失望とまでは行かないまでも、思うところがあつた。

(しっかし、今日もつまらないわね……お花摘みでも行こうかしら)

花摘み、言い換えればトイレに行くためパーティ会場となっている広い空間を出て廊下を歩く。外を見ればそれは見事な庭園だ。眞妃はつまらなさそうにそれを見た。

(……!?)

先程噂されていた彼が庭にある木に登り、枝に上着を被せてその上に寝そべる。まるで幼き日の一休宗純のようであつたが、眞妃にとつては到底理解の及ぶ行動ではなかつた。

(……まあ、良いわ。そのうち見つかるでしょう)

樂觀視していた眞妃であつたが、意外な事に彼が見つかつたのはパーティが終わつた頃であつた。大人たちはどこを探していたのだろうかと眞妃は呆れた。

見れば彼は頭から毛髪が消え去つた男の人——おそらく彼の父親だろう——に小突かれていた。だが、彼はすぐにその髪を撫でられ満足そうにしていた。眞妃は子供ながらに甘やかされてるなあと思つた。

初等部入学後にまた彼の姿を見た。彼は目が虚になっており、以前見た時に差していた影がより深くなつていた。しかし、校内テストの順位で眞妃が三位だったのに対して彼は常に一番を獲り続けていた。涼しい顔をして勉強、運動、音楽に通じており、自然男女を問わず人

気を獲得していた。

ある日また廊下で彼をチラツと見た時、眞妃は驚いた。明らかに彼は上機嫌で目が明るく輝いており、その姿は眩いばかりであった。

(あんな顔出来るんだ……)

そんな事が何回か続くと眞妃は彼の行動パターンを見破るようになっていた。彼は特定の曜日と同じ時間に特定の場所を移動しており、その時だけ彼はそのような姿を見せていた。

気になった眞妃がこっそり後を付けてみたところ、学校の敷地の隅で可愛い顔をしたどこか外国の血を感じさせる女の子と会っていた。

(案外、可愛いところもあるのね)

彼と会っていた子があのかぐやのお付きであることを眞妃が知ったのはさらには時は経過した頃のことである。

しかし、二年に進級した頃には既にそのような彼の姿を見ることは無くなっていた。眞妃は振られちゃったのねなんて勝手に思った。

それからかなり経った頃、眞妃は放課後になってしばらく過ぎても帰らない日があった。急いで帰らなきゃと思って廊下を歩くと、どこか挙動不審な彼の姿を目撃した。

(……?)

こんな時間になってまで何をやる気なのだと思った眞妃は彼の後を着けてみることにした。彼は塀沿いの木に登り、枝から塀の上に飛び移る。それから学校の外に去って行った。

私だつてと謎の対抗心を燃やして眞妃は不用心にもその後を追う。



尾行すること十分足らず、彼は神社の敷地へと入って行った。適性があつたのか尾行に優れていた眞妃はここまで来たのだからと彼が向かった場所にこっそり歩いて行った。もちろん、好奇心が手伝つてのことである。

(嘘っ……あの子、泣いてる!?)

眞妃は彼が涙を流すところなんて全く見たことがない。どちらかと言えば彼はどんなジャンルでもその圧倒的な実力で相手の子を負かす泣かせる側の人間だ。また、家族や親戚などの人間から散々四宮の悪い噂を耳にしてきた眞妃にとって、彼のする事なす事は予想外も良いところだった。思わず眞妃は彼の目の前に姿を表していた。

「情けないわね。それでも跡取り? 四宮もお終いな」

(……違う。私、泣いてる子になんてこと)

眞妃は訂正しようかと思つたが、彼は袖で涙を拭いてキツと睨んできた。

「お前、名前は?」

眞妃は目を据えて彼を見る。以前のパーティーで眞妃が大勢の出席者に紹介されていた時に居ただろうに。また、眞妃とて校内テストでは常に三位以内に入っている猛者だ。一番の子は二位以降の人間になど興味ないのかとカチンと来た。

「何よ。不調法者ね。私の名前は四条眞妃。あなたの親戚よ。あなたの名前は?」

分かつて聞いてたんだから、あんたも名乗りなさいという眞妃の意

凶を汲み取った彼は淡々短く、なれど一音一音噛み締めるようにして名乗った。

「四宮鳳翔」

睨み合った後で生来心優しい眞妃は話を聞いてあげようとした。最初彼は話すのを渋ったが、遂に根負けしてポツポツ話し始めた。

「お前も知ってるでしょ。俺の叔母のかぐや。あいつに何時も一緒にいた子を取られたんだ」

かぐやに取られたということとはつまり、彼は男の子が好きなのかなと思った。

「だったら奪い返せば良いじゃない」

「……無理だよ。父上が決めたことだから」

「あんた、その子のこと好きなの？」

「……好き、なのかな？うん、たぶんそう」

彼はそう言いながら涙声になりながら語り始めた。

「言ったんだよ。離れたくない。ずっと側に居て欲しいって。でも、聞き入れてはくれなかった。まあ、その後も時々話してくれてはいたからまだ良いんだけど……結局、あの子と親しくしちやダメって父上」

「そう」

彼は言う。お陰で家でも学校でもどこでもその子に対してぞんざいに振る舞わなければならなくなったと。そうしている内に彼自身その子がかぐや共々気に入らなくなっていったと言う。眞妃は四宮の子も苦勞してるなあと彼にどこか共感していた。

「あの子のき、かぐやがあげたらしいんだけど、アクセサリーを見ると心がざわつくんだ。それもあつてかな……いつも必要以上に刺々しくしちやつて」

それじゃダメよとこの時の色恋沙汰の経験がなかった眞妃は無責任に思った。

しかし、この子がこんなに話せる人とは知らなかった。それに意外と可愛い。普段は無表情で何でも完璧に熟すのに。そのギャップに眞妃は惹かれた。手を伸ばしながら誘うようにして彼に提案する。

「私が協力してあげる。私もあんたみたいにかぐやが気に入らないから」

その後、お互いの習い事の日程を確認して都合のつく曜日を一つ選んで、その日はここで会うことにした。幼い眞妃は学校であっても四宮の子が四条の子と大っぴらに話す訳にはいかないと思ったのだ。

彼とその子の進展具合を聞いて頭を捻っては彼にアドバイスし、時にはかぐやについてあれこれ言っていた。むしろ、いつの日かそちらがメインになっていた。

月日が流れたある日。眞妃は彼に言った。

「もう……その子のこと、諦めたら？」

ついに匙を投げた。内心、彼のその子への愛想は消えているように感じたからだ。しかし、それだともう彼とここで会う理由は無く

なる。少し、寂しさを感じた。学校やその他では二人は敵同士なのだ。

「そっか、うん。寂しくなるな」

彼の言葉を聞いて真妃の顔はパアツと綻んだ。この子もそう思っ  
てくれていたことが妙に嬉しい。

照れ臭くなつた真妃は少しいじらしい仕草をしながら言った。

「あんたが望むなら、またここで会ってあげても良いわよ」

これを聞いて彼が顔を綻ばせる。それはいつの日か時々真妃が目  
撃していた表情だった。

こんな事があつてから、逆に二人がここで顔を合わせる頻度は増え  
た。サインを取り決めて学校で密かにこれを交わし、互いの都合がつ  
く日は毎日ここで会うことになった。

この頃の真妃にはこの時間が何よりも楽しく思えた。かぐやにつ  
いてではなく、学校で起こったことについてあれこれ楽しく言い合っ  
ていた。進級して同じクラスになつてからはますます真妃は二人で  
会う事に背徳感混じりの楽しさを感じていた。

それを続けていたある日のこと。同じクラスである二人は四条と  
四宮で出席番号が連番となつているため、同じ日に日直をやるのだ  
が、その仕事のために二人一緒に職員室へと赴くこととなった。

彼は廊下に人気が感じられなかったのを良い事に、真妃に話しかけ  
てきた。慌てた真妃は静かにするよう急いで人差し指を口元にやつ  
た。

その日の放課後。

「良い？私とあんたの家は喧嘩中。あんな危ないことは絶対やめて」

真剣なつもりで言った真妃だったが、あろうことか彼は茶化した。

「俺とマキが結婚して喧嘩が収まれば良いのにな」

(何言ってるの!?!このバカ!!)

しかし、思いとは裏腹に身体中が熱くなっているのが真妃自身にも分かった。彼を散々に罵ることとその熱さを誤魔化した。

それから真妃は彼と顔を合わせたなり彼のことを考えたりすると、熱っぽさと早まる鼓動、さらには背中に電流が流れているかのような感覚を覚えるようになった。

それを誤魔化そうと彼に強く当たるが、彼は笑って受け流す。むしろ頭の良い彼に強い言葉を逆手に取られ、一本取られる始末だ。

真妃は悔しさを覚える一方で自身が恋に堕ちているのだと分かった。しかし、相手は家の者たちに良く思われていない四宮家の御曹司。大人になったら夜逃げでもして彼に匿ってもらおうかなどと考えることもあった。

そうこうするうちに、一年二年という子供にとっては長い年月が過ぎた。真妃には告白なんて無理なので、向こうからしてもらおうしかない。だが、そんな兆しは一向にない。

ある時、真妃が病気に罹って入院することがあった。真妃の病室に彼の友人である田沼翼が来た。学校で彼と翼が抱擁しているのを目撃した事がある真妃は彼を冷めた目で見た。翼は真妃の心を知らず、一冊のノートを携えていた。開けばそこには彼の字で見舞いの言葉が書かれていた。

顔も心も熱くなる。何より嬉しい。気丈にもつい本当のこととは違うことを書く。すぐ退院出来るから心配しなくて良いわよと。

ノートを受け取った翼は病室から去っていく。眞妃はそれを見てから病室から見える外の風景を見てため息をついた。世に言う恋煩いだ。

十分足らずで翼が戻って来た。ノートを開くと「嘘つくな」という文言の後に五七五七七の文字が書かれている。つまりは和歌だ。眞妃は目を丸くした。

(何これ)

百人一首のどれでもない。彼が自ら作った和歌だ。内容は簡単に言えば早く君に会いたい。思わず笑みを溢した眞妃は告白か何かかと思う一方で、やっぱり変わった人だと思った。

返事を書くころにも眞妃が和歌を詠んだ経験などないが、頭の中にある百人一首のそれらを組み合わせる新しい歌を作って書いた。

当然、バカじゃないのという文言を添えて。

なし崩し的に和歌のやり取りをするようになり、眞妃は病院で小学生ながらにして古文の勉強をする羽目になった。

その後、病院であの愚弟が彼相手にやらかすという事件があったものの、眞妃は無事に退院した。

眞妃の恋心は既に最高潮に達していた。様子がおかしいことに気付いた彼がもう一回入院したらと言ってきたので、眞妃は顔を真っ赤にして怒った。

(早く気付きなさいよ。このバカ)

そして、二人は初等部最終学年となる年度を迎えた。遂に違うクラスになった。いつもの密会を続けるとはいえ、やはり寂しさを感じた。

彼は学校で愛想こそ悪いものの、能力・家柄・容姿の三拍子が揃っているためか、女の子たちからえらくモテる。

(何これ……)

ファンクラブなんてものも出来てしまった。時には彼が告白されている場面に遭遇することもあった。

「あ……」

「つぶぶん、おじ様たら良かったじゃない。モテモテで」

慌てた真妃はあれこれ捲し立てて逃げ出した。しかし、すぐにこっそり戻って盗み聞きし始めた。

相手の子は可愛い顔して性格も彼にツンケンしてばかりの自分より全然良いと真妃自身思うような子だった。真妃はホロリと涙を流しそうになった。

「ごめん……俺、好きな子いるから」

彼は告白した子を振った。

「好きな子」とは誰だろうか。

彼の趣向を勘違いしている真妃は男子なら彼の親友の田沼翼が有力だろうと思った。

一方、彼が学校で特に親しくしている女子はいない。

強いて言うなら、かぐやだろうか。あんなに忌み嫌っていたのに、かぐやがクラスで孤立しつつあるのを見兼ねて話しかけたようだ。彼が眞妃にするようにかぐやを楽しませている。眞妃はかぐやに嫉妬した。

自分だったら良いなと思った。元はと言えば眞妃自身は彼の恋愛相談の相手だった。しかし、今や彼を好きでたまらない自分がいる。

(けど……ん?)

そもそも告白紛いの言葉を言われた事があつたじゃないかと眞妃は思い出した。

(仕方ないわね。彼にチャンスをあげようじゃない。向こうから告白して来たら、受けてあげなくもないわ)

終業式。これを逃せば一月以上もこのままだ。長期休暇中は彼と会うことはない。例の場所で眞妃は言う。

「ねえ。昔あんたが言った言葉。覚えてる?」

「どの言葉?」

それはそうだ。彼とは色んな話をしたから。明言するにあたって恥ずかしくなった眞妃は強い口調で言った。

「私とあんたが結婚したら、という話よ!」

彼は忘れる訳ないと真剣な表情で言った。眞妃は嬉しさと恥ずかしさで俯きながら言った。





ある気がした。

「四条眞妃様ですね。お渡ししたいものがございます」

見ず知らずの人に名前を知られている。眞妃は警戒つつも手渡された封筒を受け取った。気づけば謎の美女は目の前から消えていた。中に何が入っているのか、眞妃は開封して中身を見た。一枚の写真が入っていた。

(何、これ?)

途端、頭が真っ白になった。

それは眞妃の彼氏が知らない女とキスしてる写真だった。嘘だ。何かの間違いに違いない。そう強く思った。

「マキ!!」

彼が嬉しそうにやって来る。絶対彼も私と会うことを心待ちにしてくれていた筈だ。

だからこそ、彼を試さなければならぬ。

「この不調法者!!」

心臓を矛で突かれたかのような痛みと冷たさが眞妃を襲う。それでも眞妃は心を鬼にして写真を彼の足元に投げつけた。

「これは！何!?!」

嘘だと言って欲しい。人違いだと言って欲しい。眞妃は彼がそん

な言葉を発するのを待った。

「その、お祖父様が……」

現実是非情だった。

「っ、何でも良いわよー!」

眞妃は泣きそうになるのを我慢して捲し立てる。

「私は本気であんたのこと……もう知らないわ!あんたなんかと付き合おうじゃなかった!」

眞妃はその場を走り去った。

家に帰って自室のベッドに倒れ込む。

「グスグス、グス」

涙が止まらない。あんなに好きだったのに、裏切られた。その思いが眞妃を蝕んでいく。

日が沈んだ後になってもまだ泣いている。弟や帰って来た両親が心配して部屋に入ろうとしたがことごとく、追い出した。夕飯さえ抜いてしまった。

深夜になってようやく涙が枯れた。台所へ行くと、眞妃のために作ってくれておいたのか夜食が置いてあった。レンジで温めて食べる。惨めな気分で時折箸が止まった。

(どうして……あいつは)

考えても答えが出るはずなかった。

食べ進めているうちにふと疑問に思った。どうしてあの美女は眞妃の名前を知っていたのか、どうやって彼がキスしている写真を手に入れたのか。そして、それを眞妃に渡したのか。

「私たちが付き合っていたら都合が悪かった……？」

浮気の証拠写真があつて破局しないカップルなど早々いない。何が何でも別れさせたかったのだ。ならば、あの美女は一体何者なのか。

彼が眞妃と付き合っていると都合が悪い相手。彼が四宮の御曹司であることから考えるに、実は彼に許嫁がいてあの美女はその縁者だった。あるいは許嫁の席を狙う家の縁者であるとか。

それとも。

(四宮の手の者……?)

あの美女に覚えた既視感を探つて行く。誰かに似ている。昔見た誰かだ。

(……！叔母様のお付きに似てた)

かぐやのお付き、確か名前は早坂愛。彼女とどこか似ている。やはり。

(でも、彼が他の女とキスしてたことに――)

変わりはない。あの写真を思い出すだけで憂鬱になる。



彼は眞妃から目を逸らした。眞妃は途轍もない後悔に襲われた。自分が感情のままにバカなことをしたばかりに傷心中であろう彼に追い打ちをかけてしまった。そう深く自責の念に囚われた。

その翌日になつても、翌月になつても、彼は眞妃から目を逸らし続ける。次第にサインがなくても放課後暇な日はあの場所に居るようになった。彼が現れる筈もなく、眞妃は時計を見て渋々家路に着いた。帰ってから、自室で涙を流す日々が続いた。

パーティで彼の姿を見る。しかし、彼は眞妃には目もくれない。話しかけようとしても彼は上手いこと眞妃を避ける。仕方なく、かぐやと皮肉の応酬を繰り返した。かぐやの側にいる早坂を眞妃はキツと睨んだ。

その内、彼が祖父である四宮家総帥雁庵について方々に足を運んでいるという話を聞いた。疲労のせいか授業中に寝るようになったらしい。

それから、例の場所に足を運ぶことはなくなった。

ある日、眞妃は「契る」という行為についての情報を知ってしまった。眞妃の頭には彼の顔が浮かんだ。結婚してからの筈だが、もしかしたら。嫌な想像が頭にこびり付いては離れない。

後日、何時ものようにストーカーをしていた眞妃は彼が親友の翼とボーイズトークをしているのを聞いた。

「みんなやりたいヤリたい言うけど、実際そんな良いもんでもないよ」

いつ彼がそんなことを知ったのか眞妃だけには分かった。帰ってからいつもより激しく泣いた。

「大体さ、結婚前からそう言うのするのどうかと思うわ。付き合ったら大体みんなするらしいけど」

付き合ってるのに、真妃とそう言う事がない。ありもしない彼の不満が真妃には透けて見えた。なお、実際には彼が真妃に振られて現在交際状態にないと認識している事を真妃は知らない。

「翼はほんと気を付けろよ。一步間違えれば学生妊娠待ったなしだからな。どうしてもするならちゃんと避妊はしろ」

これが特大ブーメランとなる事を誰も予想していなかった。また、後に翼がやらかした際、彼はむしろ翼の手際を賞賛していた。

月日は流れる。

気付けば彼は学校の中で女子相手でも男子と同じように気安く話すようになった。俺様キャラになったというか、本当にこれがあの彼なのかと思った。それが彼が被ることにした社会性仮面であるのか時の流れと共に変質した結果なのかは定かではない。

ある日、猫被り中のかぐやのお付きや天才ピアニストに翔君と呼ばれているのを見た。真妃は私の彼氏に馴れ馴れしくしてんじやないわよと齒軋りした。

しかし、そう思ったところで現実変わるわけでもない。一生、真妃に思いを伝えた時のような彼を見る日は来ないかもしれない。このまま大人になって彼は父親あるいは雁庵に決められた結婚相手と添い遂げるのだろうか。真妃は悲観した。

あるいはもう彼女である真妃のことを忘れているのだろうかと思っただ。





いつものように肩を落として歩いている。このままでは彼を別の女に盗られかねない。昔彼が好意を寄せていたという男の子と同じように、既に愛想を尽かされているかもしれない。  
眞妃は絶望していた。

「マキ？」

すっかり声変わりした彼が眞妃の名を呼ぶ幻聴が聞こえる。振り返ってもそこには誰もいないはずだった。

「……………よっ」

眞妃に挨拶してくれる彼が居た。

「……………話すの、久しぶりだな」

最近の彼にしては珍しくまたいつかのように顔に影が差している。だが、こうして声を掛けてくれた。それだけでもう十分だと眞妃には思えた。

「……………何とか言ってくれよ。俺、お前に何て言ったら良いか」

どうせ四宮家には眞妃たちのことはバレている。もういつそ開き直って学校で話してしまおう。

「……………仕方ないわねっ!!」

眞妃は知らない。鳳翔がこの時大計の段取りを決めていたことを。一年もしないうちに海外へ去ってしまうことを。眞妃の苦悩はまだまだ続く。

[5]

文化祭が終わって二日後。後始末にひと段落着いたので、空き教室を使って俺は眞妃と一緒に白銀から直接の経過報告を受けていた。元々成功という話は通話アプリのメッセージで知ってはいたのだが。

「スタンフォード大と一緒に来い、か」

「……不味かったか？」

「白銀、聞くがそれはお前と一緒に飛び級でということか？」

「俺はそのつもりなんだが……」

「スタンフォード大進学までは後押し出来る。だが、飛び級は無理だ。仮にも四宮家総帥の娘が飛び級目的とはいえ秀知院を中退するのはいくらなんでも外聞が悪過ぎる」

結婚相手が決まっている状態であれば父黄光を説得するのは容易だ。だが、中退の話だけが広まって飛び級留学の話が今ひとつ広まりきらなかったときのことを思えば中退はあまりにリスクと言わざるを得ない。

名より実とはよく言ったものだが、だからと言って名の威力を侮つては破滅の元である。

「大体、何故前もって相談しない？お前は前にも伊井野が余計なことを言ったことを報告するのを怠ったことがあつたな。今はそこまでうるさく言うつもりはないが、四宮の縁者になれば怠慢一つで何千何万という人々に損失を与えることを忘れるな」

眞妃があんたが言うのかみたいなの視線を送ってきている気がする

が、それはまあ良い。

「……それで、告白は成功したんだよな？」

「そのことなんだが。……鳳翔、お前の最初のキスはどうだったんだ？」

聞かれたので、説明することにする。

蝉が囀し立てるのを忘れ、境内の奥の裏手で暑さのせいお互いに汗ばむ中……

「普通のチュウだったけど……何？白銀、あんたチュウしたの？良かったじゃない」

「……普通じゃなかったんだ」

白銀の言葉を聞いて俺たちは耳を疑う。かぐやの方から深い方のキスをかまされたと言うのだ。

もちろん、文化祭後の夜に早坂から掛かって来た電話で知ってはいる。かぐやにその異常性を聞かせてやれと言うので、懇切丁寧に説明してやった。

「まあ、映画か何かの影響だろうな。そこまで気にすることはない」

「……他にもある」

聞けば白銀は昨日かぐやに振り回されて散々な思いをしたらしい。

「キスなんて気分が乗れば誰とでもする。なんなら今してみますかって」

俺は即座に大笑いした。

「……何も笑うことないだろ」

「いやいや、これが笑わずにいられるか。白銀、お前まさかこんなあからさまな挑発を見抜けなかったとでも言うのか？」

「挑発？」

「言い換えれば、ウエルカムサインだな。眞妃はどう思う？」

「私も鳳翔と同意見だわ。強い言葉で本音を隠してるのよ。叔母様は白銀の方からキスして欲しいみたいね」

白銀は俺たちの言葉に目から鱗が落ちたようだった。この調子で大丈夫なのか不安になる。

「……じゃあ、めっちゃ不満を言いながら歩いてたのは？」

「その時のかぐやの言葉を思い出して状況含めて詳しく言ってみろ」

曰く、夜道を送っていったら指先が冷えると言いながらため息をついてみたり白銀の手が暖かそうだなと言ってきたりしたと言う。

「手を繋ぎたかっただけだろ。汲んでやれ」

「廊下で会ったら急に逃げ出したのは？」

「恥ずかしかっただけだろ。キスがやらかしたことを前夜に知恵袋から聞いて悟ったんだな」

後日、これが的外れな考察だったことを知るのはまた別の話。

「挨拶したら無視されたのは……」

「だから恥ずかしかったただけだろ。育ちが良く、利に聡いかぐやが知った者からの挨拶をそれ以外の理由で無視する筈がない」

自分の悩みをあつさり解決されたことに白銀は心より感じ入った。

「ま、私の彼氏なんだからこれぐらいは余裕よ」

「そうだ。白銀、お前もかぐやと添い遂げる気なら……分かるな？」

白銀は徹夜明けが丸わかりの目を精一杯見開いて、重々しく頷いた。

「さあ、かぐやのところに行ってこい。俺の心配りをゆめゆめ無駄にしてくれるなよ」

白銀が前途洋々とでも言いたげな背中を見せて去っていく。眞妃と目を合わせて互いに一笑した。

「マキ。この後クリスマスのことについて最後の話し合いたいんだが」

「良いわよ。ただ、あの弟が着いて来るって言って聞かないの」

「……帝か。まあ良い。それも織り込んでおこう」

四条帝。およそ一年半ぶりの再会はカテナチオの国でのことにな

りそうだ。

~~~~~

イタリア。四条家対策のため二泊三日でイタリア、フランス、イギリスを周るという名目でこの国に来ている。昼に着き、グループの拠点で現地滞在中の腹心と顔を合わせてからホテルに。一泊した後にはフランスに行くという観光もへったくれもない行動を予定している。

正直、今は海外であつてもオンラインを活用すればどうとでもなるのだが、一目直接己の眼で見たいという我が儘として押し通した。

自分でも少し無理があると思つているので、急ピッチで三ヶ国を周ることで誤魔化すしか無い。三日からはアメリカの方に顔を出す予定だ。

昼になり、複数の腹心たちと有名レストランで顔合わせ。近況の報告を受け、拠点に二時間弱滞在した後、時差ボケと明日明後日のための休息という名目でホテルへ向かう。

運転手——もちろん俺の息が掛かった人物——に本物の「真実の口」を見たいと気まぐれの体で言う。もちろん、疲れてないかなどと渋られたが、平気だと言つて向かわせる。

秀知院生十数名のフォロワーしかいない鍵アカウンントで「真実の口」と戦う宣言をツイートしてそのまま一眠り。起こされてから少しばかり歩いて目的地に到着した。

「あ」

「!？」

あくまでこれは偶然という体だ。

「帝お。お前もうすぐ大会なのに海外旅行？優勝は諦めたって解釈で良いのかな？ああ。仲良しごっこに飽きてサッカー留学でもする気か！成る程成る程」

「……んな嫌味言わなくても、お前と姉貴の企みは今分かったからもう良いぞ」

「はっ。つまんねえ奴」

四条帝。高校サッカーで無双中の通称ボーイファッカーだ。俺でさえフィールドプレイヤーとしては帝に及ばないのだ。高一の時に練習試合で2-0で勝ったが、それはゴールキーパーの俺の幾度のセーブからの大遠投を森と神童が活かしたからに過ぎない。

神童が居なかったらより悲惨なボール支配率になっていたであろうこと請け負いだ。

「にしても、姉貴とヨリ戻してたんだな。てつきり別れたものだ」と

「はあ？多少の冷却期間はあったけど、私たちはずっと一緒よ」

眞妃が帝のカマ掛けにあつきり引つ掛かったことにドン引きしながらも、こうなっては仕方ない。

「ああ、その通りだ。ちなみに帝の認識を詳しく聞かせてもらっても？」

帝によると、小六の夏休み明けに眞妃が泣いて帰ってきて食事も摂らなかったことがあったので、てつきり俺にフラれたものと思ってい





かぐやにとって四宮鳳翔という男は真の意味で兄であり真の意味で甥でもある。

話せば欲しかった答えが返ってくるし、ほとんど全てを完璧に熟す能力も申し分ない。白銀と会う前——といっても初等部の頃——はこの人と結婚できたら良かったのになどという今考えればこれ以上なく血迷ったことを考えていたこともあるほどだ。

しかし、今となつては違う。鳳翔はスペックの高さはそのままになり歪んだ性格破綻者へと変貌した。かぐやは鳳翔と真妃の恋仲という弱味を握っており、鳳翔もまたかぐやが白銀に深い好意を寄せているという弱味を握っている。両者の間柄は今や殺伐としたものと同化していた。

「鳳翔の協力を得た……」

白銀は肯定した。かぐやは半ば顔面蒼白といった具合になっている。

道理でプレゼントに字入れの扇子を贈って来たわけだ。かぐやが白銀の誕生日に贈ったものと同じものを字を変えて贈り返す。鳳翔らしい発想だ。

「その対価は……」

「俺の全てだ」

かぐやはすぐに悟った。それだけではないと。鳳翔は疑り深い。これ以上ない好意を寄せる真妃にさえ全幅の信頼を置いてはいないだろう。

「他には何かありませんでしたか？」

「……妹を援助すると言っていた」

白銀が鳳翔との話の流れで断れる筈もなく。

援助とは決して善意ゆえのものではない筈だ。白銀が裏切るようなことあれば援助は打ち切られ、圭に危険が及ぶに違いない。つまりは人質であり、白銀は首輪を繋がれた。このことは支援の話を持ち出された時の白銀も今のかぐやも察している。

こういう手段を平気で使う鳳翔は若輩ながら四宮家現総帥雁庵に劣らないほどに危険な人物だと言えた。

「だが、物は考えようだ。裏切りさえしなければ四宮とは引き裂かれない。鳳翔の庇護を受けて圭ちゃんの安全や暮らし向きは保証される」

そうであるから、白銀は秀知院入学当初の頃なら特に忌み嫌っていたであろうタイプの鳳翔に頭を下げる事ができるのだ。

「……」

かぐやは白銀の言葉をそうであるとも思うし、そうでないとも思う。鳳翔はかつて人との接し方に悩んでいたかぐやに人ではなく言葉を選べと言ったように、対人能力は間違いなくかぐや以上だ。

鳳翔がいなければ問答無用で二人が引き裂かれていた可能性も白銀が家族ごと破滅に追いやられていた可能性も否定できない。

だが、鳳翔は眞妃のためだと自分で勝手に考えれば暴走する癖がある。かぐやたちの学年並びに前後の学年のかつてないほどの退学者

数が良い例だ。

二人や圭の身を委ねるには少々危険な相手だろう。

家路についてからも、かぐやは思考を止めない。鳳翔ならどうにかして眞妃と結婚まで漕ぎ着けるような形を作るかもしれない。かぐやは鳳翔を言動はともかく、その能力自体は認めていた。

海外留学中に四宮の海外部門を掌握し拡大までさせるような男だ。かぐやから見ても異様としか言いようがない力を鳳翔は持っている。このままただ手をこまねいている筈がない。

かぐやの立場は以前より厳しく、鳳翔に頼らざるを得ない。ただでさえ三兄弟の家督争いが黄光の息子である鳳翔の台頭により終わったことで蝙蝠の真似事が出来なくなった。黄光がアテにならない以上はかぐやは鳳翔に全てを委ねるしかないが、慎重を期すべきであることに変わらない。

白銀との交際開始で浮かれて然るべきところだが、鳳翔が一枚噛んでいるとあってはそうもいられない。謎の好待遇に困惑しているかぐやは頭を捻る。これがどういう意図によるものなのか測り兼ねていた。

はい、そうですかと単純に乗るのはそれで危険だと思えた。

「はああああ」

しかし、どうすることもできない。どうしようもなくなってベッドに寝転がったかぐやはふと違和感を覚えた。

早坂の様子がおかしい。いつもなら白銀と付き合えたのにため息を吐いている訳を聞いて来ても良い筈。しかし、何も言わず、心ここに在らずといった様子だ。

「はあああああ」

試しにもう一度ため息を吐いてみるが、やはり何も言っただけ来ない。これは只事では無い。

「はあああああ」

「どうしたんですか。かぐや様。せっかく会長と付き合えたのにため息なんか吐いて。幸せが蜘蛛の子散らして逃げて行きますよ」

「あなたが何度も無視するからでしょう!?!……何かあったの?」

「いえ、何かというほどでも」

嘘だ。かぐやはすぐに勘づいた。いつも早坂に姉に対しているかのように甘えるかぐやではあるが、珍しく心ここに在らずといった様子の早坂の相談に乗っても良いかもしれない。

鳳翔の件について気を紛らわすためにもその方が良さそうな気がした。

「……本家の方と何かあったの?」

「いえ、そういう訳では」

まさかと思ったかぐやは質問する。

「なら、鳳翔と何か?」

「っ……」

ビンゴだ。かぐやは思い出す。かつてホテルで天ぷら片手に鳳翔



十二月二七日。文字通り精魂尽き果てて日本に戻って来た俺はホテルではなく珍しく別邸に戻っていた。掃除スキルがめきめき上がっている眞妃でも俺が数日何もせず過ごした部屋にはまだまだ分が悪いので、こうせざるを得ない。

計画が発動して人事はあらかた尽くした上、徹夜明け——ダメだダメだと思うと逆にやりたくなってしまう自分の性が恨めしい——でイタリアを出発してから一睡もせず正月までの仕事を片付けていたので、父のシンパや早坂などに見られて困るものはない。

部屋でぐっすり熟睡していた。

「若様。若様」

「……」

「……起きないと、襲いますよ？良いんですか？」

「……」

何故か三匹の猫が喧嘩する夢を見た後、部屋でけたたましく鳴った銅鑼の音に俺は飛び起きる。

「!?んな、何事!?!」

身体を起こして目を大きく見開くと、見知ったサイドポニーの金髪娘がお馴染みのメイド服を着てバチを片手に立っていた。

「若様。おはようございます」

「……早坂か。何の用だ？」

「もう良い時間です。起きてください」

時計を見ると、確かに普段なら二時間目ぐらいかと言うような時間だった。

「あのさ、時差ボケって知ってる？」

「知りません。ホットミルクはいかがですか？」

「飲む」

コルチゾールの分泌が抑制されては敵わないので、いくら早坂が居るからといって珈琲を寝起きに飲みはしない。早坂はちゃんと心得ている。

口元を白く染めた後で早坂に聞いた。

「今日は何？お前暇なの？わざわざ早坂が起こしに来るなんて珍しい」

「……珍しいと言うほどここに居ないじゃないですか」

早坂は俯きながら言った。冬なのに湿っぽい空気に居た堪れなくなる。

「……お前な」

「本邸から執事が派遣されてることはご存知でしょう？」

なるほど仕事を取られて暇なのかとなじる。しかし、早坂にあっさりあしらわれた。

「今日が特別なだけですけどね。これからかぐや様が会長とデートでするので、私も支度を。若様も早く準備してください」

「は!？」

「私一人では手が足りないので、若様もとかぐや様は仰せです。今年はまだもう仕事はしないと伺っております」

仕事を納めた件は昨日俺自身がかぐやに漏らしたのだから、まあ良い。かぐやのデートの成功は俺にとっても願ったり叶ったりだし、問題がある。

「俺の休みは?」

正直少なくともあと五時間くらいは寝たい。十時間寝ても良いくらいだ。

「全ては二人が円満に付き合うためです」

嘘だ。俺が屋敷にいては別邸の使用人トップの早坂が手を離せなくなるから、かぐやが俺を外に連れ出そうとしているに過ぎない。

であればこれは手下を貸すと言っても無駄かもしれないと悟った。

「お嫌でしたら、映画のチケットが余分にありますので眞妃様といかがですか?」

「あいつ今日は友達三人と一緒にご飯だと聞いているが?」

「……連絡取ってるんですか?」





は眩い光が鳳翔の後ろに差し込んでいるように感じられた。

いつかこの人は羽を広げ、どこか遠いところに飛び去ってしまうのではないか。そう思えた。

だけれど、早坂が青ダヌキのアニメを見るとそれに付き合ってくれたり、遊びは目を細めながら早坂を楽しませたりしてくれる。優しくて雄大で身を任せたくない理想の主人だった。

ほとんど何をやってもこの人は自分より遥かに上手くやる。ただ、メイドに求められるような能力は逆に早坂のボロ勝ちだったので、側付きとして支えられれば完璧だと思った。

大人になってもこの人に仕えられたら。

そう思っていた早坂に鳳翔の父である黄光から密命が下る。

鳳翔の同世代ではあるが叔母であるかぐやお嬢様の側付きに早坂はならなくてはいけなくなった。

それもかぐやについてのありとあらゆる情報を細大漏らさず黄光に伝えるという使命を帯びて。

そんな黄光の命令を知らない当時の鳳翔は早坂を引き留めた。鬼の目にも涙とは言いが、初めて鳳翔が涙で目を潤ませるところを見た。

声も震えている。

膝を屈して早坂の腕に手を置いてしがみつきながら嘆願してきた。

「嫌だっ……離れたくない……ずっと側に居て欲しい」

初めてこの人の弱いところを知った気がした。早坂は後ろ髪を引かれる思いこそあったが、かぐやの情報を黄光にもたらすことが巡り巡って鳳翔の為になると考えて断った。

しかし、かぐやはかぐやで良い主人であり、更に悪いことに早坂に

とって妹のような存在になっていった。

かぐやの情報を漏らすことに対して日に日に罪悪感が増していく。早坂は同じ屋敷に住む鳳翔の姿を見たり起床後や就寝前に以前彼と二人で撮った写真を眺めたりすることで心を強く持つようにしていた。

初等部入学当初はまだ良かった。休み時間に学校の誰にも見つからないようなところで鳳翔とこっそり会っていた。

黄光の密命自体を話すわけにはいかなかったが、鳳翔は優しく早坂の話を聞いてくれた。抱きしめてくれる。雪が降る中の七輪のように温かった。

だけど、どこから漏れたのか。早坂の上役であった使用人に厳しく注意された。嫡流の鳳翔でさえ異ならず、人目がないところでも仰々しく喋らなくてはならなくなった。

その頃の鳳翔が早坂を見る目は生き別れた家族を見る目のようだった。

だが、気付いた時には鳳翔はそのような目を早坂に向けることはなくなっていた。

代わりに敵対企業の令嬢でかぐやと仲の悪い四条真妃と話はずとも何やら親しげな雰囲気になっていたのが、エージェントとしての訓練を積み重ね、さらには鳳翔を最古の幼馴染として理解している早坂には感じられた。

その時には寂しさを覚えたと同時にその真妃に対して思うところがあった。

それから何年も経って鳳翔と真妃の仲に亀裂が走ったことを察したのもまた早坂だった。鳳翔が真妃からしきりに目を背ける。一方で真妃は無言ではありながらも必死に何かを鳳翔に伝えようとしているのが早坂に見てとれた。

この頃の鳳翔は既に女子たちからどこかサディステイックに気が

ある王子様として過剰に祭り上げられてファンクラブが結成されるようになっていた。

実際、鳳翔は親友の田沼翼の慌てふためく姿を見たいがために龍珠桃に喧嘩を売った実績持ちであった。

鳳翔が総帥雁庵から直々に薫陶を受けるようになり、あちこちに飛び回ることによる疲労のせいで授業中は眠るようになった頃のこと。

この時、鳳翔と早坂は同じクラスであった。教室移動のため鳳翔は起きなければならぬ。誰が起こすかファンたちの間で意見は割れた。普段は翼の役回りであるが、生憎日直の仕事のため不在だった。結果として男子たちや一部女子たちの呆れた視線虚しく、じゃんけんで勝った子が起こすことになった。

早坂は鳳翔を見る回数が多いことに目をつけられたのがきっかけでファンクラブ会員になっている。当然、参加する流れになった。わざと負ければ良かったのに、つい本気を出して勝ってしまった。この場にかぐやが居れば戸惑ったことだろう。

「四宮君。起きて〜」

擬態中のため、間の抜けた口調で鳳翔の身体を揺らす。ふと、幼い頃に夕食前に寝入った鳳翔を起こした時のことが思い出された。

ようやくまぶたを開けた鳳翔は寝ぼけていたのか、それとも遠巻きに見守るファンたちが目に入っていなかったのか大失策をかました。

「あ……早坂か。何事？」

擬態中の早坂に対しては普通の同級生として話すという決まりになっていたので、あろうことかそれを忘れたらしい。

放課後、ファンクラブ内で早坂に異端審問が行われたが、口八丁を

尽くして切り抜けた。後日、早坂は鳳翔に決まりについて口酸っぱく確認することになる。

なお、ファンクラブはそれから数日足らずで解散に追い込まれた。

## 補完編Ⅱ 早坂愛は耐えられない

「1」

秀知院学園高等部の生徒会が解散する直前。日が暮れて久しく、辺りはすっかり暗くなっている。そんな中、渋谷にある大型書店に併設された喫茶店のカウンター席に二人の男女が並んで座っていた。

「試しに私と付き合ってみない？ 勿論、私たち出会って間もないし、友達九割彼女一割っていうライトな感じでさ」

フィリス女学院の制服をその身に纏う早坂愛は王手をかけた。

早坂自体は秀知院学園に籍を置く身だが、白銀御行を落として四宮かぐやを分からせるためにわざわざ通販で入手したのだ。

何故このような状況になったのか。それは主人であるかぐやの数々の拙攻——かぐやは見舞い、花火大会、誕生日、月見などのイベントを経た今となっても白銀を落とすに至らなかった——をあげつらった早坂に対してかぐやが逆に煽りをかましたからである。

もちろん、早坂は言いたい放題で「よくも本当のこと言いやがったな、このヤロー」と言われても仕方の無いものだったが、かぐやの物言いは早坂にとっては地雷そのものであり、結果として取るに足らない意地の張り合いが始まった。

早坂はギャルとして学校に溶け込んでいる割に、未だ男と交際した経験がない。それでも、ネットで見ただけの様々な手練手管を用い、今ここに「断りずらい告白」を完成させる。

「白銀くんが好きなき子が出来たらその時はそっちに行って大丈夫なキープ的な感じの彼女でいいし」

二人の会話を近くの書棚で立ち読みするフリをしながら盗み聞きするかぐやは都合の良い女に自分からなりに行つた早坂に愕然とした。

早坂は概念の曖昧化——世のギャンブラーたちは半分このやり口のせいで多くの金を失う——によつて白銀を落とそうとしているのだ。

（お願い早坂！私が悪かつたから、もうやめ——）

かぐやは予想だにしていなかつた早坂の敏腕ぶりに観念した。よりによつて最大の信頼を寄せていた早坂に白銀を取られてしまう。

「ごめん。俺、好きな人がいるから」

早坂はあつけなく振られた。腹を据えた様子の白銀の横顔をジツと見てから俯いた。これから始めるのは事後処理である。精一杯の告白が空振りに終わった少女ハーサカの演技をしなければならぬ。

「そう……ですか」

鞆を肩にかけた早坂は席を立つ。

「その恋が実る事を私は陰ながら祈ってますよ」

見え透いた美麗字句を白銀に言い残してから店から出た早坂は心底安堵した様子のかぐやと合流する。幼い頃にかぐやから貰った髪飾りを付けて普段のサイドポニーに戻した。

「ほれ見たことですか！やっぱり会長は手強いでしょ！！早坂に会長を落とすなんて……」

「言っていないし……私、最初から一日で落とせるなんて言っていない」

小声で絞り出された早坂の負け惜しみのようにも取れる本音にかぐやは狼狽する。

そして、早坂はあれこれ捲し立て始めた。

「せめて一ヶ月あれば違ったし……凄く恥ずかしかったし、最初からやりたくなんてなかった!!でも、かぐや様がやれって言うからやったんだし!!」

地団駄を踏む早坂の大声に通り掛かった女子高生たちは何事かと目を向ける。かぐやは早坂に謝り倒すほかなかった。

~~~~~

午後十一時半過ぎ。自室にあるベッドに腰掛けながら早坂は本日最後の仕事を終えた。スマホを耳から離して、枕元に置く。

いくらかぐやが無茶苦茶な命令を下す主人であるとはいえ、早坂にとっては可愛い妹のような存在であることに変わりない。プライドの高さ、不器用さ、頭の良さあるいは悪さ……どれをとってもかぐやを守ってあげたいと心から思う要因となる。

そのかぐやの言動を彼女の長兄である黄光の一派に流していることに罪悪感を覚えずには居られなかったか、かぐやの白銀への好意を漏らさないのがせめてもの抵抗である。

「これも、全てはあの御方のため……だから、私は」

ベッドから立ち上がった早坂は机に飾られている小ぶりなフォト



フレームを手を取って見た。その写真に写っているのは幼い二名の男女。

左側にちよこんと肩を縮めて立っているのはかぐやの近侍になる以前の早坂だ。今のように髪を縛ってはおらず、ただ肩口付近まで真っ直ぐに伸ばしている。不器用ながら少し口元が緩んでおり、幸せそうな顔をしてるなど今の早坂は乾いた笑い混じりに思った。

そして、右側に写っているのは当時の早坂と同年代の男の子。この歳の子にしては長い髪はどこか鮮やかに赤く照り映えているようにも見え、まるで燃え盛っているかのような瞳が印象的な美童が三本指を構えて写っている。早坂はその手を写真の子の上に置きながら呟いた。

「……若様」

かぐやに張り合った結果、本日白銀を落としかかった早坂ではあるが、本当に彼女が落とした人間は別にいる。というより、早坂にとってはその人間しかあり得ない。いや、落とすたくとも落としてはいけない相手であるが。身分的にも任務的にも。

四宮鳳翔。黄光の長男にしてかぐやの甥。つまり、四宮家総帥雁庵の嫡孫である。

今年の春が終わる頃からずっと海外に留学しており、早坂が前に会ったのは正月の京都にある本邸でのことである。とはいえ、鳳翔はかぐやの誕生日を祝うべく、かぐやに割り当てられた部屋を少しばかり訪ねたのみで早坂とは一言も言葉を交わしていない。

しかし、かつての早坂は鳳翔とよく話していた。というより、早坂が同席しない習い事の数々やパーティに鳳翔が赴く時間や早坂が使用人としてのスキルアップに励んでいる時間を除けば、四六時中ずっと一緒に居たのだ。

「貴方のため、今日もやりました」

早坂は毎夜毎夜かぐやの情報を本家に流すことに「鳳翔のため」という免罪符を使っている。十年間ずっと。

——十年前、京都にある四宮本邸でのこと。

「いいかい、今日からお前の主人はかぐやだ。言う事をよく聞くように。そして、かぐやの信頼を勝ち取り、一挙一動を報告しろ」

本邸の廊下で早坂は鳳翔の父である黄光に命じられた。鼠となる事を。かぐやの情報を抜き出すには同年代かつ同性の早坂が適任だったのだ。

「友人関係、かぐやの起こした失敗、苦手なもの、何をされたら嫌がるか、好きな人、興味を示したものの、失いたくないもの、大事なもの、分かるな?」

早坂は戸惑った。ずっと鳳翔に仕えられたらと願っていたし、きつとそうなるだろうと思っていた。それが今になって鳳翔と同学年の叔母であるかぐやに仕えるようにと黄光は言う。

「これも全ては鳳翔のためだ。お前がもたらすかぐやの情報があの子の助けとなる」

総帥雁庵の長男である黄光は当時から四宮家の次を担うと目されていた。ただし、それは確実とまでは言い切れない。雁庵の次男青龍や三男雲鷹が己の利得に目が眩んで反旗を翻さない保証はどこにもなく、長女かぐやの情報は黄光の家督継承を十全のものとするために必要である事は幼い早坂にも分かっていた。そして、鳳翔がいつの日か家督を継ぐためにはその父黄光の家督継承が必要であったことは

言うまでもない。

眩しいあの人の顔を思い出した早坂に残された選択肢は一つしかなかった。

「畏まりました。旦那様」

彼にかぐやの近侍となる旨を伝えると引き止められたが、決意を固めた早坂がどう答えたかは言うまでも無い。

東京に移動し、かぐやと顔合わせをする。

「本日より身の回りのお世話をさせて頂きます。早坂愛です。宜しくお願ひします」

頭を下げた早坂はチラツとかぐやの方を見る。本当はあの人に仕えたかったと思いつながら。そんな早坂の胸の内を知らないかぐやは一瞬で顔を綻ばせた。

「嬉しいわ！そうだったら良いのにつてずっと思ってたの！赤ん坊の頃、私達は一緒に育ったのよ？覚えてる？」

「いえ……」

「私はずっと覚えていたわ。よろしくね。早坂」

生まれた頃の記憶を平然と話すかぐやに早坂は困惑した。早坂にとっては彼こそが物心付いた時から一緒に居る存在である。土足で家に踏み入られたような気分だった。

こうして早坂にとって幸せそのものであった時代は終わりを迎え、

厳冬のような日々が始まった。まだ人と関わることに躊躇いを覚えていなかったかぐやの純粹さを知るにつけ、罪悪感が増していく。秀知院に通うため東京にある別邸へ引っ越して来た彼の姿を見る事が早坂の精神の拠り所となっていた。

ある日のこと。早坂が別邸の庭で黄昏ていると、椅子に座るかぐやが声を掛けてきた。

「早坂、あやとりは出来る？」

「いえ……」

「教えてあげるわ」

そんなかぐやの誘いを早坂は丁重に断った。すると、かぐやは敷地の隅にあるプールで水練に励んでいた鳳翔に絡みに行った。彼は彼専属の上級使用人から手渡されたタオルで手を拭き、かぐやと一緒にあやとりをする。早坂はそんな奇妙な絵面をジッと見ていた。

後日。

「鳳翔、あのねあのね——」

かぐやは彼と一緒に食事を摂る。その席でかぐやは彼にあれこれ話しかけるのだ。早坂は使用人であるため、ルール上その空間に混ざることが出来ない。心臓をギュツと握られ、頭に異物を突っ込まれているかのような痛みを感じた。

別の日。

「鳳翔、一緒にバイオリンの練習をしましょう？」

二人は一部の稽古あるいはレッスンを同じ時間に受ける。かぐやが鳳翔とのコミュニケーションの道具としてそれを利用するのは道理である。練習する二人の近くを通りがかつた早坂は彼の音色の方が綺麗だと思った。

またある時。

「四宮の人間たるもの。人を頼ってはなりません。人を使い、人を操り、必要であれば切り捨てねばなりません」

かぐやの近侍として閉鎖された空間で彼女が受ける帝王学の授業を早坂も一緒に受ける。なお、彼は同席しない。それどころか嫡流の男子であるにも関わらず、この手の授業は受けていないと言う。指南役が発するあまりに惨たらしい内容に涙が溢れた。

心の中で彼に助けると叫んだ。大人が振るう鞭を華麗に避ける彼ならと思うが、早坂が幾ら願ったところで彼は現れない。それもそのはず。彼は今、専属の執事や一部の使用人たちと一緒にゴルフに出掛けているのだ。

「気持ち表情に出してはなりません。礼儀作法の笑みならば兎も角、怒りや悲しみを顔に出してはなりません。泣くなどもっての外です」

涙を手で拭う早坂と異なり、隣のかぐやは無表情で淡々と鞭を持つ指南役の話を聞いていた。

さらに別の日。早坂は本邸近くの山にある池の栈橋の上でかぐやと二人きりで話していた。

「これ、街に出た時買ったの。早坂に似合うと思って。貰ってくれる

？」

早坂は渡されたシユシユをおずおずと受け取った。それから、かぐや話は話し始めた。

「お仕事で構わないわ。私の側に居て。私には味方が居ない。一人は怖い……」

あの人はどうしたんだと思った早坂だったが、彼がまるで兄に甘えるかのように接するかぐやを受け止めているようできて、胸の内では鬱陶しがっていることをかぐやも薄々察しているのだと勘付いた。

シユシユをマジマジと見つめる早坂は決意した。

「お仕事なら……」

シユシユで左サイドの髪を束ねる。

「畏まりました。かぐや様」

その表情は後に言う対四宮家用早坂愛のそれだった。

かぐやに連れ添って本邸に戻る。時を同じくして帰省していた彼と廊下で会った。彼は目敏く早坂が髪につけたシユシユに気付いてほんの少しだけ目尻を下げながら尋ねてきた。

「それ、お母さんに？」

「……いえ。かぐや様より頂きました」

途端、早坂は彼の顔が僅かに険しくなったことに気が付いた。

「ふくん。そっか」

微妙そうな反応を隠そうとして隠し切れていない。彼はつまらなさそうに自室へと戻って行った。あまり似合っていないのかなと内心残念がった早坂だったが、これで彼に貢献出来るのならと気持ちを新たにした。

時が流れて三学期になったある日、早坂は上役に注意された。

「若君と学校でこっそり会っていたそうですね？」

確かに、昼休みなど敷地の奥で会っていた。そこならまず大丈夫だろうと思っていたのだが。顔面蒼白になって固まった早坂にその上役は叱咤の言葉を与える。

「これからはそのような事がないように。若君とは距離を起きなさい。自らに課せられた使命を思い出すことです。それが、彼のためですよ」

「……畏まりました」

彼も同様に注意されたらしく、早坂への言葉は刺々しさを増す一方だった。例えば、他の誰もいない別邸の廊下で会った時のこと。

(……なら……)

大丈夫。そう思って彼に近づいた矢先。

「邪魔」

「……えっ、あ」





年月が流れ、かぐやが人との接し方に悩めるようになってから大分経った頃。

早坂の心の中ではそんなかぐやに対して不器用な妹に向けるような親愛が芽生え始めていた。

学校において早坂が別邸で住み込みで働いていることは秘密である。

ゆえに、同学年の生徒として良くも悪くも不自然にならない程度には彼と口を聞くことが出来る。それが早坂にとっては不幸中の幸いだった。

かぐやの修学をサポートするため校内の生徒たちの様子を調べる早坂はある時、彼が毎日図書室に足を運んでいることに気付いた。早坂はそこで話すぐらいなら良いだろうと思いつて足を運んだ。使用人であることは秘密だが、四宮グループ幹部の娘である事は学校で公になっていく。総帥の孫と幹部の娘が話したぐらいで不思議に思われる事はない。早坂の足取りは軽かった。

(……居た)

学校では寡黙を貫いている彼が良家の子女が集まっている割にはうるさいクラスの喧騒から離れてここに来るのは考えてみれば不思議な事ではなかった。遠目に見ると、彼は『蹇蹇録』なる本を読んでいる。早坂は明るい女子が寡黙な男子に読んでいる小難しい本の内容を聞くくらいごくありふれたものだろうと思いつながら近付いた。

(あつ……)

彼が席を立った。もしかして、自分の接近に勘付いて避けたのだから

うかと俯きながら悲観する。早坂は既にエーゼントとしての技能訓練を受けており、隠密にはそれなりに自信があったのだが、多才な彼の事だ。訓練を受けた早坂の気配に気付いたとしてもおかしくはないだろう。早坂が逡巡している間に彼は奥の書棚の目前に移動していた。静かにされど急いで彼の後を追った。

「……嘘」

衝撃的な光景に目を見開き、小さな声が口から漏れた。一見、彼は本を書棚に戻しただけ。しかし、四宮家の武力の一端を担う早坂家の娘だからこそ分かる事があった。彼は一瞬、左手で薬指を強調するような仕草を見せた。そして、その先に居たのは――

(四条、眞妃……様)

髪を二つ結びにする可憐な少女。家柄、才覚ともにかぐやと同等クラスであり、秀知院学園の生徒を見渡してもかぐやと比肩出来る女子は彼女ぐらい。確かに、それだけなら四宮グループ嫡流の男子のお相手として申し分ないように見える。

たった一つの、されどあまりに大きな問題を除いて。

(ロミジュリった……ってこと?)

生憎、眞妃の実家である四条家は数十年前、四宮家中からその過激な拡大方針に反発する人々が分裂して出来た家であり、両家の対立は根深い。だが、目の前では四宮家の御曹司と四条家の令嬢が言葉は交わさずとも親しげにしている様子である。

早坂は図書室からフラフラと立ち去り、一年生の頃に彼とこっさり会っていた学校奥の敷地に足を運んだ。辿り着くや否やうづくまり、

ポロポロと涙を流した。かつてない程に心が痛むのを感じる。彼がほんの一瞬だけ眞妃に向けた表情を早坂は見逃さなかった。あれは、かつて早坂自身に向けられていた表情だ。辛くて、悲しくて仕方がなかった。

(なんで、なんで……)

溢れて止まらない涙を何回も何回も袖で拭こうとする。自分が必死に罪悪感を押し殺してかぐやの情報を本家に流していたのはそれが巡り巡って彼のためになると思っただからだ。その先にはまた彼と一緒に過ごせる未来があると思っていた。

そうであるのに、彼はそんな早坂の心の内を知らず、よりにもよって四条家の令嬢とよろしくしていた。今の早坂はやり切れない思いでいっぱいだった。

(どうすれば良いんだろう)

幾ら早坂でも泣き続けていれば涙は枯れる。頭を冷やして考えた。これを本家に伝えるべきかどうか。早坂に与えられた密命はあくまでもかぐやの監視であって鳳翔への監視は含まれていない。それでも、本来なら越権行為であろうと伝えるべき重大な事案である。だが

(そんなこと……出来ない)

確かに、彼と眞妃との仲を本家に密告すれば二人は間違いなく引き裂かれるだろう。しかし、早坂にはそんな汚い真似は出来なかった。かぐやに仕える前、なかなか母と会う事が叶わなかった寂しさを埋めてくれたのは他ならぬ彼だった。たとえ彼が早坂を裏切ろうと、早坂は彼を裏切りたくない。

早坂は天を見上げて呟いた。

「ああ。私、あの人の事がどうしようもなく好きなんだ……」

彼と眞妃が破局したことを察したのはそれから数年後のことだった。

「幕間」

時が経つにつれて朧げな記憶となりつつある幼さゆえに低い目線から見えていた在りし日の四宮本邸。そこからそれなりに歩いた先に目的の小屋があると顔にあどけなさが多分に残った彼は言う。

「ほ、本当にこっち？」

髪を肩口付近まで伸ばした早坂の問いに彼は余裕のある笑みを零した。

「そ。あとちょっと。ほら」

「あつ……」

今なら望むべくもない彼との手繋ぎ。彼は早坂の手を引いて地面に落ちている木の葉や枝を踏み鳴らしながら歩いて行く。ようやく彼は遠目に見えるその小屋を指差した。

「見てみる。あれだ。山の中を走り回ってて見つけたんだ。鍵もかかって無い。作ったやつはよっぽど不用心らしい」

「……だからって勝手に入っちゃダメなんじゃ」

「鍵がかかってないって事は誰でも入って良いってこと。それに、ここら辺の土地に俺が入っちゃダメなところなんてどこにもない」

彼の勝手な物言いに溜め息を吐いた早坂は小屋に向かって歩きながら繋がれた手を見る。振り返って不思議そうな目を向ける彼に早坂は顔を綻ばせた。

——ジリリリリリ……

彼がその小屋の扉を開けたところで早坂は夢から醒めた。冷え切ったその眼からは涙が流れている。

(やっぱり夢か……)

時々、幸せだったあの日々を夢に見る。しかし、朝起きてみれば肌寒い現実が早坂を待っていた。

早朝六時。

メイド服への着替えと小学校高学年の女子としては少し派手気味な化粧を終えた早坂は自室を出た。髪型は何時ものサイドポニーである。

「おはようございます」

他の部屋から出てきた別の使用人たちに挨拶する。既に早坂がこの別邸にやって来た時から少なくない年月が過ぎている。シルバーの曇りといった一つのミスですぐさまクビを通告されるこの四宮別邸に住み込みで勤める使用人たちの面子はだいたい入れ替わっていた。ずっと歳上の使用人に頭を下げられるこの奇怪な状況に疲れを感じないわけではない。だが、それでも続けた甲斐あって良い加減もう慣れた。

「おはようございます。ご存じの通り、本日は秀知院初等部の運動会が行われ、その観覧のため黄光様ご夫妻が上京なさいます。重要なのはお二人が今夜はこちらでお泊まりになるということ。より一層、気を引き締めて参りましょう」

早坂ら使用人たちに指示を下すのは彼の専属執事。別邸唯一の上級使用人として、使用人たちの統率ならびに来客対応のための諸事その他を任されている。

(良いなあ……)

別に使用人の管轄をすることが羨ましいのではない。

問題はその執事が毎日彼の着替えその他の手伝いをする事。

(昔は私がやってたのに)

慌ただしく廊下の掃除を終えた早坂はそう思いながらかぐやの部屋を開ける。

時刻は七時過ぎ。

ベッドの上で半身だけ起き上がっていたかぐやは早坂に目を向けた。

「あら、今日はいつもより少し早いんじゃない？」

もう起きている。

澄ました顔をしている割に、存外楽しみにしているのだろうか。早坂は仕事として味方するべきかぐやの世話を今日もする。

~~~~~

早坂は一緒の車に乗って登校する二人を見送ってから急いで朝食であるサンドイッチを口に詰め込み、初等部の制服に着替えた。それから二人を学校前で降ろしてＵターンして来た車に乗せられて登校

する。

女子更衣室で体育着に着替え、純白の鉢巻を自身の頭に巻き付けた。実のところ、今日の早坂は内心浮かれている。マザーコンプレックスを患って久しい早坂にとつて母奈央が来るといふのは朗報だ。しかも、今日は体育祭が終われば後は完全に休みで母と久々の夕食を楽しめる。寿司を何貫食べようか今から皮算用を働かせていた。

午前の競技である大玉転がしと学年別の徒競走が終わり、早坂は母を探している。今年は大丈夫な筈だ。これまで何回か急の仕事でパスになったことはあったが、それならメールが来ている筈である。早坂は母の姿を探しにあちこち探し回った。

途中、眞妃は彼が父親の黄光に褒めちぎられている場面に出くわした。

(うわあ……)

見れば彼の父親である黄光が休みなのを良いことに、真昼間から外で日本酒を飲んで顔を赤くし、徒競走で二位に大差をつけて勝利した彼の頭を掻き回している。彼は常々父親のように将来禿げるのではと危惧しており、髪にダメージが行きかねない黄光の振る舞いに表面き笑みを浮かべつつもどこか怒っているように感じられる。不本意ながら、十年も彼を見続けて来た早坂はそういう雰囲気分かるようになっていた。

「かぐやも……まあ頑張ったじゃないか。来年期待してるぞ」

黄光の言葉を遠くから聞く早坂は複雑な気分だった。かぐやはあろう事か徒競走でこの間まで入院していた眞妃に土をつけられたのだ。以前、常に完璧な成果を出していた彼が小テストで一度だけ眞妃



に負けた時はそれを知った者たちの間に動揺が走ったが、かぐやの場合は少なくとも黄光にとつては問題にならないらしい。

当時早坂は内心彼がわざと眞妃に惜敗したのではと疑った。とはいえそのテストでは眞妃が彼とかぐやを同時に撃破する結果だったために、早坂の中でその疑いはすぐに晴れていたのだが。

気を取り直した早坂が母を探しに行った一方で、黄光は二人に言う。

「昼食は外のリムジンで食べようじゃないか。行くぞ。母さんが待っているしな」

「はい。父上」

黄光は二人を連れて校外に出ようとする。途中すれ違った男を見てその表情が険しくなった。

「お、四条じゃないか。最近見ねえと思ったらこんなところほつつき歩いてたのか」

黄光に声を掛けられた俳優のように整った顔立ちの男性は黄光を睨んで淡々と口を開いた。

「私がどこをどう動こうが私の自由。娘と会うのを諒られる謂れはない」

「いや、そこまで言っただろが……」

黄光にその過剰な反応ぶりを戸惑われている男こそ、四条真琴。つまり、眞妃の父親である。

「パパ！」

眞妃が父親の登場に心躍らせた様子で走って来る。だが、すぐに状況に気が付いた。かぐやだけでなく鳳翔に父親をパパ呼ばわりしているところを見られたのだ。眞妃は羞恥したのか顔を真っ赤に染めて口元をパクパクさせた。

頭が日光によって光り輝く黄光は四条の小娘の慌ただしい表情の変化を訝しみ、かぐやは珍しい物を見たとしても言いたげな表情だ。

一方の鳳翔は――

(……下種。所詮は婿養子であることを鼻にかけただけの取るに足らない匹夫。四条は使用人を大して使わないと聞くぐらいだ。どうせやれ娘だやれ子育てのためだとあれこれ言い訳並べてて見てはいけないものを見、触ってはいけなところを触ったんだろう？セクハラ親父め。ゆめゆめ穏やかな老後を過ごせると思うなよ)

そんな鳳翔のドス黒く染まった気持ち悪い事この上ない心の内を知らない眞妃は口撃を開始した。

「こんなところで三人仲良く何をなさっているのかしら。おじ様方。」

眞妃の物言いに鳳翔は黄光と顔を見合わせる。パーティの席で偽装のため眞妃と言い争いをする際におじ様呼びされることはあつたが、ここでは自身と父親のどちらを指しているかはつきり分からなかったのだ。

「かぐや。あいつの言うおじ様って俺のことか？」

「いや、俺かもしれないねえ」

「はあ……どっちでも良いでしょう。行きますよ」

呆れて溜め息を吐いたかぐやに諭された二人は揃って歩いて行く。それを見る真琴は悪名高い四宮らしからぬ振る舞いの三人に呆気に取られた様子である。だが、次第に頭の中で整理がついたのか真妃の手を引いて親子連れで賑わう体育館の方へと向かおうと――

「お父さん。手を離して」

「え」

今この時、真妃の反抗期の火蓋が切って落とされた。

~~~~~

常人離れした身体能力を持つ早坂は任務を円滑に進めるべく、学校では滅多なことがない限りその片鱗を見せることはない。それでも今年の運動会に關しては何が何でも最終競技である選抜リレーに入ろうと少しでも本気を出した。

初等部のリレーは年齢的にまだ性差が大して付いていないため、男女混合で行われる。赤組の方で彼と真妃が同時に選抜されたのだ。彼は赤組での協議の末、最上級生を含む野球勢やバスケット勢の快速組を押し退けてのアンカーである。

他の女子たちが財力や顔・能力だけ見て彼にキャーキャー言う分には早坂は一向に構わない。彼女たちがマトモに相手されることはないからだ。それについては早坂ですら断言出来る。

問題は真妃である。病み上がりの身体で先程、本来は彼を除く大抵の男子に走力でも圧勝出来るかぐやを制するまでに至ったという事

は相当な努力をしたに違いない。早坂は眞妃の努力に嘆息はするものの、やはり面白くない。昼休憩の際には上機嫌だった早坂だったが、今はそもいれらなかつた。

(衆人環視で二人が仲良くしないよう、私が側で見張らなきや。私が居たら二人も変な行動はしない筈)

早坂は以前のパーティにおいて眞妃に目を付けられたことがある。二人の仲を知る早坂は眞妃がかぐやの近侍で彼と同じ屋敷に住んでいる自分に警戒心を持っているのだろうと推察していた。

——パンツツ!!

スターターピストルの音を合図に第一走者の早坂は走り出す。赤組の下級生である顔がパツとしない男子を顧みることなく、圧倒的ではあるが異様ではない絶妙なスピードで次に繋いだ。

(……っ!!)

少し肩で息しながら俯いて扼腕する早坂の顔は晴れない。先程走りながらほんの一瞬だけ彼の姿を見たのだ。

彼は身体をほぐしながら早坂には目もくれず、観覧席に居る黄光らからは見えないよう眞妃の方に視線を向けていた。しかも白組のアンカーを見るフリをしながらだ。

あまりにも眞妃ばかりを慮る彼に少しぐらい自分を見てくれても良いじゃないかと早坂は不満だった。

「おじ様。何か私に掛ける言葉はないのかしら？」

黄光や真琴らが遠くから見る中で突然話しかけて来た眞妃に鳳翔は目をパチクリさせる。後で黄光やかぐやに何と言おうか勘定しな

がら言葉を絞り出した。

「……そのおじ様呼び何なの？」

「違うでしょ……まあ、良いわ。だって——」

素知らぬ振りで友達と話しながら聞き耳を立て片方の目で注意を払う早坂は眞妃が彼に口パクで言った言葉に目を見開いた。それを知らない眞妃は何事も無かったかのように咳をして偽の続きを言う。

「あんたが本気出すまでもないわ。見てなさい」

「……そうする。早く行ったら？」

得意げな顔で走路へと向かう眞妃を見ながら彼は肩を竦めた。

やり取りの一部を聞いていた男子が尋ねる。今年になって始まった彼のサッカーの練習に付き合わされている被害者の会の一人だ。

「四宮で四条さんと仲良いのか？」

「今のどこをどう切り取ったらそうなるんだ？ 浅間山が火を噴くとかそういう事が起こらない限りそんな奇妙な事態にはならねえよ」

「……もし起こったら？」

「なるかもしれないし、ならないかもしれない」

「何だそれ」

冗談だと少しばかり笑ってから、彼は男子に目を合わせる。遠目から見る早坂はそれが何かしらのテストだと感じ取った。

「……お前。四宮家と四条家の関係知らない系？」

「いや、父さんがそれらしいこと言ってた気がする」

「そっか。なら一つ言っとく。長生きしたいなら変な話に首を突っ込まない方が良い。四条家が烈火のごとく怒ってお前を消しに来るぞ」

「四条家？四宮家じゃなくてか」

彼は良い質問だと微笑みながら男子に言う。

「流石に同級生を消されたら寝覚めが悪いからな。四宮家の方はある程度庇ってやる。ある程度な」

「おーい、四宮！アンカーそろそろだぞ！」

「今行く！」

顔を僅かに青くした男子の肩をポンッと叩いて彼は走路の方へと向かって行った。

グラウンドが生徒たちの喧騒に溢れる中、校舎の屋上の上に止まった一匹のカラスが鳴いた。そのカラスは生徒たち一人一人の顔を見る。それから空へ羽ばたき、先程助言という名の脅しを受けていた男子に糞を落とした。

「は!?!何これ最悪！」

この二年後。髪を異物で濡らしたその男子は盗撮の疑いによって秀知院を去る。かぐやの近侍である早坂がそれは冤罪だったと察す

るはそのまた数年経ってからのことだった。

かぐやはかつて兄・雲鷹に連れられる格好でパーティに出ていたが、今では同学年の甥である鳳翔と揃って出席することが非常に多い。

当然、かぐやの近侍である早坂はそれに伴う形で出席する。早坂家は四宮家に取り込まれる以前は名家であつたがために、このような場でも軽視されることはない。

しかし、それどころでは無い鳳翔はしつこくかぐやに確認する。

「なあ、俺の服装どこかおかしく無いか？ちゃんと似合ってる？」

「大丈夫ですよ。一体どうしたんですか？今日の貴方、ちよつとおかしいですよ」

早坂は彼がそうする理由を知っている。このパーティには帝を除く四条家の者も出席するのだ。

(……せめて私に聞いてくれたら良いのに)

早坂の胸の内など全く知らない彼はかぐやの言葉に動じることがない。溜め息を吐いたかぐやは彼に尋ねた。

「それより、貴方から見てどうなんですか？私の格好」

「……そうだな。天女のようにだとも言えば満足か？」

彼の迂遠な物言いかぐやは浅くも深くもないため息をついた。

「本当にそう思ってるなら素直にそう言ってください」



「んー。天女は言い過ぎだけど、まあまあ似合ってるんじゃないか」

「今、まあまあと言いました?」

二人の関係は複雑だ。戸籍上は叔母と甥だが、実際にはしつかりした妹とどこか抜けた兄のようでもある。一方で技能の多彩さにおいてはかぐやの方が上であるものの、勉強や運動など彼がまともに取り組んだ分野では彼に軍配が上がるために、ますますその関係は混迷を極めていた。

(私には……一言も無し)

昔ならいざ知らず、今の早坂が彼にそのような事を聞ける筈がない。かぐやの前であるし、そうでなくとも今の彼相手であれば聞いたところでまともな返事が返って来ることはないだろう。

時間が経ち、パーティーが始まった。昔と違って彼は逃げ出したり隠れたりすることはない。

あれはそもそも――

(私と一緒に出来なくなったことへの腹いせだったから)

昔の彼の瞳には早坂しか映っていなかったのだろう。パーティーで一緒に出席した時に、早坂と話すことに夢中になる余り挨拶しに来た知事や他社のお偉方のお偉方の挨拶を無視することが幾度もあり、それが問題視され早坂はかぐやの近侍になるまで彼と一緒にパーティーに出ることがなくなったのだ。

その間、彼はパーティーで前述のような問題行動を起こし続けていたが、そうした経緯があったがために黄光は心の底から彼を叱ることが出来なかったのだ。

しかし、今となつてはそうする必要は皆無だ。早坂と一緒に出られるようになったからというよりは、早坂への好意が皆無になったからだと考えるのが妥当だろう。

「あら、おば様。ご機嫌よう」

「……眞妃さん」

「おじ様も。お達者なようで何よりだわ」

大人たちのいるパーティで彼と眞妃は一言も交わさないのは逆に変に思われるだろうと考えたのか、あたかもかぐやと眞妃であるかのように口撃し合う。早坂はそんな二人をいつも白い目で見ていた。棘の刺し合いが始まって二、三分ほど経った頃、精神的疲労に耐えかねたのだろう。彼は疲れた目をした。

「俺、向こう行ってるから後はお二人で」

「あら。おじ様だったらまた元気に木登りなさる気なのかしら」

「いつの話だよ。それ……鐘ヶ江グループのトップに声掛けるだけだ」

鐘ヶ江グループ。四宮とは別に四大財閥の一角に数えられる巨大企業である。

「そう言えばあそこって近い歳の娘が居たわよね。まさかとは思うけど」

「残念。口説く気ゼロだから安心しろ」



よ。もし仮によ？あいつと付き合いでもしたらよほど耐性ない限り間違いない疲れれるわ。そのところちゃんとなら分かってるんでしょね？」

そんなことはとづくに承知していると早坂は歯噛みする。

傍若無人でルールなどお構い無し。良血であるのを良いことに誰にも文句など言わせず、万一誰かにその行いを注意されるような事があっても自身の粗を逆手に取ったり六法全書や古の聖人君子の言葉などから都合良く引用したりして口八丁で丸め込む。

友達の困った顔を見て喜ぶ。性格が悪いとしか言いようが無い。それも救いようがないレベルで。龍樹桃の件について聞いた時はかぐや共々凍りついたものだった。

昔は比較対象が少なすぎたために気付かなかったが、掃除が異様に出来ない。モノを片付けるということを知らないのだ。

だが、それでも。早坂にとって彼がかげがえのない存在であることに変わりなかった。

「私の方が、眞妃様より……それこそ他の誰よりもあの人のことをよく知ってます。だから——」

続けて早坂が切った啖呵に眞妃は目を見開いた。それから眞妃は余裕のある笑みを浮かべた。

「早坂愛……だったかしら。これから貴女のこと、愛って呼ぶわ。私、認めた相手は名前と呼ぶことにしてるの。勿論、大人たちの前では呼ばないけれど」

(……勝てない)

眞妃の度量の大きさに早坂は氣後れし、自身のやっていることと比

較しては無力感に打ちひしがれた。単にかぐやに比肩し、彼すら一時的にでも上回る能力を持っているだけではない。人としての出来が大いに違うような気がした。

——愛。愛。どうしたの？ボーつとして

俯いた早坂は顔を上げる。目の前に居たのは真妃ではない。母親の奈央だ。

「……ママ」

そうだったと早坂は思い返す。今母と居るのはパーティ会場でも手洗い場でもない。予約した寿司屋の個室だ。極めて珍しいことに、二人の休みが一致したために勝ち得た一緒に食事する機会である。

「愛……泣いてるの？」

「あつ、ううん。何でもない」

奈央の言葉で早坂は自身の目から涙が一筋溢れていることに気が付いた。指でそつと涙を拭った。

「あまり擦ると目悪くなるわよ。視力、だいぶ落ちてきちゃってるんでしょ？」

「……うん」

パソコンに嵌まりつつある早坂は毎年視力検査の結果は悪化の一途を辿っている。だが、かぐやに代わって女子社会の情報を十二分に集める必要がある早坂は明るめな女子としてクラスに溶け込んでいる手前、野暮つたい眼鏡を掛けることは躊躇われる。

かと言ってコンタクトというのはやはり怖い。目に異物を入れることに抵抗感を感じずには居られないのだ。いざとなったら眼鏡よりコンタクトを優先することになるだろうが、付けなくて良いのなら付けない方が良いと言うのが生来臆病な早坂にとっての本音だった。

「何か悩みでもあるの?」

「……別に。何でもないよ」

「無理にとは言わないけれど、何かあったらママに相談して良いのよ。ママとしてはあまり遠慮して欲しくはないわ」

「ママ……」

「そうね。若様のこと?」

「!？」

あつさりと見通され、早坂は目を見開いた。娘の初心な反応を見る奈央は自身に秘められた悪戯心を抑えつつ、母親として娘に向き合おうとした。

そんな奈央に早坂はつい弱音を吐いた。

「ねえ、ママ。今のお仕事辞めたら……また、あの人の側に付いても良いのかな」

(これは……思ったより重症ね)

奈央は息を呑んだ。よほど辛い思いをしてきたのか俯いて涙声でポツポツと話す娘を何とかしてやりたいと思う親心が奈央に無い訳ではない。だが、四宮グループ幹部である奈央も幹部であるが故にど

うにもならないことがある。加えて、今の娘のアプローチでは本当の望みが叶うことなどあり得ない。まずは娘の本音を引き出すことだ。

「難しいでしょうね」

「……」

「良い？若様は雁庵様の孫。昔と違って名声は高く、雁庵様の嫡孫として将来家督を継ぐ可能性は非常に高いわ。その側近に求められる職責はかぐやお嬢様の比じゃないの。今の愛じゃとてもじゃないけど務まらない」

将来の四宮家当主の側近の座は四宮家の傘下に入る優秀な若者たちの垂涎の的である。早坂がその座を掴むには更なる研鑽を積むのは勿論の事、総帥雁庵の長女かぐやの近侍を長く勤め上げたという実績が必要なのは言うまでもないことだ。

だが、早坂は首を横に振る。

「ママ、違うの。そういうのじゃない」

狙い通りの展開。あと一押しだ。

「違っって言うなら……そうね。若様のことが好き、とか？」

「……うん」

「若様と手を繋いだりキスしたりしたいの？」

「……」

沈黙する娘を見た奈央は口直しに酔の物を箸で摘んだ。

「もしかして若様と結婚したいと思ってる?」

早坂は首を横に振った。名家の中の名家である四宮家の二代先の当主の結婚相手には他所の名家の令嬢が宛てがわれるであろうことは早坂自身承知している。だが――

「愛。雁庵様も黄光様も若様の学生時代の恋愛に口を挟むような事はしないわ」

事実、学生時代の黄光は現在の妻とは別の女性と交際していたし、雁庵もその期間に関しては黙認していた。結局は政略結婚に際して雁庵が無理矢理別れさせる結果となったが。

「かぐやお嬢様だって愛と若様がそういう仲になっていても黙認する筈よ。かぐやお嬢様は若様を慕っているんでしょう?」

奈央は愛の目を真正面から見る。本来気が弱い早坂は半ば泣きそうな思いだった。

「告白したらきつと上手くいく筈だわ。あれ程気に入って貰ってたじゃない」

「無理だよ。もう何年も私に冷たいままだし……」

「それはね、愛。照れ隠しって言うのよ。年頃の男の子には良くあることだわ」

奈央はどこか実感がこもった口調で言った。だが、早坂は奈央の意見が的外れだと知っている。





「ねえ。あんた、早坂愛のことどれだけ知ってるわけ？」

密会場所で始まった唐突な「他の女」の話に鳳翔は面食らう。ましてたつた今まで先の運動会での話をしていたタイミングだ。以前とは逆で、鳳翔の方があれば軽率過ぎたと眞妃を嗜めたのだ。

対する眞妃が言うにはいくら二人の実家の関係が宜しくないとはいえ、同じリレー選手であるにも関わらず一言も交わさないというのはかえって不自然だという話なので、鳳翔はパーティ含め親の面前だけ会話していると同級生に思われてはそれこそ危険なのではと疑問に思いつつも渋々納得したように見せたのだが。

(何だこいつ？早坂の話なんて最初の頃散々したじゃん)

鳳翔は戸惑いながらもその口を開いた。

「二、三歳くらいの頃から一緒に居たからかなり知ってる方だと思うけど」

「へ、へえ。超ウケる」

彼の初恋相手を男だと勘違いしている眞妃ではあるが、早坂が好き男の文字通り幼馴染である事を知って焦りを覚える。学校で彼がそのスペックのせいでモテていることも面白くないが、その手の幼馴染が居るとなっては眞妃は冷や汗をかかすにはいられなかった。

顔を逸らした眞妃に鳳翔は首を傾げる。

「何？そんなに聞くってことは前のパーティであいつ何か粗相したの？珍しい」

「そう言うのじゃないわ。ただちよつと気になっただけよ。そう言え

ばあの娘っておば様のお付きつて割には学校じゃおば様に全然引つ付いてないわよね?」

「……聞いた話だとかぐやに代わってクラスメイトの情報色々探ってるらしいから、そっちの方が都合良いんだってさ。それで俺も学校であれ相手には普通に同級生として接してるってわけ」

それを聞いた真妃は訝しむ。彼の話と普段の行動に剥離があるためだ。

「それにしてもあんたが愛と話してるところあまり見た覚えがないけど」

「ちよつと待て。何故名前呼び?」

「そう言うのいちいち突っ込まない。で、どうなのよ?」

「……お前さ、俺が女子相手に俺の方から用もなく話し掛けに行つたところ見たことあるか?」

なお、学校で小学生特有の男女の距離間を律儀に守る振りをする鳳翔は日頃手駒を増やすため真妃の見てないところで男女問わず駒として使えそうな者に声を掛けては洗脳まがいの囁きや買収工作に勤しんでいる。

それを知らない真妃はその優秀な頭脳を使ってすぐに結論を導き出した。

「つまり、愛の方から話し掛けて来ないから結果として話さないってこと?」

眞妃は鳳翔が頷くのを見て、逡巡してから更に尋ねた。

「じゃあ家ではどんな話してるわけ？」

「全然話さないってだいぶ前言っただろ」

「？そうだったかしら」

要領を得ない眞妃にそう言えばこいつは選別記憶が得意だったと鳳翔は思い出す。忌まわしい頃の記憶だったとは言え、自分とのやり取りを忘れられたのだと思い、一抹の寂しさを覚えたものの直ぐに思考を切り替えた。

実際には眞妃が出会ったばかりの頃に鳳翔がした早坂についての話を「かぐやに盗られた男」についての話として記憶しているだけである。

「もうこの話は止そう。それよりさ、この間の休日ピアノコンクールを観に行ったら——」

密会の習慣が終わりを迎えるXデーまで残りもう幾年もない。

そうとは知らない二人は今日も楽しく話し込む。そして、楽しい時間というのはそれこそ矢のように速く流れるものなのだ。

「……もうこんな時間か。んじゃ、マキ。帰り気を付けて」

「はいはい。あんたも。変な人に声掛けられても付いて行っちゃダメよ」

「んなへマしねえよ。大体、お前こそ変な人に狙われそうで怖いんだが？」

「へ、へえ……超ウケる。怖いんだ？私が狙われたら」

「当たり前じゃん」

顔を真っ赤に染めて慌てふためく眞妃を見た鳳翔は悦に入っ  
てほくそ笑む。

「なんか一見無害そうな老人に道案内させられてそのままうっかり  
拉致されそうで」

一転して眞妃は溜め息を漏らした。

「これだから不調法者は。あんたは道に迷ってる人が居たらどうし  
ろって言うのよ」

「行き順をパッと行って直ぐにトンズラするとかあるいは体よく交  
番まで連れて行って警官に丸投げするとか色々あるだろ」

「……思ったより十倍はまともね。肝に銘じておくわ。じゃあ今度こ  
そ行くわ」

「おう。また明日学校で」

どこか安堵した様子の眞妃は帰路に着いた。  
時間をズラすため、鳳翔は十五分以上は此処に居続けなければなら  
ない。

眞妃が去った方へ手をかざしながら鳳翔は溜め息を吐く。

「はあ」

大人たちの前で好きな人におじ様呼ばわりされても、心に痛み自体は覚えるものの必要なことだと割り切れる。密会中に時折それが出るのも眞妃なりの照れ隠しだと思えば何と言うことはない。対処法も発見した。今となっては特に気にしていない。

だが、たとえ他の女子について話してたとはいえ最初期の頃の事を忘れられていると思えば、どこかやり切れなさを感じてしまう。とはいえ――

(あれって早坂のことで嫉妬したとかそういう事だよな？全くお可愛いやつ)

一人得意げになった鳳翔は社に背をもたれて呟いた。

「なんでアイツってあんな可愛いんだろ」

羞恥する眞妃の姿を見るに付け、自身の体温が一気に上昇していくような感覚に襲われる。それが鳳翔にとってどこか嬉しいような恥ずかしいようなそんな気がしていた。

(まあ焦ることは無い。急いで事は仕損じるだけ。ここは速戦即決を狙わず、盤面を整えることに集中しよう。それこそが勝利への道だ)

人事を尽くして天命を待つべき。どう考えても脈アリでそう遠くない日に眞妃の方から告白して来るだろう。当面やるべきは密会の継続並びに害虫の駆除だと自身に言い聞かせる。駆除作業の具体案について思案しているうちに、腕時計のタイマー音によって日暮れ近くになっていたことに気がついた。

「帰るか」

上機嫌で学校に戻る。突風のような速さで塀伝いを走り、所用時間はかつての五分の一以下だった。

だから鳳翔は付近に潜伏していた二人に気付かない。

「まさか、若君があのようなことをなさっていたとは」

「……」

部下の黒服を一人連れ、早坂奈央は無言のままつまらなさそうな顔でその神社を見る。

「どうします？ 場合によっては今後の我々の行く末に……」

「少し黙ってなさい」

「は、はい」

しばらく逡巡してから奈央は黒服に告げる。

「雁庵様には暫く経過を見るよう献言します」

「……宜しいのですか？」

「ええ。お二人の仲を壊すにはそちらの方が効果的です。それは雁庵様もお分かりになるでしょう。ただ、それにはかぐやお嬢様を含め決してご兄弟方のお耳に入れない事が必要です。勿論、黄光様にも良いですね？」

「畏まりました」

「私は少し敷地内を確認して来ます。貴方はもう帰って結構ですよ」

黒服は奈央の言いつけ通り、自宅へと帰って行った。奈央は念の為黒服に付けた盗聴器が伝える音声に耳を傾けながら、中へと入って行く。

(ここでしょうね。表からは見えにくくそれでいて暗過ぎない。密会するには最適な場所)

奈央は先程まで二人が居たであろう場所を見る。近くには林があり、葉が生い茂って超小型カメラを忍ばせておくにはちょうど良い木が何本もある。

(愛はこの事知っていたのかしら)

元々は娘と話していて鳳翔の好きな人の話題に及んだ時に娘がほんの一瞬だけ凍りついたのが切っ掛けだった。それだけならまだしも、あまつさえ娘がその話題について隠すかのようにして不自然な避け方をしていた分、奈央は疑いを持つようになった。

最初はそれこそ照れ隠しかとも思った奈央だったが、疑いを基にして鳳翔の行動や交友関係について洗ってみたところ、すぐに不自然な点が浮かび上がった。ある時から鳳翔は習い事の無い日は学校に遅くまで居ると言う。しかし、決まって校内に数多ある防犯カメラのどこにも鳳翔の姿が映らない時刻がある事が確認され、何かあると思っ張ってみればこれだ。

「あまり気は進まないのだけれど――」

奈央がこの事を雁庵に報告するのは半ば博打だ。報告したのが奈央だと鳳翔に知られるような事があれば、たいそう恨まれることだろ



う。それは雁庵の三男坊である雲鷹が奈央に抱く恨みの比では無いかもしれない。

本来なら見て見ぬ振りをするというのが賢い選択だと知っている。それに、黄光夫妻が留守の時に鳳翔を世話したことがある奈央にとつて彼は息子のようなもの。だが、それでもやらない選択肢はない。

「仕方ないわよねえ。だってこのままじゃ愛が報われないんですけど」

奈央の眩きは厳粛な静寂の中に吸い込まれるようにして消えていく。後戻りはもう出来ない。

初等部最後の夏休みが半分以上過ぎた頃、鳳翔とかぐやの両名は本邸に滞在することとなり、早坂はかぐやの近侍として同行していた。

時刻は九時半過ぎ。受験生や何かしらのスポーツのジュニアチームに所属している子でも無い限りは寝るべき時間だ。かぐやたちは本邸に泊まる際は鳳翔の自室で布団を敷いて寝る。年齢的にそれもそろそろ最後だろうという頃合い。二人は首を長くして待っていた。

「鳳翔、遅いわね。どこに行ったのかしら」

「……そうですね」

彼は総帥雁庵に挨拶しに行つてからから一向に帰つて来ない。堪らず、かぐやが本邸の使用人に彼の様子を聞いたが、外に出掛けたいと説明を受けたのみ。携帯でメールを送つて既に数時間が経過したが、梨の礫だった。

「これじゃつまらないじゃない。もう良いわ」

待ちくたびれたかぐやが就寝するのを確認してから早坂は着替え等を袋に入れて本邸にある女性従業員用の大浴場——当然、主筋を含めた男衆は接近禁止——に向かう。

道中、早坂は母親である奈央の姿を見付けて頬を緩めた。

「ママー」

「あら。これからお風呂？」

「うん！かぐや様のお付きで来てるから泊まりなの」

「そう……」

奈央は早坂の顔をジッと見つめる。母の様子を不思議に思った早坂は首を傾げた。

「ママ？」

「ごめんなさい。ママはもう行くわ。おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

互いに忙しい身であるためにここ暫く交わしていなかったやり取り。上機嫌になった早坂にはその背中を見つめて微かな声で呟いた奈央の言葉は聞こえていなかった。

翌日。

午前中に彼は車に乗って帰って来た。

自室のベッドの上でぐったりとする彼をかぐやが問い詰める。

「鳳翔。メールの返事くらいしなさい」

「……ごめん。見てなかった。次からは気を付ける」

「はあ。一体どこに行ってたの？しかも泊まりだなんて」

（母か）

心の中でかぐやの物言いに突っ込んだ早坂だったが、それはそれとして彼の様子がおかしいことに気が付いた。言葉がどこか途切れ途

切れであるだけではない。

かなりのやつれ様で顔色が悪い。普段の燃え盛っているかのような生命力溢れる瞳は色褪せており、覇気すら微塵も感じられなかった。

「美味しいもの食べに行つてたんだ。湯葉がすつごく美味しくてさ。遅くなったから泊まりつてことになつちやつたけど」

「そう。私も今度食べに行きたいわ。どこにあるお店なの？」

「ツ……ごめん。何処だったのか全然覚えてない」

「いつもみたいなのに車窓から景色を見てなかったの？ 大体の位置は分かるでしょう？」

「そんなの気にもしてなかった……どうしても行きたいならお祖父様に聞いてみれば？」

「……不調法者ね。私があの人に聞ける筈ないじゃない」

彼が祖父の雁庵に可愛がられる一方で、かぐやは酷く素っ気なくされていることは四宮家の中枢に近い者であれば誰でも知っている話だ。

夜職であつた名夜竹との間に老齢になつてから産まれた娘である——これは極秘情報だが本当に雁庵との娘かどうかは疑わしく、雁庵の意固地のせいで遺伝子検査は行われていない——かぐやとは気まぐずいのだろうと彼は言う。早坂はそんな雁庵を心の内でクソジジイと罵っていた。

そのような背景を踏まえれば、本来彼の発言は配慮を欠いてそれこそ不調法者と言われても無理のないものであると分かるだろう。



車の中でかぐやと本日の予定について話し合う中、早坂の心はこれまでと同じように沈んでいた。

「お帰りなさいませ。坊ちゃん」

「……ああ、うん」

早坂の予想より大分早く帰って来た彼は先月のある時より更に酷くやつれていた。これには流石に早坂でなくとも、彼の近侍である執事が違和感を覚えた。

「どうかなさいましたか？」

「……いや、別に。それより風呂に入りたい気分だ。沸かしてくれるか？」

「畏まりました」

彼はフラフラと自室に戻って行く。通りがかった使用人の誰もが異変に気付いたが、どうにもならなかった。

翌日。

友人の女子たちと喋りつつ早坂が相変わらずの様子である彼を心配していると、教室に眞妃が入って来るのが目に入る。

（またいつもの約束か……）

早坂は彼と眞妃が誰にもバレないように互いに薬指をかざし合う性質があるのを見破っている。小指を出す時もあり、彼の場合それは決まって習い事がある日のことなので、十中八九逢い引きの取り決めだろうと察していた。

(あれ……?)

昨年まで同じクラスだった友達と話し込む眞妃がさり気無く彼の方に薬指をかざしても彼は何も返さないどころか、一瞬だけ俯いてから顔を明後日の方向に向ける。ショックを受けたのか眞妃は凍りついた様子だった。

(二人に何かあった?多分、昨日……だよ)

早坂は俯いた眞妃の方を見て訝しむ。その視線に気付いた眞妃は早坂を唾然した顔で見つめ、それから直ぐに暗殺者のような視線で早坂を突き刺した。

早坂は何が何だかよく分からなかった。

~~~~~

翌日も。翌週も。翌月になっても状況は変わらなかった。いや、変わったことは一つある。彼が放課後や休日頻繁に京都を中心として出向くようになったことだ。おかげで彼は疲労困憊。

昼休みにさらに苛烈さを増したサッカーでの蹂躪劇を繰り広げる以外には学校では寝るか食べるかスマホで電子書籍を読むしかしていなかった。ただそれで成績に何ら影響なかったのが怪物染みていると言うべきか。むしろ学期テストでは主要科目においてはより安定して満点を取る始末だった。

眞妃は相変わらず彼に合図を送っているが、彼は眞妃と顔を合わせ

たかないのかそっぽを向き続けている。やつのことでかぐやがその様子に気付いたが、早坂はかぐやに何も言わなかった。

そしてパーティの席においても彼は他財閥のトップや各界の権力者と難しい話に花を咲かせるばかりで眞妃はもちろん、かぐやにすら目もくれない。早坂については言うまでもなかった。

眞妃もそれは見越していたらしい。早坂が手洗い場に向かったタ イミング。廊下で声を掛けてきた。

「ちよつと良いかしら？」

早坂は息を呑む。眞妃は彼だけでなく早坂と話す機会をずっと窺っていた。ただし、少なくとも早坂にとってそれは本来あまり褒められた行為ではないのだ。四宮傘下の早坂家の娘が四条家の娘と話をするのは、ましてかぐやの目が届かない場所では内通だと疑われる危険性がある。

「もう少し人目につかない場所に……いえ、むしろ人目のある場所の方が疑われないでしょうね。けど話が話だから。分かるでしょ？」

彼について話があるのだろう。多少のリスクは受け入れろと凄まじい早坂は抵抗できなかった。

「……」

「何か私に言うことはないのかしら？」

「……若様の事ですよ？何かあったんですか？」

「何かあったですって？よくもまあ……いえ、そうね。そっか。知ら





冬休み。久々に羽を伸ばせると彼は本邸にある自室に炬燵を置いて温もり出した。

だが、ここ数ヶ月の気丈な振る舞いは変わらず、本心では未だ落ち込んでいるだろう彼にせめて自分に来れることはと言えば寄り添って話を聞くくらいだろうか、かぐやの手前あるいは彼の態度からして早々聞くことは出来ない。何か口実が必要だと思つた早坂は考えに考え本邸にある彼の自室を訪れることにした。どう言うわけか、この冬から本邸においてかぐやたちと彼は別々の部屋に泊まることになつていた。

「試飲？」

炬燵に寝転がりながら惰性的に電子書籍を読んでいた彼はぶつきらぼうに聞き返した。

「はい。その……珈琲を主人に出せるクオリティで淹れられるようになったので、一杯どうかと」

「ならかぐやに飲んで貰えよ」

「かぐや様だけでなく他の人にも感想をお聞きしたいのです」

「……だからって別に俺じゃなくても」

「苦いのがお嫌なら無理には言いませんが」

「いや、珈琲くらい普通に飲めるし……仕方ねえな。厨房にカステラあるから、三時過ぎになったらかぐやと一緒に食べるつもりでいる。

どうしても出したいって言うなら、その時に出せば良い」

早坂は安堵した。畏まりましたと言って彼に頭を下げる。それを見て炬燵から這い出た彼は起き上がって伸びをし始めた。

「ま、これなら任務にも支障は出ないだろう。かぐやに変な勘繰りされずに済む」

「……え？」

伸びをしながら彼が言った言葉に早坂は耳を疑った。

「任務……？」

「いや、だってお前が俺だけに珈琲出したら余計な疑い持つだろ？」

「余計って……」

「かぐやはきつと警戒する筈だ。人付き合いが下手な割に狡猾なやつだからな。変な誤解をしてお前が俺にかぐやの情報を流しているかとも思いかねない。そうなったら万事休すだ」

早坂は顔を青くしながら確認する。

「ご存じだったんですか？」

「ああ。お前がかぐやの情報流してる事はな。前に父上から聞いた。まあ頑張れ」

それだけなのかと早坂は落胆した。

(助けては……くれないんだ)

心のどこかに彼が自分をいつまで経っても終わらない境遇から救い出してくれるんじゃないかと都合良く期待していた自分が居たことに気付く。早坂は自己嫌悪と相まって酷く落ち込んだ。彼はもう早坂にとつての道標足り得ない。そんな風に考えて――

「真妃様のこと、疑ってるんですか？」

思わず口に出していた。悪い意味で目を細めた彼にしまったと冷や汗をかく。

「……へえ。てことは知ってはいたんだ？ いや、気付いていたの方が正確か」

彼から溢れ出た怒気と殺気は以前早坂が浴びた真妃のに引けを取らず……むしろ上回っている。おそらく軍の将校のそれに匹敵するに違いない。早坂は震えを抑えようとするのに必死で答える事が出来なかった。

「何か言ってみろよ。父上は知らないみたいだけどお前なら心当たり、あるんじゃないのか？」

早坂は思い返す。数ヶ月前の真妃の言葉が頭の中で蘇った。

『そう言えば愛ってお母さんにべったりだったわよね。その場で気付くべきだったわ。本当に私って』

「……あ」

もしかしたらという嫌な想像が思い浮かぶ。いつかの運動会の後

の母との食事の席。彼と眞妃の事を言ったわけではないが、もし隠そうとしていた事自体を気取られていたのであれば……

(私の、せい……?)

早坂はどんどん顔を蒼くする。これではまるで早坂が彼を――

「過ぎた事だし、今はもう気にしてない。そもそも俺が迂闊過ぎたのがいけなかったんだし、遅かれ早かれこうなってた。ほら、アレだよ。仕方なかったてヤツ」

早坂は怒りを誤魔化そうとしてなのかあれこれ捲し立てる彼に何も言えない。目線すら合わせられない。

「早坂。お前はお前でやるべき事をやれば良い。それが……お前が選んだ道なんだろう?」

どこか諦めたような顔で言う彼。早坂には彼の言葉が欺瞞であると思えない。

「かぐやを誘って来るから、お前は珈琲淹れる用意でもしておけ。下手なもん出したら承知しないぞ」

軽い口調で締めた彼は炬燵の上の腕時計を手首に巻き付けて部屋を出て行った。一人部屋に取り残された早坂はその場にうずくまる。しばらくの間動くことが出来なかった。

[4]

後に奉心祭で客として訪れたラーメン四天王の一角に豆が喜んで  
いるかのようだと言われることになる早坂が淹れた珈琲。最初に  
彼がそれを口にしようとした時、早坂は目を瞑りながら自身の心臓の  
鼓動の速さを実感していた。

「ごふっ！なっ、何だこれ!？」

早坂は思わずドキッとしたが、咽せた彼は直ぐ取り繕うようにして  
言った。

「ああ、うん。成る程」

「鳳翔。まさかとは思いますが珈琲飲んだ事……」

「ない」

「……でしようね」

(だったら最初からそう言っつてよ)

無駄にカッコつけず砂糖とミルクを入れれば良かったのだと早坂  
は呆れ混じりの不満を心の中で溢す。それを知らない彼はしたり顔  
で言う。

「だが、苦味と同時に来る……何というか清涼感?のようなものは感  
じた。うん、カステラの甘さと併せれば——」

彼はカステラで口の中を甘くした後、珈琲を飲む。

「成る程。大人たちがこぞって好むわけだ。今日やっとその理由が分かった。まあ、早坂のが特別なだけかもしれないが」

齒に浮くような台詞のせいで早坂は気恥ずかしくなる。かぐやは鳳翔に呆れた視線を寄越した。

「若様」

ブレイクタイムが終わって自室に戻る途中の彼に早坂は尋ねた。

「実際のところどうだったんですか？」

「どうってお前……ちゃんと旨いって言っただろ」

「本当、ですか」

俯きながら食い下がる早坂に彼は顔を僅かに歪めた。

「俺がしょーもない嘘吐くとも？」

(……嘘吐き)

彼が学校で絡んできた女子に思ってもいない美辞麗句を並べて適当にあしらっていることを知っている早坂は彼の言葉をどうしても信用出来なかった。

そんな早坂の様子を見かねた彼はぶっきらぼうな口調で言う。

「じゃああれか？褒美か何かとして欲しい物でも買ったなら信用するってわけ？ご両親のどちらかに頼めば買ってくれると思うけど。あの人たちもそれ相応の給料貰ってる筈だろ」

「別に物が欲しいわけじゃ……」

「あつそ。言っとくけど、俺に使用人の給料上げる権限無いから。それじゃ」

「待って……ください」

思わずタメ口を使いかける程に慌てた早坂は彼の袖を掴む。

タイミングがタイミングだったが、ここで掴まなければ全てが終わると早坂は思ったのだ。

そんな早坂の思いとは裏腹に彼は今まで見た中で一番殺気立っていた。

「どういうつもりだ？」

「ID……ID交換、したいです」

自分の失態について何か言わなければと思っていた早坂だったが、実際に口から出たのはただの己の願望だった。早坂は自分は何をやっているのだと自問した。

「はあ？」

「だって……若様、他の女の子たちとは交換するのに私とはしてくれないですし……」

「いや、お前……はあ。有力者の子女が選り取り見取りな秀知院生相手だから基本男女問わず色々な人と交換してるだけなんだけど……」

色々な意味で諦観する早坂は半分以上やけ気味に声を振り絞った。





それから十時前まで祖父の隣でその真つ黒な手法を学んだり問答をしたりし、終わり次第自家用車で本邸から車で高速道路を通つて――運転手の休息のためのサービスエリア等での時間込みで――早朝前後に別邸に帰還する。

午前二時過ぎ辺りまで彼自身は車の後部座席で就寝するが、起きてからは別邸に着いて風呂に入るまで仕事。風呂上がりからかぐやとの朝食までは完全防音の自室でバイオリンなどの楽器に触れる他雑務という名の害虫駆除作業や完全に彼にとっては復習ではあるが試験対策などを片付ける。

登校後の休み時間中は生徒や教員その他学校関係者の弱味を握つては傀儡にしたり害虫発見作業をしたりするのはもちろんのこと、サッカー勢と軍事教練紛いの訓練をしたり翼を含む友人連中とお喋りしたりもする。授業中は不足分の睡眠を補う。これが昼寝だ。

そして放課後。また裏門から車に乗り込むと言うのが彼の日常である。

だが、今は正月。ここ数日でこれまでの分を取り戻すかのように惰眠を十二分に貪った彼はそこまで眠いというわけではない。ただそれでも正月ボケしたテレビの音声を垂れ流しながら炬燵でウトウトする程度の事は出来る。

「……失礼します」

どこか緊張した面持ちの早坂が一応の断りを入れてから部屋に入つて来る。早坂は本当に彼が寝ていると認識し、ため息を吐いた。

「そりやそうですよ。若様は……」

続きの言葉を呑み込んだ早坂は炬燵の上に山のように積み重なった蜜柑に埋もれる彼のスマホを手に取った。彼は都合良く片手を出しながら寝ているようで、早坂は彼の親指を手に取ってスマホのロックを解除した。

(これが、若様のスマホ画面)

しばらく眺め続けていたが、欲望を振り払おうと首を横に振る。それから目当てのアプリを見つけQRコードを使ってIDを交換した。

(他のSNS……見たらダメだよ)

早坂はため息を吐いて彼のスマホの電源を切った。それから彼の顔の横に置いて――

(寝てる……？本当に?)

実は起きていて自分がどう行動するか試しているのではという考えが思い浮かんで早坂は悲しさと虚しさでいっぱいになった。起きているのか確認したとして本当にそうだったらと思うと怖くて出来ない。早坂は自身のスマホで彼のアイコンを見る。

(これ、誰の肖像画なんだろう？鼻がやたら大きいけど)

どんよりとした気分を紛らわすようにして彼のイケてないアイコンにクスツと笑みを浮かべた早坂は部屋を出て行く。三分少々経ってから鳳翔はその目を開けた。

「…………この程度の単純な企てなら気付くか。ま、そんならいじやない



本当に試されていたと知って気落ちしていた早坂はそのまま初等部を卒業した。

その間、眞妃に絡まれるような事が何度もあった。

「あんだ、早速指一本触れたでしょ」

「……」

凶星であるため、早坂は押し黙る他ない。眞妃は顔に影を落としながら呟いた。

「ふーん。そっか」

眞妃と二人きりだと逆の意味で胸がキリキリ締め付けられる。

何故なら――

『そう言えば愛ってお母さんにべったりだったわよね。その場で気付くべきだったわ。本当に私って』

半年近く前にされた話がどうしてもチラついてしまう。彼と眞妃の仲を裂くのに自分の母が加担していたのではという疑い。自身の精神衛生上の観点から考えないようにしてはいたが、眞妃の姿を見れば見るほど疑いは強まって行く。

春休み。早坂はまたしてもかぐやのお付きとして本邸に赴いていた。かぐやはここ暫く彼に優しくされており、それに甘えるかのようにつつづつ文句を言いながら彼の部屋に入り浸っている。

かぐやに付いて行かざるを得ない早坂は彼と居ると申し訳なさでいっぱいになってしまい、肩身が狭いと言いがなかつた。

「鳳翔は中学でサッカー部に入るつもりなの？」

「どうだろう。幽霊部員で良いなら入るつもりだけど……かぐやはどっか入るつもり？」

「私は弓道部に入ろうかと思っているわ。まだ理想の射が出来ていないもの」

「へえ」

「そうだわ。早坂はどこかに入るつもりはないの？」

思い出したかのように尋ねるかぐやに早坂は内心呆れる。かぐやのサポート業務のせいで忙しい自分に部活動など出来る筈がない。彼の方をチラと見ると、彼は興味なさげにほうじ茶片手にスマホを弄っていた。彼が湯呑みに口をつけるのを見計らって早坂は答える。以前、彼に試された事への仕返しをすれば少しは心休まるのではと思ったのだ。

「そうですね。弦楽部に入ってチェロとか良いかもしれませんね」

「ブッフウウ!!!」

彼は盛大に茶を嘔き出した。かぐやが鳳翔の挙動に文句を言った後、早坂は力みない笑みを浮かべて冗談ですとその場を濁した。珍しく彼の方からメッセージが送られて来る。普段は早坂のメッセージに数週間後にスタンプを適当に貼り付けて済ましていると言うのに、都合の良い事だ。

『本当に冗談なんだな?』



「……うん」

雑談をあれこれ続けるうちに、早坂は母を試そうと思った。正月に彼が早坂にしたように。案の定、母は早坂に彼との仲について尋ねる。

「そう言えば、若様とはどうなったの？何か進展はあった？」

「ID……交換したんだ」

「そう……それだけ？」

「……うん。やっぱり忙しいからかな。全然返信来なくて」

早坂の拙攻に呆れたのかそれとも彼の態度に呆れたのか定かではないが、母は溜め息を吐いた。早坂は俯いてワザと弱った振りをする。

「なんか若様、今まで以上に冷たくて……何でかな？」

「さあ。ママには分からないわ」

凶太い神経をした母の言葉に早坂は肩を震わせた。

「『さあ』じゃないでしょ。ママ」

「愛？」

初めて見る娘の殺気混じりの怒気に奈央は戸惑う。だが、それと同じ時に娘がそうする訳を悟った。



「ママがなんかしたんでしょ。若様と……あの人の間に」

「あの人？誰のことを言ってるの？」

「……あくまでトボケるつもりなんだ？聞いたよ。ママがあんな酷い事するなんて思わなかった。ねえ、なんで？そんなに二人に別れて欲しかったの？」

嘘である。彼の口からも真妃の口からも詳細な説明を聞いたわけではない。これはただのブラフだ。娘のブラフを見破れない奈央ではないが、どこまで娘が知っているか分からない上、今後の親子関係の事を考えれば嫌でも乗らざるを得なかった。

「……雁庵様があんな判断するとは予想だにしていなかったんですもの」

「……」

「でも、愛も思ってたんでしょ？また若様に振り向いて欲しいって。だから二人には」

初めて自分に反抗する娘への対応。奈央はそれを間違えた。

「だからって……ッ」

一瞬だけ大きな声を出したが、すぐに場を弁えて早坂は冷静さを取り戻そうと丹田に力を入れた。それから静かにポツポツ話し出す。

「私のせいだよ。私が下手を打ったから、ママが勘付いちやった。そうでしょ？拳句、余計なお節介焼いて二人を……」



バス停のような形をした無人の小屋に身を置き、激しく降ってきた雨をやり過ぎす。今までと同じように俯いては幼い彼との思い出に浸り、辛い気持ちを紛らわそうとした。だが、今までのように浸ることなど出来はしない。仕組まれていた思い出、彼と離れてかぐやを騙す事を命令した彼の父親、何年も自分に冷たくする彼、結果的に彼を裏切ってしまった自分、彼を陥れた大好きな母親。全てが重石となっていた。

「私、何のためにここまでやって来たんだろう」

自分の存在意義がどこにあるのか今となっては分からない。彼に  
続れないのなら早坂は――

「何してるのよ、馬鹿」

「なんでかぐや様が……?」

雨の中を走って追いかけて来たのだろう。長くて艶やかな黒髪が濡れている。服も何もかもがびしょびしょでさぞかし身体が冷えるに違いない。

「私は貴女の主人で貴女は私の使用人。それ以外に理由が必要?」

(そっか、私は……)

何年も前から続く契約。早坂は仕事としてかぐやの側にいて味方になる必要があるのだ。それが彼のため黄光の命令をこなした上で早坂がかぐやに尽くすために見つけた妥協点。

早坂は憑き物が落ちたような顔でかぐやに答えた。

「いえ。そうですよね」

雨が上がり、かぐやと早坂は本邸へと戻ろうとする。早坂がかぐやの後を着いて行くと、どこか見覚えのある車がエンジン音と共に近くに止まった。

「こんなところに居たのか。全く」

「鳳翔、遅いですよ」

「車と諸々の準備を整えるのにどれだけ掛かると思ってるんだ？それでも急がせた方だ」

路上駐車したりジムジンから彼が出て来た。タオルを持った使用人を伴って。

「ほら、かぐや。これで拭いとけ」

彼は執事から奪うようにしてタオルを手に取り、かぐやの頭の上にくわつと置いた。

「早坂は濡れてないけど足……仕方ねえな」

彼は車のトランクルームを開けさせる。

そこに入っていたものを道端に置かせ、さらに自身のポケットから一組の靴下を取り出した。

「喜べよ。俺が履かせてやる。ほら、足出して」

早坂は長いスカート裾を膝付近まで持ち上げ、キャッチャーのように屈んだ彼に右足を出す。彼は汚れた靴下を脱がせて新しいもの

を早坂に履かせた。それが終わると、先程道端に置いた靴を手繰り寄せて早坂の右足に嵌める。

「ほら、右足完了。次、左足。出して」

「……うん」

早坂は作業する彼をマジマジと見つめる。姿形を除けば彼は昔と全然変わってない事に気付いた。ただ一つ変わったものがあるとすればそれは彼の中の優勢順位である。おそらく今の早坂の序列は眞妃やかぐや、翼、神童のもつと後だろう。だが、今はそれで良い。

「うん」じゃねえだろ。よし、終わった。さっさと乗って帰るぞ」

「……はい」

後部座席にかぐや、彼、早坂の順に座る。早坂はかぐやの方を見る振りをして彼の横顔を見つめる。

(やっぱり私は——)

彼のが好き。早坂が思うに、車窓に映る自分の姿は外の空模様と一致しているようだった。

中等部進学からどれほど経っただろうか。かつての激しい降雨の最中、雨宿りに使った市街地の納屋でかぐやから言われた言葉をきっかけとして、今の早坂はかぐやとも主従の別を徹底するよう心がけていた。

結局、帰宅部と化すことになった早坂は弓道部所属のかぐやより先に別邸に戻り、部活帰りのかぐやを出迎えるという日々が続いていた。

かぐやの孤独化がますます加速していく事に何も思わなかったと言えば嘘になる。だが、そんなかぐやに彼が合間を縫っては話し掛けに行くことが多かったのが早坂にとっては安心材料だった。

(……けど)

早坂はどうしても考えてしまう。彼がかぐやに優しくするのはかぐやがどこか真妃と似ているからではないのかと。言い換えれば、彼が真妃に向ける分だった優しさをかぐやに向けることで気休めになっているのではないかと早坂は疑っていた。

これはそんな日々を送るうちに中学三年生になってだいぶ経った時のことである。

(……疲れた)

別邸に勤めるメイドとして与えられたアパートの部屋のように狭い自室……ではなく、五つ星ホテルのベッドに寝巻きを纏った早坂は寝転がっていた。

発端は珍しく別邸で夕食を摂っていた彼がかぐやを誘った時に遡る。

「旅行、ですか？」

「そう。お祖父様をお願いしたら暇取れそうなんだ」

「私は別に構いませんが……サッカー部はどうするんです？もう最終学年ですし、そろそろ試合くらいは出た方が良いんじゃないですか？」

鳳翔はサッカー部に籍を置き、朝練や昼練には赴くもののそれ以外は我関せず。それでいて中等部進学早々に上級生たちを完全に支配下に置いていたところは彼が「支配者」たる所以であろうか。

「俺が居なくても神童が居る以上、そこそこは勝てるだろうから良いんだよ別に。ま、初戦でガチの強豪校と当たってしまったとかそういう状況になったなら出るつもりだけど。それよりさ、後でかぐやの予定教えてよ」

こうして二人は早坂がメイドとしてそばに控える中、部屋で日程の擦り合わせをする事に。行き先も泊まる場所も決まり、いよいよ予約しようとなった時の事だ。

「へえ。このホテル、サマースプリングが付いていて水着着用なら男女混浴OK……鳳翔、貴方まさかこの私と混浴したいと？」

「は？」

突然かぐやが言い出した事に彼も早坂も困惑した。

「もしかして宿泊先がここなのも客室に離れで付いている温泉に私と入りたいという魂胆からですか？私たちもう中学三年生ですよ？」

何言つてんだこいつとでも言いたげな視線を彼はかぐやに寄越す。呆れたように口を開いた。

「お前遂に頭沸いちまったんか。温泉付きの客室なんて珍しくもないし、大体誰がお前のそんな貧相な身体を見たいと思うんだ？」

(……それ眞妃様が聞いたら泣きますよ)

密かに眞妃を上回っている自身のスタイルに自身を持つ早坂は心の中で、かぐやをあしらう彼にツッコんだ。

関係のない話だが、早坂は眞妃が身体測定の結果を見て歯噛みするところをここ数年遠目に見続けて来た。

それはさておき、早坂の目の前では貧相と直球で言われた事にキレたかぐやと見下すような表情の彼の視線がバチバチと交差していた。

「まあ良い。風呂の事だけど、時間分けて入るに決まってるだろ。あと、そんなにそのサマースプリング入りたいなら今度百貨店の人たちが来る時に水着も持ってきて貰えば？」

「……私は入りたいたなんて言ってますん」

「あーはいはい。聞こえない」

おそらくかぐやをあしらうという意味では彼が誰よりも上手いと早坂は思う。

それはおそらく眞妃との密会でいわゆるツンデレという生き物の扱いを鍛えられてるからだろうと早坂は推察していた。

「よし、予約予約……」



早坂が感慨に浸っているうちに気付けば計画は大分完成していた。彼が手持ちのタブレットを弄る。

「そんじや二名で「ちよつと待ちなさい」……何？」

「二名じゃなくて三名でしょう？」

かぐやの言った事に彼は首を傾げた。

「何？母上でも連れて行ってか？あの人割とあれで忙しいけど」

「いえ。貴方のお母様ではなく、早坂を連れて行ってはと……」

「へ？早坂？……マジか」

あまり乗り気でなさそうな彼の態度に早坂は躊躇いがちに言った。

「私は別に……」

早坂を見たかぐやが彼に圧を掛ける。彼は投げ出すかのように急いでタブレットを弄った。

「はいはい。三名ね。分かったからそう睨むな」

こういう経緯があつて早坂はこの旅行に来たのだが、結果的に早坂は羽を伸ばすどころかどつと疲れる羽目になってしまった。身体的な意味でも精神的な意味でも。

旅行初日。仏頂面のかぐやの顔を緩ませようとした彼が藤原千花や鐘ヶ江こがねでもしそうにない斜め上の発想を見せてきたのであ

る。

彼がお気に入りとする菓子店の本店にかぐやと早坂を伴って赴いたときのことだ。

餅という餅に舌鼓を打つ彼は鼻唄を歌い始めた。

ここまではかぐやも早坂も彼が機嫌を良くしているのだろうとそこまで気にしていなかった。

だが、するとどうした事か。彼の鼻唄に釣られるかのようにして通りを行く観光客という観光客が彼の鼻唄と同じ歌詞を大声で歌いながら踊り出した。

当然、かぐやと早坂は平成の世に甦ったええじゃないか騒動に面食らう。

かぐやは目を見開いて口をあんぐりと開け、動転した早坂は彼が遂に鼻唄一つで群衆を扇動する人間業とは口が裂けても言えない程のカリスマ性を手に入れたのかなどと疑った。

そんな中、かぐやは困惑気味に彼に尋ねた。

「鳳翔、これは一体……?」

かぐやがした顔に満足したのだろうか。彼は先程まで山のように積み重ねていた餅の最後の一個をペロリと平らげ、種明かしをした。

「エキストラというエキストラを大量に雇ったんだ。どうだ?ビビっただろ?」

もちろん、かぐやと早坂はケラケラと笑う彼に軽くドン引きした。

そして問題はこの翌日だ。彼が起こした騒ぎが元となって「ええじゃないか」がSNSでトレンド入りし、どういうわけか伊勢神宮と

その周辺に近隣府県の住民が殺到。その由緒とは関係なくええじゃないかを踊る人々で一杯となり、挙句諸悪の根源である当の彼本人が呆気に取られた。

おかげで警備の問題の都合によって三人は観光を中止せざるを得ず、ホテルの敷地内にあるテニスコートで一日中テニスをする事になったのだ。

「はあ……あの子手加減というものを知らないのかしら。足が棒になるって感覚を味わうなんて今日が初めてだわ」

早坂の隣のベッドで横たわるかぐやはボヤク。早坂に言わせるならお互い様である。かぐやも最初は彼とほぼ互角にやり合っていたのだが、互いにヒートアップした結果として体力勝負に委ねられることになったのだ。

夕方には温泉に入ったかぐやはその後ベッドに横たわってから今に至るまでボヤき続けていた。

「少し将来が心配だわ。あの子あんな調子で誰かと付き合えるのかしら。まだ誰とも付き合った事がないんでしよう？ここしばらく告白される頻度も落ちて来たようですし」

かぐやは自分の事を棚に上げ、叔母として彼の心配をし始めた。

告白の頻度に関しては以前のファンクラブ解散命令の影響で女子たちが彼に遠慮するようになったのと秀知院の女子の数にも限りがあるためだ。今となって彼にアプローチを掛けているのは恋愛事に目醒めるのが遅かった人か諦めが悪い類の人。あるいは中学受験で中途入学して来た面子が良いところだろう。だが、中学受験組も入学から何年も経った事で彼に対して遠慮というものを覚えたようである。

「早坂。今度フリーで家柄が悪くなくて鳳翔が満足出来るような容姿

と能力を持った娘をリストアップしてくれないかしら。ほら、四宮家の男子……ましてそのトップに就こうという者が学生時代に誰とも付き合った事がないとなると流石に沽券に関わりかねないでしょう？」

数年ぶりに齒がゆさを覚えながら早坂は自分に言い聞かせた。かぐやや早坂の胸の内を知らない。だから自分にとってこれ以上なく残酷な命令を出来るのだと。

(……私なら)

早坂はそれこそ自分が良いのではと思う。早坂家は元名家だし、早坂自身個人としての容貌も能力もそれ相応の自信を持っている。

しかし、だからと言ってここで自分がとは名乗れない。それはかぐやに彼が好きだと宣言するようなものだからだ。

最後に早坂は酒を煮て英雄を論じるかのようにこの場で他の女子を推薦し始めた。最終的にリストアップするだけ無駄だと印象付ける為である。

「……藤原さんとかどうなんですか？あの娘なら食欲旺盛で彼に負けず劣らず常軌を逸してるくらいありますし。顔もちやんと可愛いですし」

藤原千花。天才ピアニストとして名を馳せた他、以前ゲームで勝ったら友達になって貰うという謳い文句でかぐやを挑発し、見事勝利を収めた上にかぐやが試した秘密を守るかという試験をクリアした猛者である。

元々音楽によって彼とは顔見知りで、かぐやと藤原が仲良くなったのが契機だったのか早坂が見る限り藤原は彼とも親交を深めているようだった。

「藤原さんねえ。確かに仲は良いみたいだけど、あの二人が付き合うとなるとちよつと……そうだね。経団連理事の孫娘とかどうかしら？成績は学年一桁で顔も悪くないですし、大手造船会社の娘なら少なくとも学生時代の交際相手としては——」

「柏木さんですか？昔から知ってる仲ですけど、止めた方が良いと思いますよ？」

「あら。どうして？」

思わぬ早坂の言葉にかぐやは首を傾げた。

確かに柏木渚は一見したところでは癖のない将来の良妻賢母といった印象を受ける。だが、それはあくまで一見した限りにおいての話である。

実際のところは——

「何かあの人、藤原さんとは別の意味でおかしいというか……眞妃様にひつついてばかりで習い事にまで着いて行ってるそうですし。それも眞妃様が通っているものはことごとく」

食い気味に柏木を候補から外させようとする早坂はふと眞妃が親友と好きな男が付き合った場合どんな反応をするのか気になった。きつとロクなことにならないに違いない。

「眞妃さんねえ……あの娘って鳳翔に気があるわよね？いつも目で追いかけてるし、それどころか何回も鳳翔を校内でストーカーしてるところを見た事ありますし」

かぐやは会えば眞妃と皮肉の応酬を繰り広げる割に眞妃のことを

よく見ている。早坂は念には念を押しして聞くことにした。

「……まさかとは思いますが、若様と眞妃様が付き合う事をお望みですか？」

「はあ。誰もそんな事は言っていないでしょう。あの二人が学校で話しているところなんてほとんど見た覚えがありませんし、大体四宮の御曹司と四条の令嬢が付き合うなんて天地がひっくり返ってもあり得ません。それに、そんな事で鳳翔が誰かに弱味を握られるような事があつてはこちらにどんなとぼっちりが来たものか……」

「あら。若様に弱味が出来たら利用しようとも言うのかと思いましたが、違うんですね」

早坂に不思議そうな目で見られたかぐやは平素より一族内での位置取りのため兄たちの弱味を探していることを棚に上げてため息をつく。

「不調法者ね。あの子は今や私にとって唯一の肉親と言っても過言ではない存在よ。甥であり兄。余程の事が無い限り彼を利用する気なんて起きないでしょう」

なお翌年。

「……そうですか。それで、他に誰か心当たりないんですか？」

かぐやとこうして話をすることに面白さを感じた早坂はなおも話を続けようとした。

「どういう理由で貴女にリスト作成を頼んだと思ってるのよ……けど、改めて考えると鳳翔の女の子の好みが分からない以上、作りよう



を睨りながら器用に露天風呂に入って行った。

だからこそ早坂はシャワーを浴びていてもそれがつい数十分前に使われていたであろうことに気付かない。

「は？」

「え？」

目の前の衝撃的な光景に早坂は驚きのあまり手に持っていた小さなタオルを木の床に落とす。

「な、に……入って来てるの？……お前」

早坂は朝日に照らされた湯船に浸かる彼の肢体をマジマジと見る。何も男子中学生離れしたまるで御家人のそれのように艶やかで尚且つ均整がとれた筋肉だけではない。およそ十年ぶりに見る見てはいけないものまで見てしまい、早坂はその顔を真っ赤に染めた。それを誤魔化すかのように目を逸らすと、脱いだまま投げられたのであろう彼の浴衣と下着が視界に入った。通りで脱衣所に何もなかったわけだ。

だが、「深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ」とはよく言ったもので、ほんの一瞬の間ではあったが彼の視線が早坂の要所要所に突き刺さったのが嫌でも分かる。

幼い頃に黄光夫妻が都合で鳳翔と数日離れることになったことで彼がその間早坂家に預けられて泊まった際に——性別が逆であれば流石になかっただろうが——奈央に入れられる形で一緒に風呂に入った二人である。相手がたとえ不本意であったとしてもその時と比較しているのだろうかというのは互いに察するところだ。



「あ、あんまりジロジロ見ないでください……エツチ。すけべ」

言いながら早坂は自分から入っておきながら何を言っているのだと自問した。

「はっ倒すぞお前。ここに来るまで何見て歩いてたんだ？先客が居るって分かるだろ。普通」

彼の正論に何も言い返せない。

早坂は本当は彼が先に居ることを分かっていたのではないかと自分を疑った。

「……内湯あるんだから、そっち入って来いよ」

頭に巻いたタオルを触りつつぶっきらぼうに言った彼に早坂は自らの行いを棚に上げてムツとした。

「何ですか。一丁前に恥ずかしがってるんですか？初心な人ですね」

「は？……ちよっ?!?入ってくんない！」

落としたタオルを拾って頭に被せた早坂は湯を手の甲で掬って飛ばす彼のチャチな威嚇を無視して湯船に入った。

(に、逃げちゃダメ。逃げちゃダメ)

早坂は心の中で自分に言い聞かせる。今や互いに黙り込んで二人の距離はそう遠くない。互いに退いたら負けだと思っているのだ。

どれだけ時間が経過しただろうか。湯船の縁に片肘を置いた彼が先に口を開いた。

「……風呂入る時も付けてるんだな。そのシュシュ」

早坂は沈黙が破られたことに安堵しながら答える。そういえば最初にシュシュを付けてサイドポニーにしたのを見せた時あまり彼のウケは良くなかったななどと思い出しながら。

「ええ、はい。中に防水加工された通信機が入っていますので」

「そりや便利だな……それで、何？かぐやに何か命じられたの？俺を色香で惑わせとか籠絡して弱味を握れとか。でなきやわざわざお前が入ってくるわけないだろうしな」

返答に困った早坂は逆に彼に尋ねることにした。

「……籠絡、出来るんですか？私に」

「無理だな」

予想はしていたがにべもなく一刀両断され、早坂は自嘲しそうになるのを堪えて言った。

「心配しなくてもかぐや様は若様のことを唯一の肉親だとおっしゃってましたよ」

「……へえ。そりや光荣だ」

彼がそう呟いたのを最後に二人の間には再び沈黙が訪れた。

(どうしてこうなったんだろう)

今、早坂が問題にしているのは彼と裸で混浴していることも今の静寂でもない。確かに身体のうちがちがむず痒くなるほどに恥ずかしい状況であるが、もつと別のことだ。

あの日以来、一度彼と関係に前向きになった早坂ではあるが、だからと言ってその距離が縮まったという訳ではない。

彼が口では早坂の失策が巡り巡って眞妃との仲の崩壊に繋がったことを気にしていないと言いつつ心の中ではたいそう根に持っているであろうことは早坂にとつて容易に察せられるところだ。

中学最後の学年になった今でも時折ではあるが、彼相手に繊細に感覚を受容する早坂だからこそ感じ取れる微細な怒気が自身に突き刺さるのが分かる。

そのために早坂は彼相手に気後れし、なかなか距離を詰めることが出来ない。

挙句、彼の多忙さを言い訳にして自分を誤魔化す始末だ。

「……若様はまだ眞妃様のことが好きなんですか？」

だからこそ、勝負は今ここで決める。

「は？」

「だって眞妃様のことずっと避けてますよね？眞妃様が近づこうとしても」

頻繁に雁庵の側に付くために京都へ赴く彼であるが、それでもパーティには人脈作りのために欠かさず出席する。四条グループの令嬢である眞妃がそれに居合わせることはしばしばあるが、眞妃がせめて皮肉の応酬をと思って話しかけようとしても巧みに距離を取ったり眞妃が介入できないような大物と高度な話をしたりでことごとく不

発に終わっている。

元々学校では特に話さない二人であるから眞妃は学校で話しかけることが出来ず、彼の後ろを尾いて回り柏木がその後を尾けるという奇妙な絵面が出来上がる。

早坂は彼の行動がいわゆる「好き避け」だろうと察していた。

「……どういふ顔して会えば良いか分からないだけだ」

「……それって結局、眞妃様が好きってこと——」

「好きとか嫌いとかそんなんじゃない。お前は眞妃と名前で呼び合う仲間なんだろう？なら知っている筈だ。あいつが持つ強烈なカリスマ性を出るほどに欲しい。というか他に渡したくない。ただそれだけのことだ」

「……そうですか」

早坂は今の一体何なんだろうと考える。「好き」という感情を遠回しに言っているだけなのかそれとも今更早坂相手に眞妃への想いを取り繕っているだけなのか。もし前者なのであれば彼を面倒ではあるが可愛い人だと思おうし、後者であれば今なお隠されたことに呆れと悲しみを覚えるだろう。早坂はさらに踏み込んだ。

「じゃあ若様から見て眞妃様は女の子としてどうなんですか？」

「……さつきから何なんだお前は？しつこいぞ」

「これが最後の質問です。良いから答えてください」

「彼に圧を掛けた途端、早坂はその反応を見て急いで事をし損じたのだと悟った。」

「身の程を弁えろと言っている」

深追いし過ぎたと早坂は目の前の顔を歪めて禍々しい妖気を発する彼を見て自らの発言を顧みた。だが、彼を見る早坂の視線は次第にそのベクトルを斜め下へと向けた。

「……興奮、してるんですか？私の身体に」

「……」

湯船の中で足を組むことで隠そうとしているが、残念ながらそれでは隠せる長さではない。むしろ足を組んで圧迫しているせいでますます状況は悪化しており、見ているだけで両足に挟まれている物体がかなり窮屈そうなのが伝わってくる。

顔を再度赤く染めた早坂は自分の姿を今一度確認する。今の早坂は全裸で殿方からすればさぞや眩しいに違いない。

「恥ずかしいんですか？私に興奮していることが」

間違いなくこの場において主導権は早坂にあつた。なまじ二人が幼馴染であるために、単なる若主人と女性使用人ではありえないであろう状況が早坂にとっての天祐として降って沸いた。彼がその両足を開いた時、早坂の理性は遙か彼方へと吹っ飛んだ……訳ではない。

まともにそれを直視した時、乙女な早坂は微動だにしなくなった。

「……」

急に勢いが止まった早坂を平常心を取り戻した鳳翔が鼻で笑った。

「はっ。思い上がるな。俺が興奮したのはお前じゃなくて真妃。別に俺はあいつのことが好きってわけじゃないが、それでも異性としてあいつをベッドの上で滅茶苦茶にしたいとは思ってるからな。あくまでそれを想像しただけだ。アホが」

早坂はアホはどつちだと思ったが、それを知らず整った顔で小馬鹿にしたような表情を浮かべる彼は恥ずかしげもなく堂々と湯船から出ようとする。

このままではダメだと早坂は思わず手を伸ばし、温泉から片足を出した上で踏み出そうとその足に力を込めた彼の手を強く掴んだ。

「イッー！」

「あっ」

その気になれば箸どころか林檎すら握り潰せる早坂が不意に加減なく力を込めたことによる痛みのせいで彼があげた呻き声に瞬時に反応した早坂はその手を離す。しかし、これが災いし――

「ちよっ!?!」

ザッパーンという水飛沫の音が周囲の木々を鳴らすほどに大きく響いた瞬間、湯を掻き分けた早坂は後ろ向きに滑り落ちた彼をあわやのところまで抱き止めた。

結局のところ、早坂と鳳翔の間に何も起こらなかった。いや、早坂が湯船から出ようとする鳳翔の手をかなりの力で引つ張ったことで体勢を崩した鳳翔の足が滑った結果、事故のような形で局部に相手の手が触れたり頬が胸に当たったりというような体勢になりはしたのだが、鳳翔は頑なに早坂と一線を越えようとはしなかった。

早坂が自己嫌悪しながら外湯に入っている間、鳳翔は内湯に入り直して先程の事を考えていた。

(本当にアイツなんだったんだ？危うくほんの少しの間違いで取り返しのつかないところまで行くところだったんだけど……)

三年前の夏休みのように相手から一方的に手を出されたというような形なら兎も角、「事故の結果本能のままに過ちを犯してしまいました」となったら、今度こそ眞妃に顔向け出来なくなる。ただでさえ、眞妃が大学を卒業するまでに四宮の全てを掌握した上で四条家をどうにかしようと企んでいる現状でそれをしてしまえば、いよいよ自分が自分で居られなくなるようなそんな気がしていた。

(つーかそれで早坂の裸に目を奪われてた俺って……ほんとヤダ)

鳳翔は自身に流れる好色の血を恨み、女々しく考える。鳳翔は早坂の昔より一段も二段も膨らみを帯びていた胸や扇情さを帯びた腰回りに沸き立ちそうになった自分の血をかつて直接その目で見た眞妃のキス顔を思い出す事でなんとか抑えたのだ。

(あーもう。出よ出よ。かぐやの顔見て落ち着こう)

今日も平常運転で気持ち悪い事を考える鳳翔だったが、ある事に気付く。

(しまった。浴衣もタオルも向こうに置いて来たままだ……)

脱ぎっぱなしで外湯の近くに放置していた浴衣。早坂から離れるのに必死で手に取るのを忘れていたと思い出す。頭に巻いてたタオルはおそらくだが、途中で落としてしまったのだろう。もし、それらを取りに行つてまた早坂の裸体を見ても理性を強くしたままでいれるだろうか。情けないことに鳳翔にその自信はなかった。

取りに行つて早坂の身体に我慢できなくなるリスクを負うか、それとも裸のまま急いで部屋に戻つてかぐやに変態のレッテルを貼られるリスクを負うか。目下それが問題だった。

(まあ、新しいタオル取つてそれ一枚巻けば良い話だ。うん)

一昨日怒られたばかりだが、こうとなつては仕方ない。

鳳翔は内湯を出てタオルを探そうと――

「早坂、あいつ……」

内湯を出た先の廊下。綺麗に畳まれた浴衣とタオルがそこにはあつた。

流石に罪悪感で居た堪れなくなつた鳳翔は何がいけなかつたのかよく分からないが、後で早坂に会つたらとりあえず謝罪しようと心に決めた。

~~~~~



朝食を食べた後、荷物を纏めてチェックアウトした三人は今日日本で唯一ジユゴンが見られると噂の水族館に来ている。四宮グループの御曹司の鳳翔ではあるが水族館という施設を訪れた事は何回もある。小学生の時かぐやと一緒に貸し切りにももらった上で見に行つたのもそうだし、一般客が数多群がる中を翼と一緒に訪れた事さえあった。

そんな中、早坂は珍しく後ろめたそうな彼に声を掛けられたことで目を見開いた。

「その……ほんと、何というか……ごめん。色々」と

中学生のかぐやは向こうで水槽の中の魚介と睨み合つて哲学している。

自販機で買った飲み物をついでとして早坂に手渡す形で彼は話しかけたのだ。

早坂は気まずさで目を逸らしながら答えた。

「いえ、私が手を引っ張つたのが悪いんですし、別に若様が謝る事は……」

彼が真妃を今もまだ好きでいる事は承知している。手を出してほしくなかったと言えは嘘になるが、それはそれとしてむしろあそこでホイホイ手を出されていた方が今後彼を信用出来なくなつていたらどうと早坂は気持ちを新たにしていた。

「そうか」

「ただ……」



「藤原……って藤原千花のこと？ピアニストの」

「そう。昨日突然勝負しようと言って来て大変だったのよ。ゲームで負けてしまつてそのまま友達になることになって。本当に変な子よ」  
かぐやのボヤキを聞いて愉快だったのか半笑いした彼は朝つばらからステークを一切れ口に運んだ。

「まあ、良かったじゃん。久々に友達出来て」

「まだ認めたわけじゃありませんけどね」

おかげで早坂はまたかぐやが友人候補に密かに課す試験の採点者として駆り出される羽目になる。その内容を簡単に言えば、かぐやが候補者に対して秘密を守れるかどうかを試すのだ。早坂はそんなかぐやを臆病な人だなどと思う一方で、彼のためだと自分に言い聞かせてかぐやの情報を本家に流している自分が何を考えているんだなどと自省した。

「……それにしてもかぐやに勝負で勝つたんだ。あいつ」

「鳳翔はピアノやってたんだし、知ってるのよね。藤原さんのこと」

「まあな。そんな話すわけでもないけど……結局、俺は藤原とは勝負してないままだった」

早坂はどこか名残惜しそうに呟く彼の姿が気になった。

それから月日は経って、かぐやと藤原がすっかり互いを親友だと認識するようになる。

一方で早坂は悶々とする日々を送っていた。

気付いた時には彼と藤原があだ名で呼び合っていたのである。彼にあだ名で呼ばれる女子などの学年を見渡しても藤原しかいない。事実、藤原と彼がデキているのではないかなどという噂も立っていた。

それだけではなく、彼は京都などに足を運ばない休日に藤原と一緒にラーメンを食べに行くことが少なくない。テールブルマナーなどお構いなしで勢いよく食べたせいであろうラーメンのスープが跳ねた痕が残った彼の服を見つめる早坂は危機感を抱かざるを得なかった。

正直、早坂からすれば藤原は眞妃より遥かに厄介である。藤原はどことは言わないが早坂に持っていないものを持っているし、「藤原」として総理大臣を輩出した血族であることは鳳翔の相手として四宮家と敵対関係にある四条家の令嬢である眞妃より遥かに現実味がある。そうなれば早坂は太刀打ち出来ないだろう。搔っ攫われてそのままゴールインとなればお手上げだ。

だからこそ、早坂は藤原に牽制を入れることにしたのだ。

中等部の校舎。サッカー部の昼練には律儀に顔を出す彼が水飲み場で頭から水を被っていた時を見計らい声を掛ける。幸いにして人は居なかったというよりそのタイミングを見計らったのだ。

「そう言えば聞いていませんでしたね。どうして藤原さんとあんな風にあだ名で呼び合うことになったんですか？」

「なんか向こうの方から言っただよ。まあ俺から見ても掴み所なくて面白いヤツだからまあ良いかなって思ったわけさ」

「……………そうですか」

すると彼は思い出したように早坂に対して注意した。

「そうだ。お前が俺をどう呼ぶかは任せるけど、俺はお前を絶対あだ名で呼ばないからな」

「それは……どうしてですか？」

「藤原だったら女友達って事で済むけど、お前の場合そうも行かないだろ」

目を逸らしがちに言う鳳翔の意図を知らない早坂は微笑み混じりにからかった。

「翔くん、かわい〜??」

「……それ校外で呼ぶの絶対止めろよ。つかギャルモードの時だけにしてくれ」

「おっけー??」

「……ホントに分かってんだろいな」

今度こそ早坂は頷いた。すると牛の足音のような音がドタドタ響く。彼は来たかと呟き、早坂もそれに同意した。

「翔くんに早坂さん！珍しい組み合わせですね！」

「……藤原」

「もう、ダメですよ。翔くん。私を何と呼ぶんですっけ？」

「……千ちゃん」

早坂は彼の頬を指で小突く藤原に内心イラツとした。嫉妬である。にぱあと朗らかに笑った藤原は彼に正解ですなどと言った。それから早坂の方を一瞥した後、彼に話しかけた。

「二人で一体どんな話をしてたんですか？」

「んつとね〜??翔くんと一瞬にお寿司食べに行こうって話になってて〜」

反撃のため平然と嘘を吐いた早坂を鳳翔は勢い良く振り向いてガッ見する。

一方の藤原はたじろいだ。

「ああ、早坂さん親が四宮グループの幹部ですもんねえ。翔くんと一緒にお寿司食べに行くくらい仲が良くても全然不思議じゃないですよね〜」

その内、早坂は動揺する藤原に密かに同情することになる。

明らかに藤原は良くも悪くも鳳翔に面白い女としか認識されていなかったのだ。

~~~~~

ある朝。早坂はソワソワしていた。嫌な予感がして気が気じゃない。あろう事か彼がかぐや同伴だったとはいえ、かの藤原宅に泊まったのだ。総帥雁庵の健康診断の結果が芳しくなく、その余波で鳳翔の

京都行きがキャンセルになったのを機に、かぐやが遠回しな言い方で誘ったのだ。無論、藤原が快くオーケーを出した上でのことである。彼は自身の体調を鑑みて行くか行かないか迷っていたようだったが、結局藤原宅でお泊まりすることになった。あまりに急な事で早坂が介入する余地など全くなかった。

(かぐや様が一緒なら、変な事にはなっていない……よね?)

内心自問自答する。そろそろかぐやたちを迎えに渋谷の方へ行つた車が別邸に戻って来る頃だ。早坂の緊張は頂点に達しようとしていた。

(帰って来た)

防犯システムを管轄するタブレットを操作して門を開ける。黒光りする送迎車が別邸の敷地に入ってきた。建物の側に駐車し、降りて来た運転手が後部座席のドアをゴトンと開ける。鳳翔とかぐやはそれを待つて降りて来た。

「お帰りなさいませ。若様、かぐや様」

「……ああ」

どこか上の空な彼を早坂は訝しむ。いつもの覇気が消えている。彼は千鳥足のような足取りで自室へと戻って行った。早坂が不意に思うところでは、それは三年前と同じ彼だった。

「あの、かぐや様。あれは一体……?」

「なんか朝から変なのよ、あの子。遊び疲れたのかしらね。遅くまでゲームしてたから」





「……」

早坂は見てしまった。彼の手首が赤く腫れているのを。淡々と無表情で彼に尋ねる。

「藤原さんですか？それを付けたの」

「……違う」

「じゃあ藤原さんの姉妹のどちらかですか？まさかお母さんとか言わないですよね？」

「……な訳ねえだろ」

「じゃあ誰ですか？お父さんですか？それとも叔父さん？あるいは」

「妹」

吐き捨てるように言った彼に早坂は息を呑んだ。何と言って良いかわからない。早坂は藤原がかぐやの友人になるにあたって当然その家族関係その他は把握していた。藤原千花の妹と言えば――

「妹さんって小学生ですよね？小学生に手を出したんですか？」

「手を出したというか向こうから出された」

早坂は何を言ってるんだこの人はと思つて鳳翔をゴミを見るような目で見た。

「ははっ……武道を何種も収めてきた若様が手を出された？女子小学生に？妹さんってそんなにお強いんですか？それ達人どころの話

じゃないですよね」

「……ある意味強いと思う。起きた時には全てが終わってた」

早坂は嘘だと言つて欲しかった。いや、あるいは彼が言っている事は嘘なのではないかと疑っていた。彼が尋常でなく武芸に優れており、それこそ若かりし日の剣豪將軍足利義輝もかくやと言うほどである事は周知のことである。

崩れ落ちそうになる足を必死に踏ん張らせた。

「あの手の娘からしたら俺なんてカモに見えたんだろうな。飛んで火に入る夏の虫……つて感じか？あそこまで何というか……大体、襲いたい部門第一位つて何？二位以下に誰がいるの？他に何の部門があるの？人が寝ているところを拘束してそのまま……ええ？」

もう聞きたくない。早坂はいっぱいいっぱいだった。

「それで……どうするんですか？妹さんのこと」

彼が教師陣や各委員会の要職に就く生徒あるいはVIP組と呼ばれる面々を丸め込んで中等部あるいは高等部の校則を色々と変更させたというのは早坂も聞いたことがある話だ。

それが出来る彼ならどんな報復をするものか知れたものじゃない。

「……流石に小学生相手にどうこうするわけには行かないですよ。またやるなら話は別だけども」

全てを諦めたかのような目をした彼はそう言つてベッドに寝転がって呟いた。

「はア。どうしょ。結局こうなるんだな。俺は」



だが、心労が溜まるのはやはり恋愛頭脳戦のサポートだ。進級して半年が経とうとしている今になつても続くかぐやのある意味で彼以上に面倒な恋愛観による回りくどい作戦の数々のせいで早坂は日々疲労感に襲われている。

うっかりマスメディア部の紀かれんや巨勢エリカとの関わりを深くしてしまったのも早坂の疲労の増加に一役買っていた。

(今頃あの人は何してるんだろう？)

この一年半近くの間、四宮家の家督争いの状況は大きく変化した。黄光の息子である彼が圧倒的な力を見せつけたことで情勢は決したのだ。これまで形としては三兄弟の三つ巴だったのが今や黄光の家督継承が確定という状況になつている。むしろ、なおも捲土重来を期す雲鷹が黄光の力の根源と化した鳳翔を担ぎ上げて利を得ようとするのではとかぐやが予想するほどだ。血生臭い抗争が終わるとはまるで考えていないらしい。

(あの人も、散々手を染めたんでしようね)

あんな無理矢理に事を進めた裏には相当な犠牲を伴つたに違いない。

しかし、よくよく考えてみれば――

(むしろ、嬉々としてやってるんじゃないや……)

今の早坂は彼が真妃に向ける歪んだ好意について知っている。彼は真妃のことが好きな余り、真妃に好意を寄せる他の男子生徒の情報を掴むや否や、相当なスピードでこれを退学の憂き目に遭わせているのだ。それはあまりに異様な退学者数とその男女比に現れている。かぐやがこれを知った時どうしようもなく気持ち悪いと思う一方で、その隣に居た早坂はただただ無心になっていた。

(けど、実際私にそういうことしてくれたら——)

不思議と悪い気はしないんだろうなと思う自分が居る。早坂は早坂で七歳の頃から四宮家特有の教育をかぐやの隣で受けて来た分、彼への好意と相まってその手の行為に対する抵抗感是比较的薄れていた。彼にそれほどまでに執着してもらえたらどんなに気分が良いことだろうなどとどうしても考えてしまう。

「ほんと、昔に戻りたい」

考えても仕方ないことである。どうしようもなくなって、気を紛らわそうと伸びをした。

早坂にとってかぐやの近侍になる前の日々は——たえそれが奈央が糸を引いていたものであったとしても——幸せ以外の何物でもなかった。

かぐやにこき使われるようになった今となってはより強くそう思う。彼からの冷遇を元はと言えば黄光に注意されたが故のものだと思えば、かぐやからのぞんざいな扱いは彼ほど酷くはないが自発的に行われている分より厄介だった。

「どうせなら、あの時にそのまま……」

ベッドに寝転がった早坂は左手を胸に右手をデリケートゾーンにやりながらあの時掴んだ彼の感触を思い出し、今まで見てきた彼の色々な顔を脳裏に浮かべる。あの混浴から時が経って早坂が考えるに、真妃との行為を想像して興奮したという内容の彼の発言はただの言い訳だろうと結論が出ていた。あの時の硬い感触は今も早坂の右手に残っている。小刻みにその細い指を動かすその様はとても昔かぐやに男は性欲で動く生き物だなどと得意げに言い放った者とは思えない淫れぶりだ。

それから何分経っただろうか。

ふと、眞妃と親しげに話す彼の顔が目には浮かんだ早坂は舌打ちしうになった。興が削がれたとばかりに乱れた寝巻きを整える。

「ほんと、眞妃様じゃなくて私だったら良かったのに」

毎晩毎晩早坂は現実逃避のため一人幸せだった幼少期や意味のない仮定に浸っている。

それが早坂の日常の一部であった。

——プルルル、プルルル

「!」

深夜に掛かってくる電話という非常識極まりない代物に早坂は興醒めするもスマホの画面を見てはつと息を呑んだ。彼からの電話だった。ほんの一瞬喜びで舞い上がりそうになったが、すぐにどうせ仕事絡みだろうと冷静さを取り戻す。

「……若様」

『よう、早坂。そっちは確か深夜だろ？少し時間大丈夫か？』

久々に聞く彼の声。電話越しとはいえ、早坂の頬を緩めるには十分だった。

「いえ、問題ありません」

『そうか。手短に話す。そろそろ留学終えて日本に戻るつもりだから、かぐやにそう伝えてくれ』

感無量になった早坂ではあるが、ギャルモードでもないのに彼と素で話すことなど許されない。彼が眞妃と疎遠だった中等部の頃とは違うのだ。平静を装って彼に伝える。

「若様、よくぞご決断くださいました。別邸の使用人一同、心よりご帰還をお待ちしております」

これが今の早坂が彼に伝えられる精一杯の言葉だった。

ここ一年で負担が倍増したお守りのストレスと相まって嬉しさのあまり一筋の涙が目から溢れた。

『いや、俺ホテルに泊まるつもりなんだけど』

「……………え？」

『だ・か・ら、俺ホテルに泊まるつもりなの』

「……………なんで？」

思わぬ言葉についタメ口で喋ってしまう。案の定、彼は少し気を悪くしたのか声のトーンを下げて話し始めた。

『そんなの自分の胸に手を当ててよく考えてみろ』

先程までそのようなにして淫れていた早坂はビクツとするが、ここで引き下がるわけにはいかない。あくまで自分がこの別邸のトップとして彼の世話をしていたらというかねてよりの妄想もといシミュレーションを元に彼を別邸に繋ぎ止めるべく、即興でプレゼンテーションをし始めた。

### 補完編Ⅲ 早坂愛は取り戻せない

〔0〕

朝起きて別邸の使用人の管理その他を取り仕切ることになっている早坂は使用人たちや庭師への指示出しやかぐやの昼食夕食などの打ち合わせを終え、主人であるかぐやの元に顔を出して整髪や着替えを手伝う。時刻は七時過ぎ。昨夜掛かってきた電話についてかぐやに話したところ、その反応は意外と淡泊なものだった。

「そう。あの子が」

「……良いんですか？かぐや様が会長に熱を上げていることを知られたら、どうなるか分かりませんかよ？」

手にブラシを持つ早坂が嗜めるような口調で言うのも無理はない。これまでの実績が示す通り、四宮鳳翔という男の狡猾さは並外れている。おそらく彼がそれを知ったのであれば、すぐさま本家に伝えるというよりはかぐやの弱味として握り、いざという時にそのカードを切ることだろう。

それでも万一の可能性を捨てるべきではない。もし他の誰にも理解できないような思考を展開した結果として本家に伝えるようなことがあれば万事休すである。

「私は会長に熱を上げているのではなく、あくまで会長に告白するチャンスを恵んであげようとしているだけですけどね。あの子にそれをどうこう言われる筋合いはありません」

「……はあ」

また始まったよと早坂はため息を吐く。一学期間に会長が喫茶店



でバイトしていることを知り、偶然という体で乗り込んだことがありながらかぐやは未だに白銀御行への好意を否定し続けている。

至極、面倒くさい主人である。

「ただ、心配なのは鳳翔が会長に対して素っ頓狂な勘違いをしてしまうことね。ほら、あの子眞妃さんに気持ち悪いくらい執着してるでしょう？眞妃さんは会長と同じクラスだもの。心配だわ」

早坂は急にズシリと胸に重石が乗ったような感触を覚えた。それを知らないかぐやは思い出したように口を開く。

「念の為、石上くんも含めてあまり眞妃さんと関わらないよう釘を刺しておきましょうか。彼と眞妃さんのことについては二人にも分かるよう示唆する程度に」

「……それが宜しいかと」

かぐやが続けて言った言葉に早坂は平静を装って返事を絞り出した。

~~~~~

たとえば彼がかぐやや眞妃のことで白銀に対して猜疑心を抱こうが、彼が眞妃に好意を寄せた男子生徒を片っ端から排除していることを利用し、互いに弱味を握り合う格好に持ち込めば問題ない。そう判断したかぐやは彼が帰ってこようと相変わらず、迂遠な駆け引きが繰り広げられる恋愛頭脳戦を続けた。

例えばかぐやは生徒会解散中、白銀が所属するB組を訪れる口実と

して同じクラスに配属された彼に弁当を届けるという名目を使った。その後、自然な成り行きで白銀と一緒に弁当を食べようというのがかぐやの目論見だった。結局、すぐに選挙のことでそれどころではなくなったが。

また、白銀とメールのやり取りの種として彼と白銀の食事会について聞くということもあった。白銀が言うにはただ普通に食事しただけのことだったが、おそらく白銀が社交界などでの経験に乏しいことを利用した彼に様々な情報を抜き取られているのだろうというのがかぐやの推測だった。

そんなある日。吐血や憤死とまではいかないまでも、眩暈を覚えたかぐやは体調不良で保健室のベッドに居た。近侍として早坂はクラスの皆に隠れてかぐやの側に付き添っている。

「もうお終いよ！鳳翔に出てこられたらどうしようもないわ！」

#### 生徒会選挙。

かぐやは生徒会室での交流が消え疎遠になるのでは危機感を覚えつつも白銀の生活サイクルを慮って遠慮しようとしていたが、思わず「会長は会長が良い」などというお可愛い口説き文句もとい頼み方で出馬に消極的な姿勢を見せていた白銀を引き摺り出すことに成功。それより今日この日まで白銀の影で暗躍し、組織票の確保に励んだりや対抗馬・本郷勇人の出馬取り消しを誘発したりした。

ここまでは良かった。

だが、一年生で風紀委員の伊井野ミコが鳳翔に応援演説を頼んだことにより、一転して形成は甚だ厳しいものとなった。

いや、厳しいどころの話ではない。かぐやは自らが傀儡とした選挙管理委員会から今回の生徒会選挙からは記名投票制になるとのタレ込みを受け、趨勢が既に決してしまったと悟ったのだ。

嫡流の男子である彼が生徒たちにアプローチという名の圧力を掛

けては、出生理由からして四宮家中で弱い立場にあるかぐやでは対抗するのは難しいだろう。

人脈を活用しようにもVIP組の一員で白銀とは半ば腐れ縁の龍珠桃や同じくVIP組で鳳翔の親友・田沼翼の彼女である柏木渚というカードは役に立たない。鳳翔にかつて桃太郎呼ばわりされた龍珠は龍珠組の娘として鳳翔に対抗するための戦力に成り得るが、そうであるが故に使えない。柏木に關しては実家の大手造船会社のこともあつてか申し訳なさそうに協力を断つた。

他のVIP組は剣道部部长もオカルト部部长も彼に取り込まれて久しいので無理があり、とある外国の第二王子であるサハ部部长に至つては血相変えてとんでもないという様子で断つた。

ならばと鳳翔と伊井野の仲に亀裂を入れようと俗に言う離間の計を試みたものの、文字通り悪い男に引つ掛かったような状態の伊井野にそれは逆効果でしかなく、進退極まったかぐやは手詰まりに陥つていた。

「せつかく私がやって来た工作が鳳翔のせいで台無しよ！夜なべして作つた縫い物をあつさり燃やされた気分だわ！」

喚いたところで状況が好転する筈もなく。

自棄になつたかぐやはちんぷんかんぷんな事を言い始めた。

「こうなつたら、奥の手を使いましょう！…これまでの悪行を眞妃さんに全てバラすって言つたらあの子も引き下がるわよね!？」

「かぐや様。焦り過ぎです」

少なくとも、そのカードはかぐやの白銀への好意が彼にバレた際に切るべき少なくとも現時点では最強と呼べる切り札だ。学生時代の

生徒会活動のために使うのは愚行でしかない。当然、内心それは分かっているかぐやは俯きながら呟いた。

「……………どうしろって言うのよ。もう」

「今回は天災に遭ったと思って諦めましょう。生徒会室が使えなくなっても、会長との交流は続けられます」

二人の間に沈黙が流れる。

早坂は気まずい思いだった。さながら好きな人と妹の間で板挟み。これを打破する方法は早坂には分からない。四宮家のスーパーメイドだからと言ってかぐや以上の知謀と見識を持ち合わせているわけではないのだ。

「！」

ふと静寂を破るように近づいて来た微かな足音に気づいた早坂は寝台の下へと潜った。突然のことに戸惑うかぐやの前に現れたのは先程まで話題に挙がっていた人物その人である。

「お困りのようね。おば様」

「……………真妃さん」

どこか自信と気品にみなぎった佇まいの真妃は入室すると、かぐやのベッドのすぐ側まで近寄って腕を腰に当てたまま口を開いた。

「どうしてもって言うなら、この私が力を貸してあげなくもないわ」

「……………」

かぐやと眞妃の間には元来緊張関係が走っている。  
突然の申し出をかぐやが訝しむのは無理からぬことであった。

「ちよつと。何か言いなさい」

「どういう風の吹き回しですか？どうして貴女が私にそこまで……」

「そう難しく考えなくて良いわ。単に帰って来てからのあいつの行動が目に余るから、少し懲らしめようっただけよ」

戸惑ったかぐやは眞妃に尋ねる。

「どうやってあの子に勝つと言うんです？四条グループの力があつてもこの秀知院じゃ……」

「別に家の力なんて使わないわよ」

「はあ？」

曲がりなりにも高校生にして各方面に多大な影響力を持つ彼を負かすのは容易ではない。四条家の力を使わないのならば尚更である。現にかぐやはどうしようもなくなって投げ出そうとしていた程だ。眞妃が言うには発想の転換によつて容易に白銀は会長職に返り咲けると言う。

「良い？あいつにとつて生徒会選挙は所詮お遊びでしかない。そこを狙い目よ」

続けて眞妃が提案した方策を寝台の下に潜って聞く早坂はこういふところも彼は好きなんだろうなと思いたため息をついた。その微かな音を聞き分けた眞妃が早坂を呼び立てる。

「ここそ隠れたネズミちゃんも出て来て良いわよ」

「……」

観念して大人しく姿を現した早坂に眞妃は一瞥して告げる。

「あんたにも今回少し働いてもらうわ。別に良いわよね？」

早坂とかぐやは顔を見合わせる。かぐやが頷くのを見て早坂は口を開いた。

「どうしろと言うんですか？」

「あいつに少し探りを入れて貰いたい。折を見て私とおば様が彼を……そうね。生徒会室にでも呼び立てるから、そこを利用してちようだい」

そして日は改まり、旧生徒会メンバーが記名投票制への変更と保護者への子供の記名結果の通知の組み合わせこそが鳳翔の狙いだと気付いた後、昼休みに翼と昼食を摂っていた彼を既読が付かないことに剛を煮やした早坂が直接出向くことで呼び立て、眞妃とかぐやが待つ生徒会室へ彼を送り届けることになった。

早坂の仕事はその後だ。

愛しの眞妃がかぐやたちに協力することが面白くなかったのだから彼がプンスカと廊下を歩いているところに再び早坂は声を掛ける。面倒くさい彼女のようなことを言い出した。

「……なんで未読無視するんですか？」

「はい？」

「昼休みくらい時間あるでしょう？ちょっと見るだけじゃないですか」

当人に溢す程度には早坂の不満は溜まっている。直近の会話と言えば眞妃が彼に本物の愛とは何かを聞いた経緯について早坂に尋ねて来たことくらいなのだ。

「あーそうだな。次からは気をつけようじゃないか」

(絶対そんなこと思ってない)

狡猾で面の皮が厚い彼にしてはあまりにも投げやりで適当過ぎる物言い。自分が歯牙にも掛けられていないことが容易に察せられる。やはりあの温泉がターニングポイントだったと思いつつも早坂は追撃を続けた。

「聞きましたよ。伊井野さんと度々食事に行ったらしいじゃないですか」

眞妃から頼まれた話題について話を及ぼせる。ないとは思いますが念の為というのが眞妃の言い分だ。

「……お前、まさか俺があれを喰ったとでも言いたいのか？」

「他に何かあるんです？あの手の娘にお手付きしたら、何十年か経つた後でマスコミに性被害のタレコミされる危険性に怯えるのがオチですよ」

雑誌含め各種マスメディアには今でこそ四宮の手が及んでいるが、

数十年後もそうした状況が続いているとは限らないことに何かと慎重な彼が気付いていない筈がない。早坂はそれを利用して一気に決めようとするが、そう上手く行くものではない。

「はあ。余計な疑いを避けるため、あれの友達の大仏……元子役の眼鏡を毎度毎度連れている。詮索は無用だ」

澄まし面を保ち続ける早坂はあくまで心の中ではあるがそれがそこが過ちの内通者なのだと彼を嗜めた。

「知ってますか？世の中には嫩3Pなんてものがあるんですよ」

「……？」

最初鳳翔は早坂が大変なことを言い出したのに気付かず、呆気に取られていたが次第にネットサーフィンのせいで耳年増な早坂が何を言わんとしているのか察したのか冷たい視線を送った。れっきとした財界人が集うパーティー場で叔父の雲鷹が複数の女性に同時に声掛けする事案を複数回見たことがある彼からしてみれば、早坂が言った言葉は侮辱に近いものに聞こえたが、感情を荒げては余計な疑いを助長しかねないと極めて冷静に否定することに努めた。

「ハア？俺がそんな爛れた真似するわけねえだろ。一体俺のことを何だと思ってるんだ」

「若様がそう思っけていても他人はそう見るってことです」

「ええ……」

戸惑うような目で早坂を見る彼はため息を吐いて言った。



「少なくともホテルに連れ込むような真似はしていない。大体、そんなことしたら……」

「……」

「兎に角、かぐやが俺とあれのことで邪推し、それを生徒たちにばら撒いても無駄なことだ！勝敗は既に決した！マキとかぐやが手を組もうが、最早どうにも出来ない！俺は教室に戻る！」

言外に眞妃にそんな人間だと思われたくないというのが透けて見える彼はその示唆を誤魔化すようにして強い口調で捲し立ててから歩いて行く。早坂がそれをつ立つたまま見送る中、彼は立ち止まって静かな口調で早坂に尋ねた。

「そうそう。白銀御行と龍珠桃の仲についてなんだが……お前は何か知っているのか？」

「……いえ。去年の生徒会で会計監査と会計の間柄だったとは聞いていますが、それ以上のことは」

「そうか。なら、かぐやに伝えておけ。伊井野の身柄を狙っても無駄である」と

「……畏まりました」

そう言うと彼は今度こそ教室へと戻って行った。それを見届けた早坂は生徒会室へと足を運ぶ。

「どうだった？」

「本当に何もありません。ホテルにも連れ込んでいないと」

どこかソワソワした様子の眞妃に早坂は返答した。

残るは両親が滅多に居ない伊井野ミコの自宅だが、そのマンション並びに近隣地域の防犯カメラに彼の姿が写ったことはない。眞妃は彼と伊井野が男女の仲でないことを知って安心したのを誤魔化すようにかぐやに告げる。

「そう。残念だったわね、おば様。これであいつと伊井野ミコの疑惑で追い込むという手は使えなくなつたわよ」

眞妃の横に腰掛けるかぐやは重々しく口を開いた。

「なら、あれしかないようですね」

「……本当にやるんですか？」

早坂は二人に尋ねる。旧生徒会の最終的な覇権奪還のためにやろうとしているのは将来かぐやに悪影響が及びかねない程には決定的な弱味を彼に植え付ける危険性を伴った策なのだ。

「あの子のことですから、上手く切り抜けるでしょう。もちろん、私たちの方で彼本人や伊井野さんに危害が及ばぬよう力は尽くします。ただこの学園の理事長でもあるお父上<sup>黄光</sup>にはお伝えしますが、そこは得意の弁舌で何とかしてもらいましょう」

「その、かぐや様。若様から伝言が」

「何ですか？それを早く言いなさい」

タイミングを窺っていた早坂が彼からの伝言を両名に伝えると、二人は顔を見合わせた。

「つまり、鳳翔は私がどうしても勝ちたいなら伊井野さんを……」

かぐやはそこで言い淀む。彼がかぐやに与えた最後のチャンスとはすなわち、退学ではなく――

察しの良い眞妃もかぐやと同様に彼の言わんとすることを悟り、つまらなさそうな顔をしながらかぐやに尋ねる。

「おば様はどうするつもりなのよ？」

「生徒会選挙よ。そんなこととして一線を越えるわけにはいかないわ。それにどうやってもちちらのイメージダウンは避けられないでしょう。あの子は私がそんな短絡的な真似をすると思っているのかしら？ 全くくだらないコケ脅しだわ」

根は傲慢不遜な鳳翔に侮られたのだと解釈したかぐやはぶつくさど文句を言うが、これは鳳翔が白銀と龍珠の間柄について言及していたことを早坂が伝えなかったがために起こったすれ違いである。

「かぐや様。若様は人を試す癖のようなモノがありますので……」

取りなすような早坂の言葉に眞妃が鋭く反応した。

「何？ その口振りだと愛は試されたことがあるのかしら？」

「まあ昔……」

「へっ、へえ。超ウケる！」

こんなことでも眞妃は嫉妬心を見せるらしい。

早坂は彼と眞妃が悪い意味でお似合いだと心の中で恨み節を吐い

た。

そして結局、かぐやと真妃の目論見通りに白銀御行は再び生徒会長の椅子に腰掛けることとなる。

~~~~~

一旦伊井野政権を実現させた彼だったが、かぐやたちの仕掛けた罠にハマリ存外気落ちしているようだと思つた早坂は彼に差し入れをする。少女漫画『今日は甘口で』である。

これが失敗だったと知る前日の夜。今日も一日疲れに疲れた早坂にとつて数少ない癒しの一つであるかぐやと下らない話をしている。

「弁当……またですか」

一学期の頃。かぐやが白銀の手製弁当に入っていたタコさんウイナーに興味を示したことがあつた。いつものよく分からない理屈によつて、かぐやは弁当交換を白銀の方からやらせるよう仕向けたいと考えた。

そのせいで料理人たちは突発的に興が乗つて主人の弁当を豪華にする気分屋の汚名を背負わされ、別邸の管理者として食材の発注を担う早坂は急ピッチで白銀の好物である牡蠣を含む旬の食材を産地直送させるべく骨を折ることになった。

「今度は私が弁当を作ります」

「ええ……」

胃袋作戦。男を落とす上で言うまでもない常套手段である。  
かぐやは会長との弁当交換によってこれと自身が会長の手料理を  
食べることを両立せんと言うのだ。

「この私が珍しく自分で弁当を作るのです。会長が興味を示さないは  
ずがありません」

「はあ」

「どう？早坂。料理人が急に体調不良になったことにしてしまいまえ  
ば不自然じゃないわよね？」

「ええ……まあ、良いんじゃないですかあ」

どういわけかIQが著しく下がっているかぐやに対し、早坂は投  
げやりになった。かぐやお嬢様の我が儘一つでどれだけ自分や料理  
人たちが振り回されているかよく知っている分、今となっては諦めの  
境地に至っていた。

（手弁当……か）

早坂は彼に手弁当を持っていく自分を妄……想像する。幸いにし  
て二人の弁当の献立を料理人と相談して決められる立場にある分、彼  
の食の好みは十全に把握していた。だがしかし。

（すっごく微妙な反応されそう……ん？）

「あの、かぐや様。若様の事はどうするおつもりで？」

「そんなの購買か何処かで買って来てもらえば良いでしょう？」

「……かぐや様が若様の弁当も作ったら良いじゃないですか」

「だってあの子と会長の食の好みは全く違うんですもの」

例えば白銀は牡蠣を好物とするが、鳳翔は逆に牡蠣があまり好みではない。それにかつて公家や武士が学ぶような包丁道を会得した彼に手弁当を差し入れるのはハードルが高いというモノだ。

「だからと言ってそれはあんまりなんじゃ……」

「なら早坂が作れば良いじゃない」

「……」

何も言い返さなかった早坂はこれで良いのか美味しいと思ってもらえるのか半信半疑になりながらも手弁当を拵える。

そして翌日。電話への応答もメッセージへの既読や返信もなかったので、早坂は仕方なく彼を呼び立てにB組の教室へと向かった。

しかしやたらと騒がしく、おまけに彼は不在だった。早坂の来訪に気付いた知人が話し掛けて来る。

「あ、早坂さん。今ね、四条さんと四宮君と連れ立って教室を出てってさ。あの二人やっぱり何かあると思わない？」

「う、うん」

早坂は情報の仕入れ先である友人の話に引き攣りそうになる自身の顔を必死に制御する。

「四条さんがね、四宮君に“無視すんな、バカ”だって。少女漫画みた

いだよね〜」

「へ、へえ……」

(しまった……)

彼の少女漫画<sup>今日あま</sup>への読了後の感想に洗脳効果があるという斜め上過ぎるモノがあった。考えてみれば、彼が少女漫画を読めば眞妃が食いつく可能性は否定できない。かぐやがその洗脳とやらに引つ掛かつて思わず白銀からの水族館デートの誘いを断った例もあるので、眞妃が同様に普通でない状態に陥る危険性は存分に有り得るだろう。

「やっぱりあの二人ってそういう関係なのかなあ」

「そ、そんじや、うち用事あるから行くね〜」

早坂は彼と眞妃が行きそうな場所をあちこち探す。独占欲が常人の万倍は軽くある彼ならば、しおらしい姿の眞妃をあまり人に見せまいと人気のない場所に連れ込んでいるに違いない。早坂はそうした場所をあちこち探してやつとの思うで二人を見つけた。

(居たっ……!?)

早坂は目を疑った。彼が眞妃に対して両手による壁ダアンをしている。二人の顔の距離は今にもキスするのではないかと言うほど近い。早坂は呆然として身体が上手く動かない。

(何、してるの……?)

普段おちやらけてばかりの彼はかつて巷で言われていたようなSっ気漂わせる王子様キャラの雰囲気醸し出し、対する眞妃は恋に

堕ちているヒロインのような顔をしている。

「これではまるで――」

「お前それってさ、俺に気があるってことで良いよね。え？」

「気があるっていうか……」

今にも告白しそうな雰囲気、頭が真っ白になった早坂はギャルモードで突入する。

「あつれれ、翔くん、四条さん！こんなところで何してんの？まさか二人で逢引きい？」

二人は一気に早坂の方へ顔を向けた。彼はしまったと壁ダアンを解き、初心な眞妃は顔を真っ赤にして逃げて行く。追おうとする彼を早坂は後方から床に締め倒した。僅かに呻き声を上げた彼が睨んで来て、早坂はその表情とは裏腹に悲痛な思いを抱いた。

「早坂、お前さあ」

拳を握り占めプルプル震わせている彼が完全にキレていることを早坂は察する。

それでも、どうしても言う必要があるのだ。

「本当は分かかっておいでの筈。眞妃様は四条の御令嬢。若様であつてもどうにもならない相手」

（そうだ。どうにかなつちや、私が困る）

それと同時に薄々彼ならどうにかしてしまふのではと一瞬思う。念には念を押し、諦めるよう彼に言った。



「それと、料理人たちが相次いで倒れたので今日の弁当は私が作りました。どうぞお召し上がりください」

見え透いた嘘を早口で捲し立てる。

こめかみをピクピクさせて顔を背ける彼の怒りが最高潮に達しているのが見て取れた。

「仮にそうだとして、何故それを朝に言わない？」

「……ちゃんとメッセージで送りました」

「ちゃんと仕事用端末の方に送ったか？まさかとは思いますが、プライベート端末の方に送ったとか言わないよな？」

凶星を突かれた早坂は冷や汗をかくと同時に、改めてお前と私的な交流を持つつもりは一切ないと言外に言われたような気がして胸が張り裂けそうな思いを抱いた。

~~~~~

早坂は自らが抱える想いをほとんど他の誰にも話したことがない。彼本人にすら結局言うことはこれまでなかった。唯一、幼い頃にその胸中を母の奈央に語ったのみだ。

「早坂、マキの男装指南宜しくな」

だからこそこういう命令を彼はその残酷さを知らずに言う。何が悲しくて好きな人と恋敵の密会の手伝いをしなければならないのか。

しかし、抗議などすれば今ここで早坂の好意がバレる可能性が出てきてしまうし、そうでなくとも彼の不興を買ってしまうだろう。

「……」

早坂は最後の抵抗としてかぐやに視線を送った。

少なくとも名目上早坂はかぐやの最側近。いくら彼が嫡流の男子で、今の段階から将来の家督継承が確実視されていると言っても、本来今この場で早坂を顎で使う権限はない。今も別邸で寝泊まりしているならいざ知らず。かぐやが否と言えばこの場を逃れることが出来るのだ。

しかし、かぐやはそんな早坂の胸の内を知ることなく、やりなさいと目線で言ってきた。実際、かぐやがここで止める理由はない。今のかぐやと彼の関係が微妙なバランスの上に成り立っている以上、こんなところで彼と軋轢を生むようなことをわざわざする必要がないし、彼が早坂に限らずかぐやに属する使用人を勝手に使うようなことは今に始まった話ではない。かぐやはかぐやで彼に許可を取った上ではあるが、その人員を借りることは少なくなかった。

そもそも早坂が真妃に男装を教えることに抵抗感を感じていることなどかぐやは知らない。

結果、早坂は真妃にマンツーマンで男装について教授することとなる。

「リップは出来る限り自然な色合いにした方が良いです。チークも同様に」

完全記憶のような真似事得意とするかぐやと違い、真妃の十八番は選別記憶である。とはいえ、言われた事を全て一度で覚える程度のことはその気になった真妃にとって朝飯前だ。天才を越えた天才で

ある弟と比肩しようとする努力を怠らず、さらには『昭和の怪物』四宮雁庵の真の後継者と目される彼の隣に並び立てる才女になろうと研鑽を積み重ねただけのことはある。

「こんなものかしらね」

「はい。これならご友人方にも眞妃様だと見破られることはないかと」

自身ありげな眞妃に早坂は賛辞を贈る。実際、眞妃の男装は早坂からしても合格点を遥かに上回っていると言えるぐらいには上出来だった。なお、眞妃に並々ならぬ執着心を抱く柏木渚サタンには一目で看破される。

「そう。彼にも見せたいところだけど、もう寝ているわ……だから、行っても無駄よ」

「……」

ミラー越しにガンを飛ばされて一瞬目を大きく開いた早坂に眞妃は追撃する。

「今も好きなんでしょ？彼のこと。挙句、学校で翔くんなんて呼んだりしちやって……」

未だにおば様が気付かないのが不思議だけど続けた眞妃は早坂の方を一瞥する。

「よく覚えておきなさい。私は彼をもう二度と離さない。絶対にね。だから、奪おうたって無駄よ」

「……別に、奪う気なんて」

現実的に考えれば、かぐやの嫁入りと彼の嫁取りには数年のタイムラグが生じる筈。その間も彼と真妃の関係が続いているとは考えにくい。早坂にとつての勝負どころはそこ。あくまで彼と真妃が再び疎遠になってから、アプローチを掛けるのだ。その数年だけでも再び彼の一番になれたらそれで十分であると早坂は考えている。

つまり、今はまだ再び彼に近づく気はなく、真妃から奪うつもりと  
いうのは毛頭無いのだ。

「そう？なら良いけど」

こうして場は収まった。

だが、やはり二人がイチャコラするのを見たり聞いたりしていると  
心に来るものがある。

例えば奉心祭二日目のこと。

「聞いた？四宮様、昨日ホラーハウスのロッカーで歳下の男の子とキ  
スしてたんだって」

聞き耳を立てながら早坂はすぐに歳下の男の子というのが男装し  
た真妃のことだと分かった。

進めていた音響機材オーディオを確認する手が一瞬止まる。

「うわあ。田沼くんを柏木さんに盗られたことへの腹いせだったりし  
て」

「ありそう」

あるわけねえだろタコと思いつながら早坂は平静を取り繕って作業を続ける。今日の早坂はステージで友人二人をバックダンサーにして、観客の前で歌う予定だ。文化祭に相応しい明るい歌詞と真逆にも等しいこの状況を呪いたくなる。どんな気分で歌えば良いのか早坂には分からない。

十年近く続くこの厳冬。最初の頃のように温まるための暖があると言うわけでも無い。

いや、昨日彼が眞妃同伴ではあったが早坂のクラスのコスプレ喫茶を訪れて、最初に彼に珈琲を出した時のことを覚えていてくれたことが分かったときは思わず頬が上気した程には嬉しかったが、ここに来たのあまりの落差はあまりにも辛い。

(そんなところでキスするくらいなら、普段からホテルで……)

早坂は二人が恋のABCのCまで到達しているのではと疑い、まるで脳を炙られたかのようにジリジリとした感覚を味わった。

なお、本日目撃者の日暮れ三名以降。

噂を聞きつけた友人たちが早坂に話しかけて来る。

「早坂って四宮くんとどうだったの実際？あだ名で読んでるんだよね」

「あ、それ気になる。昔ファンクラブ入ってたんでしょ」

「う、うん。なんか幻滅したっていうか。あの人、結構ズボラなところあるしい」

嘘である。その程度で幻滅するくらいならとつくの昔にしている。物心付いた時から、彼はそういう生き物だとして早坂の頭に刷り込まれているのだ。それに彼の存在が早坂の精神状態においての頼みの



「疲れた」

やっとの事で作業が終わり、貸し切った女性従業員用の下手な銭湯より広い風呂で羽を伸ばす。

（あの人が真妃様と付き合ってなければ、ここで二人で混浴なんてことも……あの時みたいに）

二人が交際状態にあることを知っているのは以前の白銀の合コン出席の件で彼を白銀救出に向かわせた時にかぐやが彼を着けていた——白銀ならいざ知らず、甥の鳳翔を連れ帰るためという名目なら角が立たない——時に近くで二人の彼らの会話を聞いたことが切っ掛けだ。

その後、奉心祭二日目の夕方にかぐやが告白方法について彼に聞く際にさり気無く真妃との交際の切っ掛けを尋ねた時、顔を俯かせた早坂がどれほど心痛めたことか。何が「エモい雰囲気になったところで俺からマキにキスした」だ。早坂はそれを今になっても引き摺っている。

気を紛らわすための行為がいつまでも続くはずはなく。

早坂は湯船に顔を沈めてあぶくを立てた。

（何考えてんの？私……）

自分の妄想が行き過ぎたことを反省する。

しかし、その分奉心祭で聞いた噂話がフラッシュバックしたせいで強烈な胸の痛みに襲われた。

時折ふらつきながら、脱衣所で着替える。実のところ、仕事はまだ残っているのだ。

メイド服を着て藤原宅から帰って来たかぐやを出迎える。かぐやの着替えの手伝いも早坂の仕事だ。かぐやはここ暫く一年以上前のような状態であったのが元通りになっている。気付けばかぐやは深いため息を吐いていた。

「はあああああ」

「どうしたんですか。かぐや様。せっかく会長と付き合えたのにため息なんかついて。幸せが蜘蛛の子散らして逃げて行きますよ」

「貴方が何度も無視するからでしょう!？」

早坂はそうだっただろうかと訝しんだが、自分で思っているより追い詰められているのかもしれないと思い直した。一方、一転して落ち着いた様子のかぐやはそんな早坂をまじまじと見つめる。

「何かあったの？」

「いえ、何かと言うほどでも」

別に特段何かあったという訳でもない。ただただ黄昏ていただけだ。

「本家の方と何かあったの？」

「いえ、そういう訳では」

だが、かぐやは執拗に問い詰める。

「なら、鳳翔と何か？」



早坂は思わず、ビクツとする。

それを見たかぐやが二人の間に何かあると察したことが早坂自身にも分かった。

「……そう言えば鳳翔はヨーロッパに出張していましたよね。柏木さんから聞いたのですが、眞妃さんもイタリアに行かれたのだとか」

心の中でやっぱりと思う自分を早坂は知覚した。オンラインを活用すれば幾らでも綿密な連携が取れる時代にわざわざあの彼が海外出張など何かあるに決まっている。本人は直にこの目で確かめたいなどとあれこれ言い訳を並べ立てていたが。

「もしかしたら……現地でこっさり落ち合ったのかもしれないわ」

今頃、二人で何をやっているのだろうか。

早坂は思いを馳せる。どうせ破廉恥なことに違いない。

「早坂」

不味い。

早坂は冷や汗をかく。このままでは自身のブレーキが壊れてしまうと危機感を覚え、正気を疑うような瞳で見つめて来るかぐやにそれ以上はやめてくれと早坂は心の中で叫んだ。

「貴女、鳳翔のことが好きなんですか？」

(あーあ)

よりにもよってこのタイミングでかぐやに長年心の中に秘めてきた自身の想いを悟られたことに早坂はやり場のないやるせ無さを覚える。最悪のクリスマス。そんな言葉が早坂の脳裏を掠めた。

「1」

完全な防音設備を誇るかぐやの部屋に張り詰めた空気は真冬の早朝のように凍り付く。先に口を開いたのは早坂だった。

「別に、好きじゃない……ですよ。あの人の事なんて」

「嘘ね」

頬を赤くして目を逸らす早坂の反応は単に早坂が初心だからという訳ではあるまい。照れ隠しという言葉が直ぐにかぐやの脳裏に浮かんだ。

「嘘じゃないです。あんなクズで人でなしでどうしようもない人ですよ。好きになる訳ないじゃないですか」

「いいえ、嘘よ」

今のかぐやにはそう判じられる訳がある。いや、かぐやでなくとも今の早坂の顔を見たならばすぐに分かるだろう。

「ふふっ。貴方もそんなに誰かを好きになるものなのね。しかも、その相手が……お可愛いこと」

その瞬間、一筋の涙が早坂の目から零れ落ちた。それを見て、かぐやの思考は散々自分を煽り続けてきた早坂への意趣返しあるいは今後の自身の四宮家中での舵取りどころではなくなった。

(これは……重症ね。でも、まさかここまで)

何もかぐやはかねてより鳳翔と早坂の関係にはつきり勘付いてい

たという訳ではない。確かに観察眼においても並外れているかぐやであるが、二人の間柄はかぐやから見れば、四宮家の御曹司と早坂家の娘として……そして、四宮鳳翔と自分の近侍としておおよそ納得の行く範疇に収まっていた。

例を一つ挙げるとすると、早坂が学校で鳳翔を藤原に倣って「翔くん」などとあだ名で呼ぶのは、進級と共に混迷さを増して行く学園内の女子社会で立場を高めて多くの情報を仕入れ易くするためであり、鳳翔が早坂の振る舞いを受け入れたのはひとえに妹分のかぐやへの配慮によるものだと解釈していた。

ただし、二人に怪しい点が一切なかったと言えば嘘になってしまうだろう。

実際、かぐやは中学時代にかぐやの甥っ子の彼女になるのは藤原千花かあるいは早坂愛かという耳を疑いたくなるような議論をする人々を見たことがあるし、中学三年生のある時期においては二人が学園外でも親しげに言葉を交わす場面を何度か見た覚えがある。

とはいえ結局、二人の関係を疑う契機となったのはやはり翼と鳳翔の密通疑惑を暴きに揃って鳳翔の拠点となっていたホテルに突撃し、鳳翔とかぐや・真妃の対談に早坂が同席した際にほんの少しの間ながらも二人の間に湿っぽい雰囲気醸成されたことである。

さて、それ以外ではどうだろうか。

(もしかして――)

一年と少し前、生徒会の活動を通じて降って湧いた自身の疑問を解決するべく早坂に調査させた末、鳳翔が四条真妃に好意を抱いた男子を場合によってはその家族ごと排除している疑いがあるなどという報告を早坂本人から受けた時のことを思い出す。

（あの時の死んだ目をした早坂は鳳翔のやつてる事に引いてたんじゃなくて、もつと別の感情で……ていうか、感情そのものを失って……）

それを知った時の早坂はどのような心持ちだったのだろうか。

振り返ってみれば、早坂が藤原に追従するかのような形で学園内限りではあるものの鳳翔をあだ名で呼びだしたのは早坂自身の好意の現れだったのかもしれないと今なら思える。

「二体、いつから……」

「ですから、好きじゃないですって」

動揺の余り、早坂はらしくもなく声を震わせる。そこまで頑なに否定しなくても思ったかぐやだが、他ならぬ自分自身が早坂の態度の原因ではないかと思いついた。かぐやの近侍として本家の御曹司である鳳翔に好意を抱いていることに後ろめたさを感じているのかもしれない。

「もしかして、ずっと前から」

「……」

早坂が好意を秘め続けていたとして、その感情が起こったタイミングが掴めない。とはいえ、中学生活がだいぶ過ぎていた頃には早坂がその手の感情を抱いていたのは確実である。しかし、いずれにせよ二年以上も感情を押し殺して来たとするならば、それは大概である。

（ちよつと待って。てことは私……）

かぐやは思い出す。九月に場の流れの結果だったとはいえ、半ば無理矢理早坂に白銀を落とさせようとした時のことを。また、白銀が

盛り場に行こうとした際、既読の件の落<sup>意趣返し</sup>し所として鳳翔に行かせるという代替え案がなければ危うく白銀を連れ出させるため、早坂にそのような場所に赴かせるところであったことを。いや、鳳翔に行かせた時点で早坂には残酷な話だったかもしれない。

あたかも走馬灯のように記憶が鮮明に甦る。当初の見込みよりずっと重い話にかぐやから余裕は消えてなくなり、血の気が引くような感覚に襲われた。

「早坂は鳳翔とどうなりたいの……？」

「別に、どうにかなりたいなんて訳じゃ……」

さて、困ったことになった。この様子では人様の彼氏にみつともなく熱を上げるななどは口が裂けても言えそうにない。

かぐやは早坂と眞妃の板挟みに頭を抱えた。前者は自身の近侍であるだけでなく、これまで散々無茶振りその他によつて苦勞を掛けている。一方で後者はかぐやより立場が強い鳳翔と縁あつて好き合っている存在だ。

現状、かぐやは鳳翔に下手に仕掛けるような真似をすべきでないのは明らかである。経済的に困窮している白銀御行が鳳翔の庇護を受けたというのはかぐやにとつてある意味で迫害よりもタチが悪い。近侍を使つて自分を陥落させようとしているなどと鳳翔に邪推されれば、かぐやだけでなく白銀一家までもが危うくなる。

しかし、この状況を放置するのも長年早坂に尽くされた身として居心地が悪い。長兄<sup>黄光</sup>が尊ぶ概念である”ノブリス・オブリージュ”の精神を——父親の逆を行く鳳翔がどうであるかはともかく——かぐや本人は心得ていた。

（ただ、それだと眞妃さんは——）

四条眞妃が初等部の時以来持ち続けている想いを把握する身とし

て、曲がりなりにも自分の近侍である早坂をけしかけるような格好になるとなれば、流石に居た堪れなくなる。

確かにかぐやは眞妃と十数年来独特の緊張関係にあるが、それでも心の底から嫌っている訳ではない。むしろ姉妹のように仲良くなりたいたいとすら思うこともある。

(八方塞がりね。こうなったら仕方ないわ)

このような時は人に聞くぐらいでしか打開策を得られまい。スマホを手にとったかぐやが恋愛面で話を聞くとなれば、やはりその相手は柏木渚である。柏木は眞妃の親友でもあるのだが、他に相談できる人間がない以上やむを得ない。

鳳翔の保護下にある白銀に聞くという選択肢は完全に万一の際に鳳翔の追求を躲す余地がなくなるので、没。石上は恋愛をかぐやに指南される立場であり、伊井野は世に言う思春期風紀委員でまともな返事が返ってくるとは思えない。藤原はかぐやから真面目な相談事をする相手として全く信用されておらず、眞妃本人に聞くのは言うまでもなく論外である。

クリスマスイブの夜、柏木渚。どういう訳か暫しの間のタイムコールを経てやっと柏木はかぐやからの通話に応答した。少し屈んだ早坂がかぐやの側で耳を立てた。

『四宮さん。どうしたんですか？あつ……』

早坂は柏木が漏らした小さな音に反応し、耳を疑う。しかし、すぐに状況を察したのか頬を赤く染め、少し落ち着かない様子でかぐやの側から離れた。

「いえ、大した話ではないんですけど……今、時間大丈夫ですか？」

『いつ、いえ！大丈夫ですよ！何でも聞いてください！……もう、やめてよお』

『え、良いじゃん』

「？誰か居るんですか？」

血縁の鳳翔や果ては眞妃にも匹敵する耳の良さを持つかぐやだが、幸か不幸かその手の行為に関する知識はあくまで机上のものに過ぎない。外泊先であるスイートルームを満喫していた柏木は助かった。

『あー。今、彼とお泊まりしてて……次やったらぜったいに許さないからっ！』

『悪かったって』

「えつと、もしかして喧嘩中だったとか……？」

『い、いえ！何でもありませんよ！気にせず話してくだっひゃい……翼ア？』

電話先の声の応酬に困惑したかぐやだったが、気を取り直す。自分ではどうにもならない事態を当然ながら鳳翔関連の話だと悟られないようボカして話した。

『成る程。知り合いが道ならぬ恋をしていてしかもその相手は彼女持ち……え？会長って彼女居たんですか？』

「？誰も会長の話なんて……ああ！そうです！そうです！そんなんです！も、どくすれば良いのかなあって」

この間の凍<sup>水</sup>つた時を除き、知り合いの話という枕詞を連発してきた甲斐があつたのだろうか。偶発的に巡って来た都合の良い勘違いかぐやはあわやのところで掴み取った。最も、これには重大な代償があるのだが、閑話休題。

『……そうなんですネ。ん、ここは悔いが残らないよう奪つちやいましよう！』

「う、奪う!？」

実際に聞くと思つていた以上に過激な言葉にかぐやは狼狽えた。まさかその彼女というのが誰よりも敬愛する親友のことであるとは夢にも思つていない柏木はイケイケだった。

『はい、そうです！これでもかつてぐらい思いつきり誘惑するんです！四宮さんに迫られて落とせない男性なんて居ませんよ！』

「は、はあ……」

困惑気味のかぐやは早坂でも同様かと改めてチラリとはあるが彼女の容姿に目を向け確認する。四宮家にメイドとして仕える者はいずれも容姿端麗であり、早坂もその例に漏れてはいなかった。

『でも、まずはそこまで行かないとダメですよ……考えられるのは、例えばあちこち連れ回して疲れたところをガブリと行く……とかですかね』

『ガ、ガブリ……』

かぐやは早坂が鳳翔を取り押さえ、その首筋に噛み付く絵面を想像した。それはまるで飢えた虎豹が地に堕ちた鳳凰を仕留めるかのよ



うな光景である。

『はい。証拠写真だけ撮って見せる方法もありますけど、四宮<sup>証</sup>さんが<sup>残</sup>やると問題ですよね……うくん。でも、四宮さんなら相手の彼女さんを少し牽制するだけでも大分効くと思いますし、そこまでしなくても良いかもしれません』

『そ、そうですか……』

少し念を入れて礼を言ったかぐやは通話を切り、部屋に残ったままの早坂に顔を向けて面と向かって言う。

「聞いた？ 疲れたところをガブリ……だそうよ」

「疲れたところをガブリ……」

復唱する早坂の目は虚ろである。かぐやは少し煽り過ぎたかと冷や汗と共に目を二度三度瞬かせる。万一の時の言い訳を考えておこうとかぐやは次善策に走り始めた。

~~~~~

12月27日。諸々の支度を終えた鳳翔は落ち着かない様子でかぐやと白銀のデート場所へと向かうリズムに乗っていた。現在習得中の言語が収録された音源を耳に伝えるイヤホンをしながら外の景色を見るフリをして、チラリと視界の片隅に映った自身の横に座る早坂の姿を捕捉した。

現在、早坂の姿はいつもの早坂のそれではない。ハーサカ状態の時

のようなカラーアイコンとウィッグを使うだけでなく、俗に路上でストゼロ飲んでる系と呼ばれる格好であり、ツインテールによつて髪を纏めていた。

(マジで何なん？その恰好……)

生粋の御曹司である鳳翔は世俗にいる神待ちギャルのような生き物とは縁遠い人生を送つて来た。当然、免疫のなさからそのような状態やそれに扮する早坂の姿には困惑する。

タチの悪いことに、早坂が同年代随一と言つても差し支えない程に化粧や服飾に通じているせいも、同じツインテールでも眞妃のそれより様になつているように鳳翔の目には映つていた。そのことを苦々しく思う鳳翔はこれまでのことを思い出すことで、そのような印象を持たせる愚かな感覚器官に喝を与えた。

そのうち鳳翔の注意は早坂ではなくイヤホンの音声と街行く車のナンバーに向けられる。謂わゆるマルチタスクをこなす間にそここの時間が経ち、ようやく運転手がほんの微かに一息ついた。

「その、着きました」

「ああ。そうみたいだな。ご苦労」

運転手に労りの言葉を掛けた鳳翔は車から降り、両腕を伸ばして肩の凝りを和らげる。どこか難しい顔をした早坂を伴つてかぐやたちの待ち合わせ場所が見える絶好のロケーションを探し出し、新しく購入した電子書籍が大量にデータとして詰め込まれたスマホを手にとって、待ち合わせする高校生男子としてその場に溶け込んだ。

隣に陣取る早坂は我関せずでデータを攫う鳳翔の方をチラチラと見る。しかし、それが気に障つたのだろうか。ふと思ひ出したように

鳳翔は早坂に指令を与えた。

「そうだ。早坂。このショッピングモールさ、これでちよつとたこ焼き買って来て。監視作業はこっちでやつとくし、もうとつくに営業時間始まつてる筈だから――」

「……」

「どうした？ 買いに行かないのか？」

「シチュー食べたばかりですよ？ お代わり何杯したと思ってるんですか？」

「知らん。記憶にない。パンもそれ程食べてないだろう。いいから、さっさと買って来てくれ。今のお前の指揮権は俺にあるんだろ？」

「……畏まりました」

（今の若様はもう私を……）

かぐやと大して変わらないぞんざいな扱い。しかもこれではデートではなくただのパシリではないかと嘆く心を抑えて早坂は渡された諭吉を携え、たこ焼きを買いに行く。

道中、メッセージアプリの通知音に気付いた早坂はスマホを取り出して画面を開いた。鳳翔からのメッセージであり、そこにはたこ焼きと明石焼きを両方買ってくるようにとの内容が綴られていた。

一方、多くの人々が羨むであろう大量に食べても太りにくい体質を持つ鳳翔は眠気から半分覚めた脳で思い出す。眞妃からあまり食べ過ぎて内臓を悪くしないように言われていたことを。暫く考え込んでから翼に通話し始めた。

田沼翼は医者の家系である。来年度に迫った医学部受験の勉強をしている筈の翼は鳳翔からの連絡と見るや直ぐに通話ボタンを押した。

「もしもし、翼。今少し大丈夫か？」

『うん、でもあんまり長いとちよつと……午後から冬季講習あるから』

「大した話じゃないからそう構えんで良い」

『?どんな話なの?』

「先程、俺はビールフシチューを十三杯、パンを九つ食べた。今からたこ焼きと明石焼きそれぞれ八つ食べようと思うんだが……これはよもや食べ過ぎか？」

目をパチパチさせた翼は鳳翔の天才らしからぬアホらしい質問に苦笑いした。サッカーから文字通り足を洗って久しい鳳翔の運動量を勘案し、未来のお抱え医師として通告する。

『それはちよつと食べ過ぎじゃない?いくら大将でも太るよ』

「……」

『正月太りって——』

「聞いたことはある。んん、少しマズいかもされないな。ここ数日運動と言えば自重トレーニングしかしていない。ん?アレは……ゴホンゴホン」

不意に要らぬことを言い掛けた鳳翔は腕に巻いた時計を見る。も

う早坂は注文してしまっただろう。キャンセルは出来ない。太りたくもなく、さりとてたこ焼きと明石焼きは一口で良いから食べたい。頭に降って湧いた譲歩案を噛み締めながら、翼にエールを送ると共に通話を切った。

「その、買って来ました」

「結構。釣りは返さなくて良い」

戻って来た早坂が注文の品を持っているのを見てスマホをポケットに仕舞った鳳翔は爪楊枝を使って器用にたこ焼きを口に運ぶ。続いて早坂が手に持つ明石焼きも一つ咀嚼した。

「美味しい。早坂、残りよろしく」

「え」

早坂はたこ焼きと明石焼きを見比べる。それぞれの器に七個残っている。これらを食べて本命の昼食は早坂の腹に収まるだろうか。詰めに詰めた自身のデザートプランが早くも瓦解し始めていることに落胆しつつ早坂はもう一つの爪楊枝を手にとった。

「2」

物心付いた時分には既に読書をよく好んでいた鳳翔にとって、電子書籍というものは差し詰め天恵だった。物量に囚われず古今東西の文献を読まんと欲する彼は、余暇さえあれば手元の端末を使ってそれを実践し、趣旨の把握と咀嚼に努める。

さながら皇帝ペンギンのように読書の海を駆け巡っていた彼を引き上げたのは、遠くより聞こえた驚愕の色に染まりつつも聞き馴染みのある声だった。

「な……なんでデートに私服で来てるんですか!？」

血相変えて目を大きく見開いたかぐやに聞いたただされた白銀は面食らう。その様子を隠れていた場所から眺めた鳳翔と早坂の両名は各々天を仰いだ。

「ええ!? デートって普通私服じゃない?」

「ええっ!？」

クソつたれがと鳳翔は心の中で舌打ちした。既に二人の仲人氣取りな彼にしてみれば、かぐやと白銀の意思疎通の不足は歓迎し難いものである。

鳳翔は自分が白銀にあれこれレクチャーすべきだったのだと内心悔やんだが、既に後の祭り。今できることと言えば、事の成り行きを静観することだけであった。

「会長といえばいついかなる時も学ランでしょう! だから私も合わせようと……」

(それは分かる)

本来、バイト勤務中でもない白銀が学外でも秀知院の制服姿に身を包む習性を持つというのは少し調べれば分かる話である。

当然のように白銀の生態を把握するかぐやであったが、今回ばかりはそれが裏目に出た形のようなだった。

「なんでこんな日に限って……」

「いや、だから」

言い淀んだ白銀が続けようとした言葉にかぐやと見物人二人は耳をそばだてた。

「こんな日……だからだろ」

白銀の決め台詞に鳳翔は舌鼓ならぬ耳鼓を打った。絶妙な言葉遣いや目線の外し方から、なかなかの手口を持っているじゃないかと感心し、戯れに隣の早坂へと質問した。

「白銀て意外と手慣れてる？交際経験なかった筈だけど」

「……知りませんよ、そんなこと」

「へ？かぐやのことだからってつきり調べてるものかと思ったんだが、違うのか？」

「はい。かぐや様は若様みたいに好きな相手を執拗に狙うようなことはしないので」

嘘である。かぐやは白銀のバイト先を突き止め、偶然の体を装って

場に居合わせようとした実績持ちである。

「……それは一体どういう意味だ？」

「何でもありません。それより、二人が映画館に入るまでは我々も後をつけましょう」

腑に落ちない鳳翔は次第に身体の内側より溢れて来る眠気を振り払い、どこか拗ねた様子である早坂への追及を取り止め、代わりにふと生じた些細な疑問を前を歩く早坂にぶつけることにした。

「早坂。あいつらってこれが初デート？」

四宮・四条両家の因縁という都合によりホテルの外で眞妃と手を繋いだ経験に乏しい鳳翔としては、戸惑いがちに手を繋いだかぐやたちが気になる。

エスカレーターに乗った二人を追いながら早坂は暫く考え込み、その上で主人の兄貴分とも言える鳳翔に答えた。

「……どうでしょう？考えようによつては今回が七回目と言えるかも知れません」

「七!?……意外としてんだな、アイツら。参考までに概要を聞いても良いか？」

果たしてかぐやたちのデートに参考になる点があったかどうかと疑問を抱きながらも早坂は思い出す。自分がこの目で見たモノや就寝前の主人に自慢された内容を。

「最初のデートは丁度今から向かう映画館でした。若様は座席指定についてご存知ですか？」



「知らん。だが察するに、先んじてどの席に座るのか予告しておく行為だろうか？」

「はあ。まあ、大体そういう解釈で良いと思いますよ。かぐや様も若様と同様、座席指定システムをご存知ありませんでした」

おかげで白銀と言葉の応酬を繰り広げた末に齟齬を引き起こし、隣の席ではなく斜めの席に座る羽目になったのだ。

鳳翔は心の中で二人をアホ呼ばわりしたが、思えば小学生時代の……キスをする以前の自分と眞妃であれば、そう言うミスを引き起こしていたかもしれないと心を改めた。

「ところで、お前はかぐやがその座席指定とやらを知らないこと、想定していなかったのか？ お前なら市井の映画館に行ったことぐらいあるだろう。あの広告娘とか火ノ口三鈴 駿河すばるIT娘とかと一緒にさ」

どことなく責められた早坂は少し俯いた。それが出来たら苦勞しないと心の中で溢した。

「カラオケくらいなら二人と偶に行きますけど、映画はあまり……こんな言い訳にもなりませんけど」

「……上級使用人目指すならそういう気遣いが出るようになった方が良いでしょう。まあ、お前はいずれ母親のような立派な幹部になれる器だし、実際そっち目指した方が良いでしょうけども。だが、どっちにしろ――」

俯いたまま目を見開いた早坂は震えそうになる声を抑え、後ろを歩く鳳翔に尋ねた。

「若様は私に将来、どうなって欲しいんですか？」

「……構想はあるが、まだ話す時期ではない。で、二回目は何？」

煙に巻かれた格好の早坂だったが、拒否権などある筈がない。淡々と説明するのみである。

二回目。送迎の車に猫が入り込み、かぐやが珍しく徒歩で登校した時のことだ。偶然通りがかった自転車通学中の白銀に乗せてもらったのだと目を輝かせて自慢するかぐやが早坂の記憶に残っている。

三回目。雨の日を見計らい、送迎のタイヤを故意にパンクさせたかぐやは白銀と相合傘で下校デートをしたのだが――

「いや、アイツほんと運転手に謝れよ」

「……若様ってそういう人たちにはお優しいですよね」

「そうか？」

四回目。発熱したかぐやを白銀が見舞った末に二人が同衾――

「はあ!？」

何をしているのだと鳳翔は憤慨する。一学期と言えば鳳翔が眞妃と顔を合わせたいのを我慢して外征に勤しんでいた頃だ。

言い換えれば、異国の地を転々としながら四条ら対抗勢力の妨害を跳ね除けつつ勢力を急拡大させるため人生で一番尽力した期間である。

その間、鳳翔が望郷の念に駆られる事は、午後に執事が持って来る

日本のおやつを——たとえ平素なら決して利用しないコンビニで売られているようなものでも——心躍らせて食べる程であった。

「話を最後まで聞いてください。二人の間に何も起こりませんでしたよ」

「……そうか。まあ良い。続けろ」

落ち着きを取り戻した様子の鳳翔に促され、早坂は説明を再開することにした。

「夏休みに生徒会の皆で花火を見に行くことがありました」

「それで？」

「書記ちゃんと会計君は居ましたけど、考えようによつてはダブルデートと言えなくもありません」

「それは藤原と石上が可哀想だろう……互いにな」

「それはそうなんですけど。続き聞きます？」

「もう良い。この間の奉心祭のヤツだろ？」

鳳翔の脳裏に蘇ったのはオカルト研究部の阿天坊ゆめが二人が来るからとかぐやの出生体重を尋ねて来た記憶である。それと同時にかぐやの乳母にして早坂の母である奈央に又聞きした結果、ドン引きされるに至った忌々しい記憶まで蘇った。

「まあ今日が六回目だろうと七回目だろうと構わんが……」

「あ」

「どうした?」

「白銀会長、聞いたところでは五回目のデートで……」

そこで口淀み、顔を赤らめてあたふたする早坂に鳳翔ははっきり言うよう仕草で急かした。

「セックス……するらしいです」

「……やばいじゃん」

四条家よりも旧家としての家風が色濃く残る四宮家の令嬢が婚前交渉などしては家の品位に傷がつく。それも無視できないレベルだ。少なくとも婚約の話が纏まるまでは我慢してもらわなくてはならないだろう。

鳳翔の判断は迅速だ。直ぐに手持ちの携帯端末を取り出した。

「あの、まさかとは思いますが……」

「白銀を牽制する。いくら何でも婚姻前にかぐやを傷物にされようものなら、全てがパーになりかねない」

メッセージアプリを開いて白銀に通話しようとする鳳翔の腕を早坂が掴む。傍目を歩く者たちにはそれがカップルの痴話喧嘩であるようにしか見えない。

「別に良いじゃないですか。どうせ若様だって眞妃様としたんでしょ?」

「四条家の令嬢と四宮家の令嬢では勝手が違う。それが分からないお前ではないだろうか？良いから！その手を離せ！……もしもし、白銀。聞こえているか？俺だよ。俺」

(……ッ！)

デート中に鳳翔が白銀に電話を掛けてかぐやに絞められるのは目付役を任された早坂である。もつと強引に腕を掴むべきだったと悔やんだが、もう遅かった。

まさか鳳翔が白銀と通話している最中に早坂が乱入する訳にも行かないからだ。

『いや、オレオレ詐欺かよ。どうした急に？』

「遅くとも冬が終わるぐらいまでは待つように」

『……何をだ？』

「婚前交渉」

『ブウツツ……!!な、何言ってるんだ!?俺が四宮とそんな事する訳ないだろう!』

「おい、てめえ!四宮”じゃまるで俺とお前がするみたいだろ!気色悪い!さっさと名前呼びしないか!このヘタレ!」

『グッ……』

「分かったな?んじゃ!」

終わってしまった。達成感のせいか満足気な鳳翔に対し、早坂は



「……別に良いんですよ。二人はアレで」

クリスマスの夜。完璧でありたいと願う白銀にかぐやが完璧でなくとも良いと諭したことを早坂はかぐやや本人から聞いて知っている。鳳翔がやろうとしていることは余計なお世話なのだと嗜めた。

「はくん。それで、こっからどうすんだ？あいつらが映画観てる間、手持ち無沙汰になるぞ」

「そんなに余裕ぶって居られるのも今のうちですよ」

「はっ？」

十分後、二人の姿は服屋にあった。世に言うウインドウショッピングである。数ヶ月前にはかぐやが長女豊実を除く藤原姉妹や白銀圭と共に渋谷で敢行した。

早坂が試着室の中であれこれ着替える一方で、その前の椅子に座った鳳翔は動揺の真っ只中にいた。

（どうする？もうこいつほつとらかして帰るか？今の状況、眞妃に浮気認定されても文句言えないぞ）

二度と眞妃に愛想を尽かされたくないと考える鳳翔にとって今の状況は大変苦々しいものである。特に浮気なんて地雷源で踊り狂うかのような蛮行など疑われたくもないし、したくもない。

（完全に浮気案件だろ、これ。眞妃の悲痛な顔が目には浮かぶ。あんな思いはもう沢山だ。さて、どうしたものか……）

実のところ、早坂が着替えている隙にここを脱出することはそう難しいことではない。急いでショッピングモールを出てタクシーを駆

前辺りで捕まえ、横浜にでも逃亡すれば良いだろう。

しかし、それをしてしまえばどうなるか。

(恐らくここ)で帰った場合、早坂が本格的にキレルラインを越えることになる。あいつキレル時は普通にキレルからな。割とマジで洒落になんねえ)

かぐやの近侍である早坂には眞妃との交際を知られている。

早坂家の娘である早坂がその情報を黄光や雁庵らに流していないのは嫡流である自分に恨まれる危険性や黙ったままでいる方が却って有益であることを知っているから。そう看破しつつ、実に殊勝な心掛けであると鳳翔はかねてより上から目線で評していた。

しかし、人間には怒りの一線というものがあり、怒り狂った人間の行動は往々にして理性を失いがちである。早坂の場合はここで騙すような形で自分が帰ることだろうと鳳翔は睨んでいた。

激情に駆られた早坂に眞妃とのことを報告されてはこれまでの苦勞が全て水の泡である。

(たこ焼き買いに行かせたり明石焼きと合わせて14個の残りを押し付けたりしたのは軽率だった。アレさえなければ、今帰っても小言を言われるだけで済んだだろうに。クっそ、今日の俺はどこかおかしい。明らかに本調子じゃ——)

「どうですか?」

「っー」

試着室のカーテンを開けた早坂の格好は今までの神待ちギャルを模したものとは一線を画していた。ウィッグを使ってツインテールではなく幼少期の早坂を思わせるミディアムボブにした金髪とそれ



に合うどころなく清楚感を伴ったお嬢様然とした格好。

あたかも昔の早坂がかぐやの近侍になることなく成長したかのよ  
うな姿は鳳翔の更なる動揺を誘うには十分だった。

「マリアージュ……だと？」

「？」

「いや、何でもない」

（何、何なの？こいつ？）

鳳翔にとって奇跡的相性マリアージュとはすなわち、サンタクロースのコスプレ  
をしたり風呂上がりで髪を下ろしたりするなどした眞妃の姿のみで  
ある筈だった。

しかし、今となって気付いた。昔を思わせる格好をした早坂の格好  
は、それこそかつて見た早坂の全裸姿よりも遥かに目に毒であること  
に。

反射的に顔面を片手で押さえた鳳翔は本能的に今の状況がかなり  
危険であることを悟った。

「へえ、これが好きなんですね。へえ」

言外に本来のお前が好きだと言われたような気がした早坂はニヤ  
つきが抑えられない。その声色にも舞い上がりそうになる気持ち  
が滲み出ていたが、鳳翔にとっては面白くないことこの上ない。

「調子乗んな、マジで。良いからさっきの格好に戻せ」

「そんなに照れなくても良いんですよ？」

「照れてない」

「じゃあその手を外してこっち見てください。真正面から」

「い・や・だ」

何だ存外チヨロ簡いじゃないかと早坂は目の前の幼馴染に得意気な顔を見せる。「揶揄うな」と言いつつ頑なに目を合わせようとしないう鳳翔の態度がますます早坂をつけ上がらせた。

今の早坂の目は完全に獐猛な肉食動物のそれである。女彪は今にも鳳凰をその爪で捉えようとした。

「し、四宮くん……?」

「うつわ、先週男の子に手を出して次は女の子ですか。ホント、見境ない人ですね」

「……」

椅子に座る鳳翔と屈むことで彼の腕を掴んだ早坂の目の前に現れたのは子安つばめ、伊井野ミコ、石上優の三人である。

ゴルフボールのように目を丸くした子安と不自然に瞬きを繰り返す石上が松葉杖を持った伊井野の後方に並ぶ形だ。

(マズい。こんなのに絡まれてる場合じゃない)

ゴミを見るような視線を送りつける伊井野を睨み返した鳳翔がかつて聞いたところによれば、石上は白銀と共に真妃の事情を聞いたことがあると言う。

今の状況を真妃に伝えられるようなことがあった場合、間違いなく

浮気行為とみなされる。その時は眞妃に見捨てられ、挙げ句の果てに全てを失う結果にもなりかねない。五年前の悪夢が脳裏に浮かんだ鳳翔は口の中が苦々しきで溢れるのを感じた。

「おい、お前ら。言いたいことがあるならハッキリ言ってみろ。子安つばめ、まずはアンタだ」

「んつと……可愛い彼女さんだね」

「違う！コイツはうちの執事で女装の練習に立ち会って欲しいと言ったから、丁度暇してた俺が付き合っただけだ！」

流れるように嘘を吐いた鳳翔だが、よりにもよってその嘘は大いに誤解を招くものであった。案の定、顔を赤くした子安は丸くした目を右往左往させて呟いた。

「そ、そうなんだ……やっぱり男の子が好きなんだ……」

「やっぱリイ？」

「つばめ先輩。この”おっかない方”の四宮先輩が好きな男の子は男の娘むすめと書いて男の娘こと読むんですよ」

「へ、へえ……」

子安つばめは新世界を見た。勿論、その新世界は鳳翔にとっても未知の境地である。

「何だ、それ。てか石上、いい加減その”おっかない方”言うの止めろや。語弊がある。この際だ。名前あるいは愛称で呼ぶことを許そうじゃないか。てな訳で、さっさと直せ。ほら早く」

「語弊があるかは兎も角として、分かりました。じゃあ、死の先輩。質問して良いですか?」

「……何だ?言ってみろ」

名前で呼ばないのは良いとして、少しニュアンスがおかしいのではと疑問に思ったのを鳳翔は水に流した。促された石上はニツコリと満面の笑みを浮かべた。

「二股ですか?」

「は?」

「うっわ、やっぱ最低ですね。前に私を弄んでおいてそれですか」

鳳翔は石上に続いてイチヤモンを付けてきたと思わしき伊井野を再度ギロリと睨み付ける。

確かに、伊井野が好きな『イケメン男子が励ますCD』に倣って「誠実な子だ」とか「安心して。俺は君の味方だよ」などと耳元で囁いた覚えこそあれ、それだけで弄んだ呼びわりは自意識過剰が過ぎると言うのが鳳翔の見解だった。

「ぎげんな。誰が弄んだだ。つか、声掛けて来たのはお前だろ」

そもそも鳳翔に言わせれば、伊井野の目は節穴としか言いようがない。伊井野の趣向は粗方調べがついており、大方ピアノをやっていた伊井野が昔の自分の——ピアノでもバイオリンでも——演奏を聴いて好印象を抱いていたのだろうと鳳翔は察していた。

「んなっ!?!」

「で、その怪我は何？大丈夫？」

「い、いえ、これは、その……」

雁庵、黄光とかつて女遊びに励んだ色男たちから受け継いだ優秀な遺伝子を有する鳳翔に心配を装った言葉を掛けられた伊井野は途端に慌てふためく。その様を見て鳳翔は内心、伊井野ミコから伊井野ザコに改名しろなどと無礼千万なことを考えた。

「ああ。伊井野ちゃん、うちでクリスマスパーティーした時に酔って階段から落ちちゃって……」

子安の釈明に鳳翔は一瞬耳を疑う。未成年飲酒は法律で禁止されているからだ。しかし、すぐに固形物は禁止されている限りではないと思いつく。だが、新世代の怪物である鳳翔は見逃さない。子安つばめからどこことなく誤魔化そうとする気配が漂っているのを。

「子安せんぱうい、何を誤魔化そうとしてるンスか？俺の目は誤魔化せませんよ？」

「……だよ。えっと」

クリスマスの夜に遡る。友人である阿天坊ゆめにあれこれ吹き込まれた子安はパーティー終了後、交際数日目にして石上と一線を越えた。その現場をうっかり見てしまった伊井野が風紀委員としての仕事を怠るのみならず、慌てて逃げた末に誤って階段から転落してしまったのだ。その結果、子安と石上は足を折った伊井野の買い出しの付き添いをしているという寸法である。

「……なんかすいません」

「んーん。こつちこそゴメンね。こんな話聞かせて。それじゃあ、私  
たちもう帰るから後はごゆつくり」

「はあ……」

そそくさと去って行く三人を軽く手を振って見送った鳳翔は完全  
に興が醒め、目を閉じて息を吸い込んだ。そして、これまでの自身の  
境遇を振り返り、呆気にとられたままだった早坂にそろそろ出ると  
極めて冷静に促した。